

# 尾崎遺跡

1993

建設省 中部地方建設局  
岐阜国道工事事務所  
財團法人 岐阜県文化財保護センター



(上)尾崎遺跡全景 (航空写真一南より)

(下)24号住出土磨製石庵丁

## 序

本報告書は、平成4年度に実施した一般国道41号美濃加茂バイパス関連工事に伴う事前の発掘調査をまとめたものです。対象は岐阜県美濃加茂市蜂屋町蜂屋に所在する「尾崎遺跡」です。

尾崎遺跡の所在する美濃加茂市は、江戸時代において中山道「太田宿」として栄えていたことは我々のよく知るところではありますが、この中山道が木曾川を渡るための「太田渡」は難所の一つとして「木曾のかけはし、太田の渡し、碓氷峠がなくばよい」とうたわれたほど交通の要衝でありました。この状況は原始・古代・中世においても同じであったと考えられ、ましてや現代においてもモータリゼーションの発展等に伴い交通の要衝としての機能は増加の傾向にあります。古くより交通の要衝となる地域は、同時に政治的・経済的にも重要なポストを占めてきた歴史的事実がありますが、当市もその例外に漏れることなく数多くの歴史的遺産が知られています。

美濃加茂市の数多くの遺跡が木曾・飛驒川の段丘上に残されているのに対しで尾崎遺跡はこれらの段丘より更に約15m程高い丘陵上に立地しています。発見された遺構は弥生時代中期～奈良時代に属する竪穴住居址37軒、中世に属する建物址2棟・溝3条、土坑等です。遺跡は更に北側へ広がる可能性が高く、その全容は明らかではありませんが、この地が長い間集落として選択され、歴史的に重要な役割を果たしてきたことは想像に難くありません。本調査はこの一部分にスポットをあてたものですが、本報告書がより多くの方々にご利用いただけますよう念じてやみません。

なお、本報告書が刊行されるまでには、直接発掘作業に参加された方々を始めとして、整理・報告書作成に当たられた方々、専門の事項について数多くのご教示・ご指導を賜った方々など、多くの方々のお世話になりました。また、関係各機関、美濃加茂市教育委員会、地元地区の皆様からは終始多大なご援助、ご協力を賜りました。

末尾ではありますが、お世話になった方々に改めて厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

(財)岐阜県文化財保護センター

理事長 吉田 豊

## 例　　言

1. 本書は美濃加茂市蜂屋町上蜂屋に所在する「尾崎遺跡」の発掘調査を対象とした報告書である。
2. 本調査は、一般国道41号美濃加茂バイパス関連工事に伴うもので、建設省岐阜国道路務所の委託を受け、岐阜県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査（平成4年度：担当谷口和人・佐野康雄）および整理作業は、（財）岐阜県文化財保護センターが行なった。尚、指導調査員として伊藤秋男南山大学教授に依頼した。
4. 本書の執筆は、第I・II・III章を佐野康雄、第IV章を藤田 英博・村木 誠、長屋 幸二、佐野 康雄、第V章を村木 誠、佐野 康雄が行なった。尚、編集作業は佐野が担当した。  
遺跡周辺の地形・立地については、古田靖氏（藤橋村中学校教諭）に玉稿を頂いた。ここに記して感謝する次第である。
5. 整理参加者は、下記のとおりである。
 

土器実測	加納 恵子・佐藤まさみ・平林 知子・目加田 哲・藤田 英博・村木 誠
	佐野 康雄
石器実測他	長屋 幸司・佐野 康雄
ト レース	高島 桂子・佐野 康雄
他の整理作業	豊田 圭子・米津 光枝・中村とよみ・伊藤 節子
6. 土器の胎土分析及び住居址出土の炭化材同定は㈱パレオ・ラボに依頼した。第V・VI章は同社菱田量・藤根久氏よりの報告である。
7. 発掘調査から報告書作成に至る過程で、次の方々からご助言、ご指導、ご協力を頂いた。銘記して感謝を表します。（敬称略 順不同）
 

宮腰 健司・赤坂 次郎・斎藤 基生・可児 光生・吉田 正人・波辺 博人  
   長瀬 治義・高橋 克寿・吉田 英敏・田口 昭二・山内 伸浩・伊藤 秋男  
   藤原 英政・高木 宏和・林 順一・齋野 裕彦・高木 洋・服部 信博  
   尾野 善裕
8. 発掘調査参加者略（敬称略 順不同）
 

山口 繁政・市原 茂夫・大澤 功・織部 勝美・兼松美津子・川合 義治  
   加木屋澄子・加藤 治・兼松なみ江・大竹 勇・板津一二三・桑原久美子  
   兼松 史恵・酒光 一美・篠田 敦雄・高井 兑子・玉置 順子・長谷川康信  
   永谷 健三・早川 瞳・福田 隆・福田 美幸・村瀬 義明・波辺美年子  
   長谷川あや子・安江 健・山口 弘美・村松 孝吉・若井 国光・井戸 義勝  
   兼松 多門・田下 光男・恵子
9. 出土遺物は（財）岐阜県文化財保護センターにおいて保管している。

## 目 次

### 例 言

第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	1
第1節 発掘調査に至る経過.....	1
第2節 発掘調査の経過と方法.....	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境.....	2
第1節 遺跡周辺の地形・立地.....	2
第2節 周辺の遺跡.....	5
第Ⅲ章 畏 序.....	10
第Ⅳ章 造構と出土遺物.....	12
第1節 竪穴住居址とその出土遺物.....	12
第2節 建物址とその出土遺物.....	91
第3節 坚穴造構、土坑、溝、溝状造構とその出土遺物.....	97
第4節 包含層出土の遺物.....	102
第Ⅴ章 尾崎遺跡出土土器の岩石学的検討.....	125
第Ⅵ章 尾崎遺跡住居址出土炭化材の樹種.....	135
第Ⅶ章 まとめと考察.....	169
第1節 ま と め.....	169
第2節 考 察.....	173
I 弥生時代後期後半の土器に現れた地域差について.....	173
II 弥生時代における石器群の様相についての一考察.....	185

## 挿図目次

第1図	尾崎遺跡調査区設定状況図	3
第2図	遺跡周辺の地形	5
第3図	諸洞遺跡出土有舌尖頭器	6
第4図	周辺地形図	7
第5図	尾崎遺跡位置図及び周辺の主要遺跡	9
第6図	12列東壁及びD列南壁土層断面図	11
第7図	造構配置図	13
第8図	1・2号住居址	17
第9図	3号住居址	20
第10図	4号住居址	23
第11図	5号住居址	25
第12図	6・7号住居址	27
第13図	8号住居址	31
第14図	8号住居址遺物分布図	32
第15図	9号住居址	34
第16図	10号住居址	36
第17図	11・31a・31b号住居址	39
第18図	12・32・33号住居址	41
第19図	13号住居址	45
第20図	14号住居址	47
第21図	15・16・17号住居址	49
第22図	18・20号住居址	56
第23図	19号住居址	58
第24図	21・22号住居址	61
第25図	23号住居址	65
第26図	24号住居址	67
第27図	24号住居址遺物分布図	68
第28図	25号住居址	72
第29図	26・27号住居址	73
第30図	28号住居址	76

第31図	29号住居址	79
第32図	30号住居址	81
第33図	34号住居址	84
第34図	35号住居址	86
第35図	36号住居址	88
第36図	37号住居址	89
第37図	1号建物址	93
第38図	2号建物址	96
第39図	1号豎穴造構	98
第40図	2号土坑	100
第41図	土器胎土中および砂質堆積物中の粒子組成	127
第42図	第1—第2主成分の散布図	132
第43図	第1—第3主成分の散布図	132
第44図	材組織とその名称(広葉樹:クヌギ模式)	135
第45図	遺構出土遺物(1)	139
第46図	遺構出土遺物(2)	140
第47図	遺構出土遺物(3)	141
第48図	遺構出土遺物(4)	142
第49図	遺構出土遺物(5)	143
第50図	遺構出土遺物(6)	144
第51図	遺構出土遺物(7)	145
第52図	遺構出土遺物(8)	146
第53図	遺構出土遺物(9)	147
第54図	遺構出土遺物(10)	148
第55図	遺構出土遺物(11)	149
第56図	遺構出土遺物(12)	150
第57図	遺構出土遺物(13)	151
第58図	遺構出土遺物(14)	152
第59図	遺構出土遺物(15)	153
第60図	遺構出土遺物(16)	154
第61図	遺構出土遺物(17)	155
第62図	遺構出土遺物(18)	156
第63図	遺構出土遺物(19)	157

第64図	遺構出土遺物⑩	158
第65図	遺構出土遺物⑪	159
第66図	包含層出土遺物(1)	160
第67図	包含層出土遺物(2)	161
第68図	包含層出土遺物(3)	162
第69図	包含層出土遺物(4)	163
第70図	包含層出土遺物(5)	164
第71図	包含層出土遺物(6)	165
第72図	包含層出土遺物(7)	166
第73図	包含層出土遺物(8)	167
第74図	包含層出土遺物(9)	168
第75図	今遺跡 7号住居出土遺物	175
第76図	今遺跡31号住居出土パレス壺	175
第77図	地域設定図	176
第78図	竪三蔵通遺跡出土遺物	178
第79図	山中遺跡S B17出土石核	188

## 図版目次

- 図版1 (1)尾崎遺跡遠景 (2)調査前状況 (3)1・2号住居址  
図版2 (4)1・2号住居址 (5)3号住居址 (6)4号住居址出土状況  
図版3 (7)4号住居址 (8)5号住居址・1号土坑 (9)7号住居址  
図版4 (10)高坏 [64] 出土状況 (11)調査風景 (12)羊形壺 [335] 出土状況  
図版5 (13)8号住居址 (14)9号住居址 (15)10号住居址  
図版6 (16)10号住火廻 (17)11・31a・31b号住居址 (18)12号住居址  
図版7 (19)13号住居址 (20)14号住居址 (21)14号住カマド  
図版8 (22)15・16・17号住居址 (23)15号住カマド (24)15号住貯藏穴内环身 [130]  
出土状況  
図版9 (25)16号住居址 (26)16号住甕 [147] 出土状況 (27)17号住居址  
図版10 (28)18・20号住居址 (29)21・22号住居址 (30)23号住居址  
図版11 (31)24号住居址 (32)24号住台付甕 [178] 出土状況 (33)25号住居址  
図版12 (34)26号住居址・3号溝 (35)27号住居址・3号溝 (36)28号住居址  
図版13 (37)30号住居址 (38)34号住居址・2号溝 (39)35号住居址  
図版14 (40)36号住居址 (41)36号住火廻 (42)37号住居址  
図版15 (43)1号建物址 (44)2号建物址 (45)2号土坑  
図版16 (1)甕 [4・5] (2)高坏 [12] (3)高坏 [15] (4)台付甕 [16] (5)短頸壺 [11]  
(6)S字状口縁台付甕 [18] (7)S字状口縁台付甕 [30] (8)高坏 [51]  
(9)高坏 [52] (10)高坏 [53] (11)高坏 [59]  
図版17 (1)高坏 [64] (2)甕 [73] (3)直口壺 [74] (4)広口壺 [76] (5)高坏  
[79] (6)高坏 [87]  
図版18 (1)S字状口縁台付甕 [93] (2)S字状口縁台付甕 [99] (3)器台 [101]  
(4)高坏 [115] (5)バレス壺 [118] (6)环身 [128] (7)环身 [129] (8)  
有台坏 [145]  
図版19 (1)甕 [147] (2)短頸壺 [148] (3)环身 [152] (4)壺 [164] (5)甕 [170]  
(6)甕 [171]  
図版20 (1)台付甕 [178] (2)台付甕 [179] (3)台付甕 [180] (4)鉢 [184] (5)  
直口壺 [186] (6)広口壺 [187]  
図版21 (1)高坏 [188] (2)高坏 [189] (3)高坏 [191] (4)高坏 [192] (5)高  
坏 [193] (6)甕 [195・196]

- 図版22 (1)器台 [205] (2)短頭壺 [212] (3)壺蓋 [227] (4)壺蓋 [230] (5)  
壺蓋 [239] (6)石庵丁 [315] (7)有肩直線刃石器 [316] (8)つまみ付  
蓋 [333]
- 図版23 (1)有台壺 [334] (2)羊形甌 [335] (3)勾玉 [503] (4)石器 [311～314]  
(5)石器 [275～295] (6)鉄製品 [17・124]
- 図版24 土器胎土中・砂質堆積物中の粒子（その1）
- 図版25 土器胎土中・砂質堆積物中の粒子（その2）
- 図版26 土器胎土中・砂質堆積物中の粒子（その3）
- 図版27 尾崎遺跡出土炭化材の電子顕微鏡写真
- 図版28 尾崎遺跡出土炭化材の電子顕微鏡写真
- 図版29 尾崎遺跡出土炭化材の電子顕微鏡写真

## 表 目 次

第1表	1号建物址ピット深度表	95
第2表	2号建物址ピット深度表	97
第3表	出土遺物（土器）観察表(1)	103
第4表	出土遺物（土器）観察表(2)	104
第5表	出土遺物（土器）観察表(3)	105
第6表	出土遺物（土器）観察表(4)	106
第7表	出土遺物（土器）観察表(5)	107
第8表	出土遺物（土器）観察表(6)	108
第9表	出土遺物（土器）観察表(7)	109
第10表	出土遺物（土器）観察表(8)	110
第11表	出土遺物（土器）観察表(9)	111
第12表	出土遺物（土器）観察表(10)	112
第13表	出土遺物（土器）観察表(11)	113
第14表	出土遺物（土器）観察表(12)	114
第15表	出土遺物（土器）観察表(13)	115
第16表	出土遺物（土器）観察表(14)	116
第17表	出土遺物（土器）観察表(15)	117
第18表	遺構出土石鏃計測表	118
第19表	遺構出土削器計測表	118
第20表	遺構出土搔器計測表	119
第21表	遺構出土両極剥離痕のある剝片計測表	119
第22表	遺構出土使用痕のある剝片計測表	119
第23表	遺構出土加工痕のある剝片計測表	119
第24表	遺構出土砥石計測表	119
第25表	遺構出土直線刃石器計測表	120
第26表	遺構出土石鋸計測表	120
第27表	遺構出土磨製石泡丁計測表	120
第28表	遺構出土有肩直線刃石器計測表	120
第29表	包含層出土石鏃計測表(1)	120
第30表	包含層出土石鏃計測表(2)	121

第31表	包含層出土石錐計測表(3).....	122
第32表	包含層出土石錐計測表.....	122
第33表	包含層出土磨製石錐計測表.....	122
第34表	包含層出土ヘラ形石器計測表.....	123
第35表	包含層出土石錐計測表.....	123
第36表	包含層出土直線刃石器計測表.....	123
第37表	包含層出土勾玉計測表.....	123
第38表	包含層出土紡錘車計測表.....	123
第39表	遺構・包含層出土鐵製品計測表.....	124
第40表	岩石学的検討を行った土器試料と砂試料.....	126
第41表	土器胎土中および砂質堆積物中の粒子組成一覧.....	127
第42表	相關行列固有値・固有ベクトルおよび寄与率・累積寄与率.....	131
第43表	尾崎遺跡出土炭化材の樹種.....	136
第44表	各地域における一括資料の序列.....	177

## 尾崎遺跡の発掘調査

### 第Ⅰ章 発掘調査の経過

#### 第1節 発掘調査に至る経過

美濃加茂市は岐阜県の中南部に位置し、古くは中山道の太田宿として政治・経済・交通の要衝の地として貢献を果たしてきた地域であるが、この役割の多くは原始・古代より継承されてきたものとして考えても大過はないであろう。現在においても、一般国道21号・41号・248号等が集中する交通の要衝となっているのも歴史を顧みれば何の違和感もない。

国道41号線は東海・北陸経済圏の中心地である名古屋市を起点として、美濃加茂市・高山市を経由して富山市に至る東海と北陸ブロックを結ぶ主要幹線道路である。しかし、近年の沿道地域の開発、交通渋滞等の条件が重なり、その機能を低下しつつある状況であった。建設省中部地方建設局・岐阜国道事務所では、交通混雑の緩和、地域開発の促進等を図るため美濃加茂バイパスを建設することとなった。また、将来的には一般国道475号東海環状自動車道と連結して、名古屋市を中心とした半径30~40km圏内の都市群を結びつける役割の一旦を担わせ、当市を含む可茂地域の21世紀に向けての新しいビジョンを見通している。

美濃加茂バイパスの路線上にあたる「尾崎遺跡」は、改訂版岐阜県遺跡地図（平成2年3月）には記載されていない。市内開発計画に関わり当地域を分布調査した美濃加茂市教育委員会により発見された新発見遺跡である。当市教育委員会によって、平成3年4月に試掘調査が実施・報告されている。遺物包含層、遺跡の広がりに関しては明確にし得なかった部分もあるが、包含層の確認が困難な当遺跡においては率直な報告であった。平成3年8月に「周知の遺跡等における平成4年度及び平成5年度以降実施予定の開発計画について」の依頼を受けていた岐阜県教育委員会では美濃加茂市教育委員会の報告を踏まえて「尾崎遺跡」の発掘調査の必要性を建設省中部地方建設局・岐阜国道事務所を報告し、平成3年11月に当事務所より委託計画を受けている。

調査地域は、遺跡の南端部約4,250m<sup>2</sup>程で、遺跡の広がりはさらに北部にあると考えられる。

#### 第2節 発掘調査の経過と方法

美濃加茂市教育委員会による範囲確認調査の成果を確認後、尾崎遺跡の発掘調査に着手した。調査は平成4年5月7日に開始し、平成5年3月10日に終了した。着手に先立って、調査区域内の伐採を4月16~30日にかけて行なった。また、杭打ち作業を5月1日に行なった。

発掘調査では、建設省が設定した国土座標に基づく道路幅杭を基準にして、8mのグリッドを設定した。グリッドは、南北方向に北からA, B, C…とアルファベットの大文字を付し、東西に西から1, 2, 3…とアラビア数字を付した。

現地では、立木・草等は伐採し運びだしたもの、伐根については遺構への影響が考えられたため後に人力で行なうこととして残した。表土の腐植土に関してはバックホーによって除去を行なった。また、この際前述の美濃加茂市教育委員会による試掘においても遺物包含層の認識がやや不明瞭であり、土層確認の意味合いも兼ねて調査区中央に地表から深さ4mのトレンチを設定した。遺物包含層からは人力によるジョレンがけで行い、遺構プラン確認後は更に精査に労した。排土場所については調査区の北・南方に設定して、排土をベルトコンベアーを使用し排土整理を行なった。

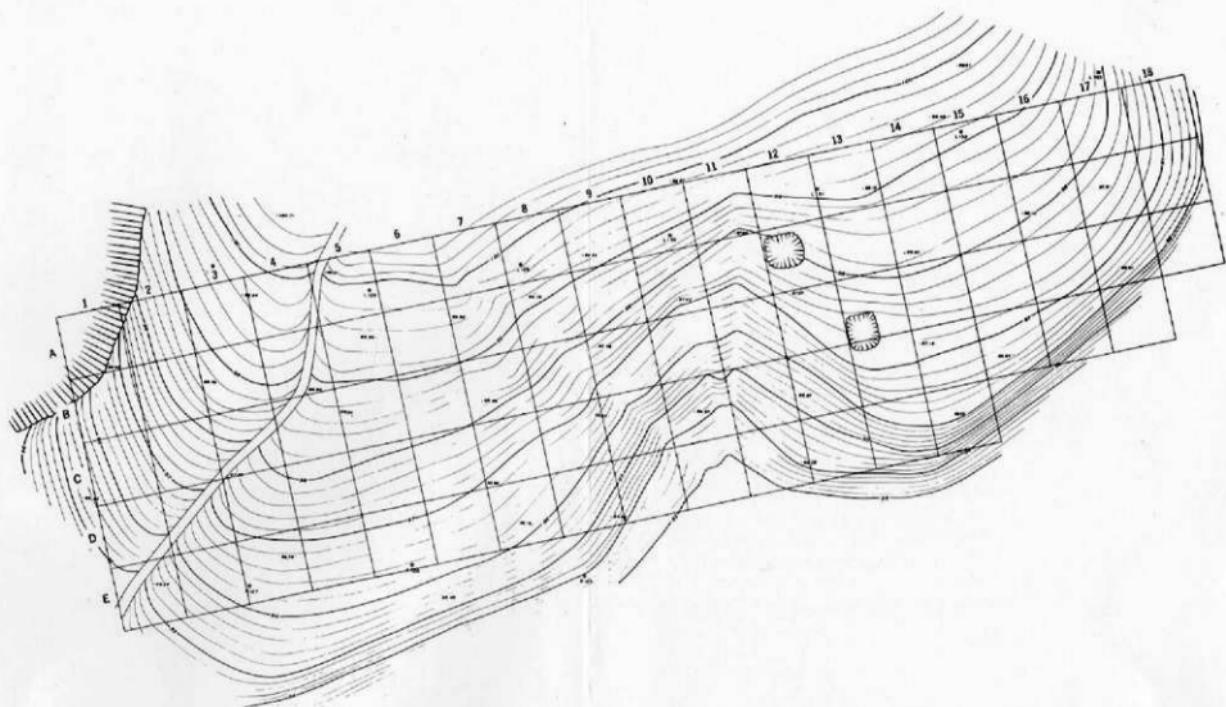
出土遺物については、コンピューター・システム佛の「サイト」を使用して、全点位置・標高を記録した。遺構実測に関しても土坑、溝等に関しては「サイト」を使用した。尚、住居址等については、平面図・セクション図を手書きし、床面レベル把握のためのエレベーション図に関しては「サイト」を使用した。

調査は、遺物が主に含まれるローム質の赤褐色土を掘り下げ、地山面（=土岐砂礫層）に掘り込まれた住居址等の遺構の掘削が主体であった。遺跡中央部には谷状地形があり、地山面に達するまで約4m近く黒褐色土が堆積しており、多くの遺物が含まれていた。また、これより下位については遺構・遺物の存在は考えられず掘り下げてはいない。最終的な調査面積は4,250m<sup>2</sup>である。尚、現地説明会を3月7日に行なった。

## 第II章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡周辺の地形・立地

尾崎遺跡の所在する美濃加茂市付近の地形（第2図）は、北部の山地、中央部の蜂屋地区や山之上地区に広がる丘陵地、そして南部の木曾川や飛騨川の河岸段丘の平坦面に大きく区分できる。北部の伊深地区や三和地区的山地は美濃帯の那比・上麻生及び金山ユニットに属する中古生層（主にチャート・砂岩・珪質泥岩など）からなり、標高は300m～500mである。中央部に広がる丘陵地は主に蜂屋層と呼ばれる新第三紀中新世の火山堆積物（溶岩・火山碎屑岩・凝灰質砂岩など）からなり、丘陵の南端部では同じく新第三紀中新世の中村層（礫岩・凝灰質砂岩・シルト岩など）や新第三紀鮮新世の土岐砂礫層（礫・砂など）が局所的に分布する。南部の平坦面は第四紀更新世以降に形成された木曾川・飛騨川の河岸段丘面であり、市街地を含む低位段丘面、西部の加茂野地区周辺の中位段丘面、上野地区周辺の高位段丘面に区分されてい



第1図 尾崎道路調査区設定状況図

る。

尾崎遺跡は美濃加茂市の市街地の北方約1km程に位置しており、市中央部に広がる丘陵地が市街地を含む低位段丘面に移行する崖端部に立地する。標高は100m~110mで、低位段丘面との比高が15m~20mある高台となっており、南方に広がる市街地のほぼ全城を望むことができる。

尾崎遺跡は、新第三紀鮮新世に堆積した土岐砂礫層が侵食された平坦面上に立地している。遺跡付近に分布する土岐砂礫層は、赤黄色を呈するローム質の基質に主として濃飛流紋岩のくさり礫を含んだ円礫層である。礫種は、大半が濃飛流紋岩であるが、わずかにチャート、砂岩、石英班岩などを含んでいる。径は数cm~40cmで、いずれも円礫である。また、層内では下位に向かって礫比率が低下しており、下位に分布する蜂屋層起源の安山岩礫は含まれていない。

遺跡周辺には明瞭な河岸段丘地形は認められず、遺跡立地面は、東方に広がり低位段丘面に対して同様な比高を有する高位段丘面とは区別される。

## 第2節 周辺の遺跡

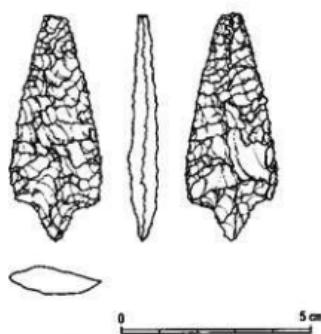
本遺跡の所在する美濃加茂市内の遺跡の多くは木曾川・飛騨川の形成した河岸段丘上に立地している。大正末より昭和の始めにかけて地元出身の研究者である林魁一氏等による精力的な調査によりいくつかの遺跡が発見された。現在も当市教育委員会による分布調査等によりその



第2図 遺跡周辺の地形

精度が高められている。これらの成果に従って、遺跡の分布状況を概観してみよう。

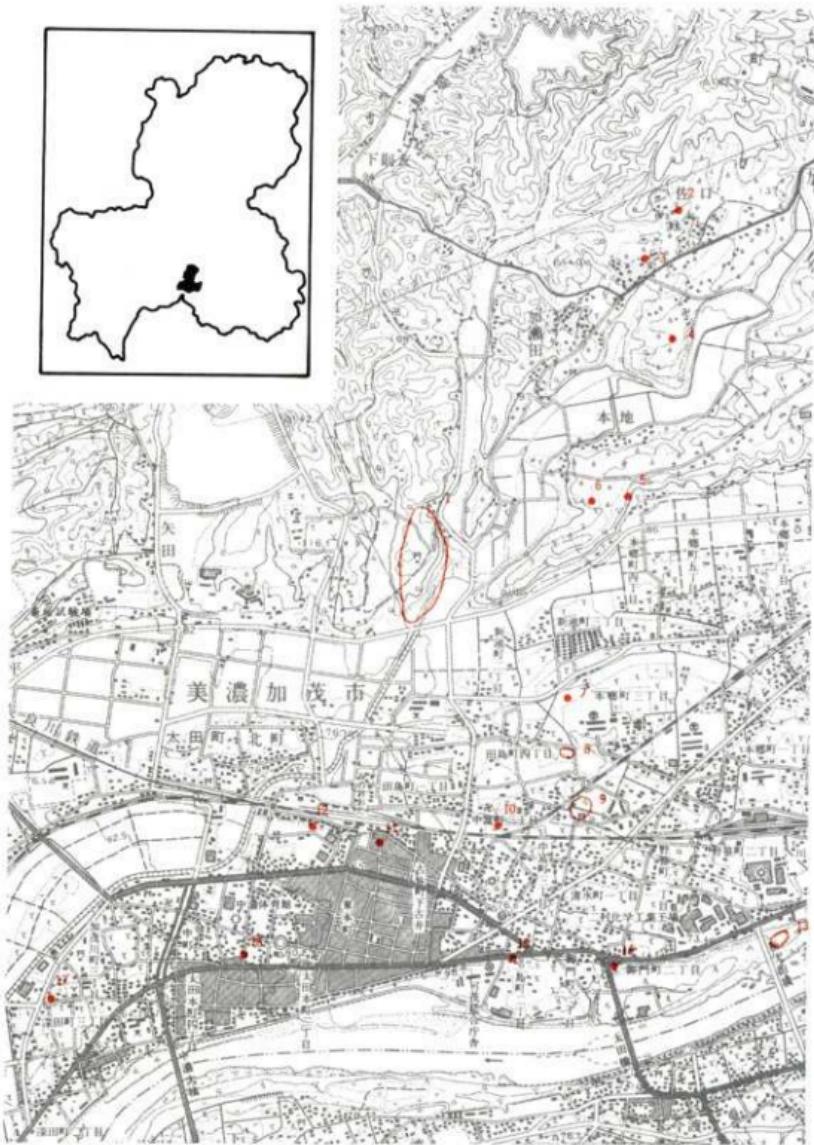
まず、旧石器時代の遺跡は、北野遺跡が挙げられる。ナイフ形石器、縄石刃核、細石刃等が確認されている。また、その南方に位置する鷹之巣駅西遺跡においてもナイフ形石器が表採されている。縄文時代の遺跡は非常に多くかつ広く分布し、草創期に属すると考えられる有舌尖頭器が表採されている。蜂屋遺跡においても第3図のような有舌尖頭器が出土している。早期の押型文土器から前・中・後・晚期の土器が見られる。発掘・報告されている「神明」・「牧之小山」等の遺跡の成果と重ね合わせて考えると、中期に遺跡拡大・増加のピークを想定することができる。弥生時代では前期の土器も確認されているが、多くは中期以降に属し、後期の土器と紹介されている資料の中には後期終末～古墳時代前期の範疇に含まれるもののが存在する。古墳時代では、現存する古墳は円墳が多く、すぐ対岸の可児市とは時期・様相を違える。また、本遺跡が所在する賀茂神社境内にも円墳が存在した記録があり、同じ標高をもつ丘陵及び高位段丘上に数多く存在した可能性は高い。集落址についても、可児市では古墳時代前期に属する大集落が確認されているが、これよりはやや後出するよう中期・後期に増大するようである。飛鳥時代では、寺院址が確認されている。奈良・平安時代の土器が確認されている。中世では、多くの白堜系陶器が確認されている。これに加え、下米田地区には原位置を異にするが多くの五輪塔が存在が報告されている。



第3図 鰐洞遺跡出土有舌尖頭器



第4図 周辺地形図



第5図 尾崎遺跡位置図及び周辺の主要遺跡

1. 尾崎遺跡
2. 大塚古墳
3. 稲場古墳
4. 木ノ下古墳
5. 鶴塚古墳
6. 火塚男塚古墳
7. 石坂遺跡
8. 仲迫間遺跡
9. 裏迫間遺跡
10. 中富遺跡
11. 後田遺跡
12. 井口遺跡
13. 亀源遺跡
14. 塚弓古墳
15. 神明堂古墳
16. 蔵の内古墳
17. 沖稻葉遺跡

## 第III章 層序

尾崎遺跡は調査以前は雜木林であった。今回の調査地点は、丘陵の南端部にあたり低位段丘面と接する崖面へ向かい傾斜している。このため、地山となる土岐砂礫層が風化等によって形成された表土・遺物包含層である褐色土は広く分布するが、かなり地傾斜に沿い流失しており、南部程やや厚く堆積している。また、中央部には自然谷状地形が存在する。弥生時代後期～古墳時代前期までは現況より深い凹状を呈していたと考えられるが、古墳時代後期以降は現況にかなり近い状態まで埋まっていたと想定される。

調査に伴い、4列東壁・12列東壁・D列南壁他に堆積土層確認ベルトを残したが、全体的に同様相を呈していた。12列東壁・D列南壁E7区位以南～谷状地形に向う傾斜面造を図示した。これをもって本遺跡の土層堆積を述べることとする。

I層(5YR4/6、赤褐色土) 廉食や植物の根が多量に見られる表土層である。厚さ10～20cm程度である。この層の中一下部にかけて多くの白瓷系陶器が含まれており、生活面が存在した可能性がある。

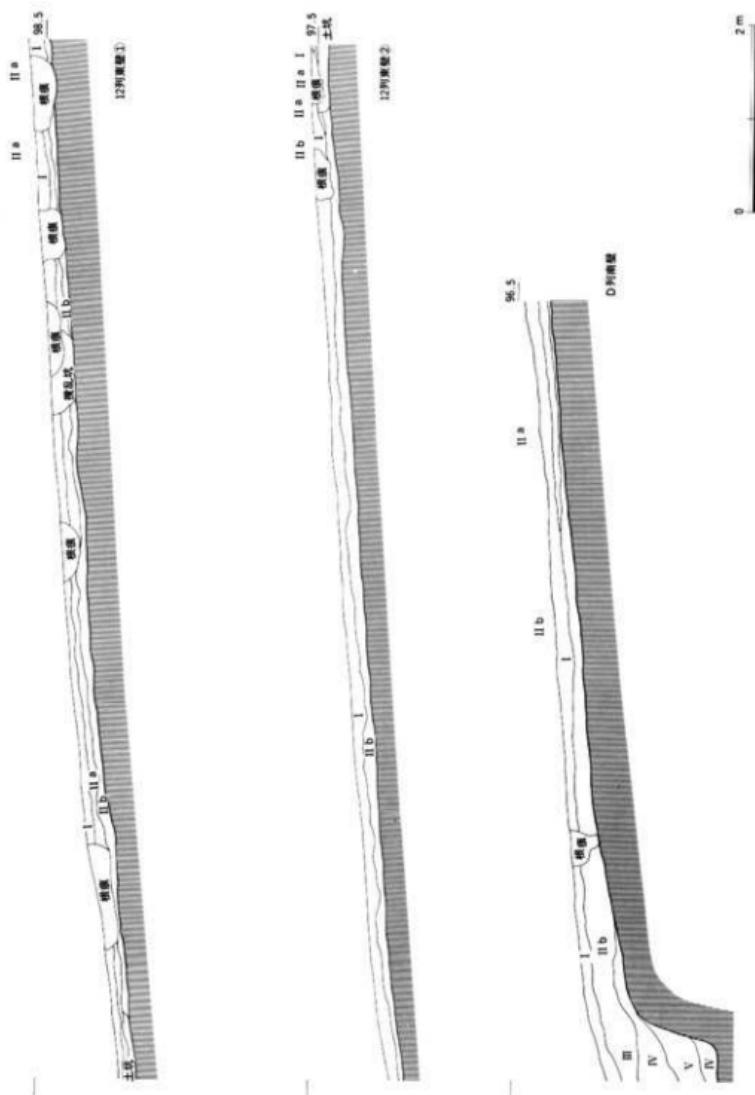
IIa層(5YR5/8、明赤褐色土) ローム質土。粘性は弱い。弥生時代後期～中世の遺物包含層である。厚さ10～30cm程度であるが、南部へ向う程厚く堆積しやや黒みを帯びるため、IIb層として細分した。

IIb層(7.5YR4/6、褐色土) 基本的にはIIa層と同質である。C・D区以南に厚く堆積しており、やや粘性を帯びる。今回確認した弥生時代後期～古墳時代後期の遺構・遺物は本来はIIa・IIb層より掘り込まれていたと考えられ、生活面を同層内に求めるべきであろう。ただし、I層及びIIa・IIb層は全体的に色合いなどが不均質で薄く、上下の境界を求めるのは非常に困難であった。

III層(7.5YR3/2、黒褐色土) 谷状地形覆土上部。しまり・粘性とも強い。おおむね厚さ40～60cmである。主に古墳時代後期以降の遺物を含み、同時代の竪穴住居址がこの層を削り構築されている。南端部で現在の排水溝によって、下部のIV層と共に攪乱を受けている。

IV層(7.5YR2/1、黒色土) 谷状地形覆土下部。III層より粒子が細かく、黒み・粘性が一段と強まる。概ね厚さ20～50cmである。主に弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含み、この谷状地形が顯著な凹状を呈していた段階に土器廃棄場として利用されていた可能性が考えられる。

尚、第6図に見られるIV層は第35号竪穴住居址に流入した二次堆積土である。また、V・VI層は同竪穴住居址に伴う覆土である。



第6図 12号東壁及びD剖面土層断面図

## 第IV章 遺構と出土遺物

### 第1節 壇穴住居址とその出土遺物

今回の調査区においては、弥生時代中期～奈良時代、中世に属する壇穴住居址37軒、建物址2棟、壇遺構1基、溝3条、溝状遺構2条、土坑2基等を確認している。この広がりは、さらには調査区北部に延びると考えられ、この地が様々な条件において居住地として好適地であったかを窺わせている。壇穴住居址の分布は、大局的には調査区西側に弥生時代中期から後期が、中央に古墳時代前期が、東側に古墳時代後期～奈良時代が密集する傾向がある。また、調査区中央に谷状地形が入り込んでいるが、古墳時代後期においては谷状地形を埋める覆土を掘り込み住居を構築している。これらの遺構の遺存状態は、調査区が南北方向に傾斜しており、このため特に南壁等南側部分における遺構の検出は良好な状態とは言い難い。

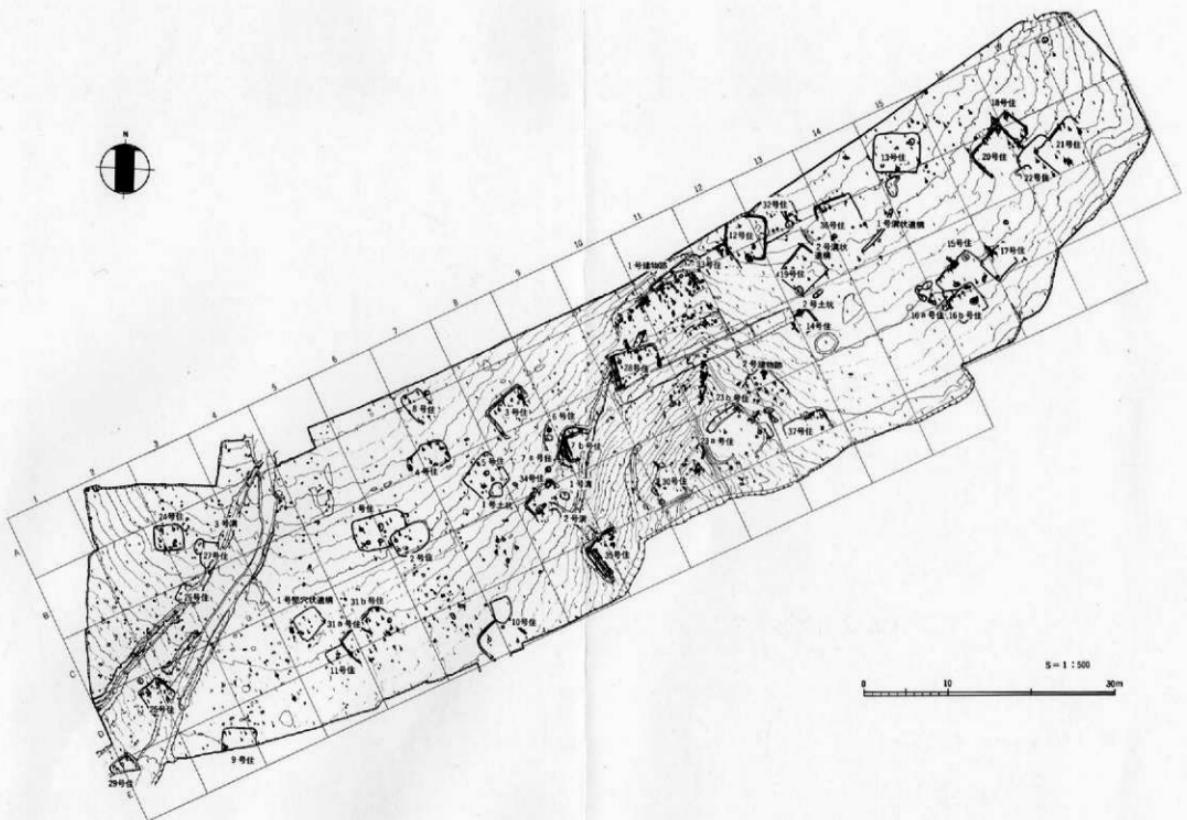
遺物は、土器片、石器、鉄製品等が出土している。その大部分は住居址内に投棄された状態で出土したもので、直接住居址に伴うものは少ない。特に、石器についてはその所属時期を明確にし得る伴出例は少ない。

以下に、各遺構とその出土遺物について説明していく。

#### 第1号住居址（第8図、図版1・2）

C 5～6区に位置する。2号住居によって南東コーナーを切られ、南壁の一部を地傾斜によって流失しているが、その他の遺存状態は良好である。平面形は東側がやや先細りする隅丸長方形を呈し、南北4.00m、東西6.82mとかなり大きな規模を有する。長軸を住居の主軸と仮定するならば、その主軸方位はN110°Wを指す。推定床面積は21.20m<sup>2</sup>である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高は26cmを測る。周溝はない。床面は地山面を掘り込み、薄い黒色土による貼床であるが全体に軟弱であった。ただし、南壁寄りに硬化面が認められた。床面はやや南に傾斜している。また、床面上の特に西壁よりのPit 1・10の傍らに建築材であったと考えられる炭化材が散在しており、後述の覆土の状態も考えるとこの住居が火災にあった可能性が考えられる。

火廻は中央やや東寄りで2ヶ所確認した。どちらも不整形であるが焼土の堆積は7cmあり、火床面はよく被熱している。その在り方から本来より2ヶ所存在したのかもしれない。また、すぐ西側に存在するPit 7は浅い摺鉢状の土坑であるが、その覆土に炭化物を多く含み、火廻に付随する施設である可能性が考えられる。



#### 第7回 旗機配置図

ピットは10本確認した。Pit 1・5・10は径27~45cm、深さ22~49cmを測るしっかりしたもので柱穴と考えられ、2号住によって切られた部分に存在しただろう柱穴を考え4本柱構造を持っていたと推定される。

覆土は2層に分かれ、特に下層の暗褐色土には多くの焼土粒・炭化物を含み、前述の火災住居であった推論に反しない状況を呈していた。

#### 出土遺物（第45・61・62・64図）

本住居址からは462点の土器片、石器が出土している。この内83%を弥生土器が占め、覆土下層及び床面直上より出土しているので、おおむね本住居址の時期を想定し得る遺物と考える。

また、石器では、石鎌・向板剥離痕のある剝片・剝片等が出土している。

#### 縄文土器

##### 壺（1）

条痕文系土器（櫻玉式）。口縁部のみ残存する。口縁端部直下に突帯が位置し、その上を縱に押圧を加えている。口縁端部には押引きが認められる。

#### 弥生土器

##### 甕（2~6）

2は口縁部が短く外反し、口縁端部は面取りが著しい。胴部は湾曲が顕著で、最大径が胴部のかなり上部に位置すると考えられる。頸部に横描の波状文と肩状文、端部内面には櫛による刺突が認められる。胴部下半を欠損する。3は底部片であり、磨滅が著しく、器形・調整等は不明。4~6は、所謂貝田町式に比定される。順に口縁部、胴部、底部片である。外面には横位、横位の羽状、縦位の条痕が見られ、4の口縁部内面には刺突文、6の底部外面上には布目压痕が認められる。

#### 石器

##### 石鎌（275~278）

凹基2点、有茎2点が出土している。276はアメリカ式と呼ばれるものであり、素材剝片の剥離面を残している。おそらく幅広な貝殻状剝片を素材としたものであろう。278は表裏面とも下半部中央稜上に磨面が認められる。

##### 剝片（296）

左側縁・下端部に稜面を残す。剥離面打面である。

##### 直縁刃石器（313）

旧来は打製石斧と分類されていたものの中に含まれる。ホルンフェルス製で、板状節理に沿う剥離を施し、片側、あるいは両側に刃部調整、使用による摩耗が集中している。石鎌の機能を考えられるが、混乱を避けるためにここでは直縁刃石器と仮称しておく。

本住居址の時期は図示した4~6の甕の特徴より弥生時代中期に該当しよう。

## 第2号住居址（第8図、図版1・2）

C～D 4・5区に位置する。北西コーナー付近で1号住を切る。遺存状態はかなり良好であるが、南壁側には根等の擾乱がありやや壁の立ち上がりが判然としない部分がある。平面形は隅丸長方形で、南北3.23m、東西4.60mの規模を有する。SB1と同様、長軸を住居の主軸と仮定するならば、その主軸方位はN123°Wを指す。床面積は12.52m<sup>2</sup>である。壁はやや外傾して立ち上がり、特に東壁においてはこの傾向が顕著である。最大壁高は35cmを測る。周溝はない。床面は地山面を掘り込み薄い暗褐色土で貼床をしているが軟弱化している。床面はやや南に傾斜している。

火廻は中央やや北寄りで確認した。53×40cmの不整形でその範囲内に河原石を1つ取り組み込んでいる。河原石は火床面上にのり、よく焼けており付帯するものと考えよい。焼土の堆積は5cm程度で薄いが火床面はよく焼けていた。

ピットは9本確認した。Pit 1・2・8・9は径15～25cm、深さ14～20cmを測り、柱穴と考えられ、4本柱構造を持っていたと考えられる。Pit 4は壁を切っているのではなく、本来は黒褐色土が充填され壁が形成されていたもので、あるいはSB1に伴うものである可能性が高い。

覆土は2層に分かれ、上部からの流れ込みによる自然埋没と考えられる。上部の褐色土には須恵器片が多く含み、本住居址が埋没する過程で施設として利用されていたと考えられる。

## 出土遺物（第45図）

本住居址からは328点の土器片、石器が出土している。この内70%を土師器が占め、前述のとおり覆土上層部には須恵器が集中して遺棄されていた。覆土下層出土の土師器はおむね本住居址の時期に近いものとして理解しても大過ないと考える。

## 須恵器

## 壺蓋（7）

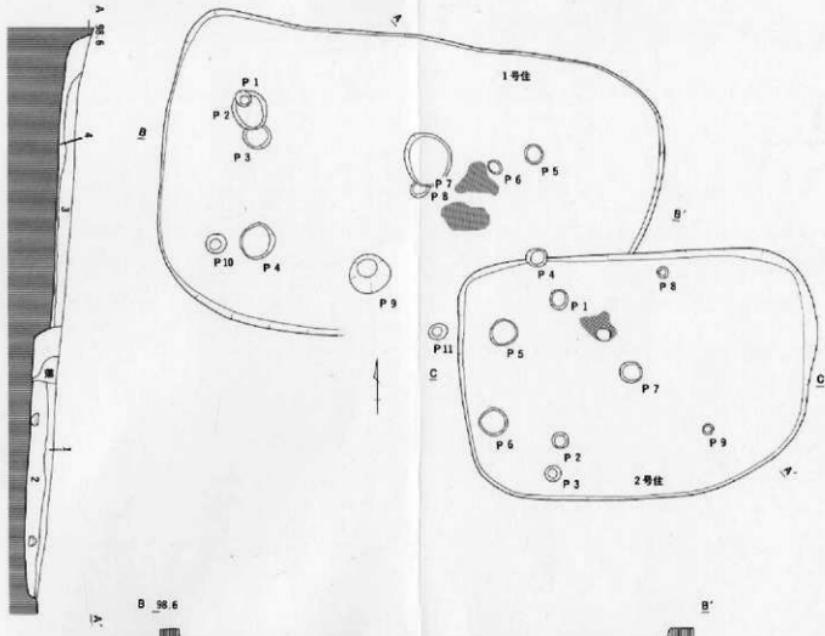
やや扁平な宝珠状のつまみをもつ。天井部は平坦で、口縁部は屈曲して下方に伸びる。口縁端部が僅かに内傾している。

## 甕（8・9）

8は口縁部一部のみ残存のため正確な器形は不明であるが、甕の口縁部と考えられる。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部は肥厚し凹面をなしている。胴部を欠損する。9は口縁部は屈折して内傾し、受口状を呈している。口縁端部は丸味を帯びている。胴部下半を欠損する。

## 壺（10・11）

10は口縁部、胴上半部を欠損するが、壺の底部と考えられる。胎土が白っぽく、他と異なる。



#### 土壤説明

- 1 7.5YR 4/5 (褐色土) 砂質土
- 2 10YR 3/2 (黒褐色土) 砂質土, SB 2 植土
- 3 7.5YR 3/4 (暗褐色土) 砂質土, SB 1 植土  
炭化物を少量含む
- 4 7.5YR 3/3 (暗褐色土) 砂質土, SB 1 植土  
燒土、炭化物を含む

0 2 m

第8図 1・2号居住址

11は口縁部が僅かに内側しながら立ち上がり、口縁端部は尖り氣味となる。胸部はやや肩が張り最大径が胸部上半に位置する。底部はヘラ切り後ナデが施されているが、内面底部は指で押し下げ丸底を意識している。

#### 土師器

##### 高坏 (12~15)

12は坏部、脚部の一部を欠損する。大きく開く坏部と真中で影らむ脚部をもつ。内面はシボリにより號状となる。13は脚部のみ残存する。脚部が下彫れ氣味に開き、裾部は屈曲して八の字状となる。内面の粘土つぎ痕が明瞭で段をなしている。14・15も脚部のみ残存する。14は形態・調整とも13に近似する。ただし、13と比べると、直線的である。13と同様内面には粘土つぎ痕の段を有している。15は円柱状を呈する脚部をもつ。器壁が厚いのが特徴的であり、内面には指で整形したような凹凸が認められる。

##### 甕 (16)

台坏甕の脚部である。磨滅が著しいが、内外面ともナデ調整が施されている。

##### 鉄製品 (17)

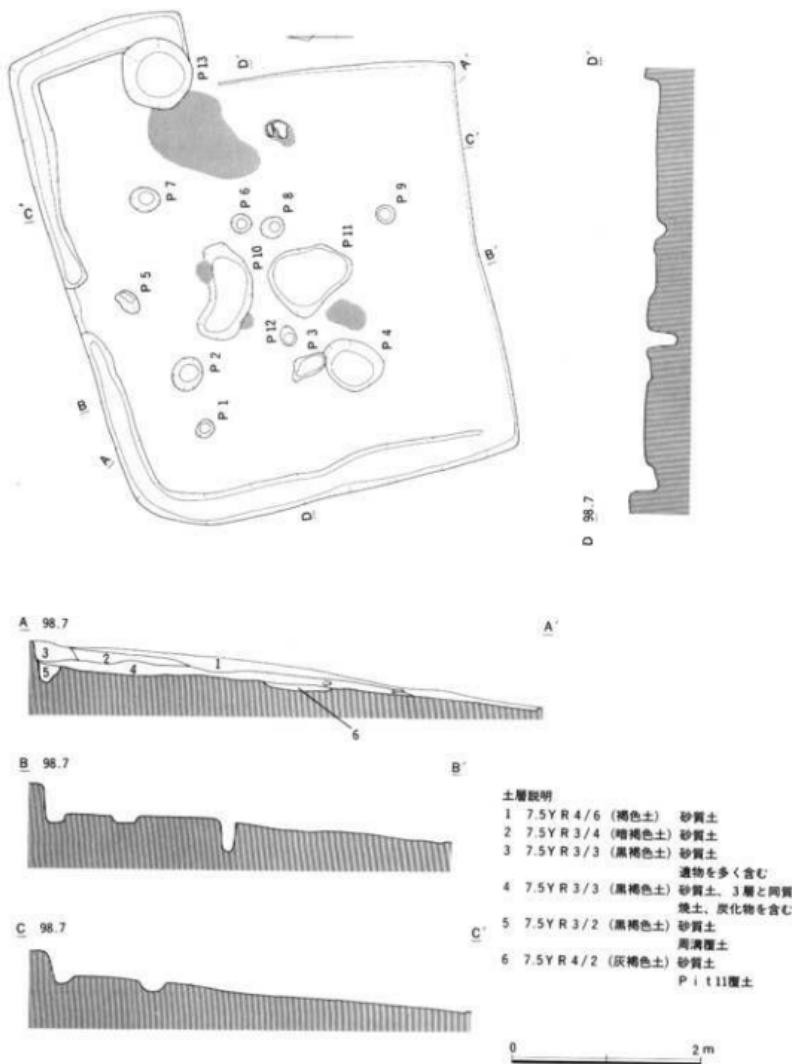
刀子である。片闊で茎の大部分を欠損している。刃部は平造か。

本住居址の時期は12・15の高坏、16の台付甕より加納編年の西北出期に位置づけられよう。

#### 第3号住居址（第9図、図版2）

B～C 8区に位置する。南側を地傾斜によって流失し、南壁・及び東壁の一部はわずか数cmを残す程度である。平面形は南北4.00m、東西4.50mの方形の北東部分に1m四方の張り出しの付くプランを持つ。張り出し部の南端は、中世の土坑により切られており、正確な形状は不明である。主軸方位はN 40°Wを指す。床面積は19.24m<sup>2</sup>である。壁は北壁でしっかりした立ち上がりが確認でき、最大壁高は31cmを測る。床面は地山面を掘り込み、南側にゆくほど若干傾斜している。特に硬化面等はなかった。周溝は、北壁沿いの中央付近で途切れるが、幅約30cm、床面からの深さ10cmを測る。東壁の一部及び南壁沿いはないという感じではなく流失したと考えられ本来はほぼ全周していたと考えられる。

ピットは13本を確認した。何れも不整形で浅く、住居の柱穴と明確に指摘できるものはないが Pit 2・6・7・9は径10~20cm、深さ15cmを測り、位置的にも柱穴と判断できようか。Pit13は前述したとおり中世のものであり、Pit 3・4・11は攪乱である。Pit10は本住居址に伴うものである。火廻としては床面の数ヶ所に焼土が検出されている。また、住居の北東部壁際ではかなり厚く堆積した焼土が認められ、その下位には焼けて赤変した径20cmほどの河原石が検出されている。断定はできないが「類カマド」と呼ばれる資料に該当するものと考えた。また、中



第9図 3号住居址

央付近にみられる2ヶ所は床面からは浮いているものと判断した。それぞれ厚さ7~10cm程度の焼土の堆積がみられた。

覆土は6層に分かれる。主体となる第4層の黒褐色土が北半部では厚く堆積しているが、南半部では流失している。やはり自然埋没であろう。

#### 出土遺物（第46・47図）

本住居址からは約900点の土器片が出土している。その内96%を土師器が占めている。大半が住居址北半部の中層から下層、床面直上及び周溝内よりかけて出土しており、おおむね本住居址の時期を想定し得る遺物と考えられる。

#### S字状口縁台付甕（18~43）

本住居址より21個体以上出土しているが、図化できたのは口縁部片及び脚部のみである。いずれもS字状口縁台付甕である。口縁部の破片については、頸部外面に「頸部調整」と呼ばれる棒状の工具による沈線が巡り、胴部は粗い刷毛目調整である。脚部については、いずれも端部を内側に折り返し、内面には指頭によるナデ、胴部との接合部外面には砂粒を多く含んだ粘土を足すというS字状口縁台付甕の基本的な製作・調整法を踏襲している。特に31は、頸部調整の工具の痕が刺突状に巡っており意図したものか否かは不明であるが、西北出遺跡溝B出土例に類似する。以上のS字状口縁台付甕は口縁部の形態により、更に細分類できる。即ち、イ=口縁部一段目から二段目にかけて緩やかに屈曲し、口縁部を肥厚させるもの（18~21）。ロ=一段目から二段目にかけてシャープに屈曲し、口縁端部に面をもつもの（22~23）。ハ=一段目から二段目にかけてシャープに屈曲し、口縁端部が薄くおわるもの（24~33）。イのものは、何れも口縁部を肥厚させた後水平な面をもつ。

#### 壺（44~45）

44は二重口縁状を呈するが、11径が復元できないほどの破片である。45は胴下半部のみ残存する。内面には指状のナデにより凹凸が顕著である。

#### 高壺（46~48）

46は壺部のみ残存し、はたしてここに分類すべきか疑問が残る。口縁端部内面に段を有している。47・48は脚部のみ残存する。何れも脚の内面にはシボリ痕を残し、脚頭部は壺部を接合する以前に閉じている。

#### 小型丸底壺（49）

口縁部径と胴部最大径がほぼ一致する器形をもつと考えられる。口縁内外面に横方向のミガキを施している。焼成・胎土とも良いもので、後に大量発生する粗製のものとは区別される。

#### 器台（50）

屈曲部の破片であり、上下さえ不明である。おそらくX字状の形態をもつものと考えられる。

本住居址の時期は、イのS字状口縁台付甕は赤塚編年C類からD類の過渡的な形と見るこ

とができる。ロ及びハは赤塚氏が小型品を中心に見られるとして挙げたものに該当する。29を除く器種構成、形式構成、さらにはS字状口縁台付壺の型式の特徴から、西北出遺跡溝Bの資料に類例を求めることが可能である。以上を考慮して、元屋敷式の末に置かれた西北出期の年代観で捉えられる。

#### 第4号住居址（第10図、図版2・3）

B～C 6・7区に位置する。平面形は、南北3.30m、東西3.20mの隅丸方形部分の西側に東西2.00m弱の台形状の張り出しの付くプランである。張り出しを持つプランについては、あるいは改築等に伴う可能性も考えられるがセクション等では確認できなかった。長軸を住居の主軸と仮定するならばその主軸方位はN120°Wを指す。床面積は12.19m<sup>2</sup>である。壁は垂直に立ち上がるが、南壁は地傾斜によって流失し数cmを残すのみである。最大壁高は北壁で30cmを測り周溝はない。床面は黄褐色土に少量の暗褐色土による貼床で硬化していたが、張り出し部分については軟弱で西から東に向ってゆるやかに傾斜している。

火坑は住居の中央部分及び南壁際に2ヶ所確認した。どちらも楕円形で、南側のがやや規模が小さい。どちらも火床面はよく焼けて硬化しており、焼土の堆積は8～10cmあった。

ピットは10本確認した。Pit 1・7は径25cm、深さ10cmを測り、梯子穴と推定するならばこの張り出し部は入口と考えられ、この住居に付随するものであろう。Pit 2・5・6・9が柱穴と考えられ、径25～30cm、深さ10～30cmを測る。

覆土は3層に分けられる。北側からの流れ込みによる自然埋没と考えられるが、暗褐色土には多くの河原石が混入していた。

#### 出土遺物（第47図）

本住居址からは226点の土器片、石器が出土しているが、その内弥生土器が90%を占める。大半が覆土下層より出土しており、54の壺？が床直より出土している。出土量のわりに図示し得たものは少ないが、本住居址に伴うものと考えられる。

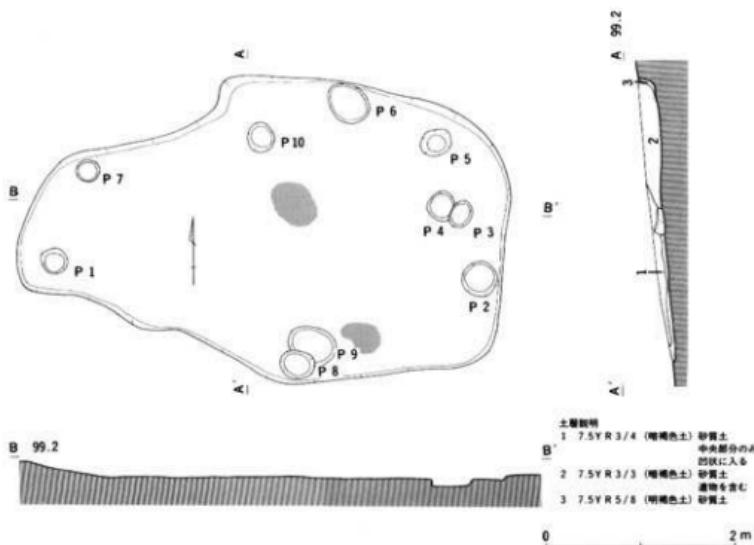
#### 土師器

##### 高壺（51～53）

51～53は全て脚部のみ残存する。51は下膨れの形状を示し、裾部で大きく屈曲する。シボリ痕が明瞭に残る。52は裾部に向って僅かに八の字状に開く形状をもつ。53は脚部は下方に向って直線状に伸びるが、中位部分でやや膨らんでいる。

##### 壺（54・55）

54は口縁部が外反し、一度内側に屈曲して口縁端部にいたる。屈曲する部位からの立ち上がりは短い。有段の壺と考えられる。55は壺の底部である。どちらも磨滅が著しく、調整等の觀



第10図 4号住居址

察はできない。

本住居址の時期は51~53の高坏よりおよそ西北出~松河戸期に位置づけられよう。

#### 第5号住居址（第11図、図版3）

C 7~8区に位置する。地傾斜によって南半部をかなり流失しており、プランの検出には困難を極めた。北東コーナー、南壁中央を1号土坑（中世）によって切られる。平面形は方形を呈し、南北・東西4.50mの規模を有する。主軸方位はN47°Wを指し、床面積は17.46m<sup>2</sup>である。壁は残存状態のよい北壁で観察するとゆるやかに外傾して立ち上がりしている。最大壁高は28cmを測る。周溝はない。床面は地山を掘り込み、全体に軟弱であった。

火廻はやや北西コーナー寄りに確認した。60×27cmの不整形で、焼土の堆積は3cm程度で非常に薄いが火床面はよく焼けていた。

ピットは11本確認した。Pit 8・9・10・11が柱穴と考えられる。径16~20cm、深さ18~40cmを測り、4本柱構造と考えられる。他は浅く、不明である。尚、Pit 6は中世に属する。

覆土は2層に分かれるが、上部からの流れ込みによる自然埋没と考えられるが、主体となる褐色土の流失も激しく、南半部はほとんど存在しない。

#### 出土遺物（第47・48・61図）

本住居址からは258点の土器片、石器が出土している。その内、88%を弥生土器が占める。大半が覆土下層より出土しており、59の高坏はほぼ床面直上より出土しており、概ね本住居址の時期を想定し得る遺物と考える。

#### 弥生土器

##### 甌（56）

緩やかに外反する口縁をもつもので、口縁端部は上方に摘み上げ、平坦な面をなしている。外面は刷毛目調整である。台部の有無は不明である。

##### 壺？（57）

底部のみ残存し、磨滅が著しく調整等の観察もできない。壺の底部であろうか。

##### 高坏（58～61）

58は壺部のみ残存する。浅い器形で、屈曲部に稜をもっている。口縁端部は、ヨコナデにより僅かに外反し、平坦な面をもつ。59～61は脚部のみ残存する。いずれも上半に柱状部をもち、3方透孔である。59は外面にミガキが認められるが、60・61は磨滅により不明である。

##### 鉢（62）

鉢に分類したが、あまり類例のない資料である。口縁部は緩やかな段をもち、口縁端部を摘み出して受け口状となっている。部外面に煤が附着しており、火にかけて使用した痕跡をもつ。

#### 石器

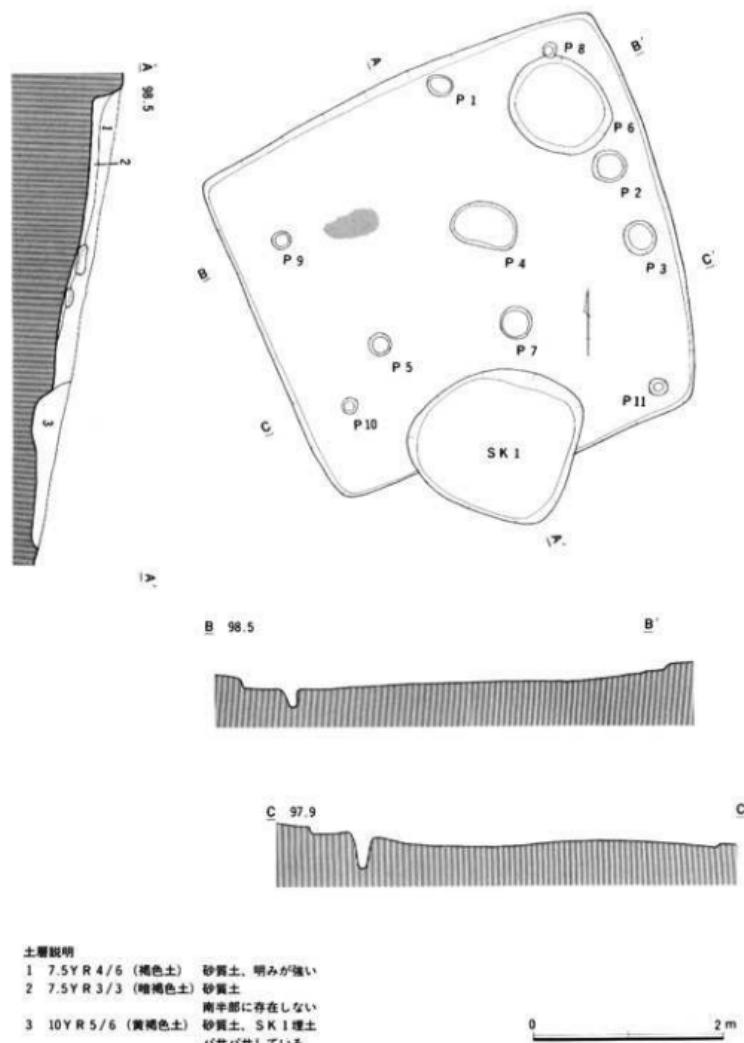
##### 石鎌（279）

大型・分厚な石鎌である。尖頭部付近で他とは異なる斜め上からの剥離を加え肩部を作り出している。茎を欠損する。

本住居址の時期は4他の高坏から、瑞穂期の範疇で捉えられよう。

#### 第6号住居址（第12図）

C 8～9区に位置する。南東コーナー付近をSB 7によって切られ、東壁側は地傾斜によつて遺存状態は悪い。平面形は歪んだ方形を呈し、南北4.10mを測る。壁は北壁でなだらかに立ち上がり摺鉢状を呈しており、本遺跡で確認した住居の中では異質であり、本来は竪穴状遺構とすべきかもしれない。南北方位はN 2°Wを指す。周溝はない。床面は地山を掘り込んだ状態で軟弱である。火廻は検出できなかった。ピットは2本確認した。Pit 1は径60cmの円形で深さ15cmを測る。Pit 2は摺鉢状を呈する深い土坑であるが、どちらも性格不明である。



第11図 5号住居址

覆土は3層に分かれるが、やはり北からの本遺跡第IIa層が厚く流れ込み、本来の埋土である褐色土は北・西壁寄りに残るのみである。

#### 出土遺物（第48図）

本住居址からは土器片が180点出土している。これらの内、83%を弥生土器・土師器が占めるが、いずれも破片で図示できるものはない。覆土上層出土の63の壊身のみ図示したが、本住居址に伴うものではない。

#### 須恵器

##### 壊身（63）

大半を欠損している。正確な器形・法量は不明であるが、明瞭な受部をもつ。

本住居址からは、いずれも小破片でこのため時期も判然としない。また、住居址の形態が他の住居址と比較しても明瞭に異なり、疑問が残る。63の壊身は7世紀終わりに属する。

#### 第7号住居址（第12図、図版3）

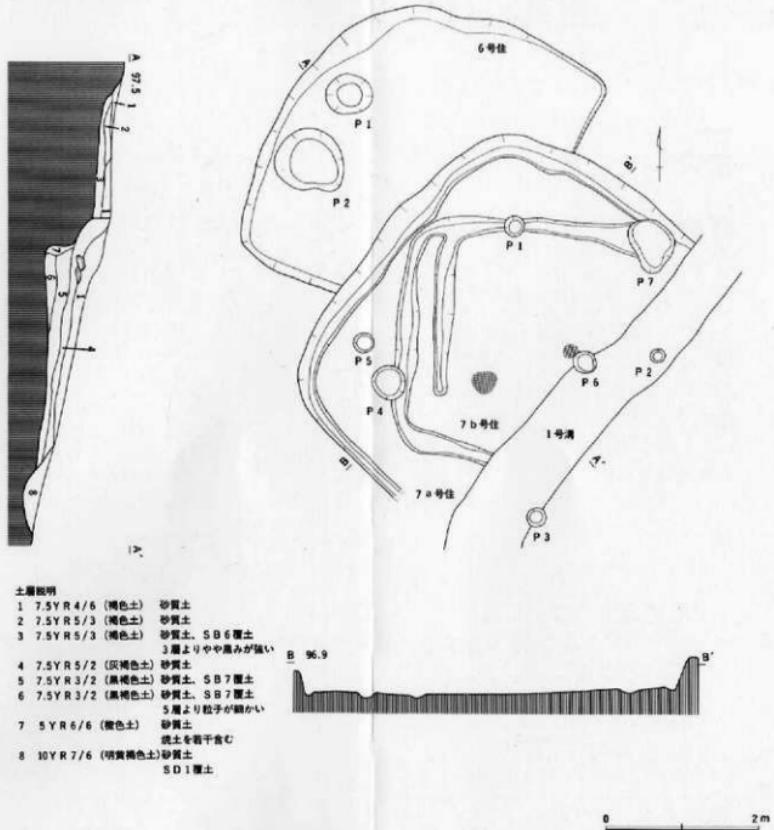
C 8～9区に位置する。北西側で6号住を切り、南東側を中世の溝である1号溝によって切られる。一部残る東壁は地傾斜によって流失している。尚、貼床をはがした結果、先に確認した住居プランとは方向を違える周溝が検出されたことから、本住居は改築の可能性を考えられ、ここでは便宜的に両者を7a号住、7b号住と呼称して説明する。

7a号住 平面形は隅丸方形を呈し、南北5.10m、東西は後述のピット位置より4.50mくらいありそうである。主軸方位はN 9°Eを指す。壁は若干外傾して立ち上がっているが、特に北壁の掘り込みはしっかりしている。最大壁高57cmを測る。周溝は南壁側は1号溝及び地傾斜のため消失しているので確認できないが、本来は全周していたと考えられる。残存部分で幅10～19cm、深さ7～14cmを測る。床面は黄褐色土による貼床で全体に硬化が顕著であった。床は若干南に向って傾斜している。

火廻は中央やや南寄りに確認した。32×26cmの橢円形を呈し、焼土の堆積は9cmを測る。火床面はよく被熱してガリガリの状態であった。

ピットは5本確認した。Pit 1・2・3・4が柱穴と考えられる。Pit 2・3は上部をSD 1によって切られており、確認時の平面形の大きさはばらつきがあるが、深さはいずれも40～50cmあり、しっかりしたものであり、4本柱構造であったと考えられる。尚、Pit 1からは高壊(64)が出土している。

覆土は5層に分かれる。上部からの流れ込みによる自然埋没である。主体となる黒褐色土は北壁側で良好に遺存する。ただし、セクションでは7a号・7b号住の前後関係等の識別はできなかった。



第12図 6・7号住居址

7 b 号住 平面形は方形を呈すると考えられ、南北3.40m以上であると考えられる。主軸方位はN24°Wを指し、7 a 号住とはその方位を大分違える。周溝はおそらく全周していたと考えられる。北東コーナー辺りで7 a 号住の周溝・Pit 7 と切り合うが、その前後関係は確認できなかった。また、西側の周溝の内側に平行するように幅15~25cm、深さ4cm前後の溝が存在し、南西コーナー手前で終結しており間仕切り施設であった可能性が高い。床面は黄褐色土による貼床である。

火處は Pit 6 の北西部に存在し、7 b 号住の中央部分にあたる。18×20cmの円形で焼土の堆積は薄いが火床面はよく焼けていた。

ピットは2本確認したのみで、Pit 6・7とも浅く性格は不明である。

#### 出土遺物（第48・61図）

両住居址からは土器片、石器が470点出土している。前述したとおり6号住を切っているため6号住の遺物が混在して取り上げられた可能性もあるものの、64の高環はPit 1内より出土しており本住居址（7 a 号住）に伴うものと考えられる。

#### 土師器

##### 高环（64・65）

64は底部から立ち上がりは弱く、大きく直線的に開く口縁をもつ。脚部はやや下彫れ気味となり、裾部を欠損する。65は脚部を欠損する。坏部のみ残存し、若干屈曲してやや外方気味に伸びている。

##### S字状口縁台付甕（66）

脚部の一部のみ残存する。荒い刷毛目が脚部から体部にかけて認められる。

##### 壺？（67）

小破片のため正確な器形は不明であるが、有段口縁の壺と考えられる。

#### 須恵器

##### 坏蓋（68・69）

68はつまみを欠損する。浅身の天井部をもち、口縁部は僅かに内側に屈折して伸びている。69は天井部に僅かな平坦面を残し、口縁部は天井部との境で折れて外反している。

##### 提瓶？（70）

欠損部位が大きく正確な器形は不明であるが、提瓶の頸部部分と考えられる。

##### 甕（71）

胴部上半のみ残存している。肩部が強く張る器形と考えられ、外面に格子目のタタキ目、内面に同心円状の当て具の痕跡を残している。

##### 長頸瓶（72）

肩部で逆くの字状に屈折する胴部をもつことから長頸瓶と考えられる。底部には高台が剥離

したような痕跡をがあり、高台をもっていた可能性が高く、底部に下駄印が残存している。胎土が他の須恵器とは異なる。

#### 石器

##### 石錐（280）

1点のみ覆土上層より出土しており、流れ込みと考えられる。チャート製で、表面に素材剝片のネガ面を残している。凹基式で、大きな抉りが入る。

両住居址の時期は、第7a号住出土の64の高坏より年西北出期の年代観で捉えられ、65の高坏66のS字状口縁台坏甕、67の壺？もこれに作うと考えられる。また、切り合う第7b号住に関してても比較的時期の近い可能性が高い。覆土中層より出土している68・69の坏甕、72の長颈瓶は7紀終わりに属する。

#### 第8号住居址（第13図、図版5）

A～B7区に位置する。地傾斜によって南側へ向かうほど流失しており、遺存状態は極めて悪い。平面形はやや歪んだ隅丸長方形を呈し、南北3.82m、東西2.75mの規模を有する。主軸方位はN41°Wを指し、床面積は9.59m<sup>2</sup>である。壁は観察可能な北壁でほぼ垂直に立ち上がり最大壁高は29cmを測る。周溝はない。床面は地山面を掘り込み、北壁側付近では硬化面も認められた。また、床面直上で確認したPit1～5の傍らには建築材と考えられる炭化材が検出されている。尚、床面は南へ若干傾斜している。

火焚は東壁際やや南寄りに確認した。40×25cmの楕円形で、焼土の堆積は7cmであり、火床面はよく焼けていた。

ピットは10本確認した。いずれも深さは10cm程度で浅く柱穴と呼ぶのに疑問を感じるが、位置及び前述の炭化材の在り方よりPit1～4、6・7が該当する可能性が高い。それぞれ径15～34cm、深さ7～12cmを測る。Pit8は入りの施設に関係するものであろうか。径30cm、深さ10cmを測り、台付甕が出土している。Pit9・10は本住居址に伴うものか不明である。

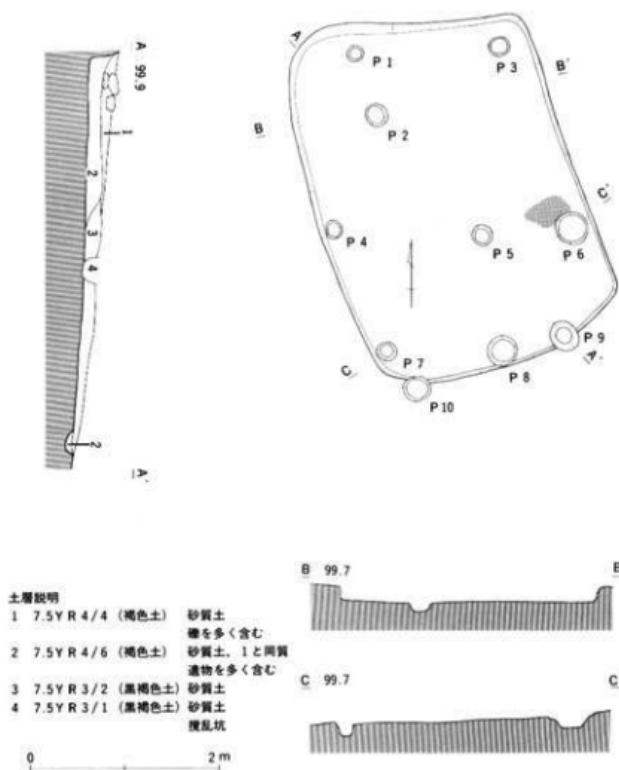
覆土は3層に分けられる。北側からの流れ込みによる自然埋没で、主体となる黒褐色土は南半部以下には見られない。

#### 出土遺物（第48・49・65図）

本住居址からは弥生土器片108点、石器4点、山茶椀片4点、炭化材が出土したが、図示し得たのは8点である。73～79は床面直上より出土したものである。316は（仮称）有肩直縁刃石器であり、県内での出土例は少なく、貴重な資料として注目される。

#### 弥生土器

##### 甕（73）

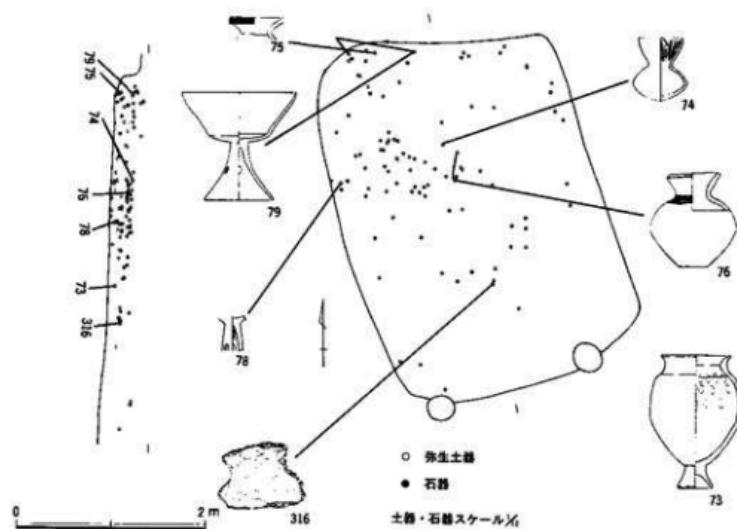


第13図 8号住居址

頭部がやや直立気味に立ち上がり、口縁部は外方に突出する。端部は顯著な平坦面をなし、面取りが認められる。また、頭部の器壁が極めて厚くなっているのが特徴的である。胴部は緩やかな曲線を描き、胸部径が口縁部径を凌ぐ。脚部は接合部より内擣しながらハの字状に開く。摩滅が著しく、調整手法の観察はできなかったが、胴部内面には指頭圧痕が残されている。

#### 直口壺 (74)

口縁部が内擣しながら外方に開く。端部付近では立ち上がりの方向を微妙に変えて垂直気味



第14図 8号住居址遺物分布図

となるが、内頬面は認められず丸くおさめている。胴部は算盤玉状を呈し、最大径は胴部中位に位置する。底部らしいものは認識し得ず、やや尖り気味の丸底となっている。調整手法は口縁部内面では継位のミガキを確認できたが、外面は摩滅が著しく観察できなかった。おそらく、継位のミガキが施されていたと考えられる。

#### 広口壺 (75~76)

75は口縁部に擬凹線が認められる広口壺である。口縁部が大きく外反し、端部に若干垂下する拡張部位が存在し、この端部に4本の擬凹線が見られる。胴部を欠損する。76は胴部に丹彩が認められ、頸部の下位にやや幅の狭い文様が施される。口縁端部に擬凹線を持たないことから広口壺とした。口縁部は強く外反し、口縁端部はヨコナデ調整によって逆くの字状に内傾し凹面状を呈している。胴部はやや肩が張る器形を呈す。施文された文様は上下に擬凹線を配し、その間を充填する継位の刺突文によって構成されている。最大径は胴部ほぼ中央に位置する。口縁部以外の調整手法等については不明な点が多いが、一部にミガキ痕が認められた。

#### 器種不明 (77)

77は胴部を欠損する。口縁部は直線的に外方に開くが、端部付近で僅かに内擣する傾向が認

められる。端部は丸くおさめる。磨滅が激しく調整手法は明らかではないが、内外面とも縦位のミガキが施されている？。

#### 高坏 (78・79)

2個体分が出土している。脚部が柱状を呈するものとハの字状に大きく開くもの2種が認められる。

78は脚部の上半部のみであるため不明な点も多いが、円柱状に近い形態を示す。また、穿孔は3方向に施されている。内面にはシボリ痕が見られる。79は坏部底部で一度屈折してから大きく外反する坏部とハの字状に開く脚部を有する有稜高坏。坏部の口縁部・脚部の裾部にはそれぞれ内彎傾向が見受けられるが、裾部は11縁部と比較するとその傾向は弱い。口縁端部には内傾面は認められずやや尖り気味におさめている。脚部中位に1組の穿孔が位置し、3方向に穿孔している。磨滅が著しく、調整手法は観察できなかった。

#### 石器

##### 有肩直縁刃石器 (316)

左右側縁に抉りを施し柄状の基部を作出している点で有肩肩状形石器に酷似するが、刃部が凸形とならず直縁刃となるため仮称しておく。結晶片岩製で、薄く剝離する石材の特性を利用している。刃部には微細な剝離痕が認められる。裏面は自然面か？

本住居址の時期は図示した甕・直口壺・広口壺・高坏より能田旭期古相に位置づけられよう。

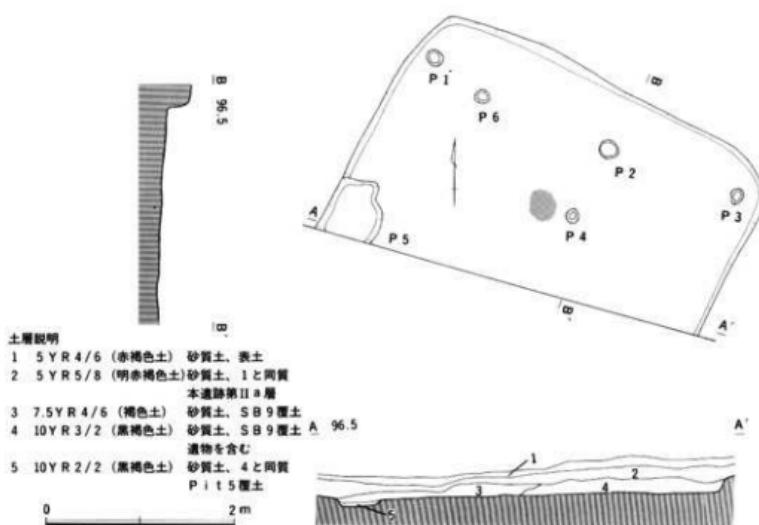
#### 第9号住居址（第15図、図版5）

E2区に位置する。住居の南半が調査区外になるため正確な規模は知り得ないが、東西4.02mを測る。方形、あるいは長方形を呈すると考えられ、南北方位はN1°Eを指す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高は25cmを測る。周溝は持たない。床面は地山面を掘り込んだ状態で確認部分でも若干南に傾斜している。火廻としては、住居の中央北より焼土を検出したが、きわめて薄く、固く焼けしまってはいない。5本のピットを検出したが、いずれも浅く柱穴と断定しかね、柱穴配置等は明らかにできなかった。Pit5は西壁に接して皿状に浅く掘り込まれた土坑であるが性格は不明である。

覆土は基本的に5層に分かれるが、上部に本遺跡I・IIa層が厚く堆積している。主体となる褐色土及び黒褐色土には遺物とともに多くの拳大～人頭大の礫を含んでいた。上部からの流れ込みによる自然埋没と考えられる。

#### 出土遺物（第49・61・64図）

本住居址は前述のとおり北半部のみの調査であるが、309点の土器片、石器が出土している。その内91%を弥生土器が占める。土器の大半が覆土中～下層にかけて出土しており、本住居址



第15図 9号住居址

に直接的に伴う可能性は少ないが、およそ同時期の遺物として捉えても大過ないと考える。また、石器も1号住居址に続いて多く出土している。

#### 弥生土器

##### 甕 (80~82)

80~82は所謂貝田町式と呼ばれるものである。ただし、80はやや疑問が残る。80・81は口縁部片であり、共に横位の条痕を残し、80の口縁端部には押引き、81の口縁端部には刻みが認められる。82は底部片であり、外面には縱位の条痕、裏面には布目压痕を残している。83は台部分のみ残存する。正確な器形は不明であるが、本遺跡での他の出土例からくの字に外反する口縁部をもつ甕であろう。

##### 広口壺 (84)

胴部上半のみ残存する。上半には櫛描きの横線文、斜線文が認められる。

##### 壺 (85・86)

85・86とも底部のみ残存し、大半を欠損する。2が体部にかけて横に開いていく器形をとるのに対して、85はやや立ち気味である。

## 高坏 (87)

深い坏部をもち、脚は内弯する。外面にはミガキを施し、3方2段の透孔が開けられている。やや長脚になるものと考えられる。

## 器台 (88・89)

88は摩滅により調整等の観察はできないが、脚部と坏部の接合部分は受部中央に上から粘土を加えることにより閉じている。これに対し、89は貫通しており外面にはミガキが施されている。

## 鉢？ (90)

底部のみ残存し、正確な器形は不明であるが鉢として分類した。あまり類例の見られない器形である。

## 石器

## 石鎌 (281)

凹基式で、大きな抉りが入っている。左脚部を欠損している。

## 両曲剥離痕のある剝片 (290)

従来ビエス・エスキューと呼ばれていたものである。上下（左右）両端に潰れ状の階段状剥離が集中し両側縁、あるいは片縁に截断面が見られるものを所謂ビエス・エスキューとして機械的に分類してきたが、ここでは剝片剥離技術における両極剥離技法を積極的に評価するため両極剥離痕のある剝片と仮称する。以降本章では本来の意味でのビエス・エスキューもひとまずこの名称で呼んでおくこととする。本資料は蝶面を一部残し、断面は凸レンズ状を呈す。

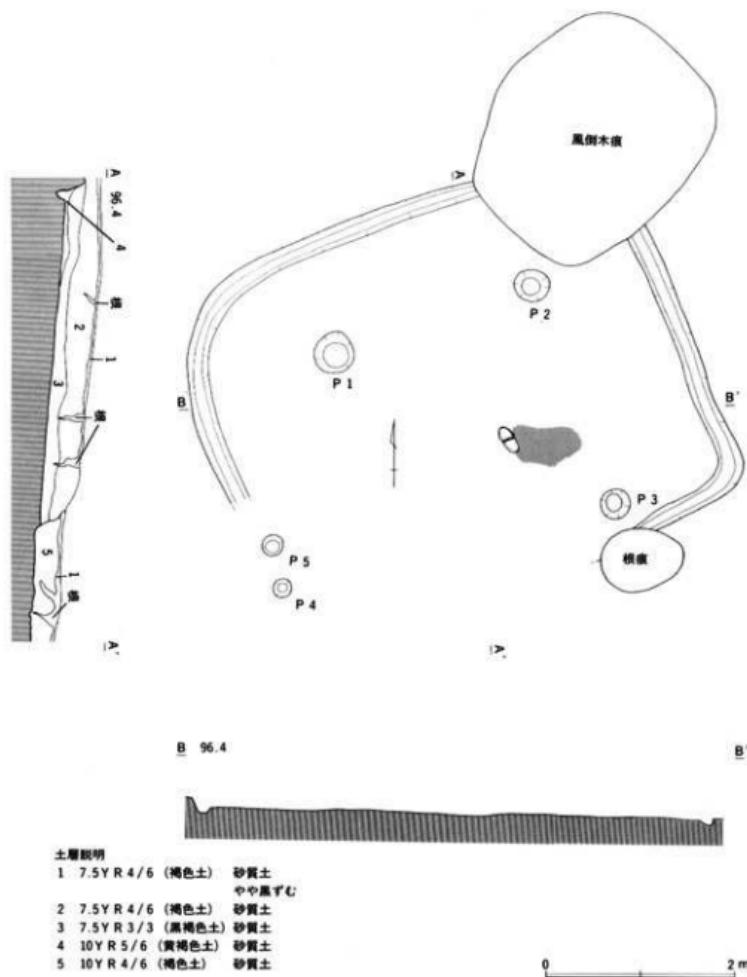
## 砥石 (312)

長さ4.7cm、幅5.9cm、重量59gを測る。凝灰岩製である。

本住居址の時期は、87の高坏、88・89の器台より能田旭期の年代観で提えられよう。

## 第10号住居址（第16図、図版5・6）

E～F 6・7区に位置する。南西コーナー付近を地傾斜で失い、北東コーナーで大きな風割木痕により切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、南北4.30m（推定）、東西5.10mの規模を有する。長軸を住居の主軸とするならばその主軸方位はN139°Wを指す。推定床面積は20.00m<sup>2</sup>である。壁は北壁・西壁でよく残っており、やや外傾して立ち上がりっている。最大壁高は22cmを測る。床面は地山面を掘り込み、やや南側へ向かって傾斜している。特に硬化面等は確認できなかったが、本住居址は調査区域の南端に位置し、後述の覆土の観察からもかなりの北側からの流れ込みの影響を受けていると考えられ本来の状況を示しているとは考えられず、果たして床面の確認も困難な状況であった。周溝は本来は全周していたと考えられるが、南西コーナー



第16図 10号住居址

付近ではやはり流失し確認できなかた。現存部分で、幅20~25cm、深さ8~4cmを測る。火葬は中央部やや南東よりに設けられている。火床面はよく被熱し、焼土範囲は80×30cmの広がりを持ち、7cmの厚さで焼土が堆積していた。また、火床面の西側には長さ60cm×幅30cm×厚さ10cmの河原石がのっていたが、その上面は平らで磨滅しており石面であった可能性がある。

ピットは5本確認した。Pit 1~3は柱穴と考えられ、本来は南西コーナー部分にあったと思われるピットを含め4本柱構造をもっていたと考えられる。それぞれ径34~48cm、深さ30~45cmを測る。Pit 4・5は後世のものである。

覆土は5層に分かれるが、上部からの流れ込みによる自然埋没である。ただし、主体となる黒褐色土はわずかに残るのみで南半部では存在しない。概して遺物の出土量も少ない。

#### 出土遺物（第50・61~63図）

本住居址からは126の土器片、石器が出土しているが、土器については、大半が破片で同化できたのは1点のみある。図示した高壙（91）も壙部を欠損し、詳細は不明である。

#### 土師器

##### 高壙（91）

脚部の上半部のみ残存する。円柱状を呈し、内面にシボリ痕が認められる。

#### 石器

##### 両極剥離痕のある剝片（291）

平面形が3cm四方前後で、左右側縁部に潰れ状の階段状剥離が集中している。

##### 剝片（297）

小型の貝殻状剝片であり、打面は剥離面打面である。

##### 石核（307）

厚みのある剝片を素材とし、縁辺部（剥離面）を打面として、剝片剥離作業を行なっている。素材となった剝片は全てボジ面で構成されており、前段階に原石の分割が想定される。

本住居址の時期は判断できる1点のみであり、明確な時期は確定できず不明である。

#### 第11号住居址（第17図、図版6）

D~E 4区に位置し、東側を31a号住により切られる。また南半を地傾斜によって流失しており遺存状態は極めて悪い。平面形は北西コーナーより隅丸方形を呈すると推測される。南北方位はN32°Wを指し、31a・31b号住とはやや方位を違える。わずかに残存する壁より若干傾斜して立ち上がっていたと考えられる。最大壁高は15cmを測るのみである。床面は北壁寄りでは硬化面が認められたが他は軟弱化している。床はゆるやかに南に向って傾斜しており、後述の覆土の状況からも考えて本来の状況を示しているとは思われない。

火處は壁が地傾斜により消失する箇所よりやや南側に位置する。55×30cmの不整梢円形を呈し厚さ約7cmの焼土の堆積が認められ固く焼けしまっていた。ピットは確認できなかった。

覆土は、2層に分かれるが、本来の埋土である黒褐色土はほとんどが流失し、また、31a号住との切り合いも明確に分層することは困難であった。

#### 出土遺物（第50図）

本住居址は31a・31b号住と切り合い、これらの遺物を混在して取り上げた可能性は考えられ、これらの住居址全体から21点の土器片が出土しているが、いずれも破片での出土であり同化できるものは1点のみである。

#### 土師器

##### S字状口縁台付甕（92）

脚部のみ残存する。外面に荒い刷毛目が認められる。

本住居址の時期は覆土の所見も鑑み、遺物の原位置性はないと考えられ時期を判然とすることはできない。

#### 第12号住居址（第18図、図版6）

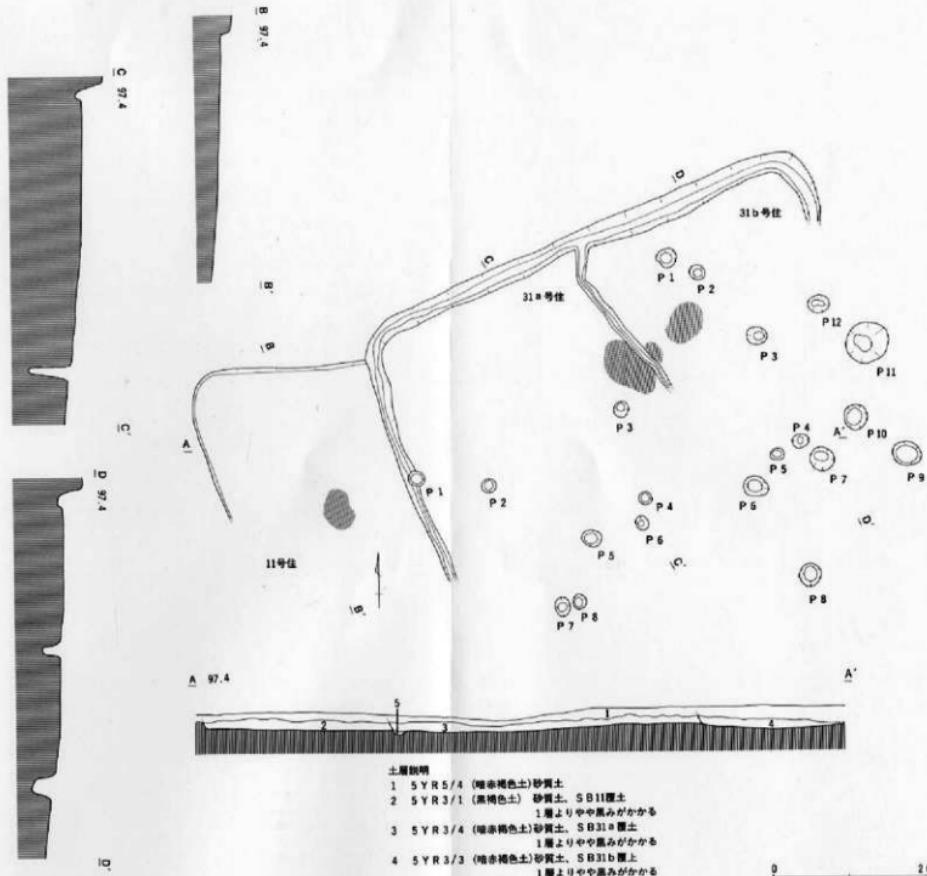
A～B12・13区に位置する。一部北西コーナーが調査区外に続いている。地傾斜及び根痕のため南壁側の一部で立ち上がりを確認することができなかった。また、南西コーナーを33号住に切られている。平面形は方形を呈し、南北4.80m、東西4.80mの規模を持つ。主軸方位はN 1°Wを指し、ほぼ磁北を向いている。推定床面積は22.56m<sup>2</sup>である。壁は若干外傾して立ち上がっており、北壁・東壁の北半部で顯著であり、最大壁高46cmを測る。床面は地山を掘り込みやや硬化しており、わずかに南側へ向うほど傾斜している。周溝は南壁の西半で流失しているが、全周していたと推測され、幅5cm、深さは平均で5cmを測る。火處としては、床面より浮いた状態で数ヶ所の焼土を検出している。中央付近で床面にのる火處を検出したが、30×22cmの梢円形で焼けて硬くしまっていた。規模としては小規模である。

ピットは6本確認した。Pit 1・3・4は径23cm、深さ20～45cmを測り柱穴と考えられる。また、Pit 6は覆土に須恵器片を含み後世のものである。

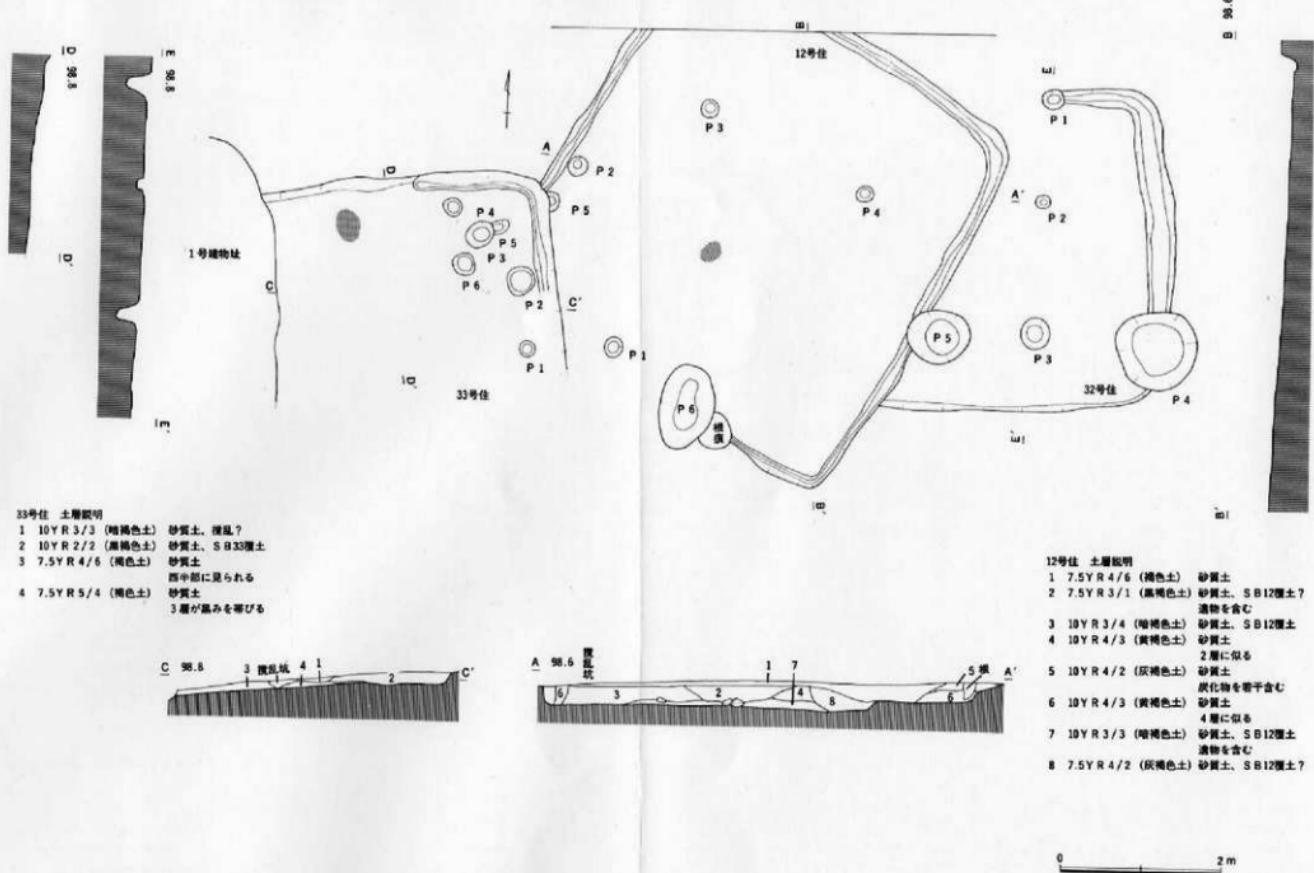
覆土は8層に分かれる。やや複雑な堆積状態を示し、北半ではしまりのない灰褐色土、南半では均質なにぶい黄褐色土、東半には粘質の暗褐色土が見られ、この層は比較的大きな土器片を含んでいるのが認められた。これらは自然埋没とは考えられないが、根の擾乱も多く影響を及ぼしており不明と言わざるを得ない。

#### 出土遺物（第50・61・62図）

本住居址からは、1500点の土器片、石器が大量に出土している。その内90%を土師器が占め、



第17図 11・31a・31b号住遺址



第18図 12・32・33号住居址

その大半が住居の北半部に集中しており、覆土上層から下層、床面の直上より出土している。前述の覆土の状況も鑑み、これらの遺物は住居廃絶に伴い投棄された遺物として理解できようが、およそ同時期の遺物として捉えても大過ないと考える。

#### 土師器

##### S字状口縁台付壺（93～100）

93～95は口縁部のみ残存する。3号住で行なった分類に従うなら、1はイとした緩やかな屈曲をもち、口縁部に水平な面をもつものである。頭部調整の工具痕が刺突状に認められる。94はロとした鋭い屈曲で、口縁部に面をもつものである。95は外反する口縁をもち、台付壺と考えられる。96～100は台部のみ残存する。何れも体部との接合部に砂粒の多い粘土が足されている。

##### 器台（101）

受部の大半を欠損している。X字状の器形を呈すると考えられ、穿孔が認められる。脚部には丁寧な継のミガキが観察される。

##### 壺（102・103）

102は有段の口縁をもつ。口縁端部を上方に擒み上げており、外面は面をもつ。103は所謂柳ヶ坪型壺である。口縁部内外面に櫛齒による羽状の刺突がつけられている。北村分類のC類に該当する資料である。

##### 高坏（104～106）

104は脚部のみ残存する。緩やかに外反する脚部で、3方向に透孔をもつ。105、106は脚部が柱状部から屈折して据部にいたる器形をもつものである。105は脚部内面に指頭によると思われるナデ痕が残る。106は、坏部・脚部共に縦方向のミガキが施されている。坏部内面のミガキは暗文状を呈する。

##### 小型有段鉢（107）

脚部と口縁部の境はシャープな屈曲をもつ。器面の磨滅が著しいため調整等は不明である。

##### 須恵器

##### 坏蓋（108）

破片であり、詳細は不明である。口縁端部を僅かに下方に折り曲げている。

##### 有台坏（109～112）

いずれも端正な高台が付く。109～111はどっしりとした胎土であるが、112はかさかさした胎土をもち時期的に下るものであろうか。

##### 石器

##### 石鐵（282～285）

4点出土している。この内訳は円基1点、他の3点は有基式であるが、283は上半部、284は

上半部及び基部を欠損している。284・285は素材剥片の剥離面を残し、貝殻状剥片を素材としたものであろう。また、285は尖頭部がやや突出している。

#### 使用痕のある剥片（294）

チャート製の縦長剥片を用いている。左側縁に連続した使用痕が認められる。

#### 剥片（298）

自然面を打面とする。背面には腹面と90°異なる剥離面が見られ、打面転移が想定される。覆面右側縁に見られる調整より加工痕のある剥片に含むべきかもしれない。

イのS字状口縁台付甕は赤堀編年のC類からD類の過渡的な形と見ることができ、ロは赤堀氏が小型品を中心に見られるとして挙げたものに該当する。本住居址の時期は、3号住に近い器種構成、形式構成、さらにはS字状口縁台付甕の型式の特徴から、やはり西北出遺跡溝Bの資料に類例を求めることができる。以上を考慮して、元屋敷式の末に置かれた西北出期の年代観で捉えられよう。

#### 第13号住居址（第19図、図版7）

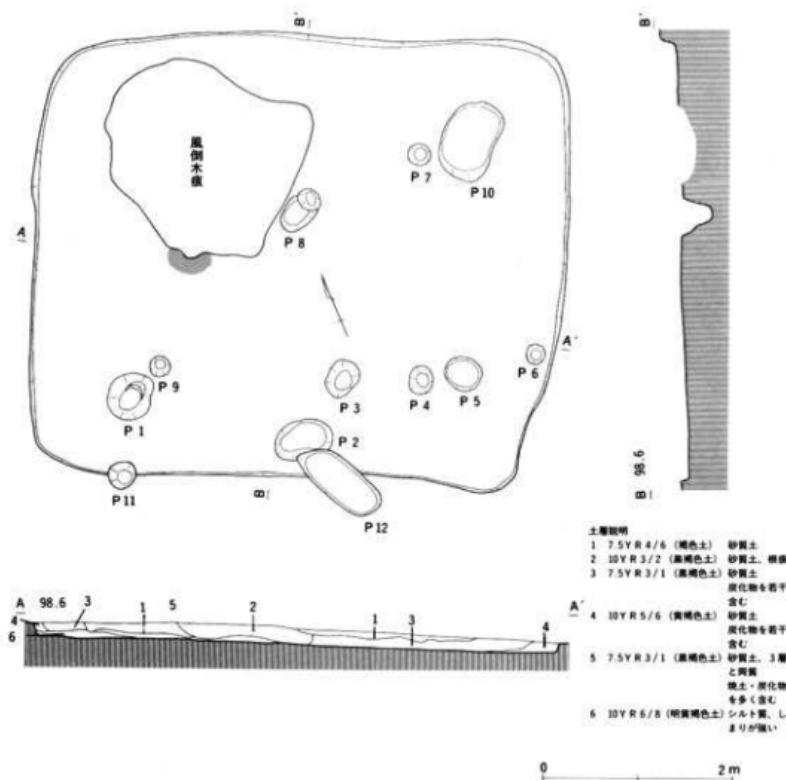
A～B14・15区に位置する。北西部に大きな風倒木痕が入る。平面形は隅丸長方形を呈し、南北4.70m、東西5.64mの規模を有する。長軸方向を住居の主軸とするならばその主軸方位はN95°Wを指す。床面積24.50m<sup>2</sup>である。壁は地傾斜のためやはり残りが悪いが、北壁の残存部分から観察するとはば垂直に立ち上がっている。最大壁高は18cmを測る。周溝はない。床面は地表面を掘り込んだ状態で、若干南側に傾斜している。床面は全体的に本来は硬化していたと考えられるが、根等の影響により軟弱化している。火坑は西側中央に設けられているが、北側を風倒木痕によって切られており、残存部分の範囲は50cm×20cmの不整橿円形を呈し、焼土は5cmの厚さで堆積していた。

ピットは12本確認した。Pit1・3・4・7は柱穴と考えられる。本来は北西部（風倒木痕位置）にもう1本あったと考えられる。それぞれ径は20～45cm、深さ30～37cmを測る。Pit10は長径42cm、短径27cm、深さ13cmの規模をもち、やや浅い感を受けないこともないが、底面はほぼ平らで位置的に貯藏穴の可能性がある。

覆土は6層に分かれるが、中央部に大きく根による擾乱が入る。他の状態は自然埋没と考えられるが、5層には多くの焼土・炭化物が観察された。

#### 出土遺物（第51図）

本住居址からは220点の土器片、石器が出土している。床面までの覆土が20cm程度で非常に浅く、また、大きな根痕等の擾乱が入り本来の覆土は僅かしか存在せず、大半の遺物の原位置性は低いと考えられる。ただし、僅かに覆土が残る住居南西部分において115の高坏、118のバレ



第19図 13号住居址

ス壺が床面上10cm程浮いた状態で出土している。

弥生土器

高环（113～115）

113は環部底部及び脚部を欠損する。口縁部が底部で屈折して外方に伸び、端部は反り気味に収めている。磨滅が激しいが、僅かに櫛描き波状文が認められる。114・115は脚部のみ残存し、環部を欠損する。115は長く伸びる脚部を有し、裾部までは中空部分がなく下方に直線的に伸び、

裾部で大きく開く。3方向の透孔が認められる。

#### 甕 (116・117)

116は台付甕の脚部と思われる。端部に折り返しが認められないため、S字状口縁台付甕とは区別される。脚部は八の字状に開く。117はやや疑問が残るが、底部と思われる。底部に焼成前の穿孔が認められ、外面には僅かに刷毛目が残存している。

#### パレス壺 (118)

口縁部のみ残存する。口縁端部を下方に拡張して、擬凹線をめぐらしている。口縁内面には羽状の文様が認められる。

#### 須恵器

##### 坏蓋 (119)

扁平な天井部をもち、つまみ部を欠損する。口縁部は屈曲して下方に僅かに伸びる。

##### 坏身 (120)

底部から緩やかなカーブをもって立ち上がり、口縁部は内傾する。受部は明瞭で、尖り気味である。底部はヘラ切り後、ヘラナデが施されている。

##### 有台坏 (121・122)

2点とも底部のみ残存する。121は高台は僅かに外方に短く伸びる。122は底部の立ち上がりが鋭い。高台の端部には僅かに凹面と内側に突出した部分が認められ装飾が施されている。

##### 有台盤 (123)

高い高台を有し、端部は平坦で内側に突出する。底部のみ残存する。

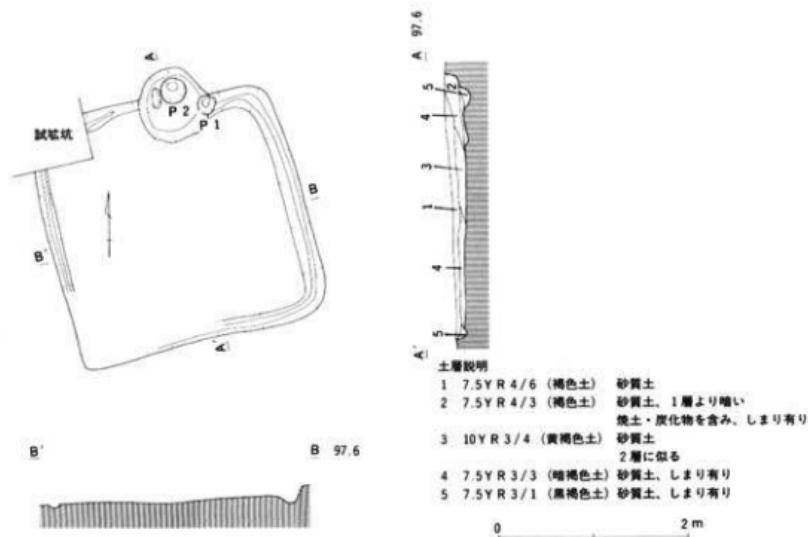
##### 鉄製品 (124)

鉄釘（角釘）である。先端部が折れ曲っているが、長さ7.3cmを測る。

本住居址の時期は118のパレス壺よりおよそ弥生時代後期前半～後半、山中式の年代観が想定するが、前述の覆七の問題、今回の調査区内において、この期の住居が自然谷状地形の西側に集中している点等を考慮するとやや疑問がもたれる。尚、須恵器は120の坏身は7世紀前半、119の坏蓋、121の有台坏は7世紀末～8世紀初、123の有台盤は8世紀中～後、122の有台坏は8世紀後半に属する。

#### 第14号住居址（第20図、図版7）

C12～13区に位置する。南西コーナー付近を根による擾乱を受けているが、他の遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、南北2.89m、東西2.72mの規模を有する。主軸方位はN42°Wを指す。床面積は6.90m<sup>2</sup>であり、本調査で確認した住居址の中では最小規模であり本来の意味での竪穴式住居址とは存在理由を異にするのかもしれない。壁はややゆるやかな角度



第20図 14号住居地

で立ち上がり、最大壁高は17.6cmを測る。周溝はカマド部分を除きおそらく全周していたと考えられ、幅15~21cm、深さ2~8cmを測る。床面は地山面を掘り込んだ状態ではほぼ水平で、全体的に硬化していた。ピットは確認できなかった。

カマドは北壁のはば中央に構築されている。北壁を外方に約35cm半円形に張り出して築かれているが、袖部は左側のみに芯の構築補強材として使用されたと考えられる河原石（濃飛流紋岩）のみが検出された。Pit 1は右側袖芯の痕跡と考えられ、また、Pit 2は支脚石の存在を示すものか。燃焼部には径24cm、深さ約6cm程の浅いビットを設け、このビットの手前には焼土が範囲15×10cm、深さ約1～2cmの規模で堆積していた。

覆土は5層に分かれ、北部・東部からの流れ込みによる自然埋没である。2層の褐色土には多くの焼土・炭化物を含んでいた。

本住居址からは遺物は全く出土せず、このため時期も判然としない。

## 第15号住居址（第21図、図版8）

C15区に位置し、16a号住・16b号住・17号住に切られ、南壁側を地傾斜によって流失しているが、それ以外の部分では遺存状態はかなり良好である。平面形は北壁と東・西壁及びそのコーナー、貼床の残存部分から隅丸長方形を呈すると考えられ、南北4.10m、東西5.70mの規模を有する。主軸方位はN51°Wを指す。推定床面積は23.40m<sup>2</sup>である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高38cmを測る。周溝は北西コーナー付近で一部確認でき、幅約8~15cm、深さ2~4cmを測る小規模なものである。床面は黄褐色土と少量の暗褐色土による貼床で硬化が非常に顕著であり、南側に向うほど若干傾斜している。尚、北東コーナー部分において壁とPit1の間が他の床面より約6~10cm程高くなっている、他の床面と同様しっかりと貼床して構築してあり、意図的な構造と考えられる。

カマドは北壁中央にあり、煙道が壁から95cm北側に掘り込まれている。両袖部は灰黄褐色粘土を芯として黒褐色土及び褐色土を固めて構築している。袖部内側は特に強く焼化し赤褐色となつておらず、左袖の西側に厚さ4cmの焼土の堆積の広がりが認められた。燃焼部は浅いピット状を呈し、炭化物を含む焼土が8cm堆積していた。中央部には支脚として使用された角柱状のシルト塊が縦長に1個置かれ、底部分を数cm地山に掘り込み固定してあった。また、本住居址のほぼ中央にこの支脚と同質のシルト塊が床面直上で火燃によって破損した状態で検出された。

ピットは5本確認した。Pit1は貯蔵穴で、径93cm、深さ53cmの規模を持ち、底面はほぼ平らである。また、この貯蔵穴の掘り方西部に幅25cm、厚さ3cm程の焼土の堆積が見られた。他は掘り込みも浅く不明であり、明確な柱穴は確認できなかった。

覆土は4層に分かれる。主体となる暗褐色土の特に北壁よりには若干焼土・炭化物を含んでいた。南半で16号住に切られているが、自然埋没と考えられる。

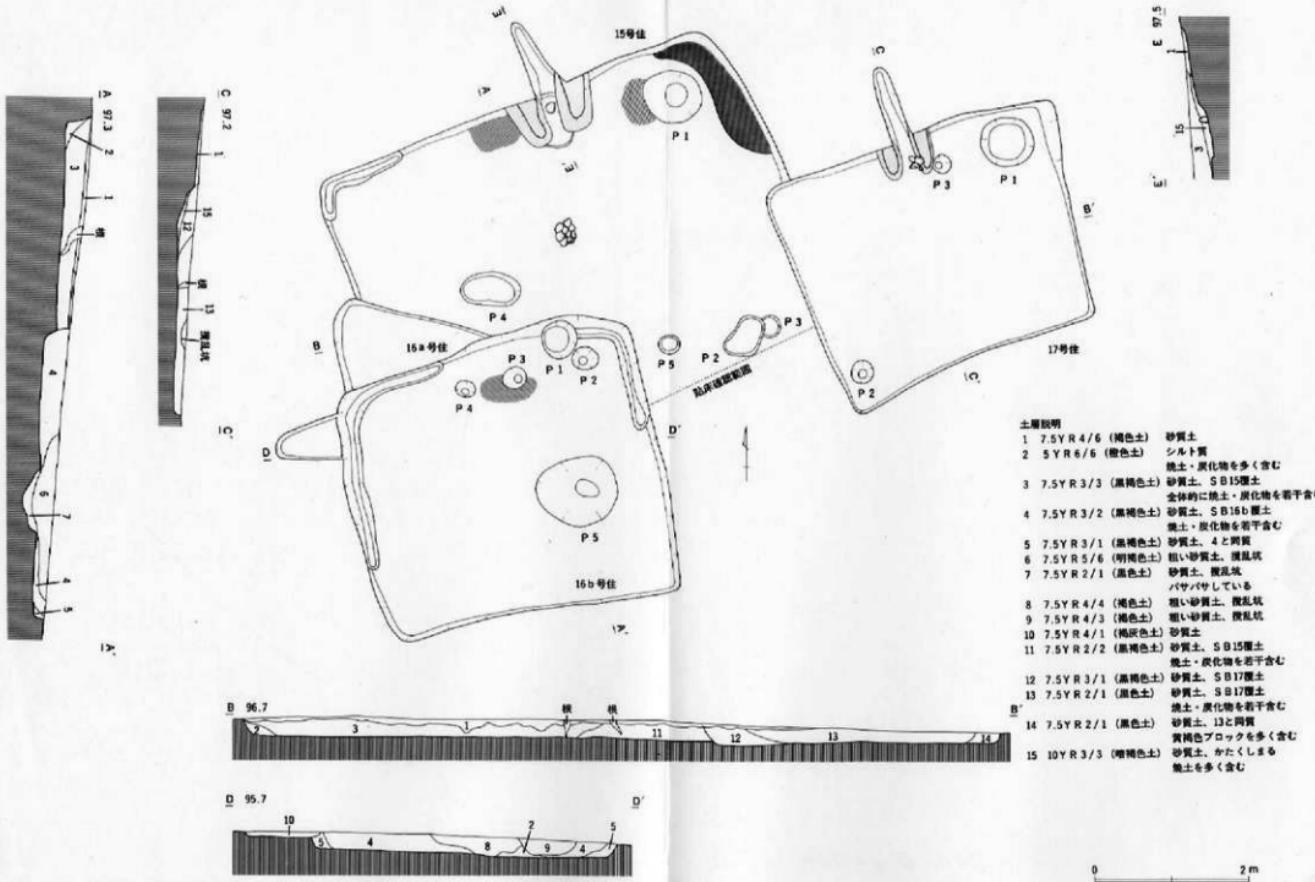
## 出土遺物（第51・52・61・64図）

本住居址からは401点の土器片、石器が出土している。それらの内、91%を須恵器・土師器が占める。大半の土器が床面上10~20cmの位置に集中しており、住居址の廃絶に伴い投棄された遺物として理解されるが、128の壺身はほぼ床面上、135の甕がカマド右袖内、130の壺身が貯蔵穴内底部より出土している。

## 須恵器

## 壺蓋（125~127）

125は天井部からカーブを描いて、そのまま口縁部に至る。天井部と口縁部の境には稜線が認められる。天井部の2/1の程度に回転ヘラケズリが施されている。126は天井部の上半を欠損し



第21図 15・16・17号住居址

ている。天井部と口縁部との境には稜線をもち、その稜線のすぐ上に沈線が認められる。127は天井部の一部を欠損する。天井部から丸味を帯びて口縁部に至る。やはり天井部と口縁部との境には明確な稜線をもっている。

#### 坏身 (128~130)

128は底部は緩やかな曲線を描き、口縁部は内傾する。口縁端部は垂直に屈曲して立ち上がり、尖り気味におさまる。受部には明確に突出した稜線をもつ。129は底部はやや浅く、口縁部は屈曲しながら内傾する。明瞭な受部を有し、底部の1/3程度に回転ヘラケズリが施されている。130は突出した受部をもち、口縁部は内傾するが、口縁端部では垂直に立ち上がり、尖り気味に収めている。

#### 無蓋高坏 (131)

脚部を欠損する。坏部は底が深い形態をもち、口縁端部内面にはわずかな内傾面を残す。外面には沈線が3本認められる。

#### 高坏 (132)

坏部及び脚部の裾部を欠損する。裾部に向って脚部は大きく開く形態をもち、沈線が2本認められる。透孔がないものか。

#### 甌 (133)

口縁部から頸部にかけての部位のみ残存する。正確な器形は不明であるが、おそらくラッパ状に大きく開く口縁部になると考えられる。2本の沈線を有し、その上にはヘラ描きの文様が認められる。

#### 有台坏 (134)

底部の一部のみ残存する。やや中央が突出した平底に高台を有し、高台の端部は内傾する。

#### 土師器

#### 甌 (135~139)

135は胴部の大半を欠損する。口縁がくの字状に屈曲して立ち上がり、口縁端部は尖り気味でわずかに面取りが認められる。口縁部径より胴部径が大きくなる器形をもつと考えられる。口縁部と胴部の外面にそれぞれ横方向と縦方向の刷毛目が認められる。136は胴部の大半を欠損している。口縁部は短く外反して立ち上がる。小型の甌か?。137は胴部の大半を欠損する。口縁部は外反するが他と比較するとその度合いは弱い。口縁端部にわずかに面取りが認められ、尖り気味となっている。138は胴部以下を欠損する。口縁部は短く、くの字状に屈曲してわずかに内巻する。胴部に縦刷毛、口縁部内面に横刷毛が認められる。139は口縁部及び胴部の大半を欠損し底部の一部のみ残存するため正確な器形は不明であるが、甌の底部と思われる。平底を呈し、横刷毛が認められる。

#### 甌 (140)

把手部分のみ残存する。

石器

石鎌（286）

有茎式が1点出土している。茎部を欠損している。

砥石（311）

長さ6.5cm、幅11.7cm、重量42.5gを測る。砂岩製であり、床面より約10cm浮いた状態で出土しており、本住居址に伴うものである。

本住居址の時期は、128の床直の坏身、130の貯蔵穴内底部出土の坏身より6世紀後葉に位置づけられ、125～127の坏蓋、131の高坏、133の鰐も本住居址に伴う可能性が強いと考えられる。また、125～129の坏蓋・坏身は他の所謂美濃須恵とは胎土が大きく異なっている。

#### 第16号住居址（第21図、図版8・9）

C～D15区に位置し、15号住を切っている。また、15号住との間には明らかにレベル差を持つ床面が一部存在し、建て替え等の可能性も考えられるので、便宜的に両者を16a号住居址・16b号住居址と呼称する。ただし、セクション等では前後関係等は確認できなかった。

16a号住 北東コーナー部分を残すのみで、プラン等は不明である。部分的に残る壁からはほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高は23cmを測る。床は黄褐色土と若干の暗褐色土による貼床で、やや南に傾斜している。西壁を主軸と平行すると仮定するならば主軸方位はN11°Wを指し、15号住・16b号住とは著しくその方向を違える。

16b号住 プランは隅丸長方形を呈し、南北3.55m、東西4.05mの規模を有する。中央やや東南寄りに根痕が入る以外は遺存状態は良好である。主軸方位はN35°Wを指す。床面積は12.80m<sup>2</sup>である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高23cmを測る。周溝は南西及び北東コーナー附近のみ存在し、幅約13～23cm、深さ3～6cmを測る。床面は黄褐色土による貼床であるが、南半部以下は根等の影響により全体的にやや軟弱化している。床はほぼ水平である。

カマドは確認できなかったが、北壁中央やや南側に範囲40×30cm、厚さ7cmの焼土の堆積を確認しており、また、その焼土を挟むように存在するPit3・4は両袖部芯の痕跡と考えられる。

ピットは5本を確認した。前述のPit3・4以外は掘り込みも浅く不明である。Pit5は根痕である。

覆土は7層に分層できるが、多くは擾乱坑の堆積である。主体となる黒褐色土は北半部に厚く堆積しているが、概して遺物の出土量は少ない。

#### 出土遺物（第52・61・62図）

本住居址（16b号住）からは154点の土器片、石器等が出土しているが、第15号住居と切りあつ

ているため遺物を混在して取り上げた可能性もある。それらの内、90%を須恵器、土師器が占める。これらの土器片は出土量のわりに図示し得るものが少なく、全体でわずか9点を載せたのみである。床面直上より出土したものは、143の壺身、145の有台壺、147の甕、148の短頸壺が出土している。

#### 須恵器

##### つまみ付蓋（141・142）

141は天井部が中央部から緩やかなカーブを描き、口縁部に近い部分でややそり気味となる。口縁部は短く下方に伸び、口縁端部はわずかに外方に屈曲して尖り気味におさめている。142は扁平なつまみをもつ。つまみの中央部はやや膨らんでいる。天井部はつまみ部付近からなだらかな曲線をもつ。口縁部は短く下方に伸びる。天井部1/2程に回転ヘラケズリが見られる。

##### 壺身（143・144）

143・144とも平底の底部をもつ壺で、口縁部を欠損する。底部からの立ち上がりは、144は比較的鋭く、143はやや丸味を帯びている。

##### 有台壺（145）

口縁部は直線的に開き、口縁端部は鋭く収束する。高台は短く、やや外方に伸びる。底部と口縁部の境に細い沈線が認められる。

##### 甕（146・147）

146は肩部の大半を欠損する。肩部が強く張り、把手を有す。口縁部は外反し、大きく屈曲して垂直に立ち上がる。口縁端部は両側に肥厚し、面取りが著しい。147は口縁部が弱くくの字状に伸び、口縁端部はやや丸くおさめている。肩部の張りは弱いが、やはり把手を有す。焼成が悪く褐色を呈し、調整等の観察は困難である。

##### 短頸壺（148）

扁平な体部を持ち、口縁部は短く体部の形状とわずかに方向を変えて立ち上がっている。高台は有台壺と共に外方に伸びる。外面には細い沈線が巡っており、金属器の写しと思われる。

#### 土師器

##### 甕（149）

口縁部のみ残存する。口縁部は短く外反し、口縁端部はやや外面に肥厚させており、内面にハケメ（横）がわずかに認められる。

#### 石器

##### 両面削離痕のある石器（292）

腹面側に明瞭な両面削離の痕跡が観察される。右側縁は板断面となっている。

##### 加工痕のある剥片（295）

小型、薄手の横長剥片の右側縁に腹面側より細かい調整加工が数回連續して施されている。

## 剥片 (299)

やや分厚な横長剥片である。打面は自然面である。

本住居址の時期は、143の壺身、145の有台壺、147の甕から8世紀初めに位置づけられよう。146の甕、148の短頸壺も本住居址に伴うものであろう。

## 第17号住居址（第21図、図版8・9）

C～D15・16区に位置する。西側で15号住を切って構築している。平面形は長方形を呈し、南北2.95m、東西3.70mの規模を有する。主軸方位はN44°Wを指す。床面積は11.08m<sup>2</sup>である。壁は北東コーナー付近でやや外傾するが、他はほぼ垂直に立ち上がっている。最大壁高は26cmを測る。床は地山を掘り込んだ状態で、やや軟弱な状態であるが、ほぼ水平である。

カマドは北壁の中央にあり、煙道が壁から95cm北側に掘り込まれている。両袖部は黒褐色土を芯として固め構築し、外側を土師器甕で補強しており、右袖部の内側にS B15の支脚と同質のシルト塊の破片が検出されており、本来は支脚を兼ね備えていたと考えられる。両袖内側は焼けて赤褐色化している。やや細長の燃焼部には焼土が5cmの厚さで堆積していた。

ピットは2本のみ確認した。Pit 1は貯蔵穴で、径65cm、深さ30cmを測る。底面はほぼ水平である。明確な柱穴等は確認できなかった。

覆土は5層に分かれる。主体となる黒色土・黒褐色土は良好に遺存しており、自然埋没状態を示している。

## 出土遺物（第52・61図）

本住居址からは77点の土器片、石器が出土している。それらの内、90%を須恵器・土師器が占め、大半が破片である。150の甕はカマド内の出土であり、本住居址に伴うと考えられる。

## 土師器

## 甕 (150)

口縁部が上方に立ち上がり、屈曲し短く外反する。肩部の張りが著しい器形をもつ。

## 石器

## 石鐵 (287)

凹基式で、尖頭部が突出する。ただし、先端部を欠損している。

本住居址の時期は、150の甕からおよそ7世紀中葉あたりに位置づけられよう。

## 第18号住居址（第22図、図版10）

A～B16・17区に位置する。20号住によって西側2/3を切られており、また、地傾斜によって

南壁はわずかに残存している程度である。平面形は、方形、あるいは長方形を呈すると考えられ、主軸方位はN52°Wを指す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高21cmを測る。東壁沿いには幅10cm、深さ4cm程の周溝がみられ、北東コーナー付近で切れる。南壁側は確認できなかつたが、本来はほぼ全周していたと考えられる。床面は地山を掘り込んだ状態で、やや軟弱化している。

カマドは北壁やや東寄りにあり、煙道が壁から北へ65cm掘り込まれ構築されている。両袖部は残りは悪いが、黒褐色粘質土を固め構築している。左袖部の河原石は補強材として用いられたものと考えられる。両袖部内側は焼けてよく赤褐色化していた。燃焼部は20×18cmとやや狭小な感を受ける浅いピット状で、褐色土の埋土には焼土・炭化物を多く含んでいた。

ピットは3本確認した。Pit 1は50×35cm、深さ25cmを測り、おそらく貯蔵穴と考えられる。Pit 2は位置的には柱穴と考えられるが、深さが9cmで浅い感を歪めない。Pit 3は中世に属するものである。

覆土は4層に分かれる。主体となる黒色土は北側から流入した自然埋没と判断でき、南壁へ向う程薄くなる。

#### 出土遺物（第53・62図）

本住居址からは60点の土器等が出土しているが、その大半が土師器、須恵器である。前述したとおり西側を20号住によって切られており、両住居址の遺物の混在も考えられるが、152の环身は貯蔵穴より出土しており本住居址に伴う資料と考えられる。

#### 須恵器

##### 环身（151・152）

151は底部を欠損する。口縁部は垂直に伸び端部は尖っている。受部も口縁端部と同様に尖り気味となる。やや異質な形状をもつものである。152は底部が緩やかな弧状を呈し、口縁部は内傾する。受部の端部は丸くおさめている。底部はヘラ切り後ヘラナデが施されている。

#### 土師器

##### 甕（153・154）

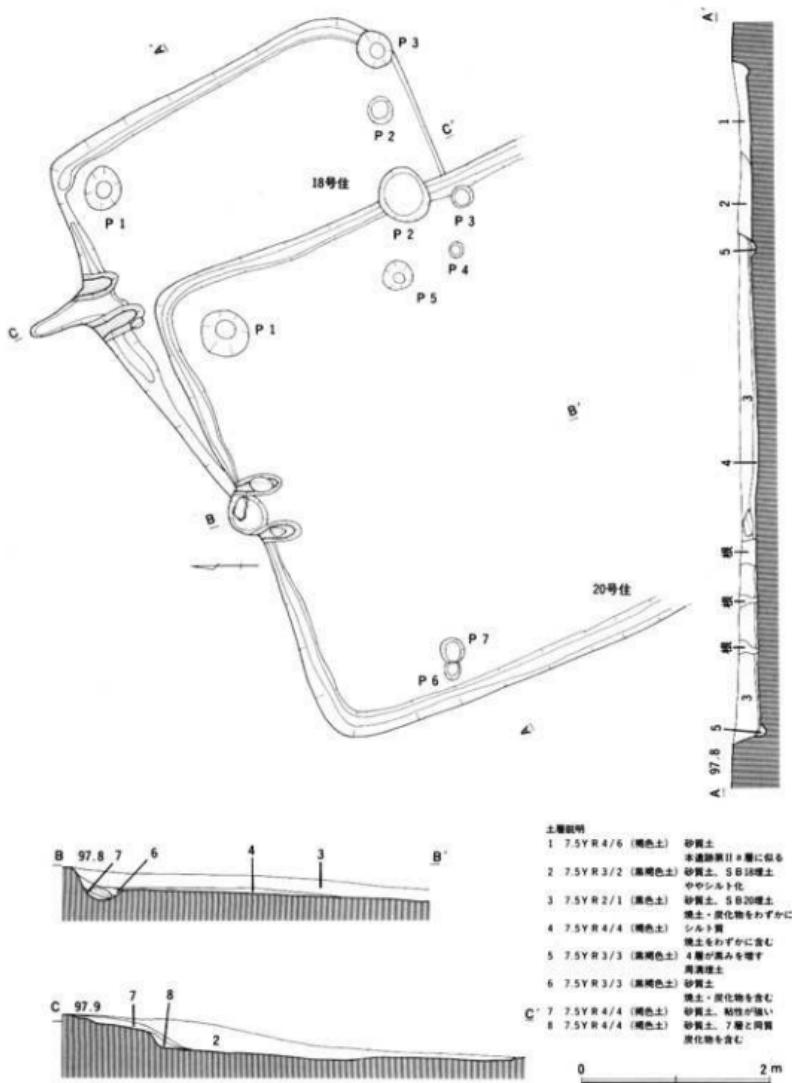
153は口縁部がくの字状に外反する。端部はわずかに面取りされている。胴部以下を大きく欠損している。154は口縁部はくの字状に直線的に伸びる。肩部が強く張り、胴部径が口縁径を大きく上回る。やはり胴部の大半を欠損する。2点とも残りが悪く、調整手法は観察できない。

#### 石器

##### 剥片（300・301）

300はチャート製であり、自然面打面をもつ縦長剝片である。301は黒曜石製である。背面に残された剥離痕より90°の打面転移が顕著に行なわれたものと推定される。

本住居址の時期は152の环身より7世紀初めに位置づけられ、151の环身も本住居址に伴うも



第22図 18・20号住居址

のであろう。

#### 第19号住居址（第23図）

B～C13区に位置する。地傾斜により南壁側をほぼ流失し、南東コーナー付近には大きな根痕が入る。また、西壁の南側で中世の土坑によって切られる。平面形は長方形を呈すると考えられ、南北4.15m、東西4.90mの規模を有する。主軸方位はN50°Wを指し、床面積は18.91m<sup>2</sup>である。壁は観察可能な北壁でやや外傾して立ち上がりておらず、最大壁高は24cmを測る。周溝は北東コーナー付近のみ存在するが、幅10～15cm、深さ2～5cm程度であり、やや不確定である。床面は一部北西コーナー付近で貼床面を確認したが、他は非常に軟弱化している。ただし、これが本来の状況を示しているとは考えられない。

火葬は中央やや南寄りに設けられている。焼土の範囲は30×20cmの楕円形を呈し、小規模ながら焼土の厚さは8cmありよく焼けしまっていた。

ピットは6本確認した。Pit 1・2は深さ25cmを測り、柱穴の一部と考えられるが、Pit 1が本住居址にともなうものか疑問がある。Pit 5・6は中世のものである。他は深さ6cm程度と浅く不明である。

覆土は3層に分かれる。主体となる黒褐色土は上部からの流れ込みによる堆積であるが、概して遺物の出土量は少ない。南に向うほど黒褐色土の流失が著しい。

#### 出土遺物（第53図）

本住居址からは122点の土器片、石器が出土している。大半が破片での出土であり、前述の覆土の条件から積極的に本住居址に伴うと考えられる遺物は抽出できない。

#### 弥生土器

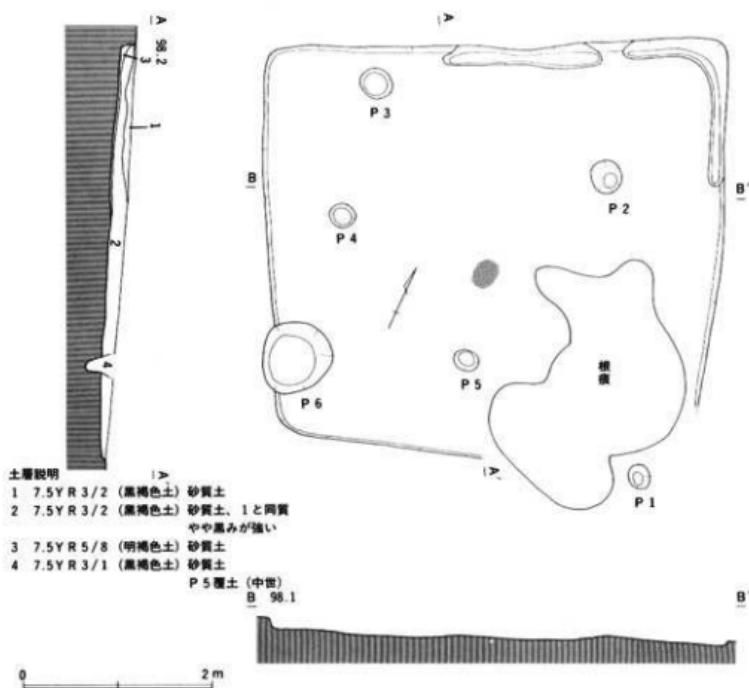
##### 甕（159・160）

159は外反する口縁部のみ残存し、正確な器形等は不明である。外面には縦方向の刷毛目及び頸部に横方向の刷毛目が認められる。やや疑問の残る遺物である。160は胴部片と考えられ、横位の羽状条痕が認められる。条痕の原体はヘラの可能性が考えられる。

本住居址の時期は伴出する遺物が無く、時期も判然としない。2点の甕は、弥生時代中期に属するものと思われるが、本住居址に伴うものかはやや疑問が残る。

#### 第20号住居址（第22図、図版10）

B16・17区に位置する。18号住を東側で切っている。また、南端でS B21と切り合い関係を持つが他の住居と同様南壁の立ち上がりが地傾斜のため流失しており、セクション等で確認す



第23図 19号住居址

ることはできなかった。ただ東壁沿いに南に延びている周溝が22号住に切られており、これが唯一の判断材料となろう。平面形は方形、あるいは長方形を呈すると思われ、東西5.35mを測る。主軸方位はN47°Wを指し、18号住とはやや方向を違える。壁はやや外傾して立ち上がり、北壁で最大壁高33cmを測る。周溝は北側の一部で切れてはいるが他は全周していたと考えられ、幅12~15cm、深さ4~6cmを測る。床面は地山を掘り込んだ状態で、北側ではよく硬化していた。

カマドは北壁のほぼ中央にあり、北へ半円形に20cm張り出して構築されている。その底面で支脚と考えられる河原石を検出している。袖部は暗褐色粘質土を固めた基底部のみを確認しているが、袖部の芯と考えられる河原石が縦位に置かれた状態で検出することができた。燃焼部には焼土・炭化物を含む褐色土が堆積しており、手前部分は焼けて硬化していた。

ピットは6本確認した。Pit 1は径50cm、深さ30cmを測り、底部はほぼ平らである。やはり貯蔵穴と見做すべきであろう。他は、形も深さも不揃いであり、性格は不明である。尚、Pit 2・3は中世に属する。

覆土は5層に分かれる。主体となる黒色土の下に炭化物を少量含む褐色土が堆積している。やはり、自然埋没と考えられる。

#### 出土遺物（第53・61・63図）

本住居址からは90点の土師器、須恵器等が出土している。それらは覆土全体に包含され18号住の遺物の混在も考えられるが、覆土下層・床面直上より出土した155の四耳壺、156の無台壺は本住居址に伴う資料と考えられる。

#### 須恵器

##### 四耳壺（155）

155は壺の底部と考えられる。胴部・口縁部を欠損し、正確な器形は不明である。底部の立ち上がりは比較的鋭角で、外面にはヘラケズリが認められる。

##### 壺身（156・157）

156は口縁部を欠損する。底部からの立ち上がりは丸味を帯びる。157は有台壺である。底部の一部を欠損する。高台が扁平で低く、高台の付根から口縁が直線的に伸びる。口縁端部は丸くおさめる。底部外面中央がややふくらんでいる。

#### 土師器

##### 高壺（158）

158は高壺の脚部である。壺部を欠損する。八の字状に開く形状をもつ。混入品の可能性が高いと考えられる。

#### 石器

##### 両極剥離痕のある剝片（293）

上下端に僅かに潰れ状の階段状剥離が認められ、断面は楔状を呈する。右側縁は截断面となっている。

##### 石核（308）

原石分割後の厚みのある剝片を素材とする。自然面からなる背面を打面として内側へ向かって剝片剝離作業を行なっている。作業中に折れて廃棄されたものと推定する。

本住居址の時期は155の四耳壺、156の無台壺より7世紀終わりに位置づけられよう。尚、157の有台壺は8世紀初めに属する。

## 第21号住居址（第24図、図版10）

B17区に位置する。22号住を北西コーナー付近で切っている。住居の南半は地傾斜及び根痕によって完全に擾乱・流失しており、北半部のみ確認できた。平面形は隅丸長方形を呈すると考えられ、東西6.20mを測る。主軸方位はN32°Wを指す。壁はやや外傾して立ち上がり、最大壁高31cmを測る。周溝は北壁の一部で認められたが、幅7~10cm、深さ4cm前後を測るのみである。

床面は地山を掘り込んだ状態でやや軟弱であった。また、火廻と判断できるような焼土の集中箇所は認められなかった。

ピットは8本確認した。Pit 2・4・6は径24~29cm、深さ19~21cmを測り、位置的にも柱穴と考えてよからう。他は判断つきかねるため、明確な柱穴配置は明らかにできなかったが、本来は擾乱を受けている南東コーナー付近に柱穴が存在したと考えられ、4本構造であったと想定される。

覆土は4層に分かれるが、主体となる暗褐色土・黒褐色土が厚く堆積しているが、南半には本遺跡第II b層が流れ込み流失している。

## 出土遺物（第53図）

本住居址からは255点の土器片、石器が出土している。22号住と切り合っているため両住居址の遺物を混在して取り上げた可能性もあるが、162の壺身、164の甕が覆土下層より出土しており、おおむね本住居址に近い時期を示していると考えられる。

## 土師器

## 甕（161）

口縁部が外反し、口縁端部を鋭く摘み上げて調整し内側している。肩部は強く張らず、胴部径より口縁部径が大きくなるものか。底部を欠損する。

## 須恵器

## 壺身（162）

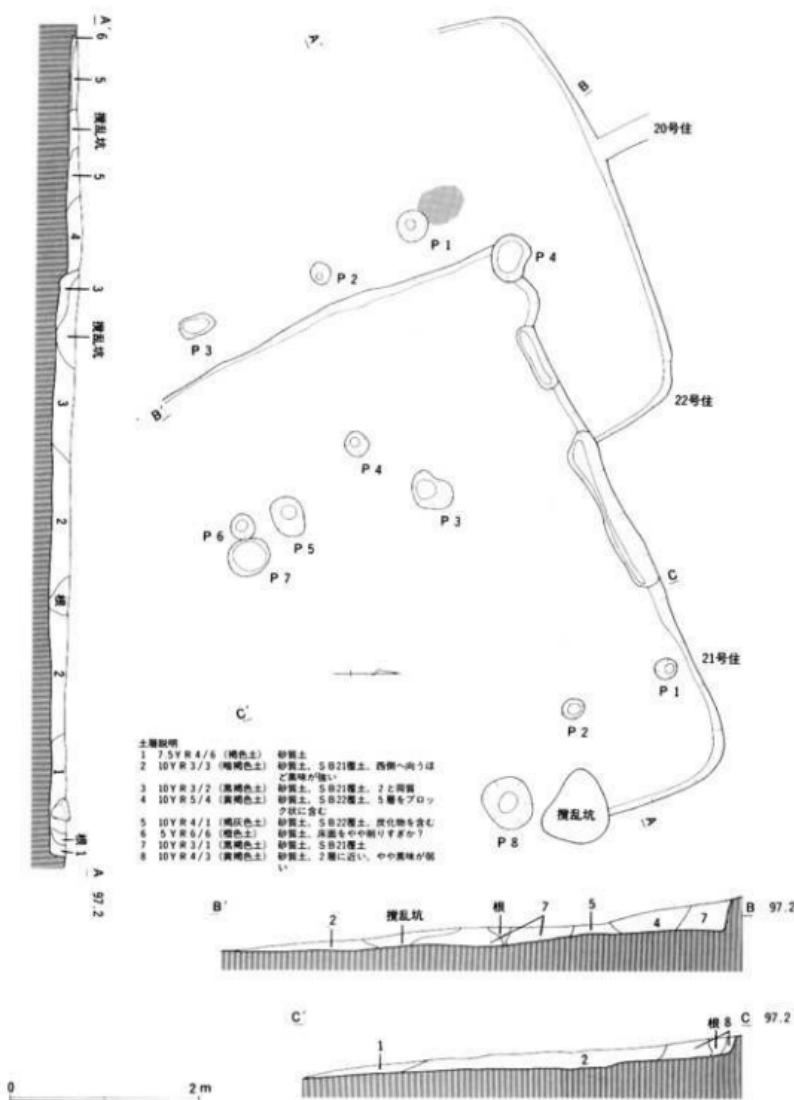
口縁部が短く内傾し、非常に短い受部をもつ。底部下半を欠損しているが、胎土が青黒く、前述の受部の特徴から畿内のものか。

## 甕（163）

有段状に屈曲して外反する口縁部をもつ。口縁部のみ残存する。

## 甕（164・165）

164は口縁部は弱く外反しながら立ち上がり、屈曲して口縁端部では内側する。胴部はやや胴長で、肩部に2本沈線が巡っている。胴部外面はタタキ調整されるが、底部下半はナデ調整に



第24図 21・22号住居址

よってタタキ目が消されている。内面は、非常に丁寧なナデが施されている。165は大型の甕の口縁部の一部のみ残存する。2本の沈線と刺突文が認められる。

本住居址の時期は162の环身、164の甕より6世紀末～7世紀初めに位置づけられる。163の甕も本住居址に伴うものと考えられる。

#### 第22号住居址（第24図、図版10）

B17区に位置する。前述したように北側で20号住を切っていると考えられる。また、東側を21号住に切られている。南側2/3を地傾斜によって流失しているが、平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる。東西4.60mを測る。主軸方位はN49°Wを指し、21号住とは若干方位を違えている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁で最大壁高28cmを測る。周溝はない。床面は地山を掘り込んだ状態であったが、21号住と比較するとやや硬化が強く感じられた。また、床面上、特に北東・南東コーナー付近には建築材と考えられる炭化材がかなりまとまって見られ、火災を受けた住居であったと考えられる。中央 Pit 1 の北部に焼土と炭の集中する箇所が認められたが、果たして火廻と判断できるようなものではない。

ピットは4本確認した。いずれも不定形で柱穴とは認めがたいが、Pit 3 は深さ18cmを測り柱穴に相当しようか。

覆土は多くの根等の搅乱が入るが、基本的には4層に分かれる。第5・8層の灰褐色土・暗褐色土には多くの炭、焼土を含み前述の推論に相違しない。

#### 出土遺物（第54・64図）

本住居址からは51点の土器片、石器が出土している。北東及び南東コーナー付近で170・171の広口壺？がほぼ床面直上より出土しており、完形近くまで復元できたが、一部が21号住の覆土中より出土している。この2点はおよそ本住居址に伴う遺物と考えられる。

#### 弥生土器

##### 台付甕（166・167）

166・167とも胴部下半及び脚台が残存する。166は胴部が内彎しながら立ち上がる。167は胴部の立ち上がりは直線的に外反している。2点とも胴部と脚台の接合方法は後述する24号住出土の台付甕と同様の手法を用いている。

##### 高坏（168）

坏部のみ残存する。口縁部は坏部底部で鋭く屈曲し、直線的に外反する。口縁端部では内彎する傾向が見られる。調整手法は全面にミガキ調整が施され、外面はその方向が端部で横方向、端部以外では縱方向となっている。

#### 土師器

## 甕 (169)

169は胴部下半を欠損し、底部の形態は不明である。くの字状に外反する口縁部をもつ。口縁部径より胴部径が上回る。

## 鉢 (170・171)

170はやや小型の平底の甕である。口縁部はくの字状に外反し、口縁端部は丸味を帯びている。胴部は肩部の張りが顕著でなく、胴部径より口縁部径の方が上回っている。胴部下半から底部にかけては、その径を著しく縮小し突出気味の底部がつく。胴部外面には縱方向の刷毛目が認められる。

171は口縁部はくの字状に外反するが、その度合が弱く口縁端部はやや外方に突出している。胴部は肩の張りが強く、最大径が胴部中位に位置している。底部は完全な平底とならず、丸味をもち不安定である。刷毛目は認められず、全面ナデ調整である。

## 石器

## 石歛 (314)

上部を欠損するが、おそらく短冊形を呈するものであろう。ホルンフェルス製である。

本住居址の時期は170・171の広口壺？より能田旭期の純粋で捉えられよう。

## 第23号住居址（第25図、図版10）

D11区に位置する。谷状地形へ向かう東斜面部に位置する。南西側へ傾斜しており、西壁を流失しているが、他の遺存状態は良好である。また、北部側に15~18cmレベル差のある床面及び壁が存在し改築の可能性を考えられる。ここでは便宜的に両者を23a号住、23b号住とする。

23a号住 平面形は長方形を呈すると考えられ、東西5.90m、南北4.00m以上はあり、東側で23b号住の床面を切っている。主軸方位はN46°Eを指し、本遺跡のカマドを持つ住居址の中においては極度にその主軸方位を逸れる。壁は若干外傾ぎみに立ち上がり、最大壁高61cmを測る。周溝は、カマド部分を除く東壁側及び地傾斜によって消滅しているが南壁側で確認できた。幅12~22cm、深さ7~9cmを測る。床面は西側では谷状地形の堆積土である黒褐色土を、東側では地山面を掘り込み黒褐色土を若干含む黄褐色土による貼床である。全体的に非常にかたい硬化面であった。

カマドは東壁中央にあり、煙道が壁から1.2m東へ掘り込まれており先端部が若干北へ屈曲する。両袖部は地山を堀り残して基礎とし、その上に黒褐色土を固め構築している。両袖部の内側は赤化が著しい。燃焼部は7cm程の焼土の堆積が見られ、底面はガリガリの状態であった。

ピットは5本確認した。Pit 5は50×55cm、深さ30cmを測り、やや小規模であるが貯蔵穴と考えられる。Pit 1~4は支柱穴で、径30~40cm、深さ15~35cmであるが、Pit 4の1本は浅く穿れ

ている。

覆土は5層に分かれるが、1・2層は谷状地形を埋める覆土であり、主体となる褐色土は東壁際に残るのみで、遺物量も少ない。

23b号住 平面形は長方形を呈すると考えられ、東西4.60mを測る。主軸方位はほぼ23a号住と同じくする。壁は北壁でわずかに残存し、ほぼ垂直に立ち上がっている。最大壁高は16cmを測る。北壁沿いには周溝はない。床面はやはり地山面及び谷状地形の堆積土を掘り込み黄褐色土による貼床をしている。床面残存部分においてはピットは確認し得なかった。

基本的に本来の住居の覆土は流失してしまっている。

#### 出土遺物（第54・62・63図）

本住居址（23b号住）からは81点の土器等が出土しており、それらの内91%を須恵器・土師器が占める。前述したように良好な覆土の遺存度が少なく、多くの遺物が床面の傾斜に合わせ南西側へ流れた状態で出土している。172の环蓋も他と同様原位置を留めていないが、ほぼ床面直上であり本住居址の時期を想定し得る遺物であると考えられる。

#### 須恵器

##### 环蓋（172）

天井部は丸味をもち口縁部は垂直に伸びる。口縁部と天井部の境には形骸化した沈線が認められる。

##### 环身（173）

底部等大部分を欠損する。受部は顕著な棱線をもち、口縁部は内傾する。口縁端部は面取りされている。

##### 無蓋高环（174）

脚部を欠損する。环部は底部から内彎しながら立ち上がり、椀状を呈している。あるいは径がもう少し大きいか？口縁部はやや外反気味で、口縁端部は丸くおさめる。口縁部と环部底部との境には沈線が認められる。

#### 土師器

##### 甕（175）

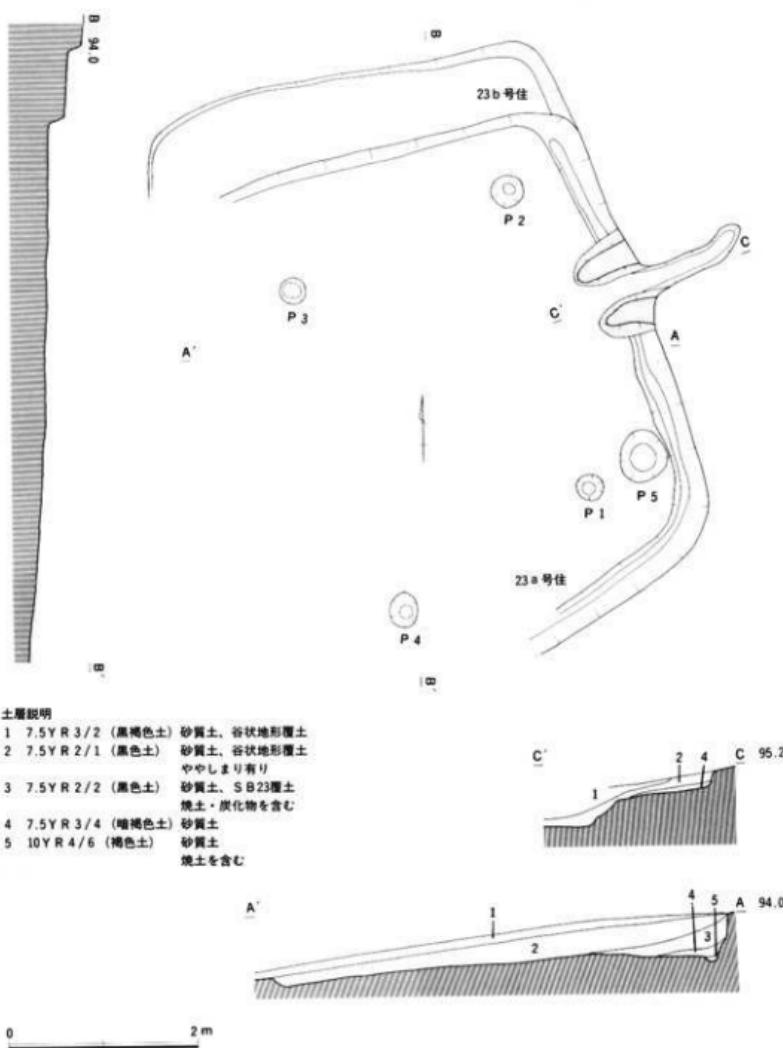
口縁部が短く外反し、口縁端部には顕著な面取りが認められる。胴部下半は欠損するが、上半には刷毛目が認められる。

##### 高环（176）

脚部のみ残存する。正確な器形、調整は不明である。混入の可能性が考えられる。

##### 柳ヶ坪型壺（177）

口縁部片である。北村分類でのC類にあたる。頸部に顕著な縦位の刷毛目、口縁部外面に棒状工具を用いた刺突が見られる。口縁部内面は剥落により観察できない。



第25図 23号居住址

## 石器

## 剥片 (302)

自然面を打面とする縦長の剥片である。下端部を両極剥離の加擊による痕跡とみなすべきかかもしれない。

## 石核 (309)

円礫を素材とし、平坦な繊維面の打面として剥片剥離作業を行なう。あるいは前段階に作業面作出のための工程が存在したのかもしれない。打点を左右に振り稜状を加擊しながら後退していく。剥片剥離作業が行われている。

本住居址の時期は172の環蓋より7世紀末に位置づけられよう。尚、173の环身、174の小型無蓋高环は7世紀初めに属し、石器と共に流れ込みと考えられる。

## 第24号住居址（第26図、図版11）

B 2～3区に位置する。南西側を地傾斜よってわずかに流失しているが、遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、南北3.10m、東西3.68mの規模を有する。長軸を住居の主軸と考えるならば、その主軸方位はN83°Eを指す。床面積は、9.46m<sup>2</sup>である。壁は西壁ではほぼ垂直に立ち上がるが、他の壁はやや外傾して立ち上がっている。最大壁高は43cmを測る。床面は地山面を掘り込みほぼ水平である。壁・床とも良く焼けており貼床等の確認はできなかつたが、他の同時期の住居と比較するならば硬く感じられた。火処・周溝は確認できなかった。

ピットは6本確認した。Pit 3・5・6以外は深さが10cm以下で浅い感を受けるが、8号住と同様 Pit 1・4付近には建築材と考えられる炭化材を床面上で検出しておらず、Pit 1・3・4・5を柱穴と考えたい。

覆土は基本的には2層に分かれるが、主体となる黒褐色土には多くの焼土・炭化物を含み、前述の壁・床の状態から焼失住居であると考えられる。

## 出土遺物（第55・56・64図）

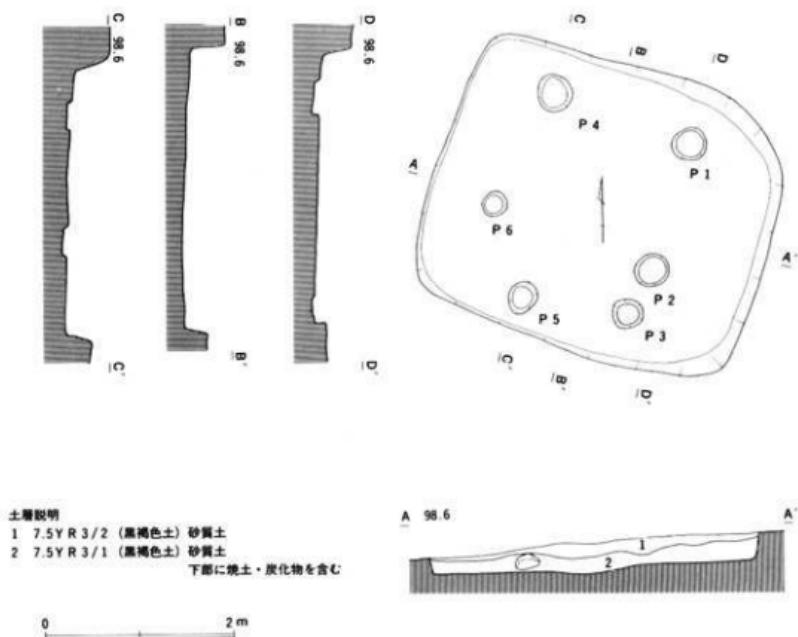
本住居址からは土器片96点、石器5点、炭化材が出土した。土器片はそのほとんどが図示した完形土器に復元でき、南壁沿いの床面直上から出土している。石器の中には磨製石庖丁があり、時期を確定し得る貴重な資料として注目できる。

## 甕（178～183）

口縁がくの字状に屈曲して立ち上がる台付甕、口縁が大きく外反する甕、口縁が短く外反する小型の甕がある。それぞれをイ・ロ類として詳述する。

## イ類

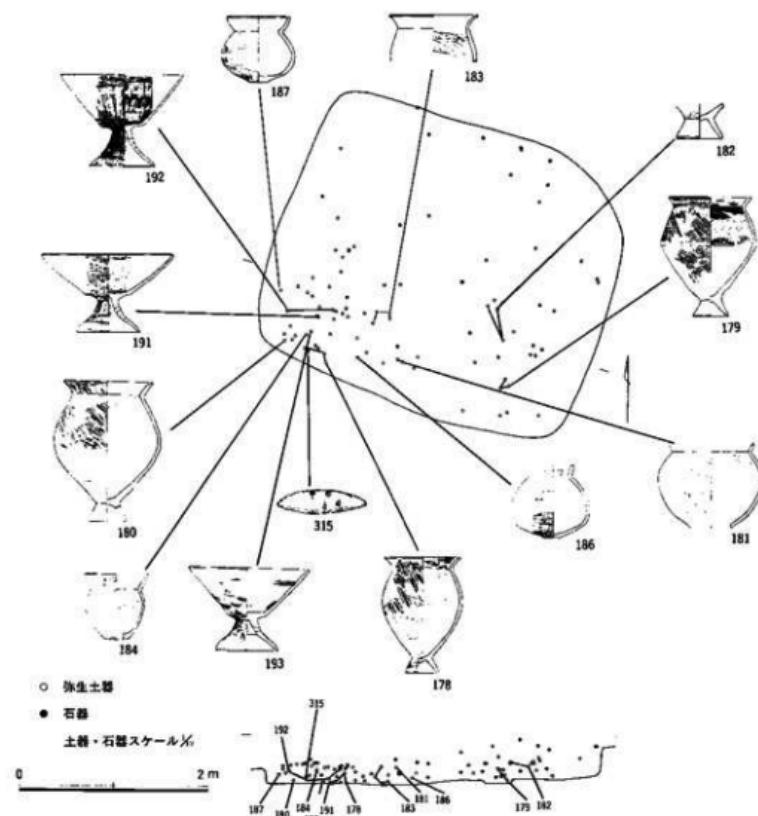
本住居址出土土器の中で最も多く5個体分が出土した。副部の調整が主に条痕調整的なもの、



第26図 24号住居址

ナデ・ヘラケズリだけで施すものの2種が認められる。

178はくの字状に外反する口縁を持ち、胴部は倒卵形を呈す。最大径は胴部やや上半よりにあり口縁部径を若干上回る。調整は条痕的な調整・ヘラケズリを多用している。この調整は口縁部の内外面・胴部外面の上半部で認められる。口縁部については条痕的な調整の後、二次調整としてヨコナデが顕著に認められる。ヘラケズリは胴部外面の下半部・胴部内面において使用されている。脚台にも条痕的な調整の痕跡が観察される。以上の観点より、本来は条痕的な調整は一次調整段階で器面の外面全体に及んでおり、その後ヘラケズリによって調整されたと考えられる。179も口縁部はくの字状に短く外反する。最大径は胴部中位やや上に位置し、口縁部径を上回るが、この部位での屈曲が著しく、これより上部ではなだらかな曲線を描くが、下部では直線的にすばまる器形を呈する。調整は条痕的な調整が多用され、これが施されない部位



第27図 24号住居址遺物分布図

はほとんどナデによって整形されている。また、胴部の屈曲部分のみヘラケズリが認められる。胴部内面には指頭圧痕が観察される。180は口縁部はくの字状に外反し、胴部は緩やかな曲線を持つ。最大径は胴部中位にあり、口縁部径を大きく越え、若干下彫れ気味の器形となっている。条痕的な調整が口縁部外面・胴部外面の上半に見られ、胴部内面・胴部外面の下半部にはヘラケズリが見られる。口縁部の内面についてはヨコナデのみで整形され、同外面には二次的にヨコナデが施されている。以上、178～180の胴部と脚台部は乳頭状の粘土を充填することによっ

て接合していることもその特徴として指摘できる。後述する高环においても同様な手法で環部と脚部を接合するものが認められる。181は口縁部の一部及び脚部を欠損する。口縁部はやはり短くくの字状に外反すると考えられ、ヨコナデによって調整される。胴部は球形に近い形を呈し、ヘラケズリによる調整が主体である。胴部内面の下半部についてはナデ調整である。182は脚台と胴部のみが残存する。ナデ調整が施され、脚台端部はやや内側する。

#### 口類

1個体分のみ出土している。胴部下半を欠損するが、台付壺である可能性もある。前述のA類とは調整手法が異なる。

183は口縁部が直線的に外方に伸び、口縁端部はやや肥厚気味に、さらに外方に屈曲する。胴部は緩やかなカーブを描き、肩は大きく張らない。このためか最大径は口縁部径、胴部最大径ともあまり大差がない。調整は口縁部はヨコナデ調整、胴部外面は丁寧なナデ調整が施される。胴部内面には板ナデ調整？が頸部付近では横方向、それより下位では斜方向に施される。

#### 鉢（184・185）

2個体分が出土している。184は口縁部が直線的にくの字状に伸びる。端部を丸くおさめているが、僅かに平坦面を残す部分もある。胴部は丸味を帯び、胴部最大径は胴部中位よりやや上半にくる。最大径は口縁部径にある。磨滅が激しくよく観察し得ないが、口縁部には僅かにヨコハケが残る。胴部内面には斜方向のヘラケズリが認められる。185は底部のみ残存する。立ち上がりは湾曲しながら外方に向かう。その他は磨滅が激しく、調整は観察できなかった。

#### 直口壺（186）

口縁部部を欠損する。正確な全形は知り得ないが、おそらく口縁部は長く直線的に伸びると考えられる。胴部は球形に近いが、最大径が胴部下半に位置し、「下彫れ」の形状を呈す。調整は横方向のヘラミガキを入念に行ない、底部付近では縦方向に施している。

#### 広口壺（187）

口縁部は内側しながら立ち上がり端部を丸くおさめるが、口縁端部内面に部分的に面を持つ。やはり最大径は胴部下半に位置し、頗著な「下彫れ」状を呈す。全体的に小さいがしっかりした平底を持つ。胴部はヘラミガキが縦方向に施されるが、上半部は部分的である。口縁部はヨコナデが胴部内面は丁寧なナデが見られる。

#### 高环（188～193）

6個体分が出土した。いずれも大きく開く環部とハの字状に内側しながら開く脚部を持つ。甕イ類と伴に本住居址出土土器の中で主体的位置を占める。

188は環部のみ残存する。口縁部は環部底部から鋭く折れ曲がり直線的に外方に開く。口縁端部ではやや内側しながら上方に伸び、端部は丸くおさめる。環部底部には円盤状に欠損部が見られることから、円盤充填法により脚部との接合が行なわれていたと考えられる。磨滅が著し

く詳細な調整手法の観察はできないが、口縁端部にはわずかに横位のヘラミガキが見られる。他の高環とは別形式のものか。189・190はハの字状に開く脚部である。端部で若干内彎し、肥厚気味で端面には内傾する平坦面を持つ。穿孔は1組で3方向に穿つ。外面は丁寧なヘラミガキが観察され、縦位中心であるが、端部付近で横位となる。190は端部は欠損する。環部との接合部付近の形狀がX字状を呈し、他の高環とは異なる形狀を示す。1組の穿穴を有し、おそらく3方向に穿っていたものと考えられる。摩滅が著しい。191の環部は底部から折れ曲がって、やや内彎しながら立ち上がり、内彎傾向を強めて端部に至っている。環部の開きはやや浅い角度で、端部は丸くおさめている。脚部はハの字状を呈するが、端部での内彎が著しく、端面は平坦面をなす。穿孔は2組3方向で、両方とも同方向に施す。調整手法はヘラミガキが主体であり、環部外面は全て横位、内面は端部で横位である以外は縦位となっている点で異なっている。脚部は外面裾部で横位の、残りの部分で縦位のヘラミガキが見られる。脚部内面には板ナデ？調整が認められる。192は環部が底部から鋭く屈折して直線的に開き、口縁端部で僅かに内彎して端面をやや鋭くおさめる。脚部はハの字状に開く裾広がりの形狀を持ち、端部でやや内彎傾向が見られる。環部に比して器高はかなり短い。脚部端面は平坦面をなす。穿孔は2組認められ、どちらも同方向に3箇所見られる。調整手法は入念なヘラミガキが施されている。環部では内外面とも端部・底部付近で横位他部分では縦位に、脚部は端部で横位、他部分は縦位に施されている。内面はナデ調整である。193は環部が底部から鋭く屈折して直線的に開き、端面に平坦面を持つ。端面中央には僅かに円線状に凹部が見られる。脚部は189の脚部に類似し、ハの字状に開き、端部で内彎する。端部にはやや平坦面を残す。穿孔は1組で3方向に穿いている。調整手法は口縁端部がヨコナデ、他の部分は横位・斜位のヘラミガキ後ヨコナデ、あるいは不整ナデで消されている。脚部は縦位のヘラミガキが認められる。脚部内面はナデ調整である。

#### 石器

##### 石庖丁（315）

杏仁形を呈する磨製石庖丁である。体部に表裏面からの穿孔による紐部をもつ。紐部の紐擦れ痕が明瞭に観察できる。刃部は何度も研磨が行なわれたと推定され、部分的にコーングロスが認められる。粘板岩製である。

本住居址の時期は、前述の一括遺物より能田旭新相、弥生時代後期後半に属する良好な一群と考えられる。

#### 第25号住居址（第28図、図版11）

D 1～2区に位置する。南東コーナー付近を現林道によって擾乱を受け、南壁側は地傾斜に

よってほとんど流失しており遺存状態は悪い。平面形は南に向かって広がる正な台形状を呈し、東西3.60m、南北3.45mの規模を有する。床面積は10.69m<sup>2</sup>。壁は東側でよく残存しており、最大壁高は42cmを測る。やや不安定であるが東壁及び北壁の一部に周溝が存在する。東壁沿いの周溝は根が入り込み原形を留めているとは言えないが、幅10~28cm、深さ7~16cmを測る。床面は地山面を掘り込んだままの状態で一部地山に含まれる礫が顔を出し、床面をやや掘りすぎた危惧もあるが、ほぼ水平である。特に硬化面等は存在しなかった。火処は確認できなかった。

ピットは4本を確認した。4本柱構造の堅穴住居を考えるならば位置的には問題はないが、Pit 1は深さ6cmを測るのみでありやや疑問が残る。他は深さ25~40cmを測り、柱穴に相当すると考えられる。

覆土は3層に分かれる。第2・3層の黒褐色土・褐色土が本来の埋土と考えられ、上部からの流れ込みによる自然埋没と考えられる。

#### 出土遺物（第57・61・62図）

本住居址からは139点の土器片、石器が出土している。その内79%を弥生土器が占める。大半が覆土上・中層より出土しているが、破片が多く正確な時期決定の資料にやや欠けている。

#### 縄文土器

##### 甕？（194）

口縁部のみ残存する。突帯上に押引きが認められる他は不明である。

#### 弥生土器

##### 甕（195~198）

所謂貝田町式に比定される。195~197は口縁部で、いずれも横位の条痕を残し、口縁端部内面には刺突文が認められる。197のみ端部外面に刻みが認められる。198は胴部片であり、横位の羽状条痕を残している。

##### 壺（199・200）

199は磨滅が激しいため断定しがたいが、突帯をもつ遠賀川系土器と考えられる。壺の頸部に相当し、2条の突帯がめぐる。突帯上の刻みの有無等は磨耗のため確認できない。200も199と同様壺の頸部に相当し、やはり遠賀川系土器と考えられる。沈線が3本認められる他は磨滅が激しく観察できない。

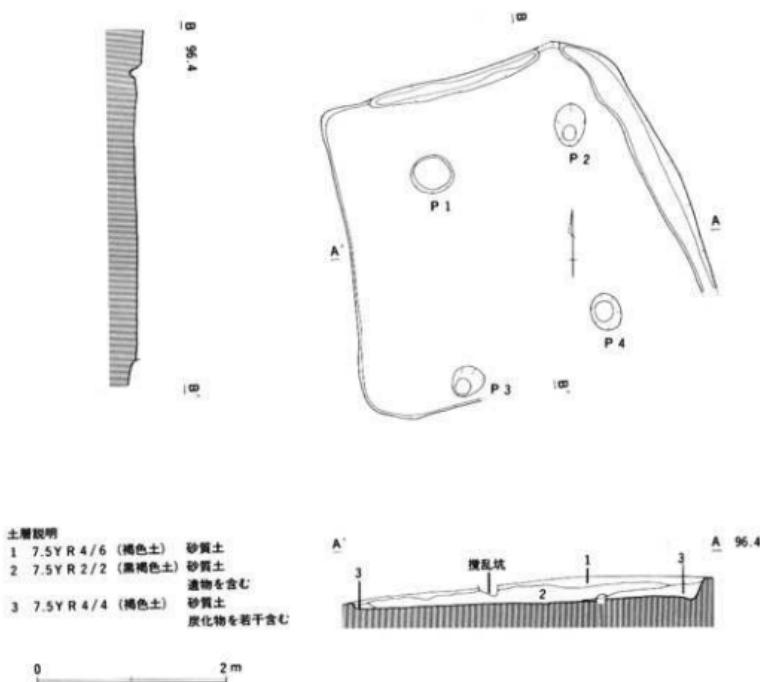
##### 器形不明（201）

磨滅が激しく正確な器形、調整等はまったく確認できない。矮小な底部である。

#### 白瓷系陶器

##### 皿（202）

底部から強い張りをもって立ち上がり、副部に棱をもつ。口縁部はやや外反し、丸くおさめている。内面底部に煤が付着している。流れ込みによるものと考えられる。



第28図 25号住居址

## 石器

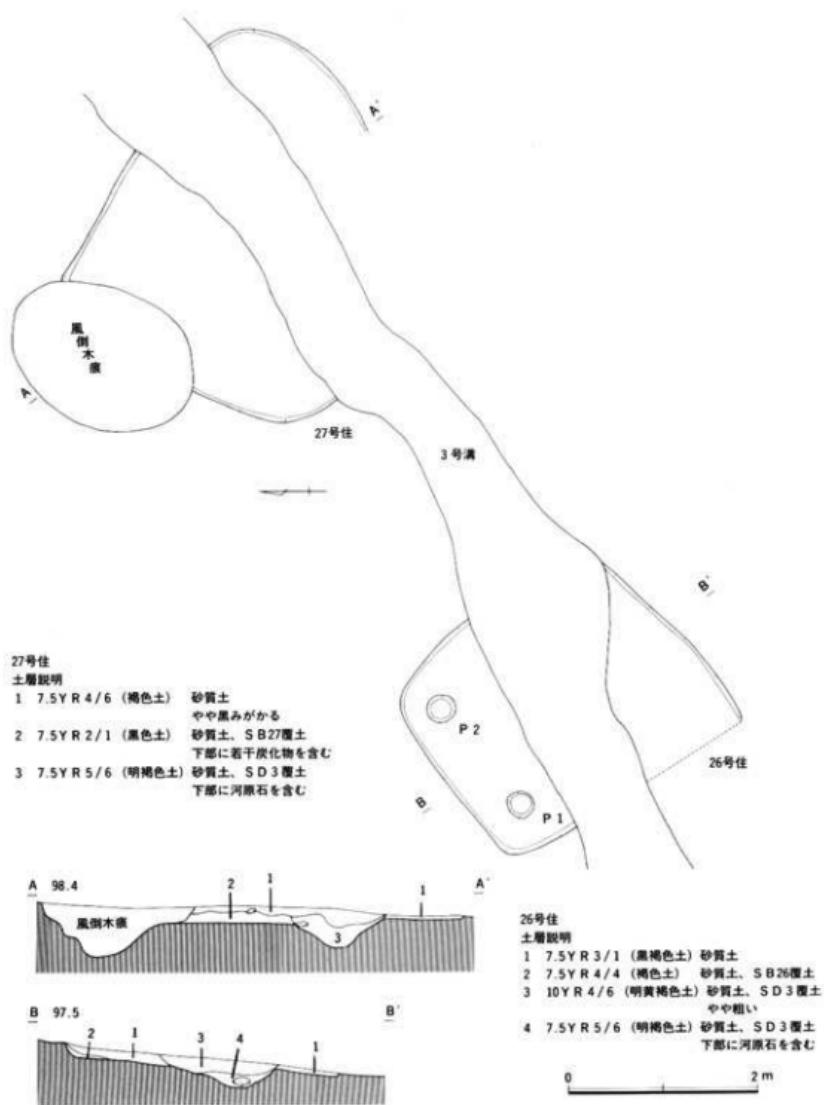
## 削器 (288)

背面が自然面からなる横長の初期剝片を素材とする。下縁に連続した調整剝離によってノッチ状の刃部を作出している。

## 剝片 (303~305)

すべて下呂石製である。304・305は自然面を打面とし、306は線状打面となっている。

本住居址の時期は、住居址の形態・位置等よりおそらく24号住等に近い時期か、あるいは、やや遡る時期が想定されるが、確定できる資料がなく判然としない。



第29図 26・27号住居址

## 第26号住居址（第29図、図版12）

C 2～3区に位置する。中央を3号溝（中世）が東西に横断して切られ、また、地傾斜により南壁の一部を流失し遺存状態は極めて悪い。平面形は隅丸の台形状を呈し、南北2.92m東西2.48mの規模を有する。長軸を住居の主軸と仮定するならば、その主軸方位はN26°Eを指す。壁はわずかに残存する程度であるが、ほぼ垂直に立ち上がっている。最大壁高は21cmを測る。床面は地山を掘り込んだ状態で、南西側へやや傾斜している。特に硬化面等は認められなかつた。火處は残存部分では確認できなかつた。

ピットは2本確認した。Pit 1・2とも径30cm前後、深さ25cmを測り、柱穴と考えられる。24号住と同様な見方をすれば4本柱構造であったと推定される。

覆土は2層に分かれる。北壁際1/3程度に主体となる黒褐色土が僅かに残る程度で、大きく3号溝によって切られている。

## 出土遺物（第57図）

本住居址からは3点の土器片が出土したのみで、図化できたのは2点である。

## 弥生土器

## 甌（203）

口縁部が短く外反する。肩部が張らず、胴部は直線的に下方に伸びている。胴部下半を欠損している。

## 須恵器

## 短頸壺（204）

口縁部の一部のみ残存するため正確な器形は不明である。口縁部には2本の沈線が巡る。

本住居址の時期は想定できる遺物がなく、判然としない。ただし、住居の形態・位置的な事項を考慮するならば、24号住に近い時期を想定できよう。204の短頸壺は、7世紀後半に属する。

## 第27号住居址（第29図、図版12）

B 2・3区に位置する。北東コーナー付近を風倒木痕により、中央を3号溝（中世）が東西に横断し切られている。また、南西コーナーを地傾斜によって流失しており、遺存状態は極めて悪い。平面形は歪な隅丸長方形を呈すると考えられ、南北3.60m、東西3.34mの規模を持ち、ほぼ24号住と同じ規模であったと考えられる。長軸を住居の主軸と仮定するならば、その主軸方位はN 2°Eを指す。壁は確認部分ではいずれもわずかに残存する程度であるが、ほぼ垂直に立ち上がっている。最大壁高は18cmを測る。床面は所々で地山の石が顔を出しやや削りすぎた

感もあるが、地山を掘り込んだ状態でやや硬化していた。床は若干南側へ傾斜している。火處及びピットは確認できなかった。火處は3号溝に切られた可能性が高い。

覆土は2層に分かれる、主体となる黒色土は南北で風割木痕・3号溝に切られており、中央部も流失が激しくその堆積は薄い。

#### 出土遺物（第57図）

本住居址からは僅か4点の土器片が出土したのみである。この内205の器台、206の壺、207の甕？（あるいは壺？）はほぼ床面直上より出土しており、おおむね本住居址の時期を想定し得る遺物と考える。

#### 弦生土器

##### 器台（205）

受部が大きく開き、直線的に伸びる器台である。脚部の一部を欠損する。径18.8cmを測り大型品の部類に入る。口縁端部には面取りが顕著で、やや下方に突出する。脚部は八の字状に開き2方向の透孔を有している。

##### 広口壺（206）

逆くの字状に口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部には面取りが著しい。肩部が欠損する。頸部の径の小さいのが特徴的で、指頭圧痕が顕著である。

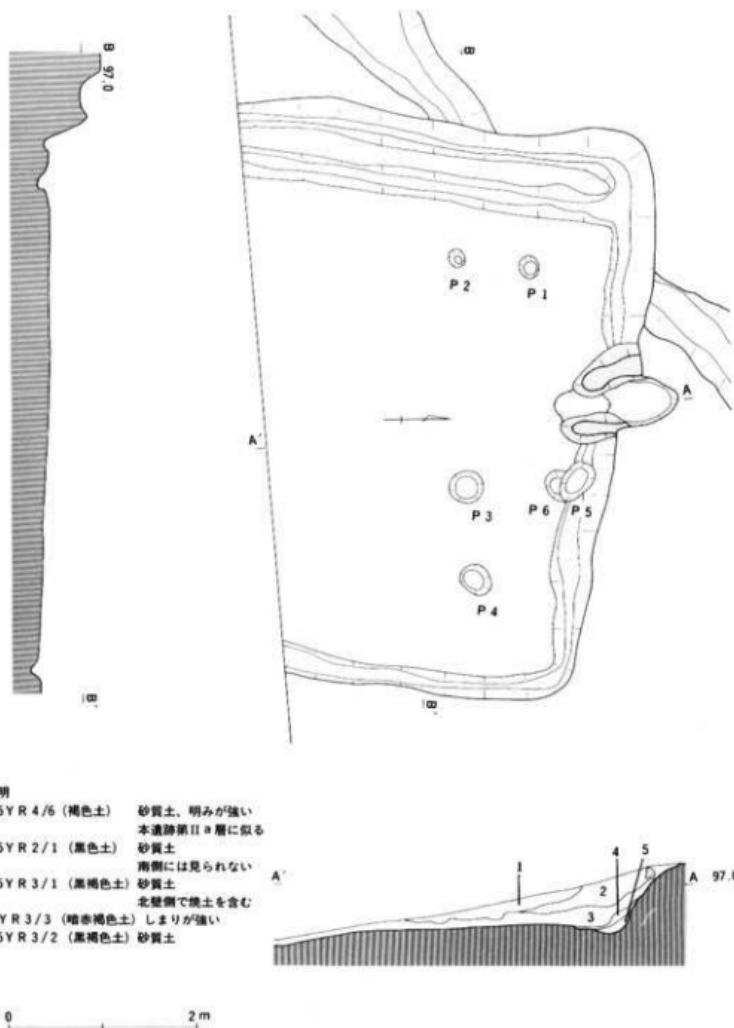
##### 甕？（207～208）

207は受口状の口縁部と肩部が強く張るのが特徴的で、あるいは壺？かもしれない。肩部を欠損している。継方向の刷毛目で調整されるが、口縁端部と頸部にヨコハケを残している。208は胴部の大半を欠損している。口縁部が外反せず上方に立ち上がり、口縁端部は僅かに外方に伸びている。

本住居址で特徴的な事項として、205の器台・206の広口壺の胎土がよく精選されており他の該期の土器の胎土とはまったく異なっていること、206の広口壺・207の甕？の器形・文様は当地域にはない要素であることの2点を挙げられる。本住居址の時期は、205の器台からおよそ能田旭期の年代観で捉えられよう。

#### 第28号住居址（第30図、図版12）

B～C10区に位置する。南部を試掘坑で欠損する。また、北西コーナー付近で上部を1号溝により切られているが、影響あるのは壁の上部のみで他の遺存状態は良好である。平面形は隅丸長方形を呈すると考えられ、東西5.90mを測る。主軸方位はN17°Wを指す。壁は若干外傾ぎみに立ち上がり、特に北壁がよくその旧形を留めている。最大壁高は65cmを測る。周溝は全周すると考えられ、幅16～30cm、深さ15cmの規模を有する。西壁に沿って2本周溝が巡っている。



第30図 28号住居址

両溝の切り合ひ関係は不明であるが、本址の改築に伴うものであろうか。床面は地山を掘り込み、黒褐色土を少量混入した黄褐色土による貼床で、よく硬化している。床はやや南側に傾斜している。

カマドは北壁の西寄りにあり、壁より北側へ50cmの掘り込みを行い煙道部を構築している。袖部は地山面を掘り残して基礎とし、その上に暗褐色土を固め構築している。右袖部の残りは悪いが、左袖部の内側はよく焼化し赤化している。燃焼部は浅いピット状を呈し、ピット手前には焼土が30×20cm、約5cmの厚さで堆積していた。ピットは6本を確認した。Pit 1・2・4が柱穴に相当すると考えられ、径25~35cm、深さ25~50cmの規模を持つ。

覆土は5層に分かれ。主体となる黒色土・黒褐色土は上部からの流れ込みによる自然埋没と考えられ、地傾斜に沿い南側へ向うほど薄くなる。概して遺物の出土量は少ない。

#### 出土遺物（第58・61・62回）

本住居址からは375点の土器片、石器が出土している。本住居址が自然谷状地形の北端部に位置するため、覆土上層・中層より時代幅のある遺物が出土している。212の短頸壺は3点の破片が接合して、口縁部の一部を除きほぼ完形資料となるが、これらは床面上より10cm前後の位置に集中しており、およそ同時期の遺物として捉えても大過ないと考える。

#### 土師器

##### 高壺（209~211）

209~211すべて脚部のみ残存する。209は円柱状を呈し、一部に透孔が認められる。210は下膨れ気味の形状をもつ。底部で屈曲する器形であると思われる。211の脚部は八の字状やや内脣気味に開く。底部との境で屈曲する部位が認められる。

#### 須恵器

##### 短頸壺（212）

口縁部が内彎し、端部はやや肥厚している。底部は平底を呈し、扁平な胴部をもつ。ミニチュア品である。底部はヘラ切り後ヘラナデが施されている。

##### 有台盤（213）

口縁部、胴部の大半を欠損する。高台はやや長く外方に伸び、底部からの立ち上がりは外方に大きく開く。

#### 土師器

##### 壺？（214）

底部のみ残存のため器形は不明である。径の大きさから壺の底部と考えられる。

#### 石器

##### 搔器（289）

縦長の剥片を素材とし、右側縁下半に角度のある調整を加え刃部を作出している。

**剝片（306）**

剥離面を打面とする。一部に礫面を残している。

本住居址の時期は212の短頸壺から7世紀末という年代観で理解できよう。

**第29号住居址（第31図）**

E・D 0～1区に位置し、南半部約1/2が調査区域外に存在する。平面形は隅丸長方形を呈すると考えられ、東西約3.15mを測る。南北方位はN40°Wを指す。壁は北壁でよく残存し、やや外傾して立ち上がっており、最大壁高は51cmを測る。周溝は北東コーナー付近のみに一部存在するが、根の擾乱がからみやや不確定である。床面は地山直床でかなり軟弱化しており、南側へやや傾斜している。火處の確認はできなかったが、調査区域外に存在する可能性が高い。ピットは7本検出した。Pit 1～2、4～6が柱穴に該当すると考えられ、径17～20cm、深さ10～15cmを測る。やや浅い感もあるが、8号住例と同様なものと判断した。

覆土は4層に分かれる。確認部分では本来の覆土である黒褐色土が厚く堆積しているが、多くの根痕等の擾乱が入り、概して出土遺物量は少ない。

**出土遺物（第58図）**

本住居址からは40点の土器片が出土している。この内97%を弥生土器が占めるが、破片が多く凶化できたのは2点のみである。

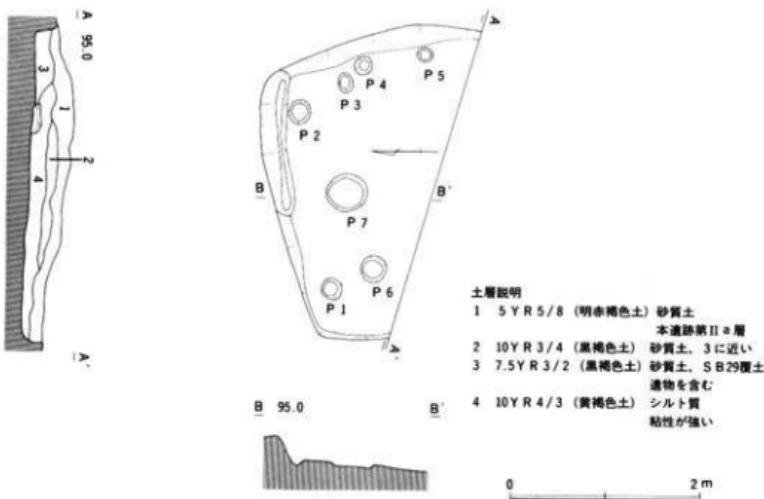
**弥生土器****壺（215）**

215は頸部と胸部の一部のみ残存する。長頸壺の一部か？216はバレス壺の口縁部の一部が残存する。端部を下方に拡張し、擬凹線を巡らしている。

本住居址の時期は破片が多く判然とせず、確定できない。216のバレス壺は山中期に属するものである。

**第30号住居址（第32図、図版13）**

D 9～10区に位置する。自然埋没谷の北肩部端から埋没谷を埋める覆土を掘り込み構築されているためにプランの確認に困難をきわめた。特に南半部は現代の排水溝等の擾乱が入り貼床範囲を確認し得た限りで詳細は不明と言わざるを得ない。平面形はおそらく隅丸方形を呈すると考えられ東西3.45mの規模を有する。主軸方位はN42°Wを指す。主軸方位はN42°Wを指す。壁は埋没谷の肩部を削り込む北壁で残りがよく、ゆるやかに外傾して立ち上がっており、最大壁高は59cmを測る。周溝は東壁沿いの一部で確認し、幅約15cm、深さ5cmを測る。また、北壁



第31図 29号住居址

際の溝は壁との間に根痕があり明確なところは不明であるが、壁寄り3~10cm離れ、西端で直角に方向を変えており、間仕切り施設としての可能性が高い。床面は黄褐色土による貼床で残存している部分は非常に硬化が顕著であり、ほぼ水平である。

カマドは疑問を残すが北東コーナーにあり、煙道がコーナー部分より110cm北側に掘り込まれている。その断面はアーチ状を呈す。両袖部は遺存せず、燃焼部と思われる位置に20×24cm程度の焼土の堆積を検出した。

ピットは2本確認した。Pit 1は柱穴の一つと考えられ、径28cm、深さ18cmを測る。

覆土は5層に分かれるが、谷の埋土が北から流れ込み、主体となる黒色土・暗褐色土の堆積は薄いが、3・4層は焼土を含み赤みがかかっている。

#### 出土遺物（第58図）

本住居址からは22点の土器片が出土している。破片が多く、また、位置的な条件等により明確に本住居址に伴う遺物はない。

弥生土器

甕 (217)

台付甕の脚部と考えられる。磨滅のため調整等は不明である。

#### 土師器

##### 高坏 (218)

脚部のみ残存する。内縁しながら裾部に向って開き、裾部で大きく外方に開いている。

#### 白瓷系陶器

##### 椀 (219)

貼付高台をもち、底部からやや張り気味に開く。内面に自然降灰が認められる。

本住居址の時期は確実に伴う遺物がなく、判然としない。

### 第31号住居址（第17図、図版6）

D・E 4～5区に位置し、第11号住居址を西側で切って構築している。ほぼ中央に幅15cm、深さ6cmの南下する周溝が存在し、当初は2軒の切り合い（改築）、もしくは間仕切り施設の可能性を考えたが、覆土の状況、南側を地傾斜によって流失している等想条件が重なり詳細は判然としないが、ここではこの周溝が火處1ヶ所を切っていることから前者の可能性が高いと考える。ここでは便宜的に西側を第31a号住、東側を第31b号住と呼称して説明する。

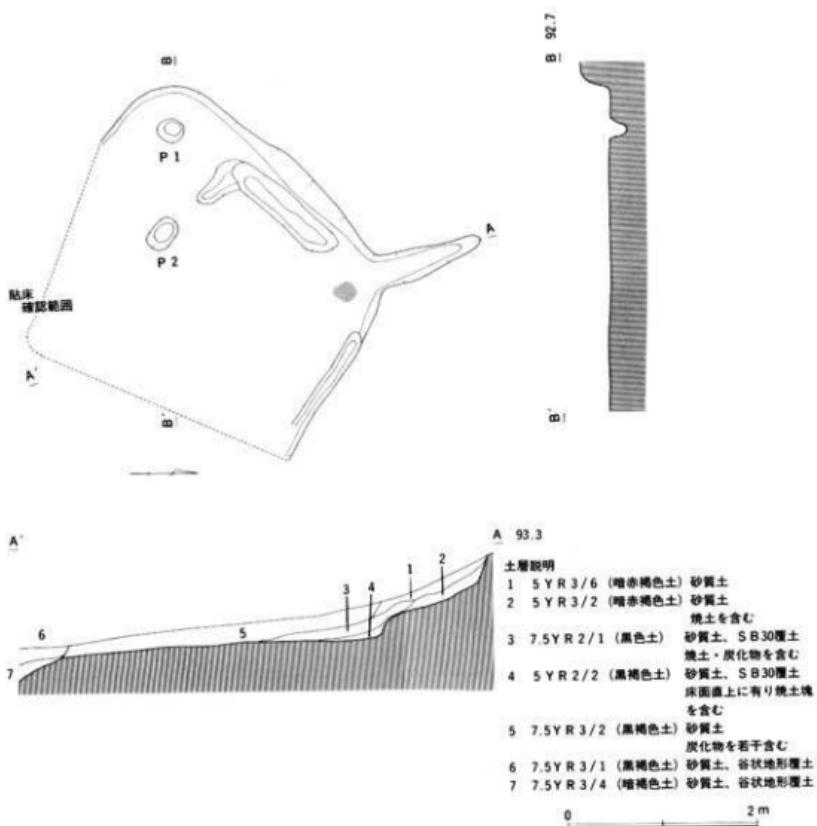
31a号住 平面形は隅丸長方形を呈すると考えられ、主軸方位はN49°Wを指す。壁は北壁で残りが良くほぼ垂直に立ち上がっており、最大壁高は30cmを測る。周溝は壁の確認ができる北・西壁で存在しており、本来は全周していた可能性が高い。幅9～17cm、深さ5～9cmを測る。床面は北壁寄りで硬化面が観察されたが、南側では流失し軟弱化している。火處は中央の周溝に切られているが、87×70cmの不整形であるが規模としては大きい。厚さ約8cmの焼土の堆積が見られ硬く焼けしまっていた。

ピットについては南壁が存在しないためどこまでを考慮するかが問題となるが、ここでは7本を範疇に入れた。Pit 2・3・6・7が深さ30～50cmを測り柱穴と考えられる規模を持つが、位置的に対応せず、判然としない。

覆土は2層に分かれる。主体となる暗赤褐色土は多くが流失し、本遺跡第II b層、32b号住との明確な区分は困難であった。

31b号住 平面形はやや歪な長方形を呈すると考えられ、東西3.30mの規模を有する。主軸方位はN50°Wを指し、31a号住とはほぼ同じくする。北壁及び北壁際の周溝は31a号住から連続しており、床面の状況も含めその特徴はほぼ同様である。火處は西壁寄りに位置し、約50×40cmの楕円形で、厚さ6cmの焼土の堆積を持つ。ただし、あまり焼けしまってはいなかった。

ピットについてはSB31bと同様な状況であるが、13本を範疇に入れた。Pit 1・3・6・7・9が柱穴に該当する規模を持つが、やはり配置的にバランスが悪く判然としない。



第32図 30号住居址

覆土は1層のみ確認できたが、SB11・31bと同様で明確な区分はできない。

#### 出土遺物（第58図）

両住居址からは第11号住居址で前述したとおり、少量の土器の破片のみ出土しており、図化できたのは第31a号住から出土した1点のみである。

#### 土師器

S字状口縁台付甕（220）

S字状口縁台壠甕の脚部である。外面には粗い刷毛目が施され、内上面には本体の胎土と異なる砂粒の多い粘土が貼付されている。

両住居址の時期は期間的には短期間での切り合いと思われるが、覆土等の状況から220のS字状口縁台壠甕が伴うとは考えられず、判然としない。

#### 第32号住居址（第18図）

A・B13区に位置する。上部を本遺跡第IIa層が覆い壁の立ち上がり等プランの確認はできなかった。包含層掘削の過程で西壁沿いに存在したと考えられる周溝を確認し、以後慎重に周辺を掘削し、北壁の一部を検出できた。遺存状態は極めて悪く、西側を12号住によって切られている。平面形は方形を呈すると推測され、南北4.00mを測る。主軸方位はN59°Eを指す。床面は軟弱な状態で、地山との区別も困難な状態であり、やや南側に傾斜している。確認できた周溝は幅20~36cm、深さ10cm程度で、やや幅広な感を受ける。火処はない。

ピットは5本を確認した。Pit 3は深さ25cmを測り、柱穴と考えられる。Pit 1・4・5は中世のものである。

本住居址の時期は、遺物は細片のみで時期を確定できるようなものは全く出土せず、このため時期も判然としない。

#### 第33号住居址（第18図）

A・B12区に位置する。東側で12号住を切り、西側で1号建物址に切られる。南半部は地傾斜によって流失している。平面形は方形、あるいは長方形を呈すると推測されるが、正確な規模は不明である。主軸方位はN38°Wを指す。壁は緩やかな角度で立ち上がり、最大壁高は27cmを測る。周溝は北東コーナー付近のみで確認でき、幅6~15cm、深さ5cmを測り、浅い。床は地表面を掘り込み軟弱な状態であり、地山との区別は困難な状態である。火処はない。

ピットは6本確認した。Pit 3は径28cm、深さ20cmを測り、柱穴であろうか。他は浅くて不明である。

覆土は4層に分かれる。主体となる黒褐色土・黄褐色土は北壁際に遺存するのみで流失してその堆積は薄く、遺物も少ない。

#### 出土遺物（第58図）

本住居址からは34点の土器片が出土したのにとどまる。前述したとおりプランの確認は困難であり、大半が覆土下層及び床面直上で取り上げたものである。

#### 弥生土器

### 壺 (221)

口縁部の一部しか残存していないが、広口壺と考えられる。口縁端部に一本の擬凹線？が巡っている。

### 甕 (222)

222は口縁部、胴部の殆どを欠損する。底部から胴部へは僅かに外反しながら立ち上がる。底部には布目压痕らしきものが認められる。223は台付甕の脚部である。八の字状を呈している。224は口縁部が短く外反し、口縁端部は鋭く尖っている。胴部下半を欠損する。肩部はあまり強く張らない器形である。

### 高坏 (225)

脚部のみ残存する。僅かに裾部に向って開いている。

本住居址の時期は225の高坏と他の甕の特徴より山中～瑞穂期の年代観、即ち弥生時代中期から後期の狭間に位置すると考えられる。

### 第34号住居址（第33図、図版13）

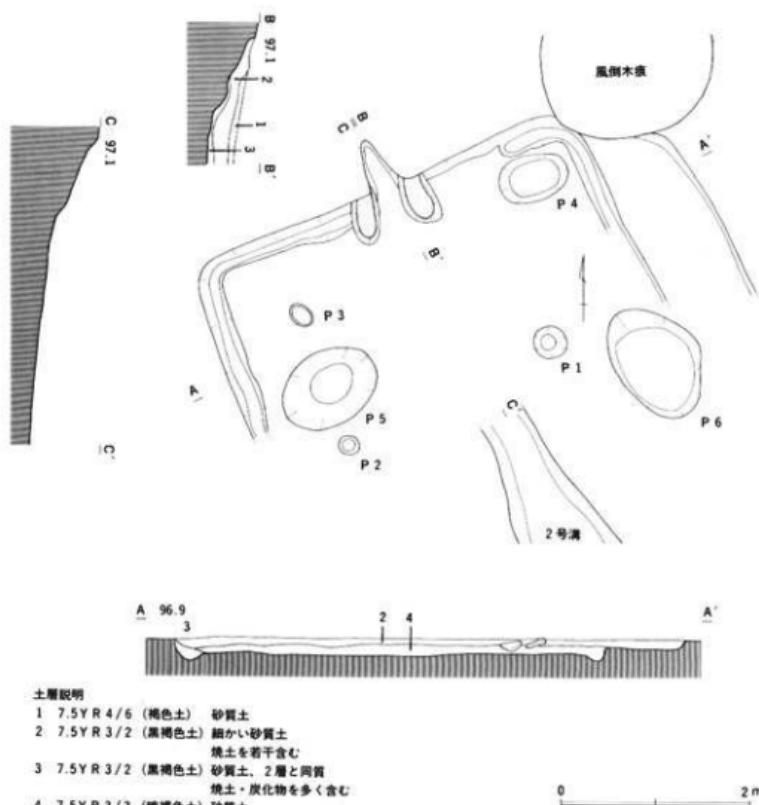
C～D 8区に位置する。南側約1/3程度を地傾斜によって流失し、北東コーナーを風倒木痕で切られている。また、南から延びる2号溝が本来は継続していたと考えられるが、これも地傾斜によって流失しており正確なところは不明である。平面形はおそらく隅丸長方形を呈すると考えられ、東西4.60mの規模を持つ。主軸方位はN46°Wを指す。壁は北壁ではほぼ垂直に立ち上がり、主軸方位はN46°Wを指す。壁は残りの良い北壁ではほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高は41cmを測る。周溝は右袖部の手前で切れるが北東・南東コーナー部分で確認でき、おそらく全周していたと考えられる。残存部分で幅約16cm、深さ約8～10cmを測る。床面は地山を掘り込み全体的に硬化面となっていたが、南に向うほど軟弱化しやや傾斜している。

カマドは北壁の中央にあり、煙道が壁から58cm北側に掘り込まれている。袖部はやや八の字状に開く。地山面を掘り残して袖部の基礎とし、その上に河原石を補強材として暗赤褐色土で固め構築している。袖部内側は特に良く焼化し赤褐色化していた。焚口から燃焼部にかけて多量の焼土粒・木炭片が検出された。

ピットは6本を確認した。Pit 4は貯蔵穴で、長径80cm、短径50cm、深さ60cmの規模を持つ。底面はほぼ平らである。Pit 1～3は主柱穴と考えられ、径20～60cm、深さ30～42cmを測る。Pit 1からは粘土塊を検出している。なお、Pit 5・6は中世に属するものである。

尚、本址に切られ東側に一部レベル差のある床面・壁が存在し改築等の可能性が考えられるが、詳細は不明である。

覆土は4層に分かれる。主体となる黒褐色土・暗褐色土は南半部ではほとんど流れている。



第33図 34号住居址

やはり上部からの自然埋没であろう。最上部を全体に褐色土が覆うが2号溝の埋土との識別は困難であった。

#### 出土遺物（第58図）

本住居址からは71点の土器片が出土しているが、覆土中を中世の2号溝が重複しているため30%あまりを白堺系陶器が占める。1の环蓋は床面直上より出土したものであり、完形品であることからも本住居址に伴う遺物として捉えることができる。

## 弥生土器

## 甕？（226）

底部のみ残存するため正確な器形は不明である。底部に木葉痕が認められる。

## 須恵器

## 环蓋（227）

天井部からなだらかな曲線を描いてそのまま口縁部に達する。口縁端部は丸味を帯びる。内面にヘラ工具痕が認められる。

## 土師器（228～229）

228は口縁部がくの字状に屈曲して伸び、肩部の張りが著しい。口縁部径より胴部径がかなり大きい器形を有する。229は小型の甕で、口縁部が鋭く、くの字状に立ち上がる。胴部の肩部はあまり張らない。

本住居址の時期は227の环蓋より7世紀初めの年代観で理解できよう。

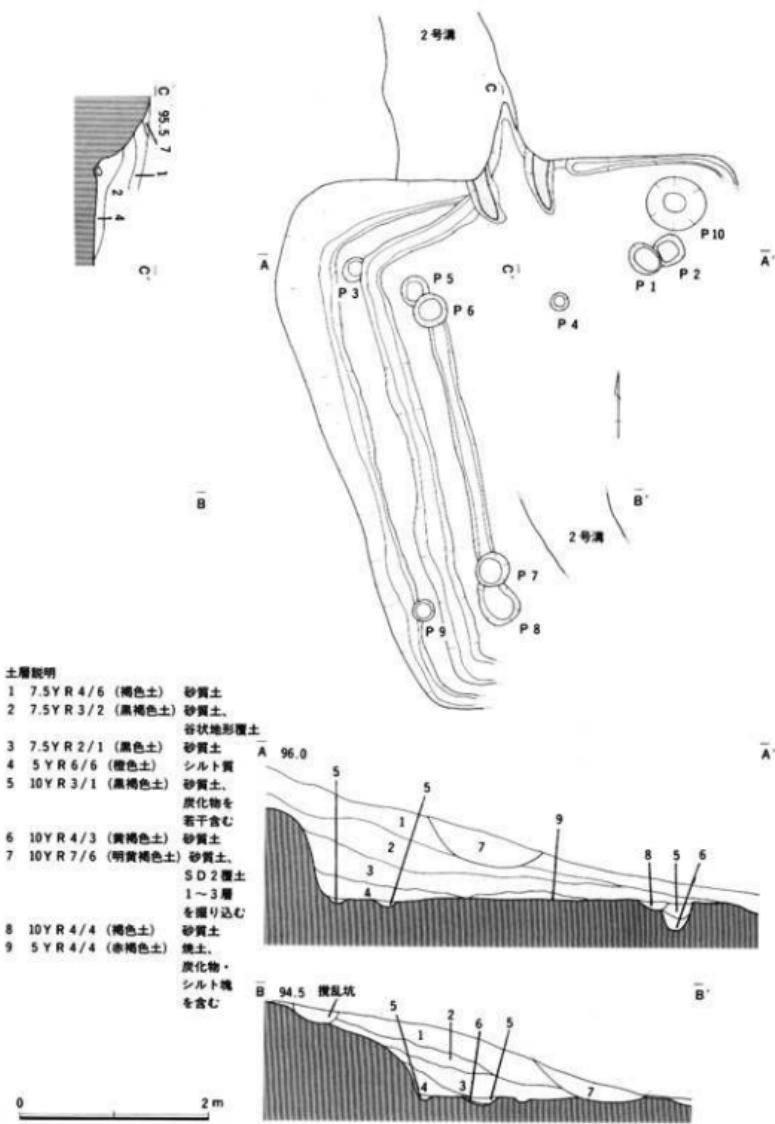
## 第35号住居址（第34図）

D・E 8～9区に位置する。本址は、遺跡中央に位置する自然埋没谷の西肩部分より谷埋土を掘り込み構築しているため上部（北西部）から黒褐色土が厚く流入しており、南壁・東壁側を流失している。また、2号溝（中世）が住居中央の覆土上層を南北に縱断しており、南部では床面までを掘り込んでいる。平面形は隅丸長方形を呈すると考えられ、南北5.10m、東西5.10mの規模を有する。主軸方位はN41°Wを指す。壁は西壁でゆるやかな角度で立ち上がり、最大壁高104cmを測る。周溝は本来はカマド部分を除きほぼ全周していたと考えられるが、北壁及び西壁沿いのみで確認した。西壁沿いには3本の周溝が巡る。壁際の周溝をその内側の周溝が切っており、さらにはピットとの位置関係から想定して本址は改築があったと推測される。Pit 6・7の間の周溝は間仕切りであろうか。幅10～37cm、深さ9～17cmを測る。

床面は少量の暗褐色土を混入する黄褐色土による貼床であるが、南東部は流失し軟弱化している。貼床確認部分に於いては床面はほぼ水平である。

カマドは北壁中央にあり、煙道は埋没谷の肩部傾斜に合わせるように立ち上がり、壁から65cm北へ掘り込まれている。袖部は赤褐色焼土がわずかに遺存する程度で中央部には浅い凹みが設けられており、浮いた状態で支脚と考えられシルト塊を検出している。カマド内より手前にかけて焼土が約13cmの厚さで堆積し、この層内に前述の支脚の破片と考えられるシルト塊が散在していた。火床面は硬くしまり、ガリガリの状態であった。

ピットは10本を確認した。Pit10は径60cm、深さ45cmを測り、貯藏穴である。Pit 3・9、この後Pit 2・6・7が柱穴として機能していたと考えられる。前者は径22cm、深さ15cm、後者は径



第34図 35号住居址

30~35cm、深さ20~25cmを測る。

覆土は9層に分かれるが、谷状地形覆土である黒褐色土が厚く流入している。主体となる黒色土は北・西壁側のみ良好に存在する。

#### 出土遺物（第59図）

本住居址からは98点の土器片、石器が出土した。その大半が覆土上層より中層にかけて出土したものである。下層あるいは床面直上では小破片での出土であり図示し得なかった。

#### 須恵器

##### 壺蓋（230）

天井部がやや平坦で浅身の器形をもつ。天井部からならかな曲線を描き、そのまま口縁部に達する。完形品である。

##### 壺身（231・232）

231は底部の大半を欠損する。口縁部は短く内傾して立ち上がる。受部は形骸化し、あまり突出していない。232は底部の殆どを欠損する。受部は明瞭で、口縁部は内傾するが大きく反って口縁端部では垂直に立ち上がっている。

##### 高壺（233）

天井部の一部を欠損するが、やや深みの器形である。天井部と口縁部の境に僅かな稜線が認められ、口縁部はこの稜付近から外方に伸びている。

##### 四耳壺（234）

欠損部分が大きく正確な器形は不明であるが、四耳壺の底部と考えられる。底部からの立ち上がりは比較的するどい。胎土が他の須恵器とは大きく異なっている。

##### 平瓶（235）

欠損部分が大きく器形の推測は難しいが、おそらく平瓶あるいは細頸壺の頸部と考えられる。

#### 土師器

##### S字状口縁台付甕（236）

磨滅が著しく、調整の観察は不可能である。口縁端部にわずかな面を形成している。

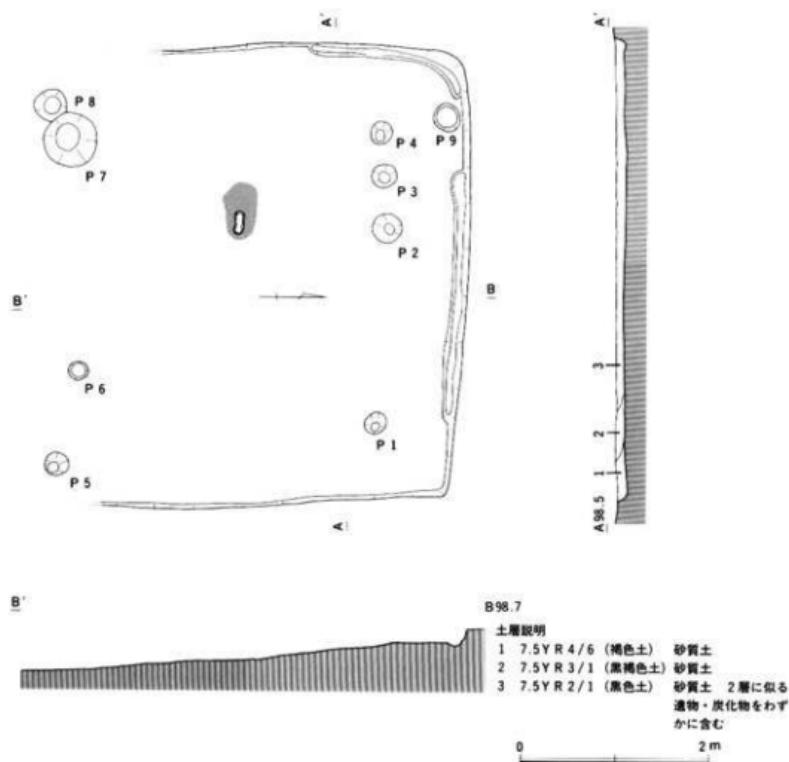
##### 甕？（237）

口縁部の一部のみ残存する。口縁部は強く外反し、口縁端部の面取りが顕著である。

##### 器台？（238）

坏部の底部に脚部との接合痕が残存していることや、坏部の形状から器台としたが、異質な形状を示す。脚部を欠損する。

本住居址からは床面遺物が存在しないため、時期を断定することは困難であるが、覆土中層出土の須恵器については230の壺蓋、231・232の壺身の6世紀後半代のものから235の平瓶の7世紀末代のものが見られる。



第35図 36号住居址

## 第36号住居址（第35図、図版14）

A・B13~14区に位置する。南側は地傾斜で完全に失い、かろうじて残存する北壁部分の他は遺存状態はきわめて悪い。平面形は長方形を呈すると考えられ、東西4.90m、南北は南側のピット位置より推定して5.20mの規模を有すると考えられる。南北方位はN29°Wを指す。壁は

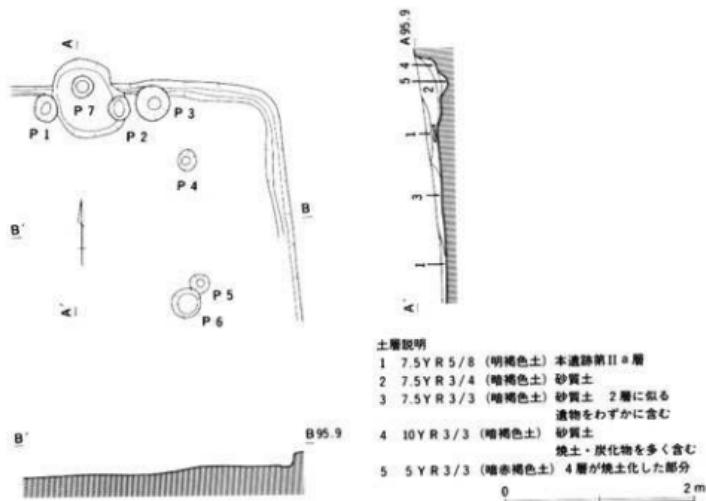
ゆるやかに外傾して立ち上がり、最大壁高20cmを測る。周溝は北壁側で確認したが、深さ2cmたらずで北東コーナー一直前で切れている。床面は地山面を掘り込み、ほぼ水平につくられ、全体に軟弱であった。

火廻は中央部よりやや西寄りに設けられている。火床面はよく被熱しており、焼土範囲は60×36cmの広がりを持ち、厚さ10cmであった。火床面東側直上に長さ23cm×幅8cm×厚さ6cmの河原石があり、10号住と同じく上面は摩滅しており、石皿であったと考えられる。

ピットは9本を確認した。Pit 1・5は径22cm、深さ24~34cmを測り柱穴と考えられるが、他は径22~46cm、深さ7~15cmと浅い。Pit 3・4・7は位置的には柱穴と考えられるが、前述の条件よりやや疑問が残る。

覆土は3層に分かれるが、本址本來の埋土である褐色土は北壁側部分に残るのみでほとんどが流失し、本遺跡第IIa層が厚く流れ込み堆積しており、遺物の出土量も少ない。

本住居址からは判別可能な遺物は全く出土せず、このため時期も判然としない。



第36図 37号住居址

## 第37号住居址（第36図、図版14）

D・E12区に位置する。南・西側を地傾斜によって流失しており、他の残存部分の遺存状態も極めて悪く、プランの確認も困難な状況であった。平面形は北東コーナー部分より推測しておそらく隅丸長方形を呈すると考えられる。主軸方位はN24°Wを指す。壁はわずかに残存している北壁・東壁より観察するとほぼ垂直に立ち上がっていたと考えられる。最大壁高29cmを測る。周溝は北東コーナー付近のみに残存し、幅17~20cm、深さ4cm程である。他の部分は地傾斜等によって流失しているが、おそらく全周していたと考えられる。

カマドは北壁の中央にあり、北へ半円形に30cm大きく張り出して構築されている。袖部は確認できなかつたが、Pit 1・2は袖芯の痕跡と考えられ、燃焼部は浅いピット状となっており、焼土及び炭化物を多く含み、底部は硬く焼けてしまっていた。奥壁側のPit 7は支脚石の存在を示すピットかもしれない。

覆土は5層に分かれるが、北壁及び東壁側に本来の埋土が薄く残存するが、本遺跡第IIa層が地傾斜に沿い流れ込んでおり、遺物の出土量も非常に少ない。

## 出土遺物（第59図）

本住居址からは本来の覆土が流出しているため5点の土器片、石器が出土したのにとどまる。その内239の壺蓋は床面上約5cm程浮いた状態で出土しており、本住居址に直接的に伴う可能性は少ないが、概ね同時期の遺物として捉えても大過ないものと考えられる。

## 須恵器

## 壺蓋（239）

やや浅みのある器形をもつ。天井部が緩やかな曲線を描き、口縁部が反り気味となる。

## 白瓷系陶器

## 椀（240）

胴部の中央付近に弱い張りをもって開き、口縁部が若干外反する。口縁端部は玉縁状となり。僅かに面が形成されている。内面見込み部分に段が見られ、底部内面中央に静止指撫調整が認められる。

本住居址の時期は、239の壺蓋より7世紀末の年代で理解できよう。

## 第2節 建物址とその出土遺物

### 第1号建物址（第37図、図版15）

A・B10~12区に位置し、東側で第33号住居址を切る。平面形は、東西方向に長軸をとる長方形を呈するが、少なくとも2回以上の建て替えが考えられる。ここでは明確に重複している北側部分1a号建物址、南部分を1b号建物址とし、一括して述べていく。新旧関係は1a号建物址→1b号建物址である。規模は1a号建物址は上端で長軸約13.40mを測る。1b号建物址については上端で長軸約12m、短軸は南壁が地傾斜によって流失しているので明確でないが、ピットの配置から6.80m以上はあったものと推定できる。北壁は両建物址ともよく残存し、最大壁高は1a号建物址で31cm、1b号建物址で25cmを測る。また、1a号建物址北壁沿いには周溝が存在し、幅30~60cm、深さ8cmを測る。

床面は地山面を掘り込んだ状態であるが、1b号建物址の西半部では岩盤が隆起しており、これまでを掘り込んで床面を形成している。

ピットは76本を確認した。その大部分が本建物址に帰属する柱穴と考えられるが、1a・1b建物址の区分は容易ではない。Pit 6・38・50・71をそれぞれの角として結んだライン上に乗るピットが多く存在する。これにはややずれるが、Pit 6・37を結んだラインが1基の建物址の規模であろうか。その間隔は長軸方向で約7.90m、短軸方向で約3.80mである。それぞれの柱穴はいずれも平面形は円形あるいは楕円形で、深さ35~64cmを測る。Pit 51・53、68・69は掘り込みはやや浅いが、前述した長軸ラインのはば中央付近で南北に並び、あるいは出入口施設かもしれない。

覆土は9層に分かれる。主体となる覆土である5層の灰黄褐色土は綿まりに欠け荒く、本遺跡第I・II層との判別が明確でなく、南側では覆土である認識がなく一気に掘り下げてしまった。1b号建物址西側で炭化物の堆積が見られるが、本建物址に伴うものか判然としない。

#### 出土遺物（第59・60図）

本建物址からは土器片130点が出土している。その内86%が白瓷系陶器に属するもので、緻密で焼き締まった胎土をもち、灰白色を呈するものが多い。覆土下層及びピット内からも出土しており、本遺物の址に伴うものと考えられる。

#### 白瓷系陶器

##### 碗（243~251）

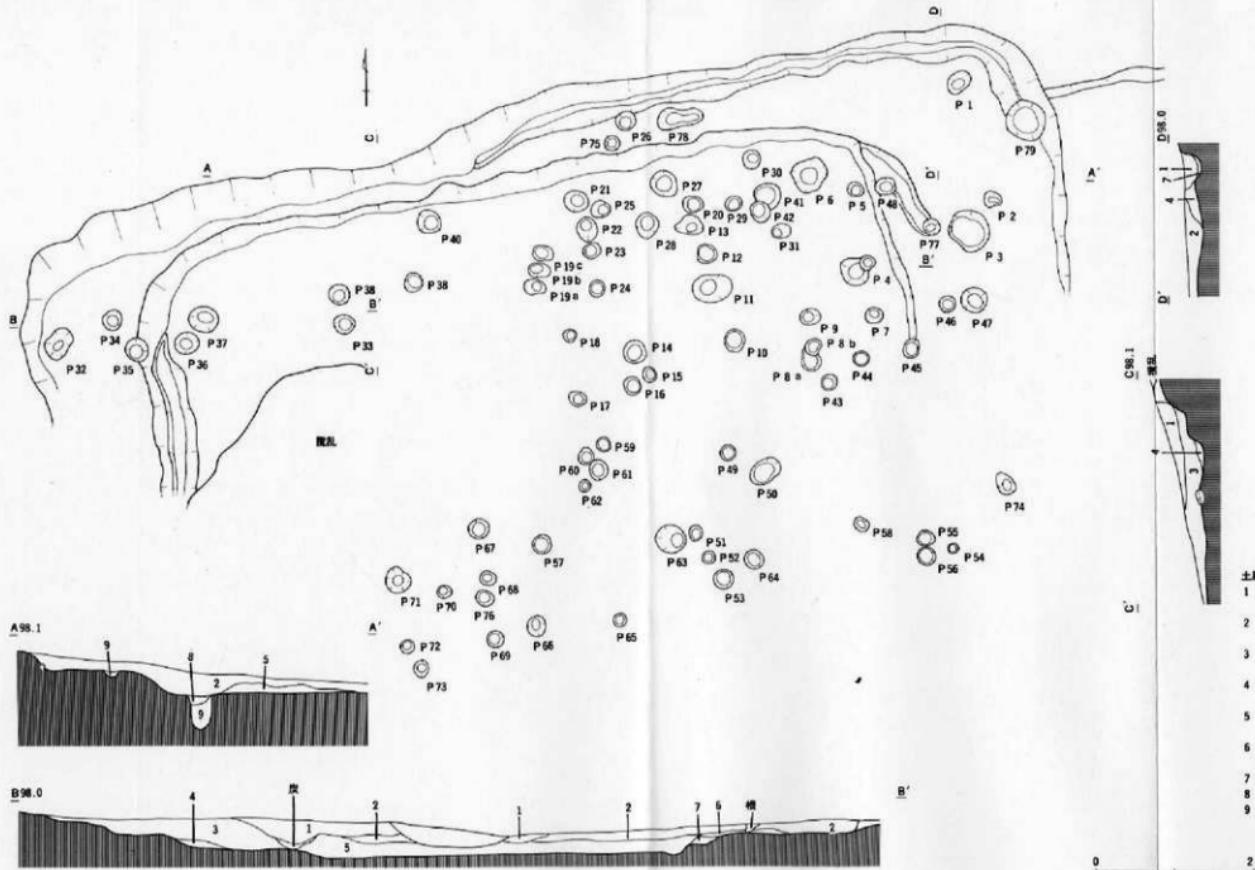
243・244は谷追間2号窯式期に属し、底部のみ残存する。全体的に厚い器壁をもつ。高台は付高台で、低いが貼付面が広く安定感がある。ただし、244の高台は剥落部分が多い。断面は台

形を呈する。底部外面に回転糸切痕が残り、244の内面には自然降灰が認められる。245は丸石3号窯式期に属し、底部のみ残存する。胴部の立ち上がりは逆八の字状に開くものと考えられる。内面には自然降灰が、底部外面には僅かに回転糸切痕が認められる。高台は付高台で精緻な作りであり、断面は三角形を呈す。246~248は窯洞1号窯式期に属する。246は器面に僅かに凹凸を残すが、胴部中央付近に弱い張りをとて開き、口縁が若干外反する。口縁端部は丸く肥厚し玉縁となる。内面の仕上げは滑らかであるが、底部にいたる見込み部分で若干段をもつ。247・248は底部のみ残存し、246と共に底部内面中央に静止指撫調整が施されている。また、底部外面には、板目・回転糸切痕が認められる。高台は付高台で、断面は三角形を呈し、端にはモミガラ痕が認められる。249~251は白土原1号窯式期に属する。器形は胴部下半に弱い張りをもって開き、口縁に近づくにつれて薄手に仕上げられるが、249・250は口縁端部で僅かに外反し、肥厚して玉縁状となる。胴部内面は滑らかで緩やかな曲面をもって底部へと至る。250の底部内面中央に軽い静止指撫調整が認められる。249・251の内面には僅かに自然降灰が見られる。高台は付高台で、端にはモミガラ痕が認められる。全体的に使用のためか内面全体は摩滅している。

### 三 (252~263)

252~254は谷追間2号窯式期に属する。底部が厚く、小型の碗とも言える。器高は低いが、胴部に強い張りをもって立ち上がり、口縁は外反する。口縁端部は丸く整形されている。底部外面には回転糸切痕が認められるが、高台貼付時に撫で消されており中心部のみ残る。高台端部にはモミガラ痕が認められる。すべて内面には僅かに自然降灰が見られ、254の底部内面中央に静止指撫調整が見られる。255~257は浅間窯下1号窯式期に属し、無高台で、底部外面に回転糸切痕をもつ。胴部に弱い張りをもって開き、口縁が外反するが、256は胴の張り及び口縁の外反とも小さい。内面は滑らかな作りで、256・257は自然降灰が見られる。又、256は内面にボロの付着も見られ、底部内面中央に静止指撫調整が施されている。258・259は丸石3号窯式期に属する。胴部は張りをとて開き、259は口縁がやや外反する。口縁部はナデ調整が加えられ面を形成している。内面は滑らかな作りであり、内外面に自然降灰が見られる。底部外面に回転糸切痕を残す。260・261は窯洞1号窯式期に属する。器形は胴部下半で若干くびれた後、中央から上半が弱い張りをとて開き、261は口縁端部は殆ど外反せず先細りとなるが、260はやや外反し、端部が肥厚し玉縁状に仕上げられている。内面に自然降灰が見られる。底部外面に回転糸切痕が残る。262・263白土原1号窯式期に属する。器形は胴部に弱い張りをとて開くが、263は口縁でやや外反ぎみとなる。口縁端部には面をもつ。内面は胴部と底部の境が軽く屈曲する。底部内面中央に静止指撫調整が認められる。底部外面に回転糸切痕を残し、262は板目も認められる。

### その他 (264・265)



第37図 1号建物址

第1表 第1号建物址ピット深度表							
ピットNo	深度	ピットNo	深度	ピットNo	深度	ピットNo	深度
1	25cm	19c	24cm	40	45cm	61	30cm
2	16cm	20	12cm	41	13cm	62	20cm
3	37cm	21	37cm	42	42cm	63	30cm
4	15cm	22	52cm	43	25cm	64	25cm
5	26cm	23	5cm	44	35cm	65	28cm
6	45cm	24	5cm	45	24cm	66	17cm
7	40cm	25	27cm	46	30cm	67	32cm
8a	33cm	26	22cm	47	41cm	68	15cm
8b	13cm	27	38cm	48	22cm	69	14cm
9	15cm	28	26cm	49	20cm	70	32cm
10	15cm	29	8cm	50	45cm	71	48cm
11	64cm	30	17cm	51	20cm	72	9cm
12	5cm	31	18cm	52	11cm	73	12cm
13	37cm	32	15cm	53	15cm	74	40cm
14	7cm	33	29cm	54	8cm	75	4cm
15	18cm	34	22cm	55	25cm	76	4cm
16	28cm	35	40cm	56	20cm	77	5cm
17	22cm	36	25cm	57	35cm	78	10cm
18	14cm	37	43cm	58	15cm	79	4cm
19a	25cm	38	32cm	59	30cm		
19b	26cm	39	25cm	60	32cm		

264は壇の口縁部のみ残存する。口縁端部が向側に肥厚し、面取りが著しい。265は鉢の底部片である。底部立ち上がり部分にヘラケズリが施されている。共に南部系と考えられる。

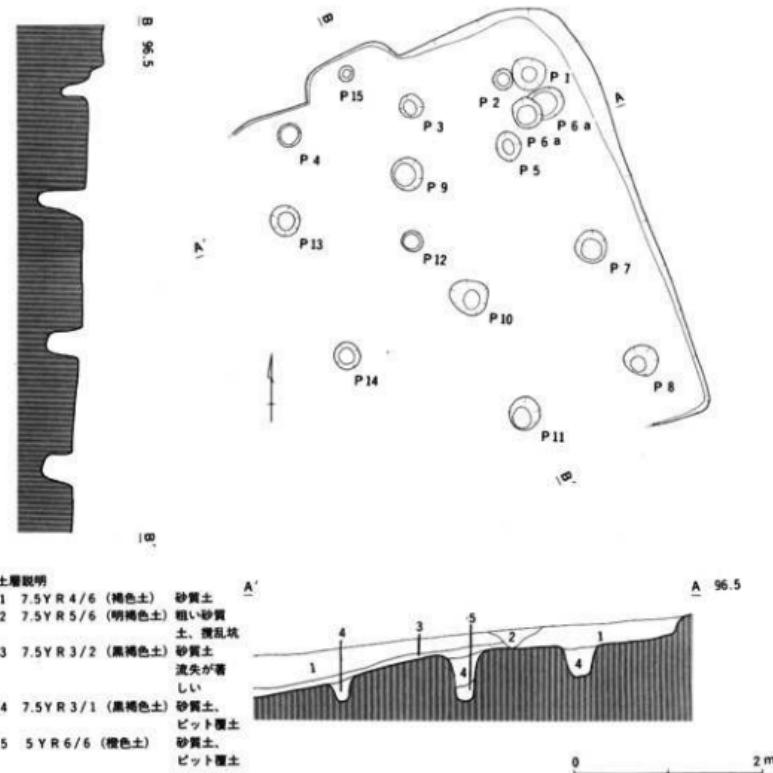
本建物址の時期は前述した遺物より12世紀～13世紀末の年代観で捉えられ、少なくとも2回以上の建替が行なわれたものと考えられる。

#### 第2号建物址（第38図、図版15）

C・D11～12区に位置する。谷状地形に向かうかなりの傾斜地に位置するため西壁・南壁は流失して遺存しない。確認できた部分で南北4.66m、東西4.14mの方形部分の北壁に1.0×0.3mの張り出し部分が付設する。壁はわずかに残るのみであるが、北東コーナー付近でやや外傾して立ち上がる他はほぼ垂直である。最大壁高は29cmを測る。床は地山面を掘り込んだ状態で

非常に軟弱であったが、本来の状態を示しているとは考えられない。

ピットは16本を確認した。いずれも本建物址に帰属する柱穴と考えられる。このうち Pit 6 a ~ 8, Pit 9 ~ 11, Pit 13・14は長軸方向各々3本ずつ並ぶ規則的な配置で穿れており、主柱穴と考えられる。主柱穴間の各距離は南北方向で1.50~1.60m、東西方向で1.50mの間隔で配置されており、おそらく3間×3間の構造を呈していたと推測される。それぞれの柱穴の平面形はほぼ円形で、深さは25~40cmを測り、同質な黒褐色土を覆土とする。Pit 2~4・15は前述の柱



第38図 2号建物址

穴と比較すると一回り小さく、深さも25cm程度で出入り施設に伴うものかもしれない。

覆土は5層に分かれるが、褐色土が全体を覆い主体となる黒褐色土はほとんど流失している。遺物も無く明確な時所属時期を確定できないが、第1号建物址に近い時期のものか。

第2表 第2号建物址ピット深度表							
ピットNo	深度	ピットNo	深度	ピットNo	深度	ピットNo	深度
1	12cm	5	20cm	8	30cm	12	15cm
2	25cm	6a	45cm	9	44cm	13	25cm
3	30cm	6b	20cm	10	30cm	14	22cm
4	25cm	7	33cm	11	35cm	15	20cm

### 第3節 竪穴遺構、土坑、溝、溝状遺構とその出土遺物

#### 第1号竪穴遺構（第39図）

D4区に位置する。平面形は直角方形を呈し、南北2.94m、東西3.32mを測る。東西方位はN126°を指し、床面積は約9.58m<sup>2</sup>である。壁はやや外傾して立ち上がり、最大壁高は32cmを測る。尚、南壁は地傾斜によりわずかに残存する程度である。形態・規模的には第24号住居址等期のものと類似するが、床面は凹凸が著しく、硬化面・火廻等は見られなかった。

ピットは4本を確認した。平面形は不規則で、深さ10cm以下であり、相対的位置関係も窺われず、柱穴とは考えられない。

覆土は5層に分かれるが、中央部に後世の擾乱があり、本来の覆土である2層の暗褐色土は壁際にわずかに残る程度であるが、第24号住居址等期の覆土と比較するならば荒く新鮮な感じを受ける。出土遺物も非常に少ない。

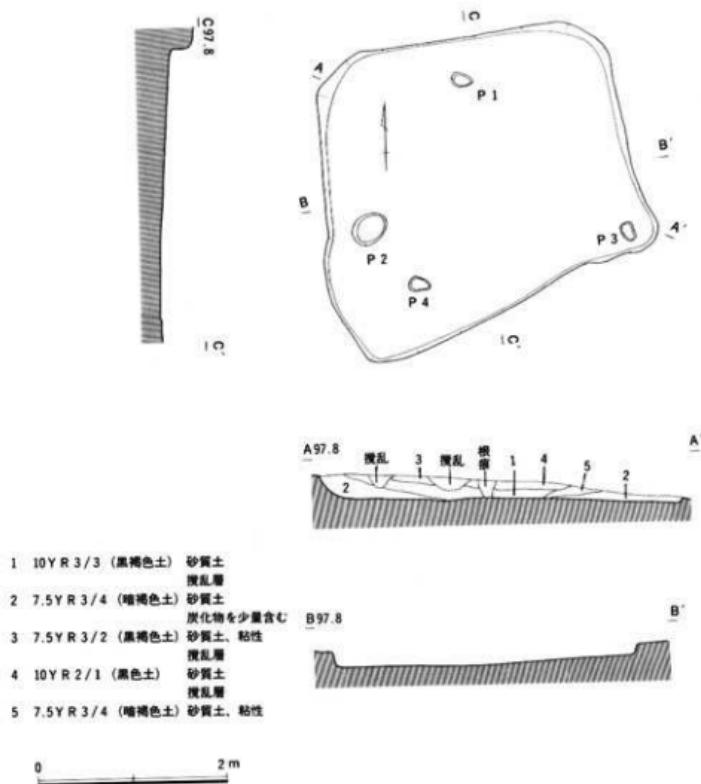
#### 出土遺物（第59・63図）

本竪穴遺構からは19点の土器片、石器が出土している。大半が破片で、図化できたのは2点の白陶系陶器、石核1点のみである。多くが覆土上層から出土している。

##### 白陶系陶器

##### 皿（241・242）

2点とも小型の皿で、糸切底をもつ。241は底部からの立ち上がりはやや開き、内縁後口縁がやや外反する。内面に自然落灰が見られる。242は底部は厚く、口縁部端部は肥厚する。内面底部に静止指撫調整が認められる。



第39図 1号堅穴遺構

## 石器

## 石核 (310)

分割礫を素材とし、一枚の平坦な自然面を打面として、その周囲で剥片剥離作業を行なっていいる。最終剥片の剥離角はかなり大きくなっている。

本堅穴状遺構の時期は確実に伴う遺物が見られないため不明である。覆土上層より出土した2点の皿は、丸石3号窯式期に属すと考えられる。

### 第1号土坑（第11図、図版3）

C7区に位置し、5号住を切る。平面形はやや歪んだ円形を呈し、 $1.90 \times 1.72\text{m}$ 、中央部を根痕の擾乱によりやや掘りすぎたが、5号住床面確認レベルより深さ20cmを測る。坑底はほぼ平坦で、南に傾斜している。壁は外傾して立ち上がっている。覆土は黄褐色土を主体とした堆積土である。

出土遺物（第60図）

白瓷系陶器

椀（266・267）

2点とも谷迫間2号窯式期に属する。底部のみ残存し、底部部分は厚手で底部外面に回転糸切痕を残す。精緻な付高台をもち、その高台にはモミガラ痕が認められる。底部からの立ち上がりは逆八の字状に開いておそらく口縁部に向かって内輪気味となるものであろう。

### 第2号土坑（第40図、図版15）

C13区に位置する。平面形は長梢円形を呈し、 $1.56 \times 0.56\text{m}$ 、深さ32cmを測る。断面形はU字形で坑底に希少な平凹部分を有し、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土は2層に分かれるが、主体となる褐色土はよく締まり、遺物を含む。

出土遺物（第60図）

弥生土器

高环（268）

脚部の一部のみ残存する。裾部に向かって僅かに開き、3方向に穿孔が認められる。調整は摩滅が著しく観察できない。弥生時代中期に属するものか。

### 第1～3号溝（第7図）

1号溝はA12区よりD8区に向かって延びる。北端部は本調査区外へ続き、南端部は2号溝にはほぼ直結する。幅0.9～1.2m、深さ20～25cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。7・28号住、1号建物址を切っている。覆土は黄褐色土を主体とし、自然埋没土である。

2号溝について確認できたのは、34号住以南よりE8区にかけてである。おそらくは北部へ延びていたものと推定されるが、地傾斜により消滅している。1号溝とD8区付近で直結する。幅0.8～1.1m深さ10～15cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。34・35号住を切る。覆土は黄

褐色土を主体とし、自然埋没土である。

3号溝はA4区よりD1区に向かって延びる。北・南両端部とも本調査区外へ続く。26・27号住を切り26号住より南部では2条となる。その部分では、南側部分を北側が切り、再構築によるものであろう。断面形はU字形を呈し、壁はやや外傾する。幅1.30~1.80m、深さ43~60cmを測る。覆土は黄褐色土を主体とするが、下部に多くの河原石を含む。

#### 出土遺物（第60図）

1号~3号溝にかけては本遺跡で出土した該期の遺物が出土しているが、多くを占めるのは白陶系陶器である。1・2号溝・3号溝とはやや形態を違えるが、ほぼ同時代のものと理解して大過ないであろう。これら1~3号溝の規模・性格等については全貌が明らかになるまで結論を留めておきたい。

#### 白陶系陶器

##### 椀（269~273）

273は谷迫間2号窯式期に属する。底部のみ残存し、厚い器壁をもつ。精緻で幅広い付高台をもち、端部にはモミガラ痕が認められる。底部外面に回転糸切痕を残し、内面に自然降灰が見られる。269~272は窯洞1号窯式期に属し、全て底部片である。器壁は薄い。高台は低い付高台で、断面が三角形となるものが多く、端部にモミガラ痕が認められる。底部外面に回転糸切痕を残し、底部からの立ち上がりは緩やかなカーブを描く。

##### 皿（274）

窯洞1号窯式期に属する。底部から弱い張りをもって立ち上がり、口縁部は外反し口縁端部に明瞭な面をもつ。底部外面に回転糸切痕を残す。

#### 第1・2号溝状遺構（第7図）

1号溝状遺構はB14区に、2号溝状遺構はB13区に位置する。平面形は、供に三日月状を呈し溝状遺構の内側を指向している感じを与えるが、36号住との関連は無い。幅40~45cm、深さ15~20cmを測る。断面はU字形を呈し、壁は僅かに外傾する。

覆土は2層に分かれるが、主体となるのはやや黒みがかかった黄褐色土である。中世に属する1~3号溝の覆土とは明らかに異なる。遺物は全く出土せず、時期・性格等は不明である。



第40図 2号土坑

### ピット群

本調査区において76基のピットを確認している。整然とした配列関係を持つものは少なく散漫と存在する傾向が強い。それらの中には柱痕が認められる例等もあり建物址が存在した可能性も高いが、現段階では規則性のある配列を把握していない。

#### 第4節 包含層出土の遺物（第66～74図）

ここでは、包含層出土の遺物を主として、他に造構確認面出土でもその所属時期が明確でない遺物も包含層出土の遺物として取り扱うこととする。

まず出土状況を見てみると、調査区の北から南へ向って緩やかに傾く地傾斜に沿い厚く堆積する包含層の堆積状況に対応するように遺物出土レベルの振幅巾も南に向かう程拡大している。これは、基本的には遺物が原位置を離れ流動した状況を端的に呈しているが、特に白瓷系陶器について顕著である。他時期の遺物も、同様の傾向が見られるものの、この流動差は小さいと考える。このような前提はあるものの弥生時代後期後半期の遺物は、調査区の西側を中心として分布する傾向が見られ、該期の生活空間を限定できる可能性がある。また、B11・C10～12・D9～12・E8～11区には谷状地形があり、覆土中からはおびただしい量の土器・石器等が出土しており、中には大型破片や完形品も含まれ、故に、例えば土器等の廃棄場的造構としての想定も可能である。

出土遺物は土器・石器・鉄製品等と多岐にわたり、18,000点出土している。時期的には縄文時代晚期終末～鎌倉時代の遺物が出土しており、ほぼ造構出土の遺物と同様な時期の所産である。ただし、僅かに弥生時代前期後半～中期前半にかけての条痕文土器が出土している。特に(400)は横位の条痕の後二段にわたって波状文が認められ、当地域においてはあまり例の無い資料である。他は、弥生時代後期後半～古墳時代前半・7～8世紀・12～14世紀代に大きく区分することができる。弥生時代後期後半～古墳時代前半の土器は高壺が多く見られる。弥生時代後期後半の土器は他に甕・台付甕・器台・鉢等が見られる。口縁に刻みをもつ甕(402)、受け口状口縁に擬凹線がめぐる甕(405)、加飾した鉢(418)等、造構出土の土器には見られなかった資料である。古墳時代前半の土器は特に高壺の脚部が円柱状を呈する資料が多く見られ、他にはS字状口縁台付甕・有段口縁壺・柳ヶ坪型壺等が見られる。7～8世紀代の土器は、高台付壺が数多く、他に甕・長頸瓶・高壺等が見られる。(333)の壺蓋、(334)の壺には「美濃國」を陰刻が見られる。また、(335)は羊形硯である。頭部のみが残存し、硯部を欠損する。類例が平城京出土のものに見られる。白瓷系陶器は谷追間2～明和1窯式期のものが見られる。石器については、その所属時期が明確でないが、大半は弥生時代後期に属するものとして理解する。石材は、殆どを下呂石が占め、数%をチャートが、数点黒曜石が入る。石鎚・石錐・ヘラ形石器・両極削離痕のある剥片・石核・石錐・直線刃石器等が見られる。石鎚は四基、有茎式が主体で、磨製石鎚も存在する。(481)は基部に穿孔が見られ、当地域の特徴的なものである。(498)～(502)を直線刃石器として分類した。詳述は「まとめと考察」で述べるが、今まででは単純に打製石斧として分類されていたものの中に数多く存在する。石製品には丁字頭勾玉・紡錘車が見られる。鉄製品では、(395)の雁股鎌、(394・441)の鍛冶具が当地域ではあまり例のない資料である。以下、実測図、観察表を参照されたい。

表3 出土遺物(土器)観察表(1)

番号	器種	出土状況	法 量		断面	色	調	造 存	備 考
			口径	底径					
1	壺	1号住			善	浅黄褐色(10YR8/4) 灰(5Y5/1)	口縁細片	口縁部に押引き 内壁上に押住 他ナデ	
2	壺	1号住	12.2		善	明赤褐色(5YR5/6) 灰褐色(7.5YR4/2)	口縁1/6弱	頸部に浅い横筋の波状文 そのすぐ下に肩状文あり 口縁部内面に弱による剥落痕 頸部内面に指痕圧痕他ナデ 外面吸附着	
3	甕	1号住		6.0	善	良	明赤褐色(5YR5/6)	底部	内底底部ナデ調整 φ~5mmの縫を含む
4	甕	1号住			密	良	橙(7.5YR7/6)	口縁細片	外面は横筋の条痕 内面に列点他ナデ
5	甕	1号住			善	良	橙(7.5YR6/6) にほい 黄褐色(10YR5/4)	口縁細片	外面に横筋の羽状条痕他ナデ
6	甕	1号住		6.9	善	善	にほい 橙(7.5YR6/4)	底部1/2弱	外面に横筋の条痕 底部外周に右左直φ0.5mmの砂粒を含む
7	つまみ付甕	2号住	13.2	4.1	密	良	灰(2.5Y7/2) 浅黄(2.5Y7/3)	2/3	人井部1/2へラケゼリ 他凹輪ナデ 大井部~口縁に自然降灰
8	甕	2号住	11.8		密	良	にほい 黄(2.5Y6/3) 灰(2.5Y7/2)	口縁細片	全て凹輪ナデ
9	甕	2号住	23.5		密	良	灰(5Y6/1) 灰(5Y5/1)	1/8	副外部外周子状叩き目 副内部当て具痕
10	壺	2号住		5.9	密	良	灰(5Y8/2) 浅黄(5Y8/3)	底部	底部~ラ切り 他凹輪ナデ
11	短颈甕	2号住	9.4	3.1	13.6	密	良	褐色(10YR5/1)	4/5
12	高坏	2号住			善	良	褐色(5YR6/8) 橙(7.5YR6/6)	环底部~ 脚部上半	环底部にシボリ痕
13	高坏	2号住			善	善	明黄褐色(10YR7/6) にほい 黄褐色(10YR6/4)	脚部(环底と の接合部わざ かに欠)	内面に粘土つぎ目痕
14	高坏	2号住	6.5		善	善	にほい 黄褐色(10YR7/4)	脚部上半	内面に粘土つぎ目痕
15	高坏	2号住			善	良	橙(5YR6/6)	脚部上半	外面上に縦のミガキ及びユビナデ
16	台付甕	2号住		6.6	善	善	にほい 黄褐色(10YR6/4) にほい 黄褐色(10YR6/3)	脚部	内部ナデ調整
18	S字状口縁 台付甕	3号住	14.0		善	善	にほい 黄褐色(10YR6/4)	口縁1/6	脚部に刷毛目 副部内面に粘土のつ き目を中心にしてユビ押さえ
19	S字状口縁 台付甕	3号住	15.0		善	良	にほい 黄褐色(10YR5/4) 明黄褐色(10YR7/6)	口縁細片	脚部に細い刷毛目 副部内面ユビ押 さえのちナデ 口縁に吸附着
20	S字状口縁 台付甕	3号住	12.6		密	善	にほい 黄褐色(10YR7/4)	口縁1/3	脚部横ナデ 脚部内面ナデ
21	S字状口縁 台付甕	3号住	12.4		密	善	浅黄褐色(10YR8/4) にほい 黄褐色(10YR6/3)	口縁1/9	口縁横ナデ 脚部刷毛目
22	S字状口縁 台付甕	3号住	15.5		密	良	灰黄褐色(10YR4/2)	口縁1/8	全て横ナデ
23	S字状口縁 台付甕	3号住	15.0		善	良	橙(7.5YR4/3) にほい 橙褐色(10YR6/4)	口縁1/8	扇曲面横ナデ 副部に刷毛目 脚部内面ユビナデ
24	S字状口縁 台付甕	3号住	14.4		善	善	浅黄褐色(10YR8/4)	口縁1/8	全て横ナデ 扇曲部に粘土のつぎ目 痕
25	S字状口縁 台付甕	3号住	16.6		密	善	にほい 黄褐色(10YR7/4) にほい 黄褐色(10YR7/3)	口縁1/8	扇曲部に2条の沈線 脚部に刷毛目
26	S字状口縁 台付甕	3号住	14.9		善	善	にほい 黄褐色(10YR7/3) にほい 黄褐色(10YR5/3)	口縁1/8	脚部に刷毛目 副部内面に指痕され
27	S字状口縁 台付甕	3号住	15.0		善	良	にほい 黄褐色(10YR7/4)	口縁細片	全て横ナデ 口縁に煤附着

表4 出土遺物（土器）観察表(2)

番号	器種	出土状況	法 量 口径 底径 高さ	粘土 焼成 色	洞	遺 存	備 考
28	S字状口縁 台付甕	3号住	15.0	普 青	灰黄褐(10YR5/2) 明黄褐(10YR6/6)	口縁1／6 ～1／7	全て横ナデ 口縁部上段に埋附着
29	S字状口縁 台付甕	3号住	19.0	普 青	にじい黄褐(10YR7/4)	11縫1／8	脚部底端ナデ 脚部内面刷毛目 脚部内面ユビナデ
30	S字状口縁 台付甕	3号住	9.6	普 青	黄褐(10YR8/6) にじい黄褐(10YR5/3)	口縁1／8	口縁部中段内面に指腹によるナデ 口縁部下段に刷毛目及び脚部に斜方向の刷毛目 口縁に埋附着
31	S字状口縁 台付甕	3号住	18.0	普 青	にじい黄褐(10YR6/4)	口縁細片	脚部に粗い刷毛目による利刃状 脚部に粗い刷毛目 11縫に埋附着
32	S字状口縁 台付甕	3号住	16.6	普 青	にじい黄褐(10YR6/4) 橙(7.5YR7/6)	口縁1／5	脚部に粗い刷毛目 内面全体横ナデ 口縁部～脚部にかけて黒褐色の変化 物有り
33	S字状口縁 台付甕	3号住	10.3	密 普	にじい黄褐(10YR7/6) 明黄褐(10YR7/6)	口縁1／2	口縁部中段内面 指腹によるナデ 脚部に斜方向の刷毛目
34	S字状口縁 台付甕	3号住		普 普	にじい黄褐(10YR6/4)	脚部	接合部に粗い刷毛目 脚部内面ユビ押さえ
35	S字状口縁 台付甕	3号住		普 普	橙(10YR6/6) 橙(7.5YR4/3)	接合部	体部内面底部へラ状工具による押さえ 脚部内面ユビ押さえ
36	S字状口縁 台付甕	3号住		普 普	明黄(7.5YR5/8)	接合部2／3	脚部に粗い刷毛目 脚部内面横ナデ
37	S字状口縁 台付甕	3号住		普 普	にじい黄褐(10YR6/4) にじい黄褐(10YR5/3)	接合部	接合部～脚部に斜方向の刷毛目 脚部内面指腹、或へラ状工具によ るナデ? もた同部内面に埋附着
38	S字状口縁 台付甕	3号住		普 普	明黄褐(10YR7/6)	接合部	脚部内面刷毛目 脚部内面ユビ押さえ
39	S字状口縁 台付甕	3号住	9.2	普 普	橙(2.5YR6/8) 橙(5YR7/8)	脚部2／3	脚部内面上面指腹による強いナデ 及びユビ押さえ
40	S字状口縁 台付甕	3号住	8.0	普 普	にじい橙(7.5YR6/4) 橙(5YR6/6)	脚部	接合部に刷毛目 脚部外面上部に へラ状工具による圧痕 脚部内面上面指腹による強いナデ 及びユビ押さえ
41	S字状口縁 台付甕	3号住	10.0	普 良	にじい黄褐(10YR7/4) にじい黄褐(10YR6/4)	脚部1／4 倒	接合部に刷毛目 脚部内面上部ユ ビ押さえ 脚部ナデ
42	S字状口縁 台付甕	3号住	9.4	密 良	明黄(10YR8/6) 褐(10YR4/1)	脚部1／3	接合部～脚部に刷毛目 脚部外 面上部へラ状工具 脚部内面 に埋附着
43	S字状口縁 台付甕	3号住	9.0	密 普	にじい黄褐(10YR6/4) 黒褐(7.5YR3/1)	脚部2／3	脚部内面ユビ押さえ 及び埋附着
44	大型甕	3号住		普 不	明赤褐(5YR5/6)	11縫細片	全て横ナデ
45	甕	3号住	8.2	普 良	にじい黄褐(10YR6/4) にじい黄褐(10YR7/4)	1／4	外面ナデ (板状工具か?) 内面ナデ
46	高环	3号住	16.4	密 良	にじい黄褐(10YR7/3) にじい黄褐(10YR5/4)	口縁細片	全て横ナデ
47	高环	3号住		密 普	明黄褐(10YR7/6)	接合部	脚部内面にシボリ痕 指腹による押圧で器壁が薄い
48	高环	3号住		普 普	明黄(7.5YR5/4) にじい橙(7.5YR5/4)	脚部上半	外面ナデ 脚部内面にシボリ痕
49	小形丸底甕	3号住	9.0	密 良	明赤褐(5YR5/6) 橙(5YR6/6)	口縁1／5	11縫細片ナデ 内面にミガキ
50	器台	3号住		普 普	にじい黄褐(10YR6/4)	接合部	脚部内面にへラ状工具
51	高环	4号住		普 良	明赤褐(5YR5/8)	脚部のみ	脚部内面にシボリ痕 その後ユビナ デ 外面で押圧?
52	高环	4号住		普 良	にじい黄褐(10YR7/4)	脚部のみ	脚部内面にシボリ痕 その後ユビ (へラ) ナデ?
53	高环	4号住		普 普	にじい黄褐(10YR7/4)	脚部のみ	脚部内面にシボリ痕
54	甕?	4号住	15.0	普 良	橙(7.5YR6/6)	口縁1／8	有段状

表5 出土遺物(土器)観察表(3)

番号	器種	出土状況	法 量		地	色	調	遺 存	備 考
			口径	底径					
55 瓢	4号住		9.0		普	明黄褐(10YR7/6)		底部1/3	
56 瓢	5号住	18.0			普	良	明赤褐(5YR5/6)	口縁1/8	口縁部に刷毛目の中ナデ? 口縁部に纏刷毛目 斑点に纏刷毛目 斑点にナデ or 刷毛目?
57 瓢?	5号住		6.0		普	良	明赤褐(5YR5/6)	底部	手1~7mmぐらいの擦を多量に含む
58 高坏	5号住	21.0			密	良	明黄褐(10YR7/6)	手部1/6	
59 高坏	5号住				密	良	明黄褐(10YR7/6)	环底部~脚部1/3	环底部~脚部に纏刷のミガキ 环底部内面にヘラ状工具による押さえ 爪部内面にヘラによる押さえ、ヨコナデ 3方通孔
60 高坏	5号住				密	良	明黄褐(10YR7/6)	脚部上半	脚部に纏刷のミガキ 3方通孔
61 高坏	5号住				密	良	黄褐(10YR8/6)	脚部上半	3方通孔
62 瓢	5号住	16.5			普	良	褐(10YR4/4) にふくし褐(7.5YR7/4)	口縁1/6	口縁部外側ヨコナデ及び塗飾着
63 环身	6号住				密	良	灰白(2.5Y7/1)	口縁細片	すべて回転ナデ
64 高坏	4号住	15.8			普	普	黄褐(7.5YR7/6)	脚部のみ欠損	脚部内面にシボリ痕
65 高坏	7号住	16.0			密	良	黑(2.5Y2/1)	环部1/6	
66 S字状II縫合台付雙	7号住				普	普	浅黄褐(7.5YR6/6)	脚部1/3	脚部に刷毛目
67 瓢?	7号住				普	普	褐(7.5YR6/6)	口縁1/6	有段口縁
68 つまみ付蓋	7号住	16.1			密	良	灰(2.5Y8/1) 灰(2.5Y7/1)	1/4	人丹部2/3~ヘラケズリ 他全て回転ナデ つまみ欠損
69 环蓋	7号住	11.1			密	良	黄灰(2.5Y6/1) 灰(2.5Y7/1)	1/3	火舟部1/2~ヘラ切りのちナデ 包涵部ナデ
70 提瓶	7号住				密	良	灰白(2.5Y8/1) 灰白(5Y8/1)	脚部	全て回転ナデ 内・外面に自然落灰
71 瓢	7号住				密	良	灰(2.5Y7/1) 灰(5Y7/1)	脚部~脚部上半2/3	脚部は格子状叩き目 内面は円型内 て異致 口縁部回転ナデ
72 長颈瓶	7号住	7.6			密	良	灰白(10Y7/1)	脚部~底部1/3	脚部~ヘラケズリ 他回転ナデ 底部高台がつく? 底部に下敷印あり
73 瓢	8号住	15.0	7.2	27.5	普	不 良	明黄褐(10YR7/6)	口縁1/6 脚部1/3 脚部全存	脚部内面に折彎压痕 脚部外側に炭化物
74 密口蓋	8号住	8.9	0.9	13.2	普	不 良	褐(7.5YR7/6)	完形	口縁部内面に纏刷のミガキ及び堆附 着
75 底口蓋	8号住	11.3			密	不 良	浅黄褐(10YR8/3) 良 にふくし黄褐(10YR7/4)	口縁部	口縁部に4条の擬四線 内外面ともナデ
76 底口蓋	8号住	9.9	5.7	19.3	普	不 良	にふくし黄褐(10YR7/4) 良 にふくし赤褐(2.5YR4/4)	完形	瓶底下半に擬四線及び刺突一部にミ ガキ 脚部外側に升形
77 ?	8号住	14.8			密	普	にふくし褐(7.5YR5/4) 明赤褐(7.5YR5/6)	口縁1/2	内外面とも纏刷のミガキか?
78 高坏	8号住				密	不 良	褐(7.5YR6/6) 褐(5YR6/6)	脚部上半	内面にシボリ痕 3方通孔
79 高坏	8号住	24.2	14.4	22.7	普	不 良	にふくし黄褐(10YR7/4) にふくし黄褐(10YR6/3) にふくし黄褐(10YR6/4)	环部1/3	3方通孔
80 瓢	9号住				普	良		口縁細片	口縁部に2列の押引き 外面は模様 の条纹 他ナデ 手1mm前後の妙粒を多く含む

表 6 出土遺物（土器）觀察表(4)

番号	器種	出土状況	法 量		耐土度成	色	調	遺存	備考	
			11件	実測						
81	甕	9号住			密	良	明黄褐(10YR7/6)	口縁細片	口唇部に斜方向の痕跡 外面は横位の条痕 内面に列点文様ナダ	
82	甕	9号住			密	良	棕(7.5YR7/6) によい黄褐(10YR6/4)	底面部片	外面に縱位の条痕 底部外側に布石痕	
83	右付甕	9号住	8.9		密	良	棕(7.5YR7/4) によい黄褐(10YR8/4)	脚台部	内面は所ナダ	
84	広口甕	9号住			密	良	浅棕(10YR8/4) によい黄褐(10YR7/3)	脚部1／3	平行無縫文と斜縫横文を交互に運ら	
85	甕	9号住	7.4		密	良	によい赤褐(2.5YR4/4) 明黄褐(10YR7/6)	底部	外面に赤彩及び指圧痕	
86	甕	9号住	6.2		密	良	によい黄褐(10YR7/3)	底部2／3	外面板ナダか刷毛目 内面に指圧痕	
87	高环	9号住			密	良	によい黄褐(10YR7/3)	脚部上半	外面に低いミガキ 内面にシボリ痕 能ナダ調整 2段3方の6コの透孔	
88	器皿	9号住	14.0		普	普	によい黄褐(10YR7/4)	受部1／4		
89	器皿	9号住			密	良	棕(7.5YR7/6) によい黄褐(10YR7/4)	受部2／3	外面にミガキ 内面ナダ調整	
90	鉢	9号住	6.6	4.0	3.7	密	良	によい黄褐(10YR6/4) によい黄褐(10YR4/3)	ほぼ完形	外面板兩面底 ナダ調整 内面にヘラ状の工具による指圧痕
91	高环	10号住			普	良	によい黄褐(10YR7/4) 黄褐(10YR6/6)	脚部1／6	脚部内面にシボリ痕	
92	S字状口縁 台付甕	11号住			普	普	によい赤褐(10YR7/3) によい黄褐(10YR7/4)	接合部	外面に刷毛目 脚部外側にユビ押さえ	
93	S字状口縁 台付甕	12号住	12.6		密	良	黄褐(10YR6/6) 明黄褐(10YR7/6)	II縁1／5	曲面部に斜突及び縫ナダにより段がつく 脚部に刷毛目 内面にユビ押さえ	
94	S字状口縁 台付甕	12号住	15.0		普	普	によい黄褐(10YR6/4)	II縁1／4	II縁上段全て縫ナダ II縁下段内面ナダ 体部内面にユビ押さえ	
95	甕	12号住			普	良	によい黄褐(10YR6/4)	II縁細片	山陰系口縁台付甕 脚部に棒状工具 による調整及び刷毛目 機械ナダ 脚部に深附着	
96	S字状II縁 台付甕	12号住			密	良	棕(7.5YR7/6) によい黄褐(10YR6/4)	接合部	外間に刷毛目 体部内面にユビ押さえ	
97	S字状II縁 台付甕	12号住			密	良	棕(7.5YR7/6)	脚部上半	外面に刷毛目 体部内面にユビ押さえ	
98	S字状II縁 台付甕	12号住	11.0		密	良	によい赤褐(10YR7/4) によい黄褐(10YR5/3)	脚部1／3	脚部上半部ユビ押さえ 下半部棒ナダ凸凹生じる 縫部 は折り返し及び指圧痕、押さえ	
99	S字状II縁 台付甕	12号住	9.6		密	不 良	棕(7.5YR6/8) 明黄褐(2.5YR5/6)	脚部	上半部に刷毛目 下半部ナダ 内面にユビ押さえ 縫部は折り返し	
100	S字状口縁 台付甕	12号住	10.0		普	不 良	棕(7.5YR6/6) 棕(7.5YR7/6)	脚部	上半部に刷毛目 下半部ナダ 内面にユビ押さえ 縫部は折り返し	
101	器皿	12号住			密	普	明赤褐(2.5YR5/8)	接合部	外面に縫位のミガキ 接合部外側ともにヘラ押さえ	
102	甕	12号住	19.8		密	普	棕(5YR6/8)	II縁1／6	II縁外側とも棒状 工具による羽状文様	
103	甕	12号住	18.5		密	良	明黄褐(10YR6/6)	口縁1／5	口縁外側とも棒状による羽状文 縫部に細かな刷毛目 空疎片を多く含む 捕ヶ坪型	
104	高环	12号住			密	良	明黄褐(10YR7/6)	脚部2／3	外面丁寧なナダ 脚部内面にシボリ痕? 3方透孔	
105	高环	12号住			密	普	明赤褐(5YR5/6)	脚部	赤帯系 脚部にミガキ? 内面にヘラ or 棒状工具で押圧 环底部に粘土 被覆	
106	高环	12号住			密	良	棕(5YR6/8)	环底部~ 接合部	環底部内面に放射状支線のミガキ 内面にやや傾仄のミガキ 脚部内面にヘラナダ?	
107	小型有縫鉢	12号住	18.8		密	普	明赤褐(5YR5/6)	II縁1／6		

表7 出土遺物（土器）観察表(5)

番号	器種	出土状況	法身		胎土	施成	色	調	道存	備考	
			11種	底深							
106	つまみ付壺	12号住	14.6		密	良	灰白(2.5Y7/1) 灰黄(2.5Y7/2)	11種1／6	天井部1／2及び内面にヘラケズリ 他回転ナデ		
109	有台环	12号住	14.0	11.2	3.8	密	良	灰白(2.5Y8/4) 灰白(2.5Y8/2)	1／3	底部にヘラケズリ 他回転ナデ	
110	有台环	12号住	14.3	11.5	3.5	密	良	灰白(7.5Y8/1) 灰白(7.5Y8/2)	1／4	底部にヘラケズリ 他回転ナデ	
111	有台环	12号住	15.6	11.4	5.0	密	良	灰黄(2.5Y7/2) 灰黄(2.5Y6/2)	1／3	底部にヘラケズリ 他回転ナデ	
112	有台环	12号住		13.6		密	良	灰白(5Y7/1) 灰白(7.5Y7/1)	底部1／4	底部にヘラケズリ 他回転ナデ	
113	高环	13号住	19.4			普	普	浅黄褐(10YR8/4) 浅黄褐(10YR8/4)	环部1／8	环部に波状文	
114	高环	13号住				普	普	に付・黄褐(10YR7/4) に付・橙(7.5YR7/4)	脚部上半	3方透孔	
115	高环	13号住		12.5		密	普	に付・黄褐(10YR7/4) に付・黄褐(10YR6/4)	脚部1／2	3方透孔	
116	台付甕	13号住		8.0		普	普	に付・橙(7.5YR7/4) に付・黄褐(10YR7/4)	脚部		
117	甕	13号住		5.8		普	不良	橙(2.5YR6/4)	底部	外面上部毛目? 焼成前の穿孔あり	
118	バレス甕	13号住	19.7			普	普	明黄褐(10YR7/6) 浅黄褐(10YR8/4)	口縁部	口縁部に擬門縫? 口縁部内面に波状文	
119	つまみ付甕	13号住	16.7			密	良	灰黄(2.5Y6/2) 灰(12.5Y7/1)	11種1／6	天井部1／2回転ヘラケズリ 他回転ナデ 天井部に自然隣灰	
120	环身	13号住	10.6		3.6	密	良	灰(2.5Y7/1) 灰(2.5Y7/3)	1／2	底部1／2切りのちラナデ 他回転ナデ	
121	有台环	13号住		10.2		密	良	灰(5Y7/1) 灰(7.5Y6/1)	底部1／4	底部1／2切り 他回転ナデ	
122	有台环	13号住		8.1		密	良	灰黄(2.5Y7/2) 灰(2.5Y7/1)	底部1／5	底部1／2切り 他回転ナデ 底部凸に養筋あり	
123	有台甕	13号住		10.4		密	良	灰白(7.5Y7/1) 灰(7.5Y6/1)	底部1／3	底部ヘラ切りのちナデ? 他回転ナデ	
125	环盖	15号住	10.4		4.0	密	良	灰(7.5Y4/1) オーバーアーク(5Y3/1)	1／3	天井部1／2ヘラケズリ 他回転ナデ	
126	环盖	15号住	9.4			密	良	灰(5Y6/1)浅黄(5Y7/3) —墨(5Y2/1)	11種1／6	全く回転ナデ	
127	坛蓋	15号住	10.8			密	良	灰(5Y6/1) 灰(5Y4/1)	1／6	天井部1／2回転ヘラケズリ 他回転ナデ	
128	环身	15号住	9.8		4.3	密	良	灰(5Y5/1)	1／2	底部1／2ヘラケズリ 他回転ナデ	
129	环身	15号住	9.6		4.1	密	良	灰(5Y7/1) 灰白(5Y7/2)	11種完形	底部1／2に回転ヘラケズリ 他回転ナデ 体部に1条の沈線	
130	环身	15号住	10.8			密	良	灰(5Y7/1)	11種細片	全く回転ナデ	
131	無蓋高环	15号住	13.1			密	良	灰白(7.5Y7/1) 灰オーピー(7.5Y5/3)	1／10	环部に3条の沈線、全て回転ナデ 外面上に自然隣灰	
132	高环	15号住				密	良	灰(7.5Y6/1)	脚部2／3	全く回転ナデ 端部中央に2条の沈線	
133	甕	15号住				密	良	灰(5Y5/1) 灰(NS)	颈部	颈部上部にヘラ引き その下に2条の沈線	
134	有台环	15号住	11.0			密	良	灰白(5Y8/1) 灰白(5Y7/1)	底部1／4	底部ヘラ切り 他回転ナデ	
135	甕	15号住	22.1			普	不良	浅黄褐(10YR8/4) に付・黄褐(10YR7/3)	口縁～脚部	11種底部刷毛目 1／6 制作刷毛目	

表8 出土遺物(土器)観察表(6)

番号	器種	出土状況	法 量			色	調	直 有	備 考
			11径	底徑	器高				
136	甕	15号住	13.8			青 不良	椎(7.5YR7/6) 浅黄(7.5YR8/4)	口縁1/6	
137	甕	15号住	16.5			青 青	黄褐(2.5Y5/3) 浅黄(2.5Y7/3)	口縁1/4	胴部内面に指印压痕
138	甕	15号住	13.5			青 青	浅黄(10YR8/4) 浅黄(10YR8/4)	口縁1/5	胴部に複数毛目 口縁部内面に摩擦毛目
139	甕	15号住		7.5		青 不良	にせい黄(10YR7/4) 良にせい黄(10YR6/4)	底部1/3	胴部下に擦刷毛目
140	瓶	15号住				青	浅黄(10YR8/4)	把手部分	
141	つまみ付蓋	16号住	16.7			青 良	灰黄(2.5Y7/2) 灰黄(2.5Y7/1)	1/3	天井部1/3へラケズリ 他回転ナデ
142	つまみ付蓋	16号住	16.0	3.2		青 良	灰黄(2.5Y7/2) 灰黄(2.5Y7/3)	1/3	大升部1/2へラケズリ 他回転ナデ
143	环身	16号住		8.8		青 良	灰白(5Y7/2) 灰(5Y6/1)	1/5	底部へラ切り 他回転ナデ
144	环身	16号住		8.2		青 良	灰白(7.5Y8/1) 灰白(7.5Y7/1)	1/4	底部へラ切り 他回転ナデ
145	有古坏	16号住	10.8	7.4	3.7	青 良	灰白(5Y7/1)	5/6	底部へラ切り 他回転ナデ
146	甕	16号住	23.6			青 良	灰黄(2.5Y6/2) 灰オリーブ(5Y6/2)	口縁標片	胴部外間に椅子叩き目 脇部内面に 全て具痕 扱手あり
147	甕	16号住	21.9			青 不良	黄褐(10YR5/6) 褐(10YR4/4)	1/3	胴部外間にわざかに椅子叩き目 脇 部内面にわざかに当て具痕 扱手あり
148	短頸壺	16号住	9.3	7.7	6.4	青 良	灰白(2.5Y7/1) 灰白(5Y7/1)	ほぼ完形	胴部へラ切り 他回転ナデ 胴部下に1条の沈線
149	甕	16号住	20.3			青 不良	黄褐(10YR5/6) 黄褐(10YR6/6)	口縁標片	口縁部内面に擦刷毛目
150	甕	17号住	18.0			青 青	浅黄(2.5Y8/3) 浅黄(2.5Y7/3)	口縁1/4	
151	环身	18号住	10.8			青 良	灰白(5Y7/2) 灰白(5Y7/2)	口縁標片	全て回転ナデ
152	环身	18号住	10.2	4.1		青 良	灰(5Y6/1) 灰黄(2.5Y6/1)	1/6	底部1/2へラケズリ 他回転ナデ
153	甕	18号住	15.9			青 青	椎(7.5Y7/6) 浅黄(7.5Y8/4)	口縁標片	
154	甕	18号住	19.4			青 青	にせい黄(10YR6/3) にせい黄(10YR7/3)	口縁1/5	胴部内面に擦刷压痕
155	四耳壺	20号住		14.2		青 良	灰黄(2.5Y7/2)	底部標片	胴部へラケズリ 底部へラ切り 内部回転ナデ
156	無古坏	20号住		4.0		青 良	灰白(2.5Y7/1) 灰黄(2.5Y7/2)	底部2/3	底部へラ切り 他回転ナデ
157	有古坏	20号住	14.2	8.8	4.4	青 良	灰黄(2.5Y7/2) 灰白(2.5Y7/1)	1/2	底部へラ切り 他回転ナデ
158	高坏	20号住				青 青	浅黄(10YR8/3)	脚部1/4	
159	甕	19号住				青 良	にせい褐(7.5YR5/4) 明褐(7.5YR5/6)		外面に擦刷毛目 内面ナデ 約1mmの白色粒を含む
160	甕?	19号住				青 良	にせい黄(10YR6/3) 褐(10YR4/1)	脚部標片	外面に鶴による斜方向の羽状条痕
161	甕?	21号住	17.6			青 良	浅黄(7.5YR8/4) にせい黄(10YR7/4)	口縁～颈部	脚部下半に刷毛目 内面に滑溜压痕
162	环身	21号住	11.0			青 良	灰白(5Y7/1)	口縁1/4	内外面とも回転ナデ

表9 出土遺物（土器）観察表(7)

番号	器種	出土状況	法 量 (1升) 底径 器高	動土 地成	色	調	道 有	備考		
								内	外	
163	甌	21号住	8.6	密	良	浅黄(2.5Y7/4) 灰白(10YR8/1)	II縁1／5	内外面とも回転ナデ 外面部に自然隕片		
164	甌	21号住	11.1	密	良	灰白(5Y7/2)	II縁一部	瓶形中央に2条の沈線及び平行凹字 口文 全て回転ナデ		
165	甌	21号住		密	良	黄灰(2.5Y4/1) 暗灰黄(2.5Y5/2)	口縁細片	箱形口部による瓶方向の連続刻突痕 及びその下に2条の沈線 全て回転ナデ		
166	合付甌	22号住	5.8	普	普	明黄褐(10YR7/6) に近い黄褐(10YR5/3)	肩台部	内面部ともナデ 内面部帯にヘラによる押圧		
167	合付甌	22号住	7.2	普	普	に近い黄褐(10YR7/3) 淡黄褐(10YR8/4)	肩台部	内面部及び脚部内面にヘラによる 押圧 脚部内面にラケズリ？ 他 ナデ		
168	高坏	22号住	28.9	密	普	に近い黄褐(10YR7/4) に近い黄褐(10YR7/3)	竿部1／3弱	环形外表面位のミガキ 口縁部の み擦痕 内面部はナデ		
169	甌	22号住	20.1	普	普	に近い黄褐(10YR8/4) に近い黄褐(10YR7/4)	口縁2／3 脚部1／3	内面部ともナデ 口縁・脚部一部に塗附着		
170	甌	22号住	14.9 5.2 16.0	密	普	に近い黄褐(10YR7/4) に近い黄褐(7.5Y7/8)	ほぼ完形	脚部に縱列毛目 脚部内面に半に輪 上つき月歯 他ナデ 脚部中央一部に気泡垂		
171	甌	22号住	9.4 4.9 13.1	密	普	明黄褐(10YR6/6) 褐(2.5YR6/6)	ほぼ完形	内外面ともナデ 脚部下一部に塗附着		
172	环盛	23号住	9.8	3.3	密	良	褐(10YR4/1) 灰(2.5Y4/1)	2／3	天井部1／2へラ切り 他回転ナデ	
173	环身	23号住	8.5	密	良	に近い褐(7.5YR5/3) に近い褐(7.5YR6/4)	口縁部1／6	全て回転ナデ		
174	無高坏	23号住	11.2	密	良	灰(5Y6/1)	1／4	全て回転ナデ 口縁部に1条の沈線		
175	甌	23号住	12.8	普	普	淡黄褐(5YR7/4～7.5 YR6/3)に近い褐(5YR7/ 4)	口縁1／6	脚部内面に捺痕压痕		
176	高坏	23号住		普	普	淡黄褐(10YR8/4)	上半部			
177	甌	23号住		普	普	明黄褐(10YR7/6)	II縁部1／6	脚ヶ坪型 口縁部外表面彫刻工具に よる創痕 瓶部に規則毛目		
178	合付甌	24号住	15.9 6.4 24.2	普	良	褐(5YR6/6) 淡黄褐(7.5YR8/3)	1／2 (脚部のみ 全脊)	口縁部内外面柔軟的な調整のちラケズ リ 脚部上半部は柔軟的な調整及び塗附着 内面部と脚部内面はナデ 脚部下部 外面部柔軟的な調整のちナデ 塗附着 ラケズリ 脚部上・内面に炭化物附着		
179	合付甌	24号住	17.1 7.3 24.7	普	普	に近い黄褐(10YR7/4) 淡黄褐(10YR8/4)	ほぼ完形 (口縁部のみ 1／2欠損)	口縁部内外面柔軟的な調整のちラケズ リ 脚部上半外面は柔軟的な調整 内面 は柔軟的な調整のちナデ(真ん中は に指印毛目残存) 塗附着下半部内面 は柔軟的な調整のちナデ？ 内面部ナデ 及び炭化物附着 脚部屈曲部分のヘ ラケズリ 脚部上部は外面部ともナデ		
180	合付甌	24号住	18.3 7.6 29.6	普	普	に近い黄褐(10YR7/4)	口縁1／2 ・脚部欠損	II縁部外表面は柔軟的な調整のちナデ 内面部はナデのみで1／3炭化物附着 脚部上半外面柔軟的な調整のちナデ 脚 部内面・脚部下半外表面へラケズリ 脚部下半内面はナデ 塗附着上半部に炭化 物附着		
181	甌	24号住		密	良	に近い黄褐(10YR6/4)	脚部3／4	口縁部内外面ともナデ 剥離外面部 と内面部はナデ		
182	合付甌	24号住	9.0	密	良	に近い黄褐(10YR7/4)	脚部2／3	脚部各部位に捺痕压痕		
183	甌	24号住	18.6	密	良	に近い黄褐(10YR7/4) に近い黄褐(10YR7/3)	口縁1／7	II縁部内外面とも強い黄ナデ 瓶部 内面横方向の板ナデ？ 及び捺痕压痕 脚部外面部は丁寧なナデ 内面部は斜方 向の板ナデ？ 瓶部以外の外面部に 炭化物附着		
184	甌	24号住	13.2 4.4 13.6	密	良	に近い褐(7.5YR7/4) に近い褐(10YR7/3)	ほぼ完形	II縁部外面部も横列毛目が残る 脚部内面斜方向のヘラケズリのち ナデ 脚部外面部ナデ？ 内面部ナデ		
185	甌	24号住	5.6	普	不良	灰黄褐(10YR8/2) 褐(7.5YR7/6)	底部	II縁部外面部とも横列毛目が残る 脚部内面斜方向のヘラケズリのち ナデ 脚部外面部ナデ？ 内面部ナデ		
186	直口甌	24号住	3.4	密	良	赤褐(10RS/4) 褐(5YR6/6)	口縁のみ欠損	II縁部外面部と内面部のミガキ 脚部下半及び同内面に横列毛目		
187	広口甌	24号住	13.2 4.2 13.8	密	良	褐(7.5YR6/6)	完形	II縁部外面部と内面部のミガキ 内面部は丁寧なナデ 口縁部内面及び脚部中央一部 に塗附着		

表10 出土遺物(土器)観察表(8)

番号	器種	出土状況	法 量 (口径 底径 深さ)	地 色	調 色	進 存	備 考	
							動土	静止
188	高环	24号住	17.0	黒	小 良	にじい黄焼(10YR7/3) 灰黄焼(10YR6/2)	环部	11.神縁部に横位のミガキ 底部底盤に円盤状の欠損部が見られる
189	高环	24号住	12.8	黒	良	明黄焼(10YR7/6) 黄焼(10YR8/6)	脚部	外側は縦位のミガキで脚部のみ横位のミガキのら構ナダ 内面はナダ 3方透孔
190	高环	24号住		青	不良	浅黄焼(10YR8/3)	脚部上半1/ 2	3方透孔?
191	高环	24号住	25.8 13.7 19.2	黒	良	明黄焼(2.5YR5/8) にじい黄(5YR6/4) 明黄焼(7.5YR7/2)	环部1/5 脚部1/3全存	环部外削は脚部のヘラミガキ 内面は底盤が位置する以外脚部へラミガキ 脚部外削端部は横位へラミガキ 残り部分は縦位へラミガキ 脚部内削ナダ? 2 枝の3方透孔 口縁部内面と底盤に煤附着
192	高环	24号住	28.0 13.4 16.2	青	良	にじい黄焼(10YR7/3) にじい黄(7.5YR7/3)	环部1/3 脚部2/3	环部外削とも横位、底盤付近で横位へラミガキ 他の部位底盤へラミガキ 脚部外削は脚部のみ横位で他脚部へラミガキ 脚部内面はナダ 2 枝の3方透孔 环部内削に煤附着
193	高环	24号住	25.2 12.9 17.3	青	良	にじい黄焼(10YR6/4)	ほぼ完形	口縁部横ナダ ボルト内面とも横位・斜位のラミガキのち構ナダ or 不整ナダで消されている 脚部外削は横位のヘラミガキ 内面はナダ 3方透孔
194	甕?	25号住		青	良	にじい黄焼(10YR6/4) にじい黄(10YR7/3)	II縫隙片	II縫隙部に凸凹 異質? による押引き他ナダ
195	甕?	25号住		青	良	にじい黄(7.5YR7/4) にじい黄(7.5YR6/4)	II縫隙片	外側に底盤の条痕 内面に列点文
196	甕?	25号住		青	良	にじい黄焼(10YR7/4) にじい黄(10YR6/4)	II縫隙片	II縫隙部に新方向の列み目 外面に横位の条痕 内面に列点文
197	甕?	25号住		青	良	青(7.5YR7/6) にじい黄(7.5YR7/4)	口縫隙片	外面に横位の条痕 内面に列点文 II縫隙部に崩れ
198	甕?	25号住		青	不良	青(7.5YR6/3)	脚部縫片	外面に斜方向の条痕 他ナダ より1mmぐらいいの砂粒を含む
199	甕?	25号住		青	良	にじい黄焼(10YR7/4) 浅黄焼(10YR8/4)	脚部縫片	頭部に2条の突審 連貫用系
200	甕?	25号住		青	良	浅黄焼(2.5Y5/2) にじい黄(2.5Y6/3)	脚部縫片	頭部に3条の沈線 連貫用系
201	?	25号住	4.8	青	良	浅黄(2.5Y7/4) 灰(2.5Y6/2)	底部	
202	山瓶	25号住	9.4 4.6 3.3	青	良	浅黄(2.5Y7/3) にじい黄(2.5Y6/3)	底部	底部赤きり 白縫隙ナダ 黏付高台 内面底部に底羽垂 内面に自然陥没
203	甕?	26号住	11.6	青	良	青(2.5YR6/8) にじい黄(7.5YR6/4)	II縫~脚部 1/2	脚部外側に刷毛目 より1~3mmぐらいいの繊維を含む
204	短颈甕	26号住	11.6	青	良	青(2.5Y7/2) 灰(2.5Y7/1)	II縫隙片	外側とも同版ナダ 口縫隙部に2条の沈線 内外側に自然陥没
205	器台	27号住	18.8	青	良	明黄焼(10YR7/6)	1/2	脚部にミガキ?
206	広口甕	27号住	19.2	青	良	浅黄焼(10YR8/4)	1/3	頭部に指痕压痕
207	甕? 瓶?	27号住	20.9	青	青	青(7.5YR6/6)	1/6	口縫隙~脚部にかけて縫隙毛目の中筋前毛山
208	甕?	27号住	28.9	青	青	明黄焼(10YR7/6)~ 青(5YR6/8) 明黄焼(10YR6/6)~ 明黄焼(2.5YR5/6)	II縫隙片	外面に刷毛目
209	高环	28号住		青	良	明黄焼(2.5YR8/6) 明黄焼(10YR8/4)	脚部上半2/ 3	内面にシボリ模
210	高环	28号住		青	青	浅黄(2.5Y7/4) にじい黄(10YR7/4)	脚部上半	内面にシボリ模?
211	高环	28号住		青	青	青(7.5YR7/6) 灰(7.5YR7/8)	脚部上半	
212	短颈甕	28号住	8.7 4.7 6.0	青	良	灰(2.5Y6/1) 灰オリーブ(5Y6/2)	ほぼ完形	底部へラ切りのちヘラケズリ 他同版ナダ

表11 出土遺物（土器）観察表(9)

番号	器種	出土状況	法 量		粘土 成	色	調	遺 存	備 考
			口径	底径					
213	有台盤	28号住	12.9		善	良	灰黄(2.5Y7/2) 灰白(5Y7/1)	底部1/2	底部へラケズリのちナデ 他回転ナデ 内面底部に静止指痕調整
214	壺?	28号住	8.9		善	良	によい黄褐(10YR5/3) 明黄褐(10YR7/6)	底部	
215	此類壺	29号住			善	良	褐(7.5YR6/8) 褐(7.5YR6/6)	II縫1/2	内面板ナデ 外面ナデ
216	バレス壺	29号住	17.4		善	普	浅黄(2.5Y7/4) 浅黄(2.5Y9/3)	II縫1/6	口縫部に4条の擬凹線
217	高环	30号住			善	普	浅黄褐(10YR7/6) によい黄褐(10YR7/4)	脚部上半	脚部内面に斜方向の刷毛目 他ナデ
218	高环	30号住			善	良	オーリーブ褐(5Y3/1) 灰白(5Y8/1)	脚部上半	脚部内面に粘土補充 脚部内面に シボリ痕 瓶部内面へラ押さえ 他ナデ
219	白瓷系陶器 碗	30号住	7.8		善	良	灰白(2.5Y8/2) 灰黄(2.5Y8/3)	底部1/5	瓶部系切り 内外面とも回転ナデ
220	S字状口縫 台付壺	31号住			善	普	によい黄褐(10YR4/4) によい黄褐(10YR7/4)	脚台部1/6	脚部内面に粘土補充 外面に刷毛目
221	広口壺	33号住	18.4		善	不 良	褐(2.5YR6/6) 褐(2.5YR6/8)	口縫1/10	口縫部に擬凹線?
222	甕	33号住	6.8		善	不良	明赤褐(2.5YR5/8) によい赤褐(5YR5/4)	底部2/3	底部に布目痕 脚部下半に条痕 約1~2mmの織を含む
223	台付甕	33号住	9.4		善	不 良	明赤褐(2.5YR5/8)	脚台部1/3	内外面ともナデ 約1mmぐらいの織を多量に含む
224	甕	33号住	17.6		善	不 良	によい褐(7.5YR5/4) 褐(7.5YR6/6)	口縫~脚部 1/8	内外面に刷毛目 約1~3mmの織を含む
225	高环	33号住			善	良	浅黄褐(10YR8/4) 明黄褐(10YR6/6)	脚部上半	
226	甕	34号住			善	不 良	明褐(7.5YR5/6) によい褐(7.5YR5/4)	底部1/3	底部に木葉痕有
227	环蓋	34号住	9.6	3.1	善	良	灰白(10YR7/1) 灰白(5Y8/1)	完形	天井部1/3へラ切り 天井部内面にヘラ工具痕
228	甕	34号住	17.6		善	普	浅黄褐(10YR8/4) によい黄褐(10YR7/4)	II縫1/8	
229	甕	34号住	8.5		善	良	褐(5YR7/6) によい褐(7.5YR5/4)	口縫~脚部 織片	口縫部内面に横刷毛目 II縫部~脚 部に縱刷毛目 内面に葉痕有 約1~3mmの織を多 量に含む
230	环蓋	35号住	12.2	3.0	善	良	灰白(5Y7/1) 灰白(2.5Y7/1)	完形	天井部1/3へラ切り 他回転ナデ
231	环身	35号住			善	良	灰白(5Y8/1) 灰白(2.5Y8/1)	II縫1/8	全て回転ナデ
232	环身	35号住			善	良	浅黄(2.5Y8/3) 灰白(2.5Y8/2)	口縫1/8	全て回転ナデ
233	高环	35号住	11.2		善	良	灰白(5Y7/2) 灰(5Y6/1)	坏部1/3	坏底部へラケズリ 他回転ナデ
234	四耳甕	35号住	8.2		善	不 良	によい黄褐(10YR7/4) 良 淡黄(2.5Y7/4)	底部1/2	底部へラ切りのち指痕圧痕 他回転ナデ
235	平底?	35号住			善	良	灰白(10YR7/1) 淡黄(2.5Y7/3)	底部1/2	全て回転ナデ 細刷毛の可能性有
236	S字状口縫 台付甕	35号住			善	良	によい黄褐(10YR5/3) によい黄褐(10YR4/3)	口縫1/8	口縫部回転ナデ 脚部上半に刷毛目
237	甕?	35号住	12.4		善	不 良	褐(5YR6/6) 良 淡黄(5YR7/6)	口縫1/4	
238	蓋台?	35号住	10.4		善	不 良	褐(5YR7/8)	受蓋1/2	約1mmぐらいの織を含む
239	环蓋	37号住	11.0	3.2	善	善	灰白(5Y7/1)	ほぼ完形	天井部1/2へラ切り 他回転ナデ

表12 出土遗物（土器）观察表(10)

番号	器種	出土状況	法 量	動土 径(往 來) 器高	性 別	色	調 査	存	備考	
									底部	内面
240	白瓷系陶器 瓶	37号住	15.0	6.6	5.9	青 良	灰黄(2.5Y6/2) 灰白(5Y6/2)	完形	底部に系切り・板目	他回転ナデ 貼付高台に難板 内面底部に静止指標調整
241	白瓷系陶器 瓶	1号壁 穴	8.4	4.7	2.1	青 良	灰白(5Y7/1) 灰白(5Y7/2)	2/3	底部系切り	他回転ナデ 口縁部内面に自然降灰
242	白瓷系陶器 瓶	1号壁 穴	8.7	4.8	1.9	青 良	灰白(5Y7/2) 灰白(5Y7/1)	ほぼ完形	底部系切り	他回転ナデ 内面底部に静止指標調整
243	白瓷系陶器 瓶	1号建 物		7.9		青 良	淡黄(2.5Y8/3) 灰白(2.5Y8/2)	底部1/4	底部に系切り	他回転ナデ 貼付高台に難板 内面に自然降灰
244	白瓷系陶器 瓶	1号建 物		7.0		青 良	灰白(2.5Y8/2) 淡黄(2.5Y8/3)	底部	底部に系切り・板目	貼付高台に難板
245	白瓷系陶器 瓶	1号建 物		6.5		青 良	灰白(5Y8/1)	底部1/3	底部に系切り・板目	貼付高台に難板 内面自然降灰
246	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	15.4	6.6	5.1	青 良	灰白(2.5Y8/2) 灰白(2.5Y8/1)	1/3	底部系切り	板目 他回転ナデ 貼付高台に難板
247	白瓷系陶器 瓶	1号建 物		6.4		青 良	灰白(5Y8/1) 灰白(5Y8/2)	1/4	底部系切り	板目
248	白瓷系陶器 瓶	1号建 物		5.8		青 良	灰白(5Y8/2) 灰白(5Y8/1)	底部1/3	底部系切り	板目 他回転ナデ 貼付高台に難板 内面自然降灰
249	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	14.1	5.2	5.5	青 良	灰白(5Y8/1) 灰白(7.5Y7/1)	1/5	底部系切り	板目 他回転ナデ 貼付高台に難板 内面自然降灰
250	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	13.5	4.7	5.7	青 良	灰白(5Y8/1) 灰白(2.5Y8/1)	1/3	底部不明	他回転ナデ 貼付高台に難板 内面底部に静止指標調整及び難板
251	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	12.8	5.7	4.7	青 良	灰白(5Y8/1) 灰白(5Y8/2)	1/5	底部系切り	板目 他回転ナデ 貼付高台に難板 内面自然降灰
252	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	9.3	5.3	2.7	青 良	淡黄(2.5Y7/3) 灰白(2.5Y7/2)	1/3	底部系切り	他回転ナデ 貼付高台 に難板 内面底部に静止指標調整及び難板
253	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	9.4	4.3	2.7	青 良	淡黄(2.5Y7/2) 灰白(5Y7/2)	1/2	底部系切り	貼付高台に難板 内面自然降灰
254	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	9.1	4.2	2.4	青 良	淡黄(2.5Y7/3) 灰白(2.5Y7/2)	完形	底部系切り	他回転ナデ 11線高 内面自然降灰 底部内面に静止指標調整
255	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	8.2	4.3	2.7	青 良	灰白(7.5Y7/1) 灰白(7.5Y7/1)	2/3	底部系切り	他回転ナデ
256	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	7.8	3.8	2.5	青 良	灰白(7.5Y7/1) 灰白(7.5Y7/1)	1/4	底部系切り	他回転ナデ
257	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	7.9	3.6	2.2	青 良	淡黄(2.5Y8/3) 灰白(10Y6/2)	ほぼ完形	底部系切り	内面底部に静止指標調整?
258	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	8.2	4.0	2.2	青 良	灰白(5Y8/1) 灰白(5Y8/2)	1/4	底部系切り	他回転ナデ 口縁・側面外縁に自然降灰
259	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	8.4	4.5	2.2	青 良	灰白(5Y8/1)	1/3	底部系切り	他回転ナデ
260	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	7.5	3.4	1.8	青 良	灰白(5Y8/1) 灰白(5Y8/2)	1/2	底部系切り・板目	他回転ナデ 内面に自然降灰 内面底部に静止指標調整
261	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	8.5	3.6	1.8	青 良	灰白(5Y8/2) 灰白(7.5Y7/1)	1/3	底部系切り	他回転ナデ
262	白瓷系陶器 瓶	1号建 物				青 良	灰白(10.5Y8/2) 灰白(5Y8/1)	1/2	底部系切り	他回転ナデ 内面底部に静止指標調整
263	白瓷系陶器 瓶	1号建 物	8.3	4.6	1.9	青 良	灰白(10Y7/1) 灰白(5Y8/3)	2/3	底部系切り	他回転ナデ 内面底部に静止指標調整
264	瓶	1号建 物	25.5			青 良	灰白(2.5Y6/2) 灰白(2.5Y5/1)	口縁1/2	底部系	
265	瓶	1号建 物		12.7		青 良	灰白(2.5Y7/2) 灰白(2.5Y7/3)	底部1/6	南部系	制御下半へラグゼリ
266	白瓷系陶器 瓶	1号上 城		7.8		青 良	灰白(2.5Y7/2) 灰白(2.5Y7/3) に青白(10Y5/3)	底部1/3	底部系切り	他回転ナデ

表13 出土遺物(土器) 簡表表01

番号	器種	出土状況	法 量		耐土 性	焼成 色	調 査	道 有	備 考
			口径	底径					
267	白堊系陶器 碗	1号土坑	7.2	7.2	密	良	浅黄(2.5Y7/3) 灰黄(2.5Y7/4)	底部3/4	底部に系切り・板目 他回転ナデ 貼付高台に粗痕
268	高环	2号土坑			普	良	明黄褐(10YR7/6)	脚部上半	
269	白堊系陶器 碗	5号溝	7.4		密	良	浅黄(2.5Y7/3) 灰黄(2.5Y7/3)	底部1/5	底部に系切り 他回転ナデ 貼付高台に粗痕
270	白堊系陶器 碗	5号溝	6.4		密	良	浅黄(2.5Y8/4)	底部1/4	底部に系切り 他回転ナデ 貼付高台に粗痕
271	白堊系陶器 碗	5号溝	6.8		密	良	灰オリーブ(5Y6/2) 灰白(5Y7/2)	底部1/5	底部に系切り 他回転ナデ 貼付高台に粗痕
272	白堊系陶器 碗	5号溝	5.8		密	良	浅黄(2.5Y7/3) 灰黄(2.5Y7/3)	底部1/3	底部に系切り 他回転ナデ 貼付高 台に粗痕 内面に自然陥灰
273	白堊系陶器 碗	5号溝	7.0		密	良	灰(2.5Y7/3) 灰黄(2.5Y7/2)	底部	底部に系切り・板目 他回転ナデ 貼付高台に粗痕 内面に自然陥灰
274	白堊系陶器 盤	5号溝	4.2		密	良	灰黄(2.5Y7/2)	底部細片	底部に系切り・板目 他回転ナデ 貼付高台に粗痕 内面に自然陥灰
317	盤	C10II a			普	普	にほい黄(10YR6/3) にほい橙(7.5YR7/4)	口縁細片	突唇あり 他ナデ 約1mm前後の白色粒を含む
318	盤	B12II a			普	普	にほい黄(10YR7/4) 浅黄(10YR8/4)	脚部細片	平行撫拭文と波状文を交互に運らす
319	広口壺	B1 II b	18.2		密	良	にほい黄(10YR6/4)	II層1/8	口縁部に5条の鋸刃線 口縁部はナ デ 頂部に板刷毛目 他ナデ
320	壺	A16II a	10.9		普	普	明黄褐(10YR7/6) 黄(10YR6/6)	底部2/3	
321	高环	B11II a			密	良	黄(7.5YR8/8) 黄(7.5YR7/8)	脚部	内外面ともナデ 3万透孔
322	高环	B12II a			密	良	にほい黄(10YR7/4)	脚部	内外面ともナデ 3万透孔
323	高环	B1 II a			密	良	にほい黄(10YR6/4) にほい黄(7.5YR6/4)	脚部上半	内外面ともナデ 4万透孔
324	高环	C12II a			密	普	明黄褐(10YR6/6) 橙(5YR6/6)	脚部1/2	内外面ともナデ
325	鉢	B8· 9II a	16.5	11.7	密	良	にほい黄(10YR7/3) 浅黄(10YR8/3)	ほぼ完形	脚部内面に指頭压痕 脚部~底部に擦痕
326	小型丸底壺	A3 II a		3.5	密	普	明黄(10YR7/6) 橙(7.5YR7/6)	脚部1/2 底部	外面はナデ 脚部内面にユビナデ痕
327	高环	D4 II a			密	普	浅黄(2.5Y7/4) 浅黄(2.5Y8/4)	脚部1/3	前面上部に削押し痕 そのすぐ下貼付痕
328	高环	A5 II a			密	普	橙(5YR6/6) 橙(7.5YR7/6)	脚部上半	外面はナデ 内面にシボリ痕
329	高环	A3 II a			密	普	橙(7.5YR6/6)	脚部上半	内外面ともナデ
330	甕	A15II a	13.0		普	普	にほい黄(10YR7/3) 浅黄(10YR7/4)	口縁~脚部 上半1/5	脚部に刷毛目 脚部内面ナデ
331	甕	A15II a	21.4		密	良	にほい黄(10YR7/3) 浅黄(10YR7/4)	II層~脚部 上半1/6	
332	甕	A14II a	13.0		密	普	橙(7.5YR7/6) にほい橙(7.5YR7/4)	II層~脚部 上半1/4	内外面ともナデ
333	つまみ付壺	D14II b			密	良	灰黄(2.5Y6/2)	1/5	天井部に回転ヘラケズリ
334	有台壺	?			密	良	灰(1.5Y7/1)	脚部	全てヘラケズリ
335	羊形埴	?			密	良	灰(1.5Y7/1)	脚部	全脚立掌なナデ 日・口・頬面の張 毛はヘラ工具による刺突によって 表現される 頂部に自然陥灰

表14 出土遺物(土器)観察表(2)

番号	器種	出土状況	法量	粘土	焼成	色	調	重存	備考		
									口径	底径	
336	环身	A16II a	13.2		密	良	灰白(2.5Y7/1)	口縁~全体 1/5	内外面とも回転ナデ		
337	环蓋	A16II a	10.8		密	良	にじい黄緑(10YR7/2) にじい黄緑(10YR7/4)	1/3	天井部1/2ヘラケズリ 他回転ナデ		
338	有台环	A 2 II a	12.0	8.4	3.6	密	良	灰黄(2.5Y7/2) 浅黄(2.5Y7/3)	1/4	底部ヘラケズリ 他回転ナデ	
339	有台环	A12II a	10.5		密	良	灰黄(2.5Y7/2) 灰白(5Y7/1)	底部1/2	底部ヘラケズリ 他回転ナデ		
340	有台环	A12II a	10.1		密	良	灰黄(2.5Y7/2) 灰白(2.5Y7/1)	底部1/2	底部ヘラケズリ 他回転ナデ		
341	有台盤	A12II a	13.7		密	良	灰白(5YR7/1) 灰白(5YR7/2)	底部1/4	底部ヘラケズリ 他回転ナデ		
342	甕	D10II a	20. 25		密	良	灰白(5YR7/2) 灰白(5YR7/1)	口縁~内部 上半1/4	内外面とも回転ナデ		
343	甕	D 7 II a	9.5		密	良	灰白(10YR7/1) 灰黄(2.5Y6/1)	口縁~颈部 1/4	颈部内面に當て具輪 他回転ナデ		
344	長頸瓶?	Aトレ	13.3		密	良	灰オリーブ(5Y6/2) 灰黄(2.5Y6/2)	口縁~颈部 1/8	内外面とも回転ナデ		
345	長頸甕	B 2 II b	7.45		密	良	灰白(5Y7/2) 灰白(5Y6/1)	口縁~颈部	内外面とも回転ナデ		
346	手捏ね	C 6 II a	4.8	3.8	密	良	海(10YR4/4) にじい褐(7.5YR5/4)	ほぼ完形	底部内面に海頭压痕 他ナデ		
347	白瓷系陶器 碗	D 9 II a	15.9	6.9	6.1	普	良	灰白(2.5Y6/2) 浅黄(2.5Y6/4)	1/3	底部に糸切り、他回転ナデ 貼付高台に粗筋 口縁~内面に自然降灰 内面底部に静止指輪調整	
348	白瓷系陶器 碗	C10II a	15.1	8.1	5.7	密	良	灰白(2.5Y8/2) 灰白(2.5Y8/3)	2/3	底部に糸切りのちへラナデ 他回転ナデ 貼付高台に粗筋 口縁~内面 に自然降灰	
349	白瓷系陶器 碗	C11II a	15.4	7.0	5.2	密	良	灰黄(2.5Y7/2) 灰白(5Y7/1)	完形	底部に糸切り、他回転ナデ 貼付高台 に粗筋 口縁~内面に自然降灰 内面底部に重ね引き抜	
350	白瓷系陶器 碗	B10II a	14.6	5.8	5.5	密	良	浅黄(2.5Y7/3) 灰白(2.5Y7/1)	2/3	底部に糸切り、他回転ナデ 貼付高台 に粗筋 内面に自然降灰	
351	白瓷系陶器 碗	B10II a	15.8	7.1	5.7	密	普	灰黄(2.5Y6/3) 灰黄(2.5Y7/2)	1/6	底部に糸切り、他回転ナデ 貼付高台 に粗筋 内面底部に静止指輪調整	
352	白瓷系陶器 碗	B11II a	14.9	4.7	5.7	密	良	灰白(7.5Y7/1) 灰白(7.5Y7/2)	2/5	底部に糸切り、板目、他回転ナデ 貼付高台に粗筋 内面に自然降灰 内面底部に静止指輪調整	
353	白瓷系陶器 碗	表掲1	16.2	8.0	6.2	密	良	灰白(7.5Y7/1) 灰白(7.5Y7/2)	1/3	底部に糸切り、他回転ナデ 貼付高台 に粗筋 口縁~内面に自然降灰	
354	白瓷系陶器 碗	B10II a	15.7	7.2	5.4	密	良	灰白(5Y7/1) 灰白(5Y7/2)	1/3	底部に糸切り、板目、他回転ナデ 貼付高台に粗筋 内面に自然降灰 内面底部に静止指輪調整	
355	白瓷系陶器 碗	B 6 II a	14.0	5.4	5.9	密	良	灰白(10YR8/1) 灰白(10YR8/2)	2/3	底部に糸切り、板目、他回転ナデ 貼付高台に粗筋 内面に自然降灰 内面底部に静止指輪調整	
356	白瓷系陶器 碗	A 4 II a	14.2	5.3	6.1	密	良	灰黄(2.5Y7/2) 灰白(2.5Y7/1)	1/3	底部に糸切り、板目、他回転ナデ 貼付高台に粗筋 内面に自然降灰 内面底部に静止指輪調整	
357	白瓷系陶器 碗	B10II a	14.6	5.5	6.0	密	良	灰白(7.5Y8/1) 灰白(7.5Y7/1)	1/2	底部に糸切り、他回転ナデ 貼付高台 に粗筋 口縁~内面に自然降灰 内面底部に粗筋?	
358	白瓷系陶器 碗	R10II a	13.3	5.8	5.1	密	良	灰白(2.5Y8/2) 灰白(5Y8/1)	1/5	底部に糸切り、板目、他回転ナデ 貼付高台に粗筋 内面に自然降灰 内面底部に静止指輪調整	
359	白瓷系陶器 瓶	C11II b	8.7	4.8	2.8	密	良	浅白(2.5Y7/3) 灰白(2.5Y8/2)	ほぼ完形	底部に糸切り、他回転ナデ 貼付高台 に粗筋 口縁~内面に自然降灰 内面底部に重ね引き抜	
360	白瓷系陶器 瓶	C11II a	9.6	5.5	2.9	密	良	灰白(5Y8/2) 灰白(7.5Y7/1)	1/3	底部に糸切り、板目、他回転ナデ 貼付高台に粗筋 内面に自然降灰	
361	白瓷系陶器 瓶	D 7 II a	8.8	4.8	2.5	普	普	灰白(5Y7/1) 灰白(5Y7/2)	1/2	底部に糸切り、他回転ナデ 貼付高台に粗筋 内面に自然降灰 内面底部にロクロの褐色斑紋	
362	白瓷系陶器 瓶	C11II b	9.3	4.7	2.8	密	良	灰白(5Y8/2) 灰白(5Y7/2)	ほぼ完形	底部に糸切り、他回転ナデ 貼付高台 に粗筋 内面に自然降灰	

表15 出土遺物（土器）観察表(3)

番号	器種	出土状況	底			地	色	調	通存	備考
			口径	底径	高さ					
363	白瓷系陶器 皿	C 6 II a	8.6	4.0	2.8	密	良	灰黄(2.5Y6/2) 灰黄(2.5Y7/2)	1/2	底部に板目 他回転ナダ 粘付高台 に難脱 内面に自然降灰 内面底部 に静止指施調整
364	白瓷系陶器 皿	C 11 II b	9.2	4.7	2.9	密	善	浅黄(2.5Y7/4) 灰黄(2.5Y7/2)	3/4	底部に糸切り 板目 他回転ナダ 粘付高台わずかに残る 内面に自然 降灰 内面底部に静止指施調整
365	白瓷系陶器 皿	B 10 II a	8.7	4.5	2.8	密	良	浅黄(2.5Y7/3) 灰白(5Y7/2)	ほぼ完形	底部に糸切り 他回転ナダ 粘付高 台に難脱 内面に自然降灰
366	白瓷系陶器 皿	C 11 II b	9.6	5.3	2.9	善	善	浅黄(2.5Y8/4) 浅黄(2.5Y8/3)	完形	底部に糸切り 他回転ナダ 粘付高 台に難脱 内面に自然降灰
367	白瓷系陶器 皿	A トレ	8.4	4.4	2.5	密	良	灰(7.5Y8/2) 灰白(10YR8/2)	ほぼ完形	底部に糸切り 他回転ナダ 粘付高 台に難脱 口縁へ内面に自然降灰 内面底部に静止指施調整
368	白瓷系陶器 皿	C 11 II a	9.1	4.3	2.5	密	良	浅黄(2.5Y7/3) 灰黄(2.5Y7/2)	1/3	底部に糸切り 他回転ナダ 内面に自然降灰
369	白瓷系陶器 皿	C 11 II b	9.3	4.3	3.0	密	良	灰(5Y6/1) 灰オリーブ(5Y6/2)	1/2	全て回転ナダ? 口縁へ内面に自然降灰
370	白瓷系陶器 皿	D 4 II a	8.9	4.5	2.2	善	善	灰黄(2.5Y7/2) 灰(5Y6/1)	3/4	底部に糸切り 板目 他回転ナダ 粘付高台に難脱 内面に自然降灰 内面底部に静止指施調整
371	白瓷系陶器 皿	B 10 II a	8.8	4.2	2.6	善	善	灰白(5Y7/1)	1/2	底部に糸切り 他回転ナダ 内面に自然降灰
372	白瓷系陶器 皿	C 11 II b	8.9	4.7	3.0	密	良	浅黄(10YR8/3) 灰白(2.5Y8/2)	2/3	底部に糸切り 他回転ナダ 内面に自然降灰
373	白瓷系陶器 皿	B 9 II a	8.9	4.8	3.4	密	良	灰白(2.5Y8/2) 灰黄(2.5Y7/2)	ほぼ完形	底部に糸切り 他回転ナダ 粘付高 台に難脱 内面に自然降灰 内面底 部に重ね焼き痕
374	白瓷系陶器 皿	C 11 II b	8.2	4.7	2.6	密	善	浅黄(10YR8/3) 浅黄(10YR8/4)	完形	底部に糸切り 他回転ナダ 内面に自然降灰
375	白瓷系陶器 皿	D 4 II a	8.2	4.7	2.5	密	良	灰白(10Y7/1) 灰白(10Y7/2)	1/5	底部に糸切り 他回転ナダ 内面に 自然降灰 内面底部に重ね焼き痕
376	白瓷系陶器 皿	D 4 II a	8.5	5.0	2.6	密	良	灰黄(2.5Y7/2) 灰白(5Y7/1)	1/2	底部に糸切り 他回転ナダ 内面に 自然降灰 内面底部に静止指施調整
377	白瓷系陶器 皿	D 4 II a	7.8	4.0	2.5	密	良	灰白(5Y7/1) 灰白(2.5Y7/1)	1/3	底部に糸切り 板目 他回転ナダ 内面に自然降灰 内面底部に静止指 施調整
378	白瓷系陶器 皿	B 10 II a	7.5	3.1	2.4	善	良	浅黄(2.5Y8/3) によい黄(10YR7/4)	1/3	底部に糸切り 他回転ナダ 口縁に 自然降灰 内面底部に静止指施調整
379	白瓷系陶器 皿	B 10 II a	7.8	4.1	2.0	密	良	灰白(2.5Y8/2) 灰白(5Y8/1)	完形	底部に糸切り 板目 他回転ナダ 内面に自然降灰 内面底部に静止指 施調整
380	白瓷系陶器 皿	B 10 II a	8.5	4.4	2.0	密	良	灰白(5Y7/1) 灰白(2.5Y7/1)	1/2	底部に糸切り 他回転ナダ 内面底 部に静止指施調整
381	白瓷系陶器 皿	B 10 II a	8.6	4.6	2.0	密	良	浅黄(2.5Y8/3) 灰黄(2.5Y6/2)	完形	底部に糸切り 他回転ナダ 内面に わずかに自然降灰 内面底部に静止 指施調整
382	白瓷系陶器 皿	B 11 II a	8.5	4.1	2.2	密	良	灰黄(2.5Y7/2) 灰黄(2.5Y6/2)	完形	底部に糸切り 板目 他回転ナダ 内面 に自然降灰 内面底部に静止指 施調整
383	白瓷系陶器 皿	B 11 II a	7.9	4.9	2.0	密	良	灰黄(2.5Y8/3) 灰黄(2.5Y8/4)	1/2	底部に糸切り 他回転ナダ 内面に 自然降灰 内面底部に静止指施調整
384	白瓷系陶器 皿	B 10 II a	8.1	4.3	2.2	密	良	浅黄(10YR8/4) 灰白(10YR8/2)	1/3	底部に糸切り 板目 他回転ナダ 内面底部に静止指施調整
385	白瓷系陶器 皿	B 10 II a	8.45	4.2	2.0	密	良	灰白(2.5Y8/2)	1/2	底部に糸切り 他回転ナダ 内面底 部に静止指施調整
386	白瓷系陶器 皿	B 11 II a	7.8	4.0	2.0	密	良	灰白(5Y8/2)	2/5	底部に糸切り 他回転ナダ
387	白瓷系陶器 皿	B 11 II a	8.7	3.8	1.9	密	良	灰白(7.5Y8/1)	1/2	底部に糸切り 板目 他回転ナダ
388	白瓷系陶器 皿	B 10 II a	8.9	4.3	1.9	密	良	灰白(7.5Y8/1) 灰白(7.5Y7/1)	1/2	底部に糸切り 他回転ナダ 内面に 自然降灰
389	白瓷系陶器 皿	D 7 II a	8.1	3.8	2.0	密	良	灰白(5Y8/1)	完形	底部に糸切り 他回転ナダ 内面に 自然降灰 内面底部に静止指施調整

表16 出土遺物(土器)観察表⑥

番号	器種	出土状況	法 量	質	形状	色	調	直 存	備 考
390	白堊系陶器 皿	D7II a	8.6	4.6	1.9	善	灰白(SV7/1) 灰白(SV8/1)	1/3	底部に糸切り 横回転ナデ 口縁に自然隕灰 内面底部にロクロの渦巻状模様
391	白堊系陶器 皿	B10II a	8.2	3.6	1.6	善 良	灰白(SV8/1)	2/3	底部に糸切り 横回転ナデ 内面に自然隕灰 内面底部にロクロの渦巻状模様
392	白堊系陶器 皿	C11II b	8.9	4.4	2.4	善 良	灰青(2.5Y7/2) 灰白(2.5Y7/1)	ほぼ丸形	南部系 底部に糸切り 横回転ナデ 内面に自然隕灰 内面底部に重ね焼き
393	白堊系陶器 皿	B11II a	8.0	4.0	1.9	善 良	灰青(2.5Y7/1) 灰青(2.5Y7/2)	完形	南部系 底部に糸切り 横回転ナデ 口縁に自然隕灰 内面底部に静止指痕調整
398	甕	谷状地 形	6.0			善	浅黄褐(10YR8/4) に、深い黄褐(10YR7/2)	底部	外面に斜角の条痕 内面に斜角の条痕
399	甕	谷状地 形	7.4			善 良	灰褐(7.5YR4/2)	底部 1/3	外面に縦位の条痕
400	甕?	谷状地 形				善 善	褐(7.5YR4/4)	口縁細片	口部に刺突窓 外面に波状文
401	甕	谷状地 形				善 善	に、深い黄褐(10YR6/4) に、深い黄褐(10YR5/4)	脚部細片	外面に平行構造文と列点文
402	甕	谷状地 形	24.5			善 良	黄褐(10YR8/6) に、深い黄褐(10YR7/4)	11縫~脚部 上半 1/5	11縫部にヘラによる押圧 脚部中央に軽上のつづり痕 横回転ナデ
403	甕	谷状地 形	17.6			善 骨	浅黄褐(10YR8/4) に、深い黄褐(10YR7/3)	口縁~瓶部 1/6	瓶部に5条の沈痕と列点文 横回転ナデ
404	甕	谷状地 形	14.3			善 良	に、深い黄褐(10YR5/3) 灰黄褐(10YR4/2)	11縫~瓶部 1/6 等	瓶部にヘラによる押圧と深附着 内面に粘土のつづり痕 横回転ナデ
405	甕	谷状地 形	14.4			善 良	に、深い黄褐(10YR7/4) 浅黄褐(10YR8/4)	口縁部	口縁部に3条の沈痕 横回転ナデ
406	甕	谷状地 形	17.0			善 骨	灰黄褐(10YR4/2) オーリーブ褐(2.5Y4/3)	口縁~瓶部 1/3 等	脚部に削毛目 危ナデ 外側にこぼれにより附着
407	甕	谷状地 形	5.8			善 骨	椎(5YR6/6) 椎(7.5YR7/6)	底部	底部ヘラ切り 外側にミガキ 内面にヘラ跡えん
408	甕	谷状地 形	4.2			善 善	に、深い黄褐(10YR7/4) 椎(7.5YR7/6)	底部	内面に削毛目 危ナデ
409	甕	谷状地 形	20.4			善 骨	黄褐(10YR7/8)	口縁細片	瓶部に貼付凸部
410	台付甕	谷状地 形	8.9			善 良	に、深い黄褐(7.5YR5/3) 椎(7.5YR7/6)	脚台部	脚台部頭頂に沿压痕 内外面にヘラによる押圧
411	台付甕	谷状地 形	8.6			善 骨	明黄褐(10YR7/6) 浅黄褐(10YR8/3)	脚台部	内外面ともナデ
412	台付甕	谷状地 形	8.2			善 良	椎(7.5YR7/6) 黄褐(7.5YR7/8)	脚台部	内面 1/3 板ナデ 危ナデ
413	台付甕	谷状地 形	6.9			善 骨	椎(7.5YR7/6) 小椎(10R6/6)	脚台部	内外面ともナデ
414	器台	谷状地 形				善 良	椎(7.5YR7/6)	受部~脚部	内外面ともナデ 3方通孔
415	高坏	谷状地 形				善 良	浅黄褐(10YR8/3) 椎(7.5YR7/6)	脚部 1/2	内外面ともナデ 3方通孔
416	高坏	谷状地 形				善 良	灰黄褐(10YR4/2)	脚部上半	外側にミガキ 内面にシカリ痕 3方通孔
417	鉢?	谷状地 形	3.3			善 骨	椎(5YR6/8) 黄褐(7.5YR7/8)	底部	内外面ともナデ
418	鉢	谷状地 形	16.9			善 骨	浅黄褐(10YR8/4) に、深い黄褐(10YR5/3)	口縁~脚部 上半 1/4	11縫部に報四線? 局部に沈痕及び 刺突窓 横回転ナデ 脚部に媒附着
419	S字状口縁 台付甕	谷状地 形	19.4			善 骨	に、深い黄褐(10YR6/4) 椎(7.5YR8/6)	接合部	脚台部外側に削毛目 内面にユビによる押圧・ナデ
420	S字状口縁 台付甕	谷状地 形				善 善			

表17 出土遺物（土器）観察表⑤

番号	器種	出土状況	法		胎土	焼成	色	調	遺有	備考
			口径	底径						
421	高环	谷状地 形			青	普	明赤褐(5YR5/8) 褐(7.5YR6/6)		环底部	环部に刷毛目
422	高环	谷状地 形			青	密	褐(2.5YR6/6)		环底部	内外面ともナデ
423	高环	谷状地 形			青	良	にふい・黄褐(10YR6/4)	脚部上半	脚接合部に1条の沈線 内面にシボリ痕	
424	高环	谷状地 形			青	良	にふい・黄褐(10YR5/3)	脚部上半	内面に擬柱のナデ	
425	高环	谷状地 形			青	良	赤褐(10R6/6) にふい・赤褐(10R6/3)	脚部上半	内面に粘土のつぎ目痕 他ナデ	
426	高环	谷状地 形			青	良	明赤褐(2.5YR5/8)	脚部上半	外面上横位のナデ or 脚接合部にガキ 内面に粘土の貼付	
427	高环	谷状地 形			青	良	褐(2.5YR6/6)	脚部上半	脚接合部に刷毛目 脚部内面にヘラ後の工具のナデ	
428	高环	谷状地 形			青	良	にふい・黄褐(10YR5/3) にふい・黄褐(10YR5/4)	脚部上半	外面上横位のミガキ 他ナデ?	
429	甕	谷状地 形	24.9		青	良	褐(5YR7/8) 褐(10YR4/4)	口縁1/6	内外面に棒状工具等を用いた刺突・ 押圧による斜線跡が羽状に施されている 底部外面上に擬柱の刷毛目 楠 ケ坪型	
430	甕	谷状地 形	19.3		青	良	明黄褐(10YR7/6)	口縁1/2	内外面とも横ナデ 二重口縁状	
431	?	谷状地 形	5.4		青	良	にふい褐(7.5YR5/3) 褐(7.5YR6/6)	底部	底部へラ切りのちナデ 他ナデ	
432	甕	谷状地 形	10.2		青	不 良	明赤褐(5YR5/6)	口縁～脚部 上半1/5	脚部に条板? 脚部内面に街頭瓦灰 他ナデ	
433	高环	谷状地 形	12.4		青	良	灰(7.5Y5/1) 灰(7.5Y4/1)	底部1/3	環部に2条の沈線 内面とも回転ナデ	
436	?	谷状地 形	15.8	7.1	5.4	青	灰白(2.5Y7/1) 灰白(5Y7/1)	3/4	底部回転へラ切り 他回転ナデ 灰 質?	
434	甕	谷状地 形			青	良	灰黄(2.5Y7/2) 灰白(2.5Y7/1)	脚部1/3	脚部に2条の沈線 脚部下半に横位 の刷毛目 他回転ナデ 脚部1/2 に自然降灰	
435	甕	谷状地 形	12.5		青	良	灰白(5Y7/1) 灰(5Y5/1)	口縁～脚部	脚部に2条の沈線 脚部下半回転～ ラケツリ 他回転ナデ	
437	山茶楕	谷状地 形	16.5	9.2	4.5	青	灰白(10YR8/2)	1/4	底部に系切り 他回転ナデ 贼付高 台に模倣 口縁～内面にかけて自然降灰	
438	山里	谷状地 形	9.3	4.9	3.0	青	灰白(2.5Y8/2) 灰白(5Y8/1)	1/3	底部に系切り 他回転ナデ 贼付高台に模倣	
439	山里	谷状地 形	9.0	4.3	3.0	青	灰白(2.5Y8/2) 灰黄(2.5Y8/3)	1/2強	底部に系切り 他回転ナデ 贼付高台に模倣	
440	製塙土器	谷状地 形			青	青	にふい黄褐(10YR7/4)			

表18 造構出土石器計測表

No	出土区	石 材	大きさ(mm)			重量(g)	抉深基長	最大幅の位置	折損部位	分類	備 考
			長	幅	厚						
275	1号住	下呂石	36	18	6	2.6	5	脚部	先端、左脚	円基	
276	1号住	#	20	18	3	0.5	2	脚部		円基	アメリカ式
277	1号住	#	29	16	5	1.3	5	基部	先端		
278	1号住	#	41	13	5	2.1	6	基部		有茎	表裏中央部分磨り?
279	5号住	#	47	28	7	9.2	(3)	基部	茎部	有茎	
280	7号住	チャート	(16)(13)	2	0.2		5	脚部	先端、両脚	凹基	素材剥片の剥離面を残す
281	9号住	下呂石	12	13	4	0.7	6	脚部	左脚	円基	
282	12号住	#	17	14	2	0.3	4	脚部		凹基	
283	12号住	#	(14)	18	4	1.0	4	基部	上半	有茎	
284	12号住	#	(15)	15	3	1.1	(2)	基部	上半、茎部	有茎	素材剥片の剥離面を残す
285	12号住	#	20	12	3	0.6	4	基部		有茎	素材剥片の剥離面を残す
286	15号住	#	30	12	5	1.3	6	基部		有茎	
287	17号住	#	(16)	12	5	0.4	2	脚部	先端	凹基	

表19 造構出土削器計測表

No	出土区	石 材	大きさ(mm)			重量(g)	加工部位	備 考		
			長	幅	厚					
288	25号住	下呂石	27	41	8	8.1	末端部	初期剥片を素材、ノッチ状		

表20 造構出土機器計測表

No	出土区	石 材	大きさ (mm)			重量 (g)	加工部位	備 考
			長	幅	厚			
289	28号住	下呂石	59	33	8	16.9	左側縁	刃部は粗い数回の調整で作出

表21 造構出土両側削離痕のある刷片計測表

No	出土区	石 材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)
290	9号住	下呂石	34	20	11	7.5
291	10号住	#	33	33	9	9.6
292	16号住	#	25	15	9	3.2
293	20号住	#	34	21	9	6.1

表22 造構出土使用痕のある刷片計測表

No	出土区	石 材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	備 考
294	12号住	チャート	37	26	8	3.4	左側縁に使用痕が残る

表23 造構出土加工痕のある刷片計測表

No	出土区	石 材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	備 考
295	12号住	下呂石	22	27	7	4.4	右側縁に不連続・微細な調整痕有

表24 造構出土砥石計測表

No	出土区	石 材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	備 考
311	15号住	砂岩	65	117	19	425	裏面に敲打痕有
312	9号住	凝灰岩	47	59	14	59	

表25 造構出土直線刃石器計測表

No	出土区	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
313	1号住	ホルンフェルス	86	38	7	35	先端部を欠損し、節理面を残す

表26 造構出土石錐計測表

No	出土区	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
314	22号住	ホルンフェルス	109	50	15	103	上部を欠損する

表27 造構出土磨製石庖丁計測表

No	出土区	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
315	24号住	粘板岩	53	190	10	150	刃部及び穿孔部の磨耗が著しい

表28 造構出土有洞直線刃石器計測表

No	出土区	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
316	8号住	結晶片岩	137	187	22	571	刃部付近両面にコーングロス有

表29 包含層出土石鎌計測(1)

No	出土区	石 材	大きさ(mm)			重量(g)	抉深基長	最大幅の位置	折損部位	分類	備 考
			長	幅	厚						
442	B 7 II a	黒曜石	22	26	6	0.9	3	脚部		凹基	
443	E 3 II b	下呂石	23	(15)	4	1.0	2	脚部	右脚部	凹基	アメリカ式
444	E 7 II b	チャート	(14)	(12)	3	0.5	2	脚部	先端、脚部	凹基	
445	E 4 II b	チャート	(20)	15	4	0.9	5	脚部	先端	凹基	
446	C 8 II a	下呂石	(15)	14	2	0.3	5	脚部	先端	凹基	側縁が鋸歯状
447	D 8 II a	チャート	(12)	13	2	0.2	3	脚部	先端	凹基	

表30 包含層出土石鐵計測表(2)

No	出土区	石 材	大きさ(mm)			重量(g)	抉深基長	最大幅の位置	折損部位	分類	備 考
			長	幅	厚						
448	D 6 II a	下呂石	18	13	3	0.4	5	脚部		凹基	
449	B10II a	下呂石	25	(14)	5	1.0	3	脚部	左脚部	凹基	
450	C11II a	下呂石	16	(14)	5	1.2	3	脚部		凹基	
451	A15II a	チャート	19	(10)	4	0.6	2	脚部	左脚部	凹基	側縁が鋸歯状
452	C 8 II a	チャート	22	(14)	5	1.1	5	脚部	右脚部	凹基	
453	B 4 II a	下呂石	23	21	5	1.7	1	脚部		凹基	浅い凹状の抉りが入る
454	C10 谷状地形	下呂石	29	16	3	1.2	2	脚部		凹基	表裏中央部分に磨り?
455	A 6 II a	下呂石	23	19	5	2.0	-	基部		平基	基部鋼直線状
456	E 9 摆乱	チャート	25	26	6	3.7	-	基部	上半部	平基	素材剥片の剥離面を残す
457	B13II a	下呂石	28	11	6	1.6	8	基部		凸基II	
458	B13II a	下呂石	25	11	5	1.1	10	基部	先端	凸基II	
459	C10 谷状地形	下呂石	(23)	11	4	0.9	8	基部	先端		素材剥片の剥離面を残す
460	B12II a	下呂石	(34)	16	7	2.8	8	基部	先端	有茎	
461	A12II a	下呂石	(26)	15	7	1.6	7	基部	先端	有茎	
462	D7I	下呂石	27	11	4	0.9	4	基部		有茎	側縁が鋸歯状
463	B12II a	下呂石	(28)	18	6	2.6	2	基部	先端、茎部	有茎	素材剥片の剥離面を残す
464	B10II a	下呂石	29	14	6	1.8	7	基部		有茎	素材剥片の剥離面を残す
465	B11II a	下呂石	(22)	(12)	5	0.8	4	基部	先端、茎部	有茎	素材剥片の剥離面を残す
466	C11II a	下呂石	(25)	15	5	1.6	5	基部	先端	有茎	素材剥片の剥離面を残す
467	E 3 II b	下呂石	(30)	18	6	2.7	8	基部	先端	有茎	素材剥片の剥離面を残す
468	B11 谷状地形	下呂石	23	15	4	0.8	5	基部		有茎	側縁が鋸歯状
469	A12II a	下呂石	(26)	16	5	1.9	4	基部	先端、茎部	有茎	素材剥片の剥離面を残す

表31 包含層出土石錐計測表(3)

No	出土区	石 材	大きさ(mm)			重量(g)	抉深基長	最大幅の位置	折損部位	分類	備 考
			長	幅	厚						
470	B 2 II a	下呂石	18	14	5	0.8	5	基部		有茎	
471	C 9 II a	チャート	(15)	15	6	0.8	7	基部	上半部	有茎	
472	B 10 II a	下呂石	(19)	14	5	1.1	(2)	基部	先端、茎部	有茎	
473	B 2 II a	下呂石	(17)	(14)	4	0.9	(2)	基部	先端、茎部	有茎	
474	C 11 II a	下呂石	17	14	4	0.8	5	基部		有茎	
475	D 10 谷状地形	下呂石	(24)	13	5	1.7	6	基部	上半部	有茎	
476	D 10 谷状地形	下呂石	(44)	13	7	4.1	(2)	先端部	基部	有茎	
477	C 13 II a	下呂石	(25)	17	5	1.6	—	基部	下半部	有茎?	

表32 包含層出土石錐計測表

No	出土区	石 材	大きさ(mm)			重量(g)	尖頭部(mm)				備 考
			長	幅	厚		長	幅	厚	断面	
478	C 13 II a	下呂石	(29)	10	5	1.5	14	5	4	菱形	尖頭部を欠損する
479	C 10 谷状地形	チャート	29	10	4	1.2	(10)	6	3	菱形	横長削片を素材とする

表33 包含層出土磨製石錐計測表

No	出土区	石 材	大きさ(mm)			重量(g)	抉深基長	最大幅の位置	折損部位	備 考
			長	幅	厚					
480	A 10 II a	粘板岩	50	18	3	3.4	—	先端部	基部の一部	
481	E 4 II a	流紋岩	35	21	4	2.8	—	基部		基部に穿孔、凹形の 抉

表34 包含層出土ヘラ形石器計測表

No	出土区	石 材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備 考
484	A12II a	チャート	34	16	9	4.8	右、左側縁は切断面で形成

表35 包含層出土石鋤計測表

No	出土区	石 材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備 考
497	B11II a	ホルンフェルス	100	47	15	101	

表36 包含層出土直線刃石器計測表

No	出土区	石 材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備 考
498	D10 谷状地形	ホルンフェルス	37	78	11	48	先端部を欠損する
499	D10 谷状地形	ホルンフェルス	51	82	20	105	先端部を欠損する
500	B9 II a	ホルンフェルス	55	78	9	47	先端部を欠損する
501	C9 II a	ホルンフェルス	40	73	10	44	先端部を欠損する
502	C14II a	ホルンフェルス	43	108	13	96	基部を欠損

表37 包含層出土勾玉計測表

No	出土区	石 材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備 考
503	C7 II a	硬玉	39	23	9	9.4	T字頭勾玉

表38 包含層出土紡錘車計測表

No	出土区	石 材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備 考
504	C7 II a	結晶片岩	36	38	11	27	一部欠損

表39 遺構・包含層出土鉄製品計測表

No	出土区	石 材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備 考
17	2号住	刀子	60	13	3	8.4	関部、茎の一部残
124	13号住	釘	73	6	7	13.9	
394	A13II a	鍛冶具	40	25	9	20.7	鎌の一種?
395	A15II a	鎌	59	51	4	18.2	雁股式
396	E 6 II b	鎌	61	23	5	11.7	平造斧鎌式
397	D14II b	鎌	25	97	4	33.9	曲刃鎌
441	D 9 谷状地形	鍛冶具	67	19	12	48.0	鎌の一種?

## 第V章 尾崎遺跡出土土器の岩石学的検討

菱田 量 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

尾崎遺跡は、美濃加茂市加瀬田地内に所在する弥生時代～奈良時代、及び中世にかけての遺跡である。遺跡は、標高約100m前後の丘陵先端部に位置し、前面には木曾川により形成された複数の段丘面が広がる。丘陵部は、周辺において高位段丘も見られるが、新第三紀中新世前一中期の瑞浪層群から構成されている(山田他、1990)。遺跡付近では、上位層から黒黄褐色土壌、赤褐色～赤黃褐色の礫混じり凝灰質粘土層、円礫から構成される黄褐色砂礫層、砂屑あるいは黒灰色の溶結凝灰岩が見られる。遺跡調査は、この内最上位層の黄褐色土壌層を中心に行われた。

遺跡からは、弥生時代の住居址が検出され、台付壺・広口壺・直口壺・高杯・鉢・バレス壺等一連の土器が出土している。また、古墳～奈良・中世の遺構・遺物なども検出されている。

言うまでもなく、土器の形式学的研究の歴史は長く、そこから導き出される土器編年も精緻になされている。しかしながら、土器胎土そのものの特徴やその起源（すなわち胎土の産地）についての研究は、その方法や解析法に数々の問題点があり必ずしも十分な成果が得られていくとは言えない。胎土の特徴、あるいはその起源の検討は、本来形式学的分類の一端を担うものであり、土器研究の今後の展開を見いだす要素として非常に重要である。菱田ほか(1993)は、從来から行われている土器胎土分析の一手法である岩石学的手法について、胎土中の粒子に対して從来とは異なった分類群を設定し、岩石学的手法による胎土分析の展望について示している。

ここでは、尾崎遺跡から出土した弥生時代後期の土器について、その岩石学的特徴およびその意味について述べる。なお、ここで検討した試料のうち、土器以外の旧河川砂試料のうち、堀田城之内遺跡の砂試料は岐阜市教育委員会の高木 洋氏に、また古村遺跡の砂試料は美濃市教育委員会の高木宏和氏にそれぞれ案内していただき採取させて頂いた。ここに感謝いたします。

### 2. 試料

ここで岩石学的検討を行った試料は、弥生時代後期在地土器12点である(表40)。また、比較・

表40 岩石学的検討を行った土器試料と砂試料

No.	遺構	時代	器種	(No.)	備考(切断面の特徴)
1	8号住	弥生後期	広口壺	76	黒灰色
2	8号住	"	台付甕	73	淡黄褐色
3	8号住	"	直口壺	74	黄褐色
4	13号住	"	バレス壺	118	淡黄褐色
5	24号住	"	直口壺	186	赤褐色
6	"	"	鉢	184	淡赤褐色
7	"	"	高環		淡黄褐色
8	"	"	台付甕	179	明赤褐色
9	"	"	高環	192	黒褐色
10	"	"	台付甕	180	褐色
11	"	"	"	178	淡黒灰色
12	"	"	高環	191	淡黄褐色
13	勝更遺跡	縄文中期以前砂礫層			郡上八幡町—長良川系
14	古村遺跡	沖積砂礫層			美濃市—長良川系
15	堀田城之内遺跡	古墳土器包含層下位砂礫層			岐阜市—長良川系
16	仲追間遺跡	縄文層下位段丘砂礫層			美濃加茂市—木曾川系

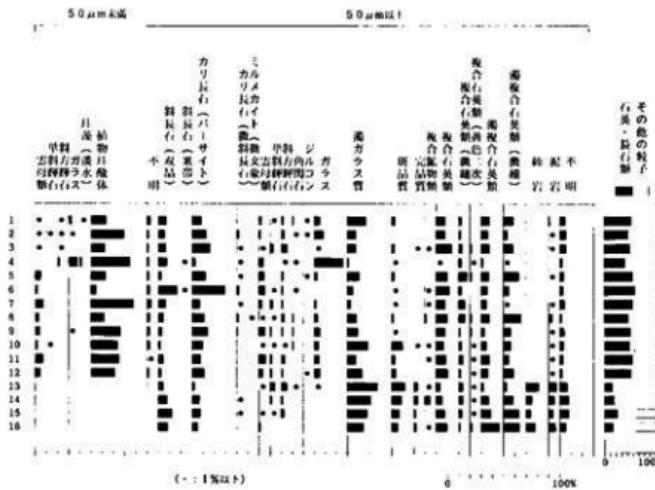
参考試料として、郡上八幡町勝更遺跡縄文中期以前砂礫層（長良川系）、美濃市古村遺跡沖積層砂礫層（長良川系）、岐阜市堀田城之内遺跡古墳土器包含層下位砂礫層（長良川系）および美濃加茂市仲追間遺跡縄文層下位段丘砂礫層（木曾川系）の各1点である。

### 3. 分析方法

- (1) 土器試料は、30×20×15mm程度の大きさのチップを岩石カッターで切り出し、恒温乾燥機により乾燥させた後、そのままの状態でエボキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行なう。また、砂試料は、同程度の大きさのブロックを切り出し、同様に固化処理を行う。
- (2) これらの試料は、片面を岩石薄片と同様に研磨機およびガラス板を用いて研磨して平面を作り、スライドグラスに接着する。その後、精密岩石薄片作製機およびガラス板で研磨し、試料の厚さが0.02~0.03mm前後の薄片を作製する。
- (3) 各薄片試料は、偏光顕微鏡下で各分類群ごとに同定・計数する。なお、同定・計数は、任

分類群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
5.0 μm未満																
白石質	3	4	1	-	18	7	25	12	15	8	23	17	-	-	-	-
半斜長石	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
斜方輝石	28	43	3	5	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
透長石	3	-	27	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
珪藻土 (水)	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
粘土 (無機)	45	122	45	122	45	16	131	40	85	87	62	80	-	-	-	-
粘土 (有機)	11	6	5	6	6	13	8	7	8	3	9	-	-	-	-	-
5.0 μm以上																
斜長石 (長石)	24	23	24	26	11	57	22	16	12	9	14	9	16	26	40	28
斜方輝石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
透長石	28	52	58	19	43	101	23	38	51	34	26	41	8	22	24	15
カリ長石 (ハマサイト)	-	8	2	2	1	2	5	4	-	-	-	-	1	1	-	-
カリ長石 (地質別)	6	-	5	13	16	19	18	20	20	20	19	12	-	-	-	-
カルシウム	3	-	11	-	-	-	8	3	4	2	5	6	14	6	12	-
カルミカイト (炭酸塩)	7	10	18	3	6	5	10	3	1	10	5	1	17	5	8	-
内閃石	5	-	3	-	-	-	4	4	4	-	-	3	-	-	-	-
カルボン	5	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガラス質	16	34	1	91	9	-	6	10	19	15	14	19	1	-	-	-
高嶺石質	56	32	27	4	43	18	11	29	33	68	26	50	81	71	58	44
高嶺石質	10	-	2	3	8	-	2	2	2	2	11	10	20	23	17	17
云母質	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	11	11	6	-	-
沸石質	-	-	2	-	-	-	5	5	-	-	1	3	15	-	7	-
重介鉱物質	-	-	2	-	-	-	5	5	-	-	1	3	-	-	-	-
重介鉱物質	25	37	30	38	37	41	26	31	28	28	28	37	12	35	25	28
重介鉱物質 (地質)	-	7	12	-	-	-	9	19	4	4	3	-	7	13	6	-
重介鉱物質 (岩質) (次)	-	-	6	2	5	-	-	-	-	-	-	-	3	3	6	-
重介鉱物質 (岩質)	25	25	27	35	25	30	18	26	21	18	25	24	9	22	50	-
重介鉱物質 (岩質) (地質)	25	15	30	-	48	17	34	33	19	15	35	16	10	43	43	-
砂質	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	37	18	13	25
泥質	4	1	3	-	3	-	5	11	1	2	3	1	24	17	14	19
粘土 (無機)	18	28	8	6	11	12	1	1	1	1	1	1	27	17	27	17
粘土 (無機) (洗浄)	305	301	303	202	354	392	342	253	297	285	319	331	53	56	95	51
標準ポイント数	534	416	360	351	364	346	347	546	358	369	332	376	335	333	329	307

表41 土器胎土中および砂質堆積物中の粒子組成一覧  
(総ボリューム数は石英・長石類以外の粒子の合計である)



第41図 土器胎土中および砂質堆積物中の粒子組成  
(石英・長石類以外の粒子を基準として百分率で算出した)

意の直線を設定し、この直線下にある約 $40\mu\text{m}$ (0.04mm)以上の粒子すべてを対象とし、石英・長石類以外の粒子が約300個以上になるようにした。

#### 4. 分類群の記載

細礫～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩片(岩石の破片)については、岩片を構成する鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが事実上不可能である場合が多い。そのため一部の岩片を除いては岩石名を付けず、岩片を構成する鉱物の組合せや構造的な特徴に基づいて分類する。なお、鉱物や岩片以外の生物起源の粒子も同時に計数し、 $50\mu\text{m}$ 未満の粒子として扱った。また、斜長石やカリ長石などの長石類の粒子の中で鉱物学的に特徴が認められないものについては、石英との区別が困難であるため、“石英・長石類”として分類した。

ここで使用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的特徴についてはその記述を省略する。

**石英：**無色透明で透明度が高い鉱物であり、 $\text{SiO}_2$ (二酸化ケイ素)を主成分としている。本来、自形の結晶は六角錐からまるみをおびたそろばん玉のような形、あるいは六角柱状を示す。大きな結晶で、きれいな六角柱状のものは一般に水晶とよばれる。カコウ岩類や変成岩中のものは不定形のものからなる。また、ガラスに似た割れ口(貝殻状断口)を示す。風化されにくい鉱物である。 $\text{SiO}_2$ %の多い火成岩の主成分鉱物であり、チャートや砂岩などの堆積岩あるいは変成岩にも広く産する。

**長石類：**長石類は、いずれも白色半透明から無色透明で石英と比べると透明度が低い。柱状・板状・粒状などいろいろな形をしている。長石は斜長石とカリ長石に分類される。さらに、斜長石は双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同心円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。また、カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(バーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶(微文象構造といふ)である。累帯構造を示す斜長石は火山岩中の結晶(斑晶)の斜長石にみられることが多い。バーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などの $\text{SiO}_2$ %の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。ミルメカイトは火成岩が固結する過程の晚期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩変成岩に普通に産する。

**雲母類：**一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開(規則正しい割れ目)にそって板状にはがれやすい。薄片上では長柱状に見える場合が多い。その他、白雲母などもある。カコウ岩などの $\text{SiO}_2$ %の多い火成岩に普遍的に産し、

泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。

**角閃石類**：主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などさまざまである。形は細長く平たい長柱状である。閃綠岩のようなSiO<sub>2</sub>%が中間的な深成岩をはじめ、主として火成岩、変成岩などに産する。

**輝石類**：主要な鉱物としては、斜方輝石と単斜輝石がある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にヒールびんのような淡褐色および淡緑色などを呈し、形は長柱状である。SiO<sub>2</sub>%が少ない深成岩、SiO<sub>2</sub>%が少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO<sub>2</sub>%が少ない火山岩によく見られ、SiO<sub>2</sub>%の最も少ない火成岩や変成岩中に含まれる。

**ジルコン**：無色で長柱状から短柱状で端部が尖った形を呈し、カコウ岩などの酸性の深成岩やその他の火成岩や変成岩、堆積岩にも含まれるが一般的にその量は少ない。

**珪藻**：珪酸質の殻をもつ藻類で、大きさ0.01～1mm程度である。珪藻類は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。

**植物珪酸体**：植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なるが、主に約0.05～0.1mmである。一般的にはプラント・オバールと呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や棒状のものなどが見られる。

**ガラス**：透明の非結晶の物質で、電球のガラスの破片のような薄くて湾曲したもの（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつもの（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出されたものである。

**濁ガラス質**：非結晶の粒子で、偏光顕微鏡の下方ポーラーのみで観察した場合に粒子が濁って見える。これらは主として凝灰岩などの火山碎屑岩や流紋岩やデイサイトなどの火山岩類の石基（基質の非結晶質ガラスの部分）や堆積岩類に見られる。

**複合鉱物類**：比較的粗粒の鉱物が集合し石基部分が見られないもので、構成鉱物は石英、斜長石、カリ長石、黒雲母、角閃石などである。これらは主としてカコウ岩、閃綠岩、ハンレイ岩などの深成岩類に見られる。

**複合石英類・濁複合石英類**：複合石英類は石英の集合している粒子で基質（マトリックス）部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細とし、それ以上のと区別する。また、複合石英類のうち、下方ポーラーのみで観察した場合、粒子が濁って見えるものを濁複合石英類とする。また、石英の粒子のすきまに直交ポーラーでの観察で黄色などを呈する二次的な鉱物がみられるものは複合石英類（黄色二次）、濁複合石英類（黄色二次）とする。

砂岩・泥岩：石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.063mm以上のものを砂岩とし、約0.063mm未満のものを泥岩とする。これらは、土器胎土中の粒子としては、唯一岩石名を付けられるものである。

不明：下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なもの、変質して同定不能な粒子およびその他の粒子を不明とする。

## 5. 考察

### a. 各試料の特徴

土器試料に注目すると、分類群の特徴から、大きく3タイプの胎土に分けられる。

第1のタイプは、対象とした土器の中で最も多く見られる胎土で、鉱物のカリ長石（バーサイト）、斜長石（双晶）、岩片の複合石英類、濁複合石英類、濁複合石英類（微細）、濁ガラスなどからなる土器である。これらは、広口壺・台付甕・直口壺・高壺・鉢のいずれの器種においても見られる。

第2のタイプは、50μm以上に出現するガラスが約26%と多く検出される13号住出土No.4のパレス壺である。これは、50μm未満に出現するガラスを含めると約34%に達する特徴的な組成を示す。このガラスは、いわゆるバブル・ウォール型のガラスが最も多く、軽石型のガラスも含まれることから、テフラ起源（火山灰起源）と推定される。また、淡水域で生育する珪藻化石が含まれること、主にイネ科植物の葉身で形成される植物珪酸体が高率で含まれるのも特徴的である。これは土器胎土の材料となる粘土の性質を強く反映したものと考えられ、火山ガラスを含むと思われる淡水性堆積物などがその起源と思われる。この点については、予想される堆積物を実際的に調べることにより、その特定は可能と考える。

第3のタイプは、斜長石（双晶）およびカリ長石（バーサイト）が共に高い割合で検出される24号住出土No.6の鉢である。片理状鉱物類が含まれないことから火成岩の要素が強いと考えられる。

なお、全体的に植物珪酸体が多く含まれるが、土器焼成場所という特殊な状況下で混入したものと考えられる。ただし、弥生時代後期の土器において約70%の植物珪酸体が混入している場合もあることから、意図的に灰質のものを混入している場合も考えられる（菱田ほか、1933）。この点については、植物珪酸体の同定を行うなど今後の検討が必要と考える。

一方、旧河川の砂試料を見ると、斜方輝石や单斜輝石あるいは雲母類に違いが見られる。また下流に向かって濁ガラス質や斑晶あるいは砂岩が減少する一方、濁複合石英類（微細）や濁複合石英類あるいは複合石英類の増加が見られる。

土器との比較では、旧河川砂では砂岩が約10%前後含まれるのに対し、土器胎土では全く含

まれていない。また、完品質も胎土中には稀である。これは、砂が時代の異なる試料であることも関係あるが、胎土の材料として長良川あるいは木曾川とは直接関係ない材料（粘土層など）である可能性がある。

### b. 主成分分析による胎土の分類とその意味

ここで用いた分類群のうち、 $50\mu\text{m}$ 以上の岩片類は構成する鉱物組合せや構造的特徴から設定した分類群であるが、源岩となる岩石とは対比出来ない。これは、対象とする岩片が小さく、岩石名を付けることが困難であるためである。このため、示される胎土の鉱物・岩石学的特徴を、地質学的特徴に一義的に対比出来ない。ここでは土器胎土の材料組成の特徴を復元する目的で主成分分析を試みた。この主成分分析は、多くの変量の値をできるだけ情報の損失なしで、1個または総合的指標（主成分、ここでは胎土の材料組成の鉱物・岩石学的特徴）で代表させる方法である（田中ほか、1984）。

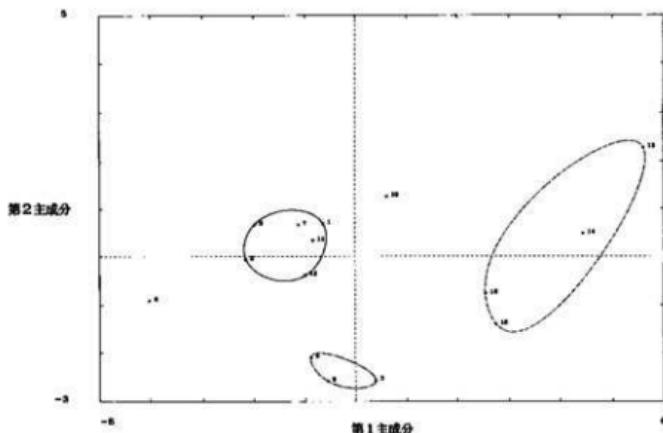
ここでは、田中ほか（1984）が示した主成分分析プログラム“PCA”を使用した。なお、

分類群	主成分	1	2	3	4	5	6	7
新菱石（双晶）	-0.05494	-0.05775	0.50750	-0.12274	0.15635	0.02265	0.05456	
新長石（单晶）	-0.19633	0.05671	0.38072	-0.08295	0.24430	-0.03267	-0.12069	
カリ長石（ペースト）	-0.22220	-0.26374	0.28570	0.04423	-0.05507	0.11734	-0.35899	
カリ長石（斜長石）	-0.21340	-0.11424	0.26710	0.03253	0.17481	0.26593	0.11545	
ミルメカイト（沸玉灰）	-0.02135	-0.21287	-0.20233	0.16148	0.47311	0.32286	0.09240	
雲母斑	-0.27508	0.05945	0.04342	0.08739	-0.06425	-0.35704	-0.14463	
單斜輝石	0.17651	0.02818	0.11818	0.51224	-0.17992	-0.01861	-0.14541	
斜方輝石	0.09628	-0.11339	0.12234	0.47584	-0.18315	0.23881	0.03521	
角閃石	-0.11063	0.17254	-0.25794	-0.01956	0.28216	0.42480	-0.37975	
ジルコン	-0.09781	-0.02276	-0.12089	-0.15305	-0.45967	0.38086	0.20501	
ガラス	-0.18557	-0.36101	-0.15346	-0.07378	0.08449	0.04054	0.22416	
濁ガラス質	0.10716	0.04209	-0.05342	-0.06603	-0.14456	0.21500	-0.29396	
底品質	0.12360	0.11242	-0.03249	-0.00750	-0.08821	0.01874	-0.36810	
完品質	0.34945	0.08098	0.16576	-0.08744	0.09234	-0.01636	0.00158	
複合鉱物類	0.17084	-0.07151	0.18541	0.15162	0.28110	0.02130	0.22351	
複合石英類	-0.11695	-0.47851	0.05079	0.05430	-0.21934	-0.06477	-0.16449	
複合石英類（微細）	0.00837	-0.18844	-0.11059	0.37988	0.17466	-0.26694	0.33849	
複合石英類（黄色二次）	0.16556	-0.23888	-0.21053	0.00118	0.15307	-0.27234	-0.23422	
濃複合石英類	0.08781	-0.34563	-0.03853	-0.37709	-0.07850	-0.16630	0.16895	
濃複合石英類（難纏）	0.08837	-0.42462	-0.12271	-0.20749	0.13576	0.06387	-0.08461	
砂岩	0.32698	0.06227	0.11094	-0.08524	0.05803	-0.04697	-0.03882	
泥岩	0.14327	-0.02263	0.06145	-0.08477	0.18134	0.03190	0.06764	
不明	0.24716	-0.05113	0.25764	-0.08121	-0.19107	0.29727	0.21348	
固有値	0.95949	3.21095	2.63822	2.07471	1.93317	1.51162	1.04053	
寄与率	0.10259	0.10408	0.11688	0.08920	0.08427	0.06572	0.04524	
累積寄与率	0.30259	0.41306	0.55994	0.65915	0.75142	0.80014	0.84538	

表42 相関行列固有値・固有ベクトルおよび寄与率・累積寄与率

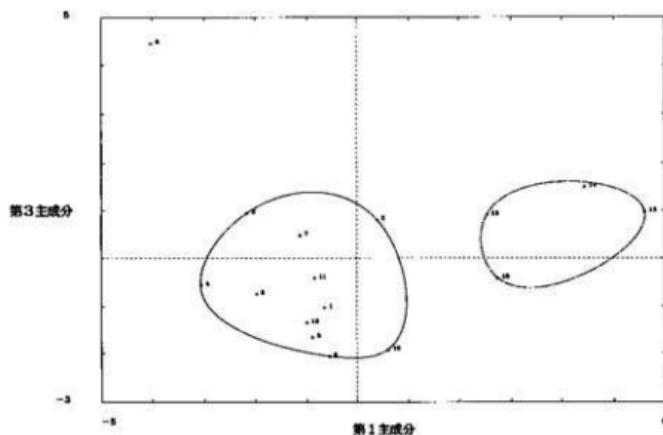
プログラムは、主成分散布図の出力の一部を変更して使用した。個体数は土器12点および旧河川砂4点の合計16点である。また、変量数は、具体的な鉱物・岩石学的特徴を見いだすために $50\mu\text{m}$ 以上の分類群23点を対象とした。

表42には、上位7個の主成分得点結果を示す。上位7個の主成分得点の累積寄与率は約85%に達する。表42を見ると、第1主成分は濁ガラス質・斑晶・完品質・砂岩・泥岩などを中心に



第42図 第1—第2主成分の散布図（数字は各試料No.に対応）

No.1 : SB8広口壺、No.2 : SB8台付壺、No.3 : SB8直口壺、No.4 : SB13バレス壺、No.5 : SB24直口壺、No.6 : SB24鉢、No.7 : SB24高杯、No.8 : SB24台付壺、No.9 : SB24高杯、No.10 : SB24台付壺、No.11 : SB24台付壺、No.12 : SB24高杯、No.13 : 横更道跡採集砂（長良川）、No.14 : 古村遺跡採集砂（長良川）、No.15 : 堀田城之内遺跡採集砂（長良川）、No.16 : 仲追間遺跡採集砂（木曾川）



第43図 第1—第3主成分の散布図（数字は各試料No.に対応）

No.1 : SB8広口壺、No.2 : SB8台付壺、No.3 : SB8直口壺、No.4 : SB13バレス壺、No.5 : SB24直口壺、No.6 : SB24鉢、No.7 : SB24高杯、No.8 : DS24台付壺、No.9 : SB24高杯、No.10 : SB24台付壺、No.11 : SB24台付壺、No.12 : SB24高杯、No.13 : 横更道跡採集砂（長良川）、No.14 : 古村遺跡採集砂（長良川）、No.15 : 堀田城之内遺跡採集砂（長良川）、No.16 : 仲追間遺跡採集砂（木曾川）

正の相関が高いグループで、火成岩類と堆積岩類を合わせ持った主成分と解釈される。第2主成分はガラス（火山ガラス）で正の相関が高く、複合石英類・濁複合石英類などで負の相関が高いグループである。第3主成分は斜長石（双晶）・斜長石（累帶）などで正の相関が高いグループで、火山岩の要素の強いグループである。第4主成分以降は、その寄与率が10%以下であることから、尾崎遺跡から出土する土器胎土の特徴は、ほぼ第1・第2・第3の各主成分で説明されると考える。ただし、ここで示される主成分は、4箇所の旧河川砂試料に対してであり、別の試料を使用した場合には主成分の示す要素も変わりうる。

図42に第1—第2主成分、図43に第1—第3主成分のそれぞれ散布図を示す。図42を見ると、旧河川砂試料も含め6群に分類される。なお、グループを示す閉曲線は、グループとなるすべての点を含むように結んだスプライン曲線で描いてある。これらのグループは、第1主成分の示す火成岩類と堆積岩類を合わせ持った主成分と第2主成分の示す火山ガラスの主成分を基準にした場合に分類されることを示している。これによると、No.3・No.5・No.8あるいはNo.1・No.2・No.7・No.9・No.11・No.12はそれぞれ岩石学的に類似した特徴を持っていると判断される。一方、No.4・No.6・No.10はいずれにも属さず分散する。図43の第1—第3主成分の散布図においても同様で3群に分類されるが、第3主成分の寄与率が低いことから、胎土組成を識別する感度は低いと判断される。

このように、尾崎遺跡から出土する土器胎土は大きく5つのグループに識別されるが、いずれも長良川あるいは木曾川の砂組成とは幾分異なる組成を示していると言える。これは、土器胎土の材料とされる粘土（層）が必ずしも周辺に流域を持つ河川の砂組成とは一致していないことを示す可能性がある。特に、No.4のように火山ガラスを多量に含む胎土などは（No.6以外の胎土もガラスを含むが）、この地域としては特異な組成であり、粘土層そのものの特徴を考えた方が良い。永草（1991）は、愛知県朝日遺跡において、胎土中の多量の火山ガラスが含まれる弥生時代後期のバレスを見いだし、同時期の他の土器胎土とは異なった胎土であることを示している。尾崎遺跡から出土するNo.4のバレスは、淡水珪藻化石を含むことから、その胎土の材料となる粘土層は淡水成堆積物（同時に火山ガラスを含むと思われる）であると考える。この粘土層が遺跡周辺に分布するかどうかは、実際的に調査・検討する必要がある。

## 7. おわりに

今回検討した土器は、土器形式学的には在地的要素の強い土器群であるが、土器相互において明確な違いを示している。この違いは、主成分分析により識別されるが、こうした違いが如何なる理由によるかは多くの比較試料（土器胎土以外に粘土層や旧河川砂など）を実際的に検討する必要がある。ここでは、長良川あるいは木曾川の旧河川砂との比較において識別される

ことから、材料となる粘土の組成を反映している可能性が高い。

最後に、土器胎土の鉱物岩石学的な特徴記載等は、胎土の材料が在地のものかそうでないかを出発点として、その後の土器移動に関する議論などに大きく係わる問題であり、慎重かつ精緻な検討が必要である。ここでの検討は、尾崎遺跡から出土する土器胎土の特徴とその分類について示したもので、その胎土の材料となる粘土の起源については現段階においては可能性を示すに留める。

### 引用文献

- 菱田 豊・車崎正彦・松本 実・藤根 久 (1993) 岩石学的方法に基づく胎土分析について—弥生時代後期の土器を例にして一。日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集, 34-35
- 永草康次 (1991) 朝日遺跡出土の土器胎土。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集、「朝日遺跡・自然科学編」, p299-312.
- 田中 豊・垂水共之・脇本和昌 (1984) パソコン統計解析ハンドブック II 多変量解析編、8. 主成分分析、共立出版, p160-175.
- 山田直利・島田浩二・広島俊男・駒沢正夫 (1990) 20万分の1地質図幅「飯田」、地質調査所

## 第VI章 尾崎遺跡住居址出土炭化材の樹種

藤根 久 (パレオ・ラボ)

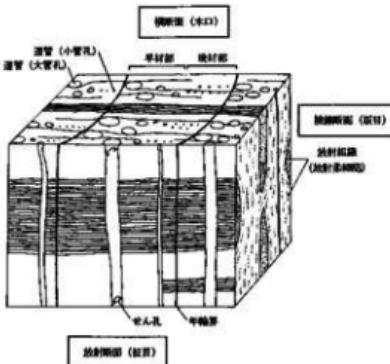
### 1. はじめに

尾崎遺跡は、標高約100m前後の丘陵地に成立する弥生～奈良、中世に及ぶ時代の遺跡である。遺跡は、北側山地から虫喰状に張り出した丘陵先端部に位置し、その前面には河岸段丘が作る平坦な盆地が広がる。遺跡からは、弥生時代から奈良時代の堅穴住居址等が検出され、量的には多くないが炭化材が伴っている。これら炭化材は、その分布や形状から建築材あるいは燃料材と思われる。弥生時代の住居建築材の樹種を検討する例が少ないとことから、貴重な資料となる。

ここでは、これら住居から出土する炭化材の樹種について検討する。

### 2. 標本の記載と結果

炭化材は、比較的保存の良い硬質部分を選び適宜手割りで横断面を作成し、実体顕微鏡下で観察する。この段階で同定できる試料と同定できないものに分類する。同定される典型試料と同定できない試料すべてについて、片刃カミソリ等を用いて試料の横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)、放射断面(柾目と同義)の3断面を作る。各断面試料は、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製JSM T-100型)で観察する。



第44図 材組織とその名称  
(広葉樹: クヌギ模様)

表43にその結果を示す。樹種の同定は、現生標本との比較により行なう。  
以下に、標本の記載と同定の根拠について述べる。

表43 尾崎遺跡出土炭化材の樹種

No.	遺 墓	時 代	取上 No.	樹 種	備 考
1	S B 1	先秦中期	3171	クヌギ節	建築材
2	"	"	3172	ニレ真	"
3	"	"	3173	ク リ	"
4	S B 8	先秦後期	2330	クヌギ節	"
5	"	"	2331	"	"
6	"	"	2333	"	"
7	"	"	2324	"	"
8	"	"	2327	"	"
9	"	"	5634	"	"
10	"	"	1635	"	"
11	"	"	-	アカガシ亜属	ノリ直径3.8cm
12	S B 12	古墳前期	17516	サクラ属	建材材
13	S B 14	古 墓	2117	ク リ	他材料?
14	S B 22	古墳後期	18514	"	建材材?
15	"	"	18517	コナラ節	"
16	"	"	18519	"	"
17	"	"	18520	"	"
18	S B 14	先秦後期	18836	ク リ	建材材
19	"	"	18837	トチバ+ナラ	" 直径4cm
20	"	"	18838	ク リ	"
21	"	"	18839	ク リ+ナラ	" 直径7mm
22	"	"	18840	ク リ	"
23	"	"	18841	"	"

アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 (図版27 1a~1c)

大型の管孔が放射方向に配列する放射孔材である (横断面)。道管のせん孔は単一である (放射断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものとがある (接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のアカガシ亜属の材と同定される。アカガシ亜属の樹木には関東に分布するアカガシ (*Q.acuta*) やアラカシ (*Q.glaucia*) やシラカシ (*Q.myrsinaefolia*) をはじめ8種類ほどある。アカガシ亜属の樹木は、いずれも樹高20m、幹径1mに達する常緑広葉樹である。

コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 (図版27 2a~2c)

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから徑を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である (横断面)。道管のせん孔は単一である (放射断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる (接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のコナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ (*Q.serrata*) やミズナラ (*Q.mongolica* var. *grosseserrata*)、カシワ (*Q.dentata*)、ナラカシワ (*Q.alienae*)などがあるが、現在のところこれらを識別するには至っていない。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹である。

クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 (図版27 3a~3c)

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこからやや急に徑を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である (横断面)。道管のせん孔は単一で、時としてチロースが

見られる（放射断面）。放射組織は単列同性のものと集合放射組織のものとがある（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のクヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木には、関東地方に普通に見られるクヌギ (*Q.acutissima*) と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ (*Q.variolilis*) がある。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

#### クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 (図版28 4a~4c)

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから除々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチロースの見られるものもある。また、軸柔組織は短接線状に配列する（横断面）。道管のせん孔は單一である（放射断面）。放射組織は単列同性であり、時に2細胞幅で、2~17細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科クリ属のクリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

#### ニレ属 *Ulmus* ニレ科 (図版28 5a~5c)

年輪のはじめに大型の管孔が數個配列し、晩材部では小型の管孔が径を減じて斜めに配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は單一で（放射断面）、内壁にはらせん肥厚が明瞭に見られる（接線断面）。放射組織は、異性4~8細胞幅、10~42細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ニレ科のニレ属の材と同定される。ニレ属の樹木には、中部地方以西の荒地などに生える樹高15m、幹径60cmに達するアキニレ (*U.parvifolia*)、北海道から九州にかけての平野部や山麓部で普通に生える樹高30m、幹径1mに達するハルニレ (*U.davidiana* Planch. var.*japonica*) や北海道に特に多く見られる樹高25m、幹径1mに達するオヒョウ (*U.laciniata*) がある。いずれ落葉広葉樹である。

#### サクラ属 *Prunus* バラ科 (図版28 6a~6c)

年輪のはじめにやや小型の管孔が並び、數個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管は外側に向かって減少する傾向がみられる（横断面）。道管のせん孔は單一で、その内壁にはらせん肥厚がある（放射断面）。放射組織は、同性に近い異性で、1~5細胞幅、2~37細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、バラ科のサクラ属の材と同定される。サクラ属の樹木には、暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高25mに達するヤマザクラ (*P.jamascakura*) など数種類ある。

#### トチノキ *Aesculus turbinata* Blume. トチノキ科 (図版29 7a~7c)

小型の管孔が単独または2~4個程度放射方向に複合し、やや密に散在する散孔材である（横

断面)。道管のせん孔は單一で(接線断面)、内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、同性單列まれに1~2細胞幅で、3~21細胞高である。また、この樹種を最も特徴づけるリップルマーク(規則的な層階状配列)を示している(接線断面)。

以上の形質から、トチノキ科トチノキ属のトチノキと同定される。トチノキの樹木は、樹高30m、幹径2mに達する北海道から九州まで分布する落葉広葉樹である。

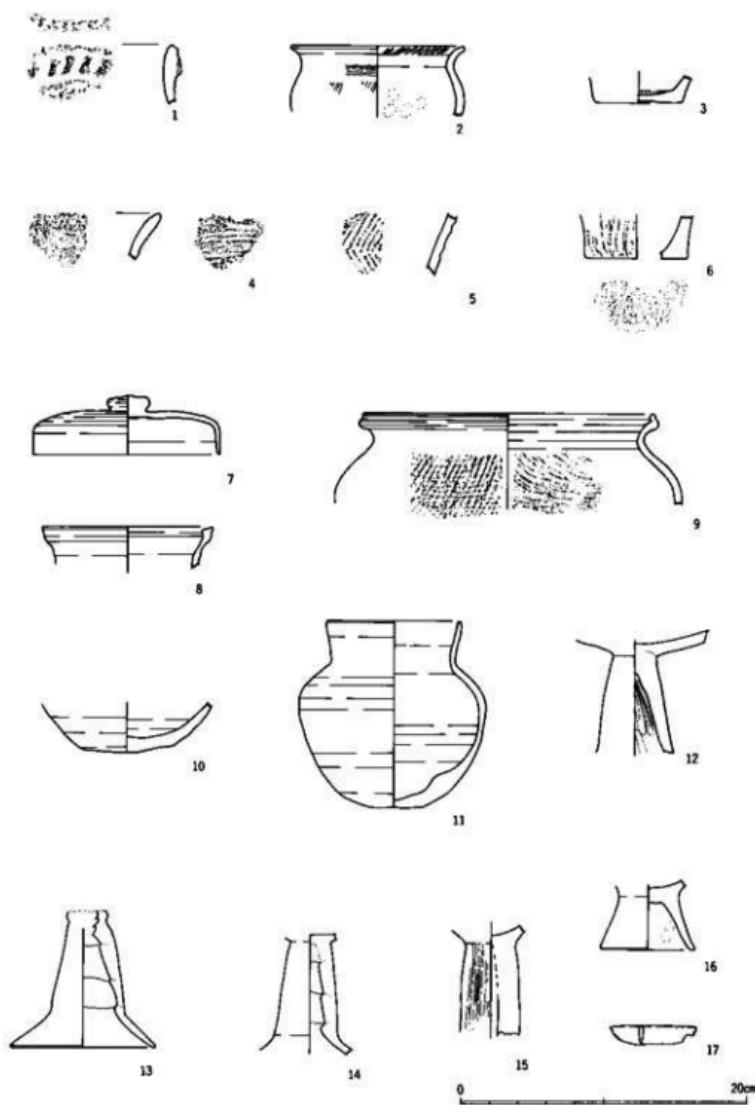
#### タケ亜科(ササ類) subfam. Bambusoideae イネ科(図版29 8a~8c)

左右の後生木部・外側の後生木部・原生師部および内側の原生木部の周囲を維管束鞘を取り巻く維管束が、多數散在する(横断面)。

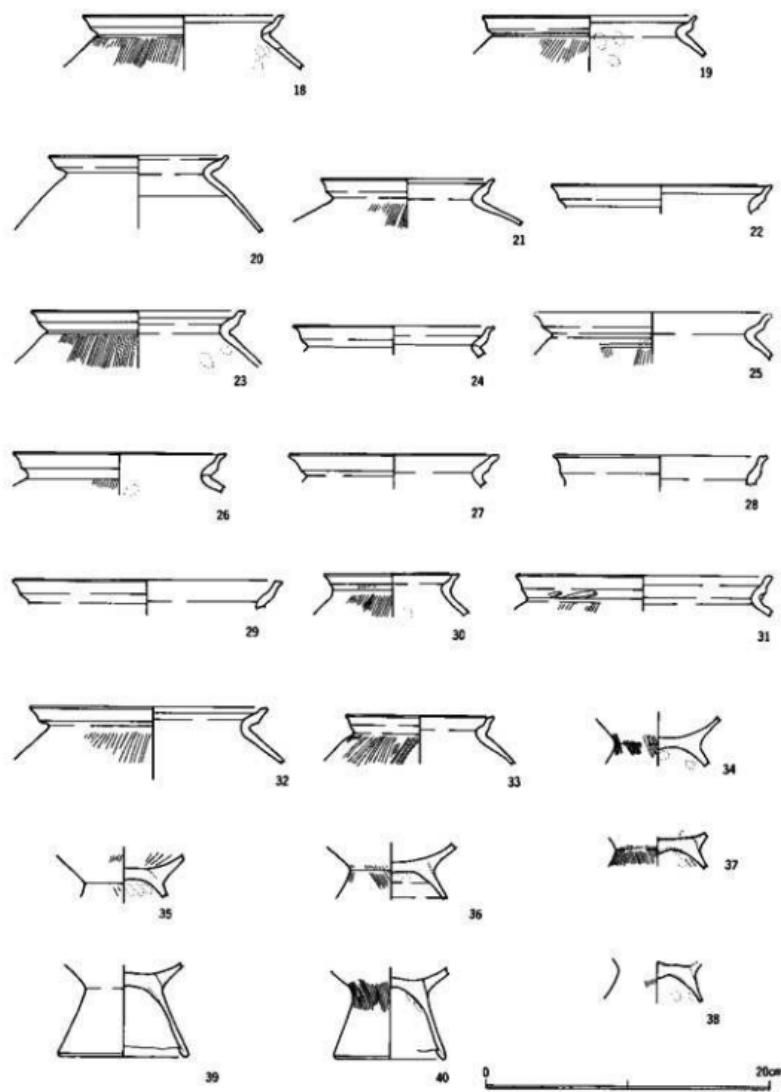
以上の形質から、イネ科のタケ亜科の程と同定される。タケ亜科には、タケ類とササ類があるが組織的では識別できない。試料は、いずれも程の厚みが薄く、その直径も6mm~7mm程度で比較的小さいことからササ類と考える。

### 3. 考察

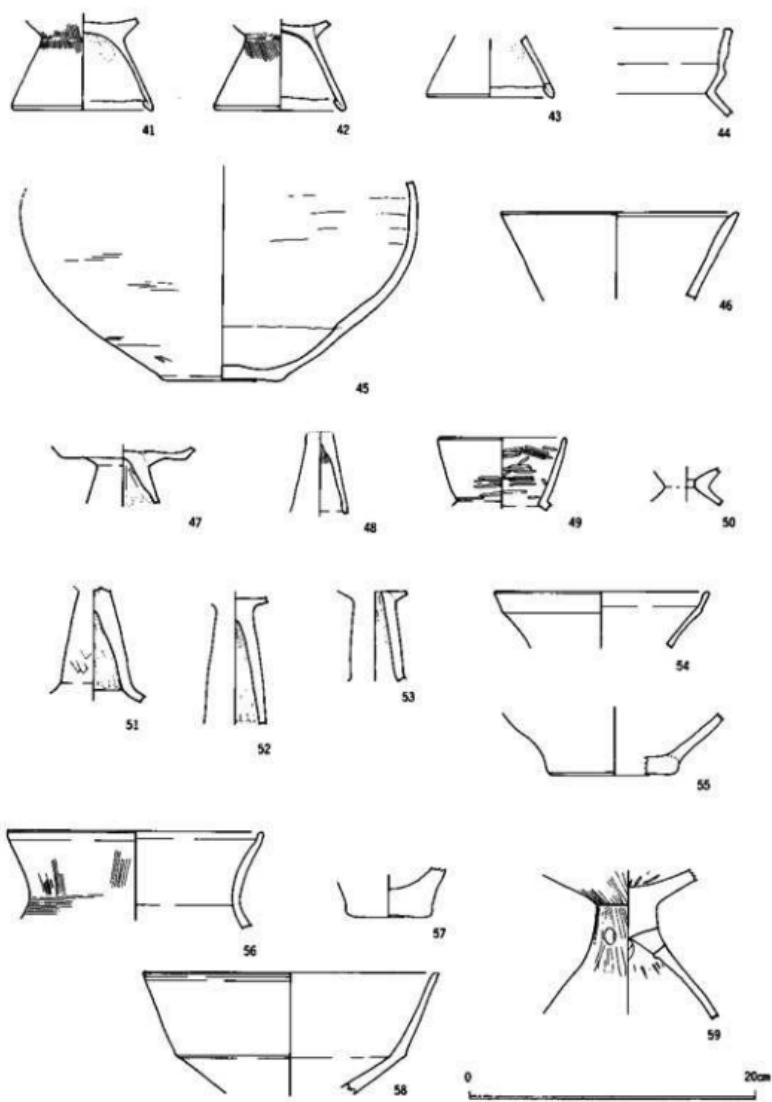
全体として検出される樹木分類群は、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亞属、落葉広葉樹の同属コナラ節、同属クヌギ節、クリ、ニレ属、サクラ属、トチノキおよびササ類(タケ亜科)の8分類群である。これらのうち、建築材としては、クヌギ節やクリの樹木が多く利用され、コナラ節の樹木も利用されている。当時、建築材として利用する樹木は、周辺に多く生育する樹木と考えられるが、この遺跡の南東約1.5km地点の仲追間遺跡(平成5年度発掘調査)での縄文時代相当の泥炭質砂の花粉化石の検討では、コナラ亜属(コナラ節とクヌギ節からなる)が約50%前後と最も多く、次いでイチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科(約10%前後)、クマシテ属—アサグ属(約5%前後)、マツ属複維管束亞属(アカマツなど)、クリ属、エノキ属—ムクノキ属あるいはニレ属—ケヤキ属などが丘陵地から段丘上にかけて分布している。また、アカガシ亞属やスギ属あるいはコウヤマキ属などもわずかながら分布していた。こうしたことから、クヌギ節の樹木を建築材で利用する状況は理解される。なお、弥生時代後期の第24号住居址は祭司の要素をもつ遺構とされるが、出土する建築材はクリ材が主体で、周辺に多く生育するコナラ属の樹木を利用していないことから、遺構の性格と何等かの関係が予想される。



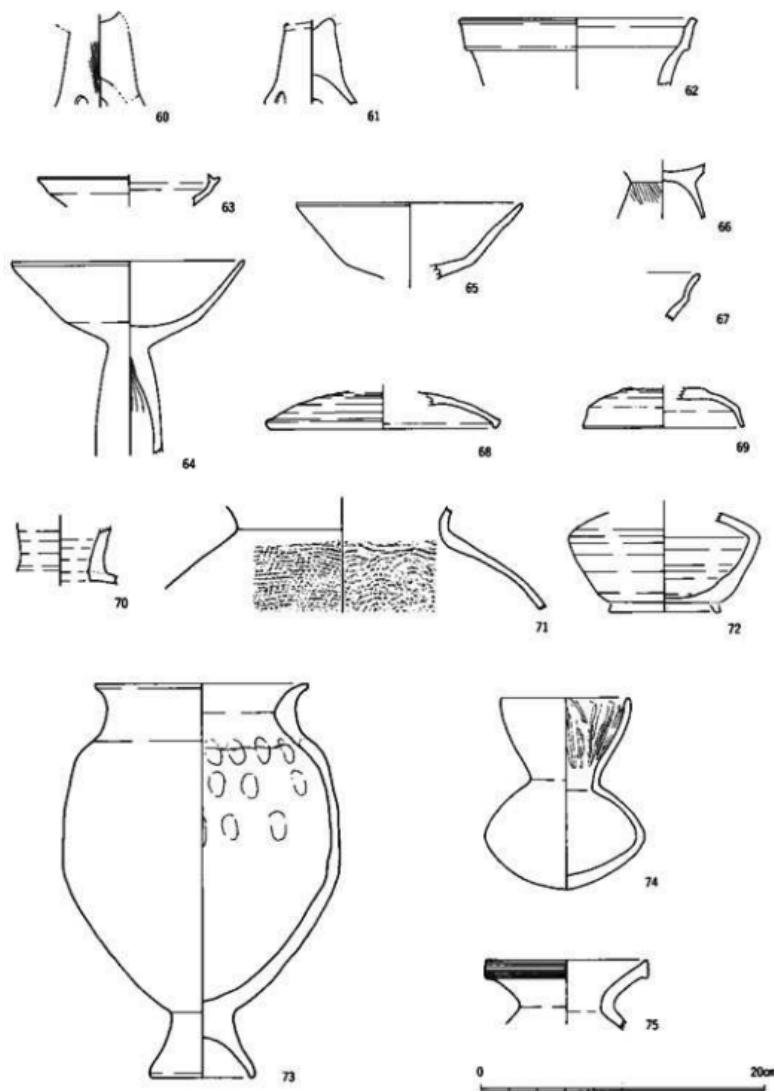
第45図 遺構出土遺物(1)



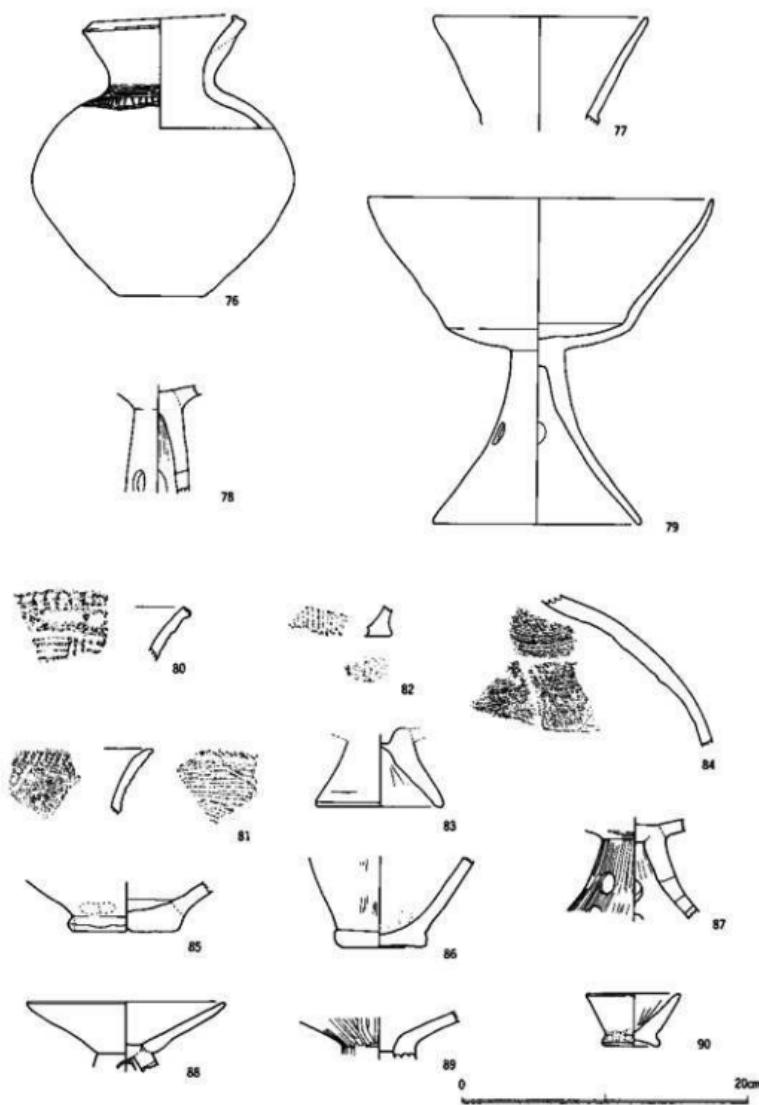
第46図 造橋出土遺物(2)



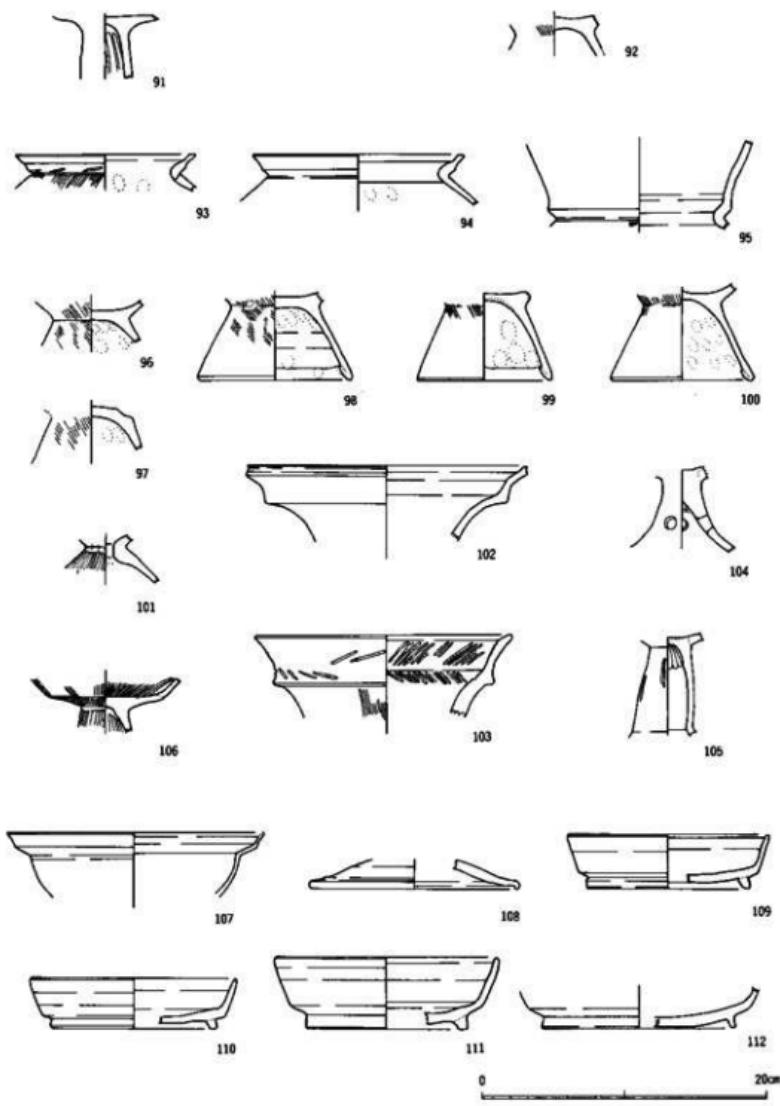
第47図 造構出土遺物(3)



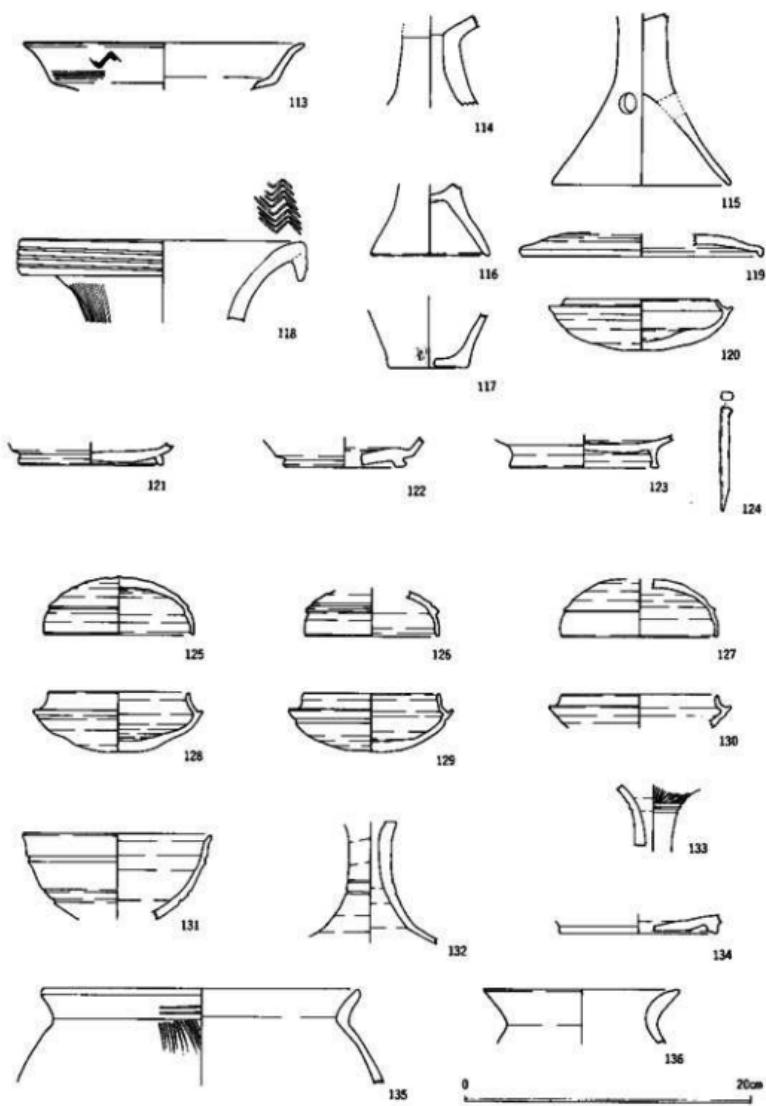
第48図 遺構出土遺物(4)



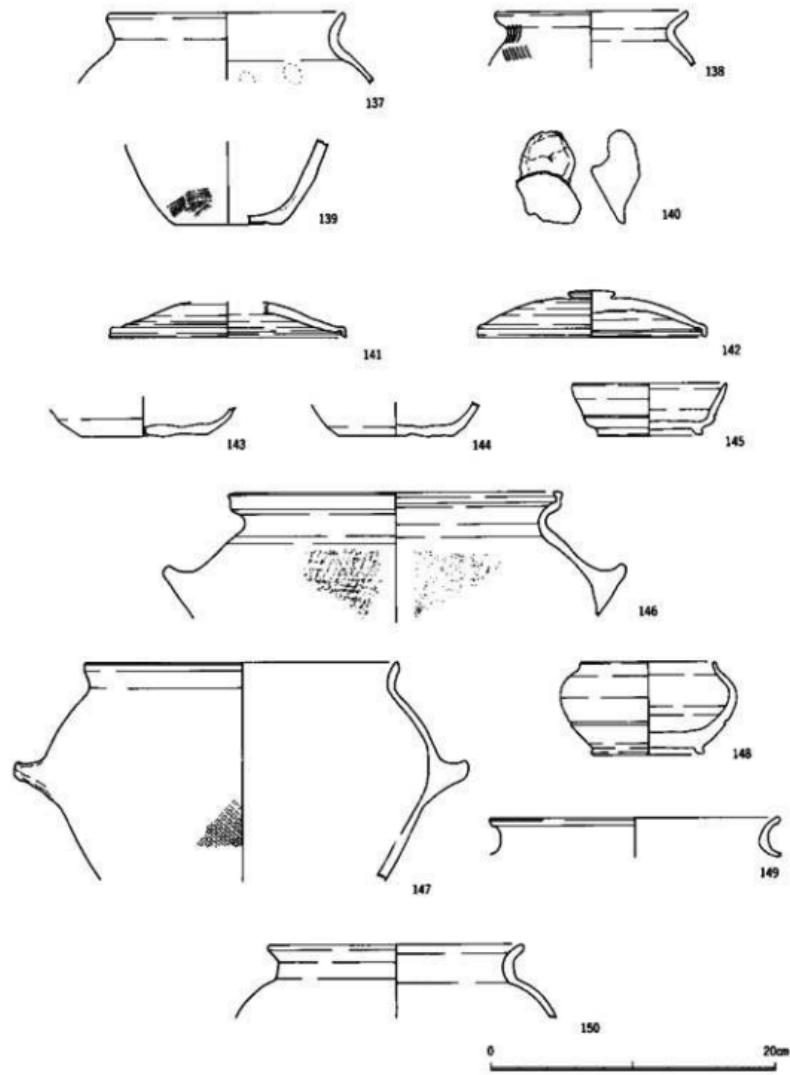
第49図 遺構出土遺物(5)



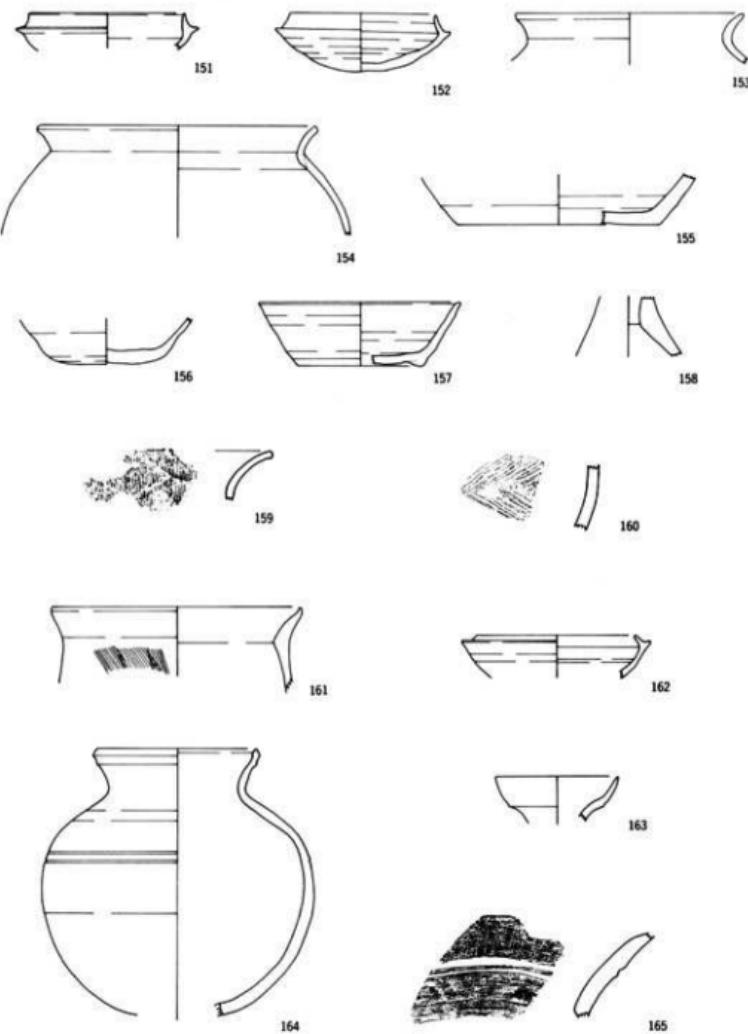
第50図 遺構出土遺物(6)



第51図 遺構出土遺物(7)



第52図 遺構出土遺物(8)



0 20cm

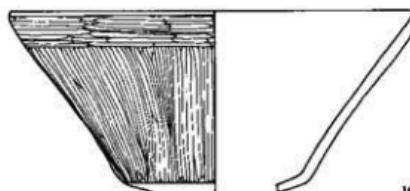
第53図 遺構出土遺物(9)



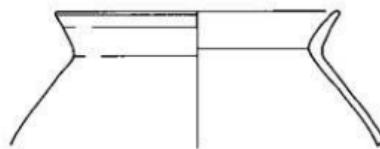
166



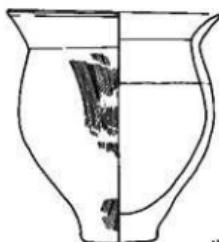
167



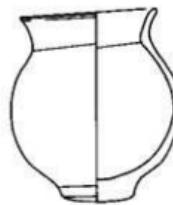
168



169



170



171



172



173



174



175



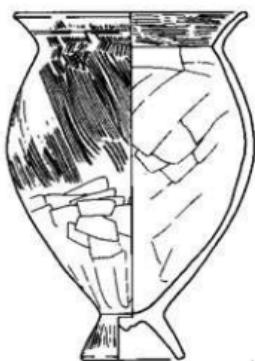
176



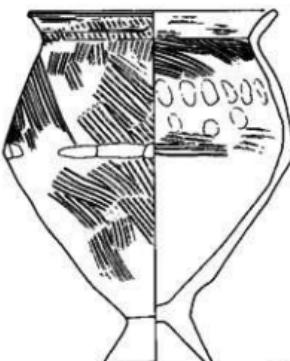
177

0 20cm

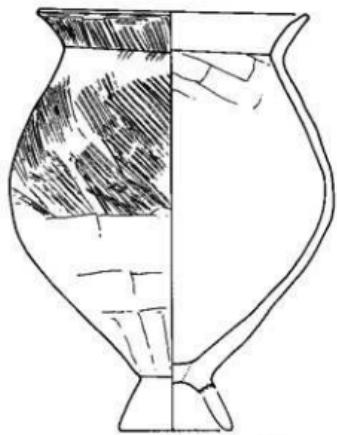
第54図 造構出土遺物(3)



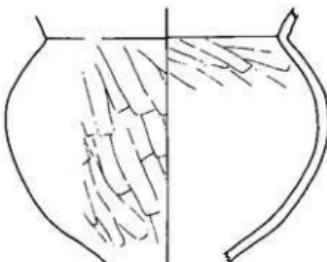
178



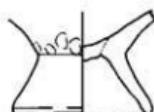
179



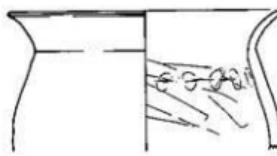
180



181



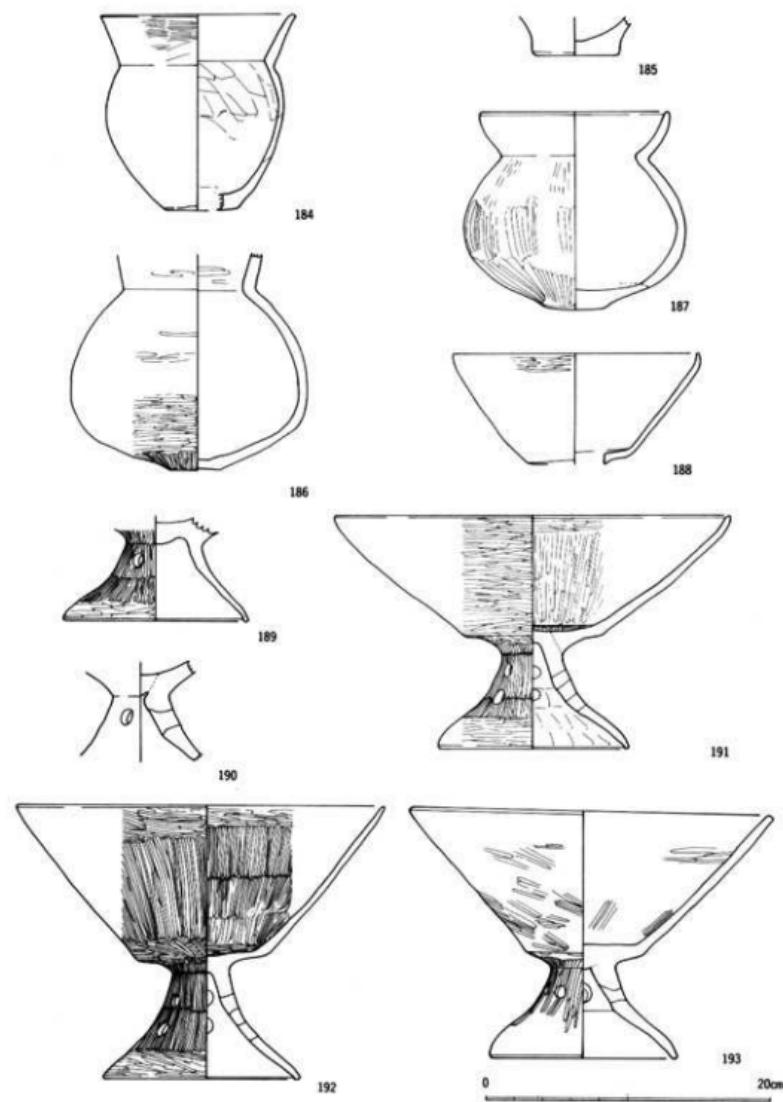
182



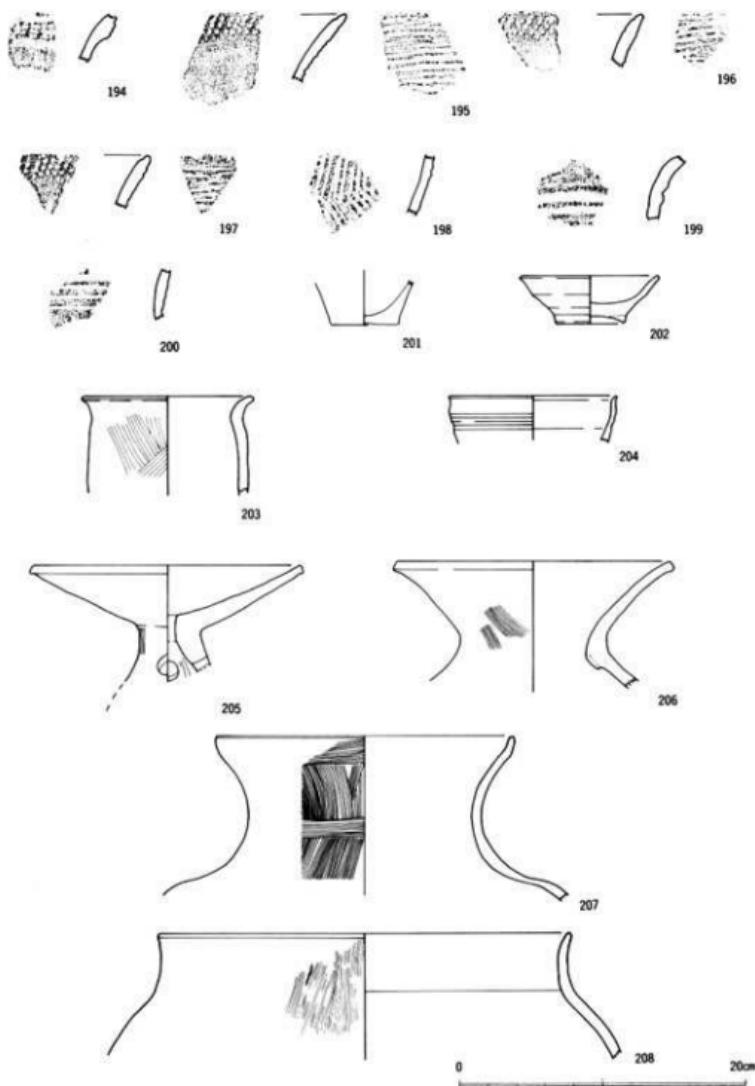
183

0 20cm  
scale

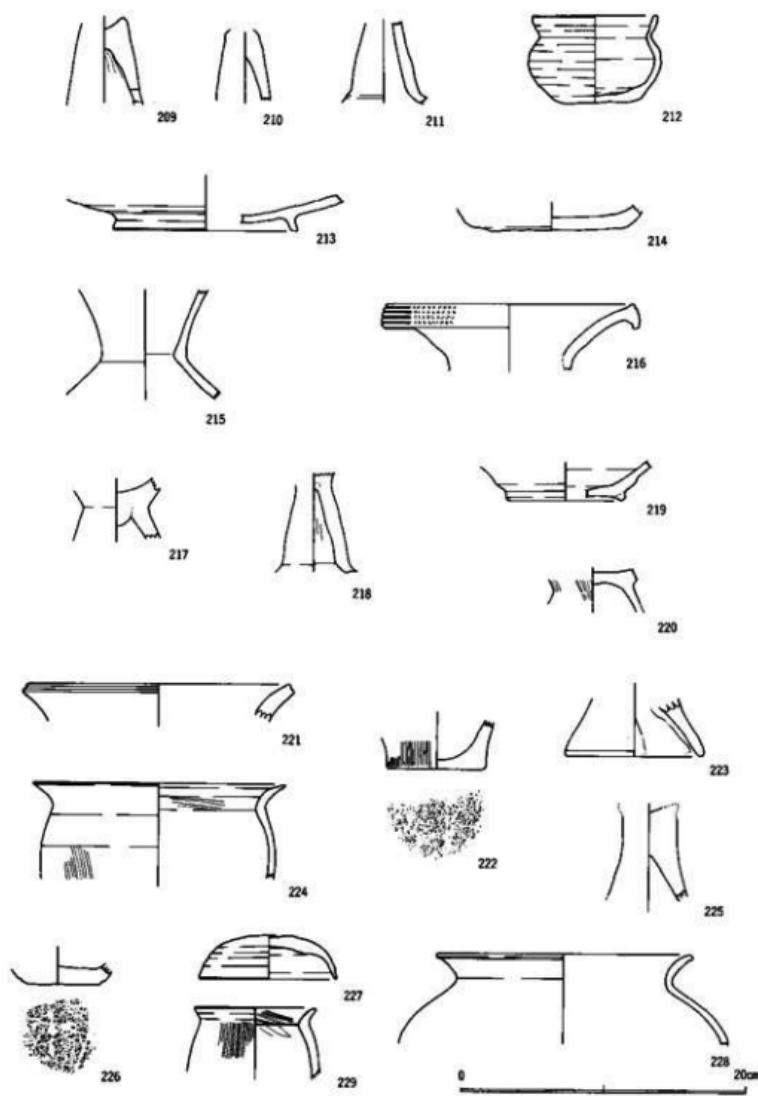
第55図 造構出土遺物III



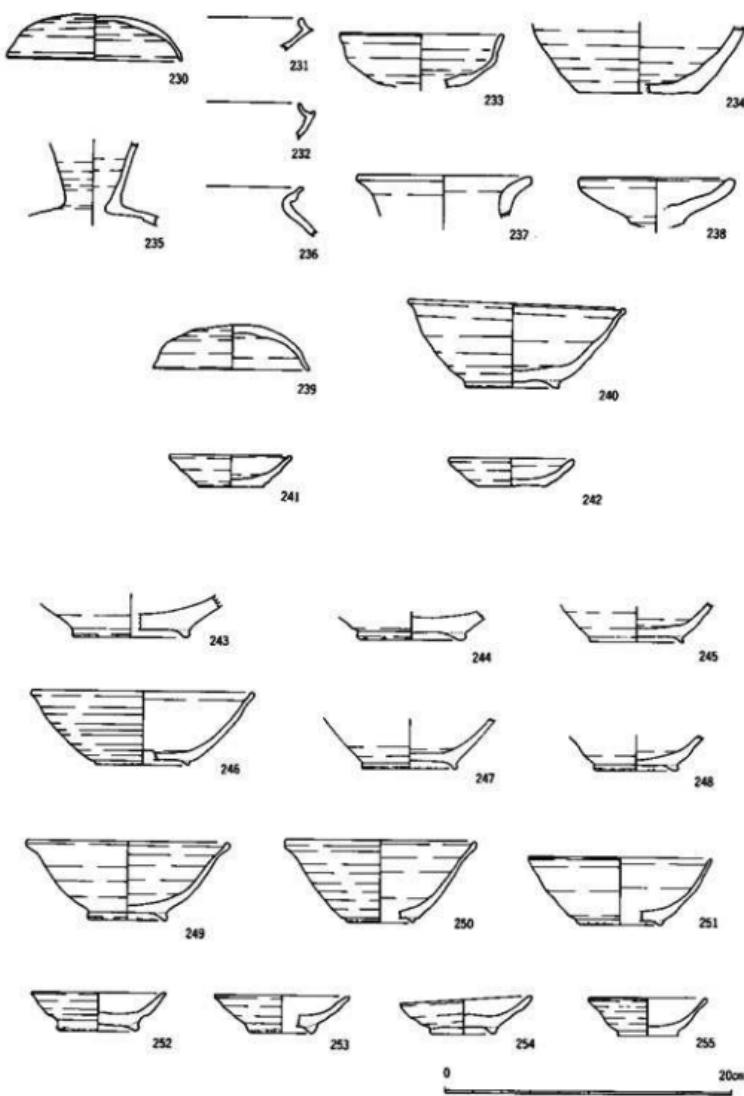
第56図 造構出土遺物02



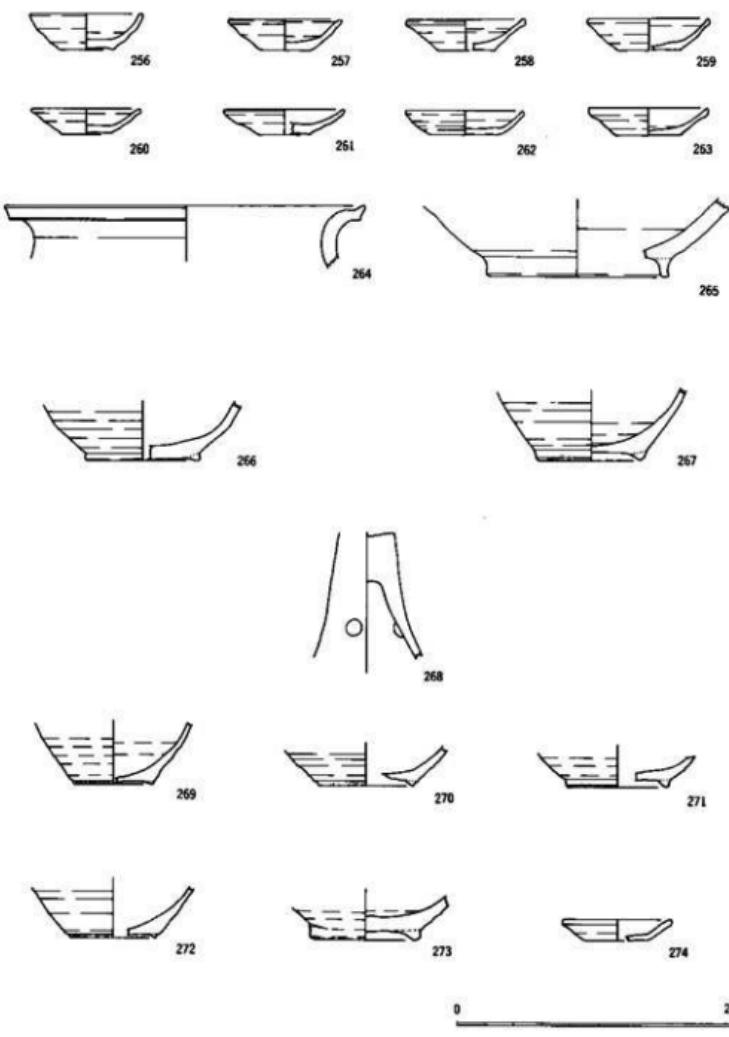
第57図 遺構出土遺物⑬



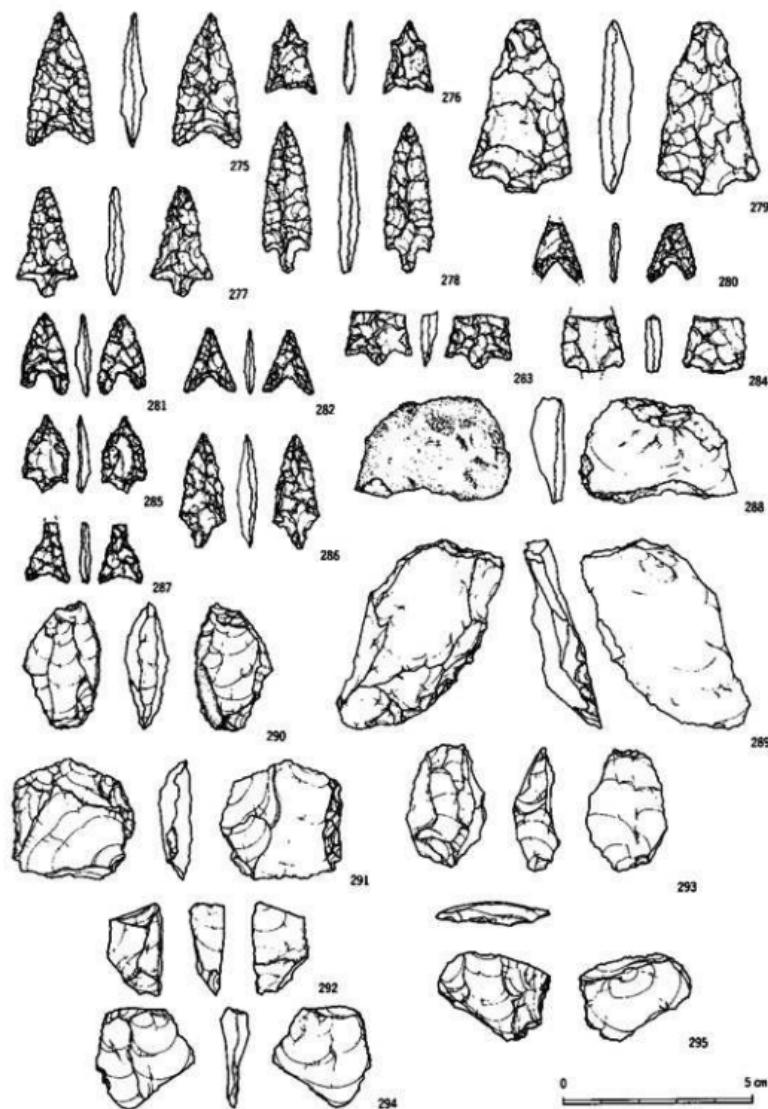
第58図 遺構出土遺物04



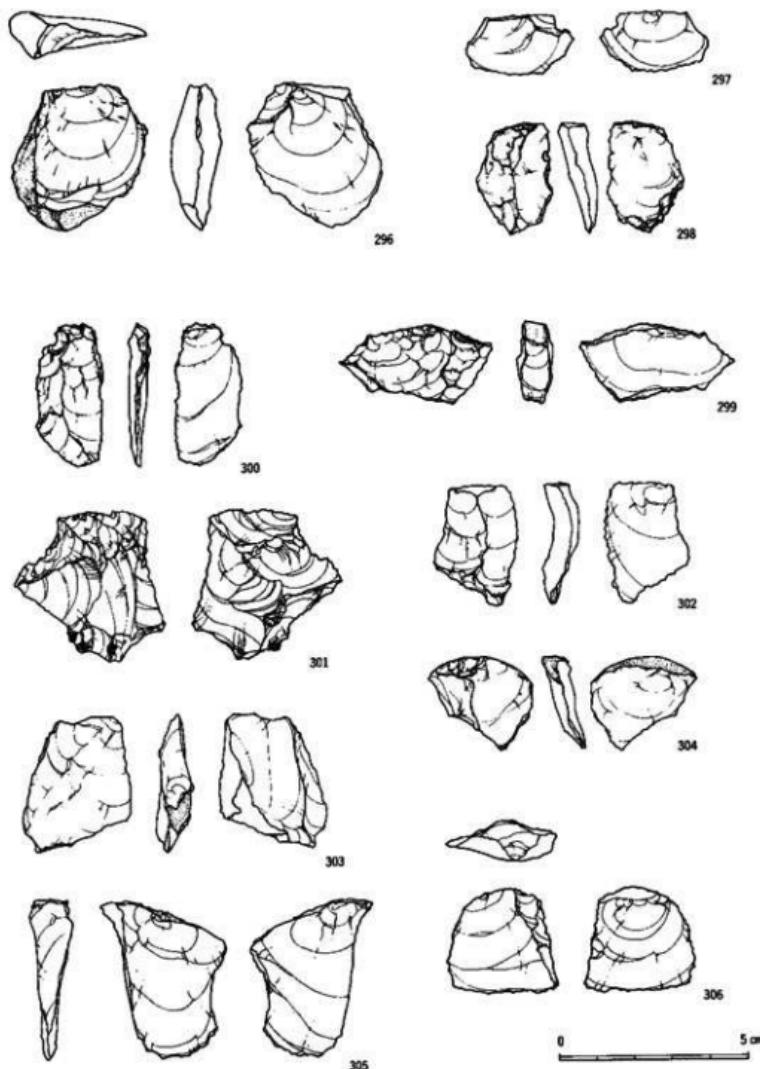
第59図 遺構出土遺物09



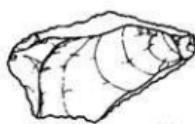
第60図 造構出土遺物15



第61図 遺構出土遺物(1)



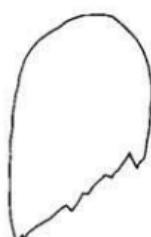
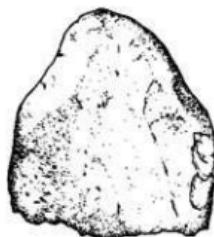
第62図 遺構出土遺物05



307



308



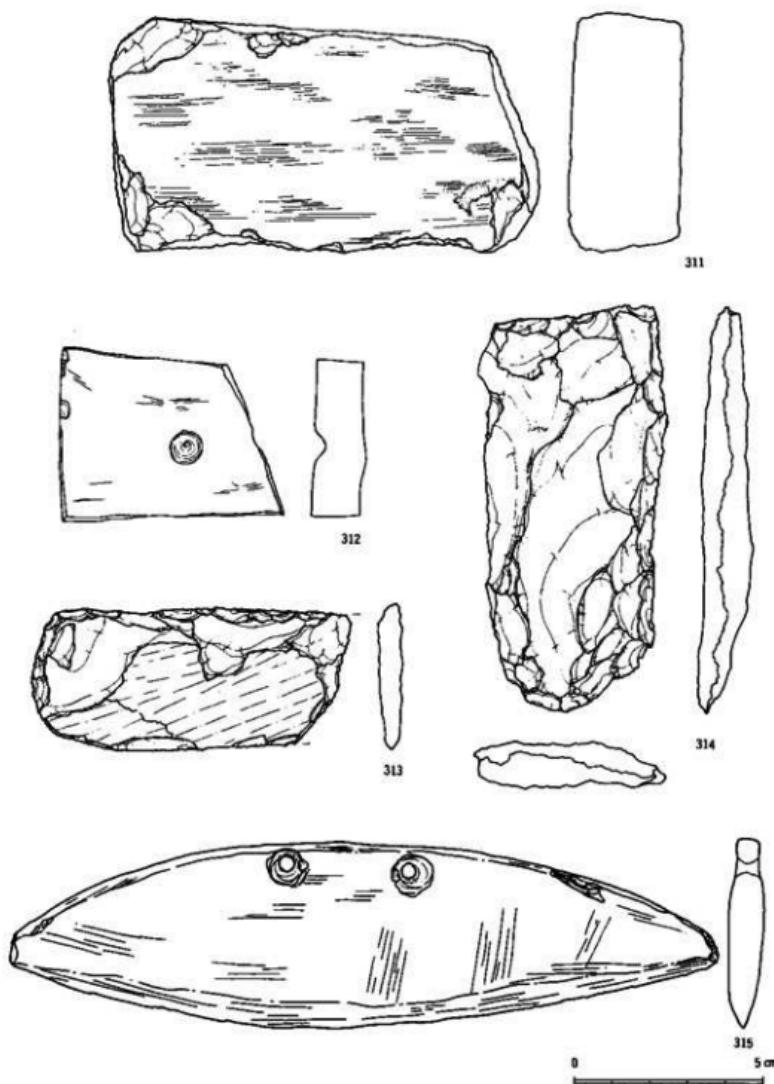
309



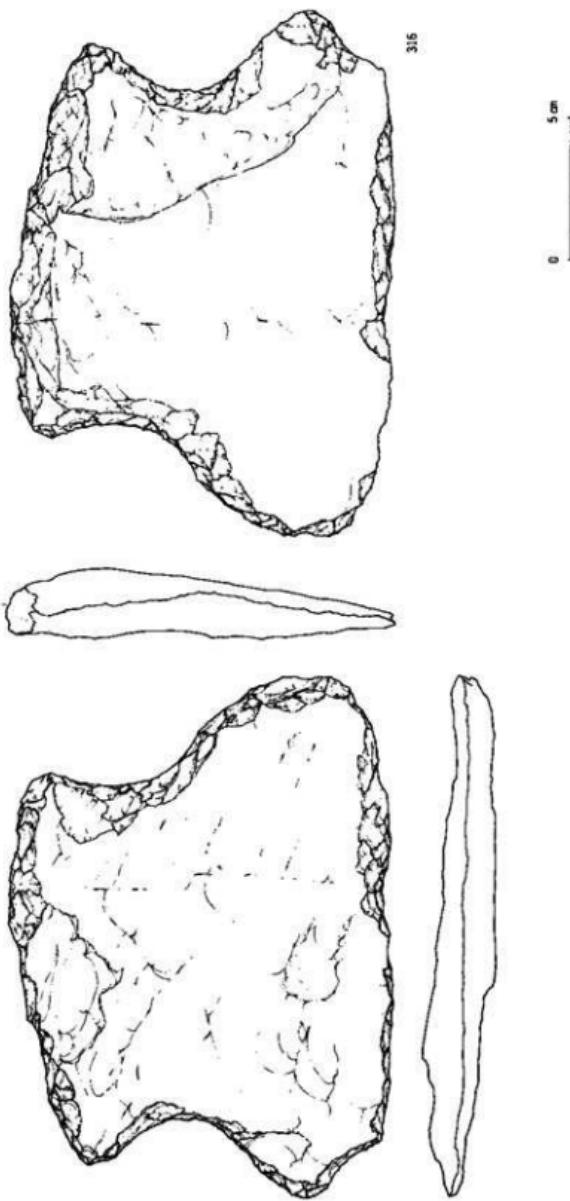
310



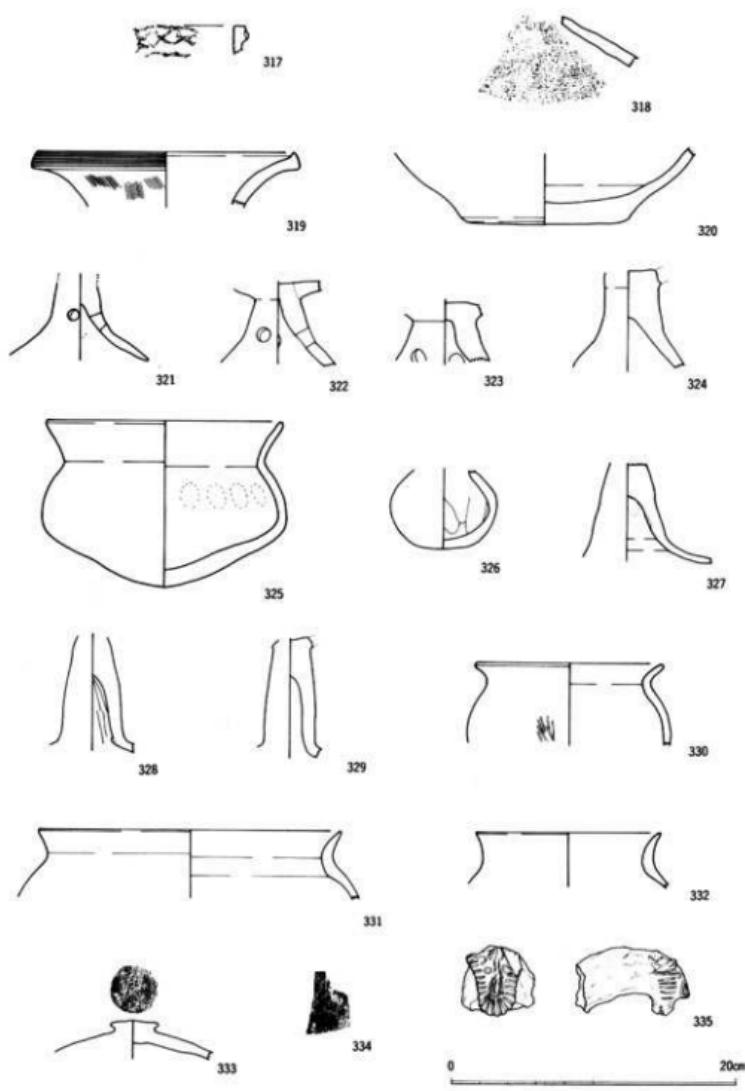
第63図 造橋出土遺物⑯



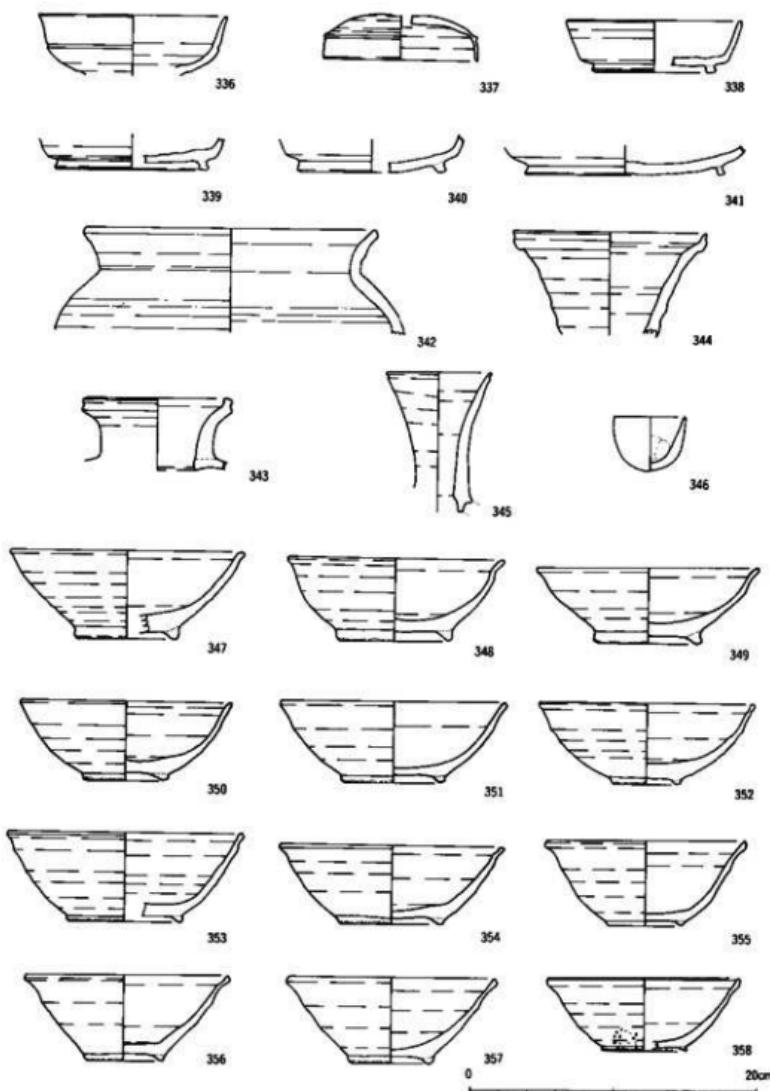
第64図 遺構出土遺物20



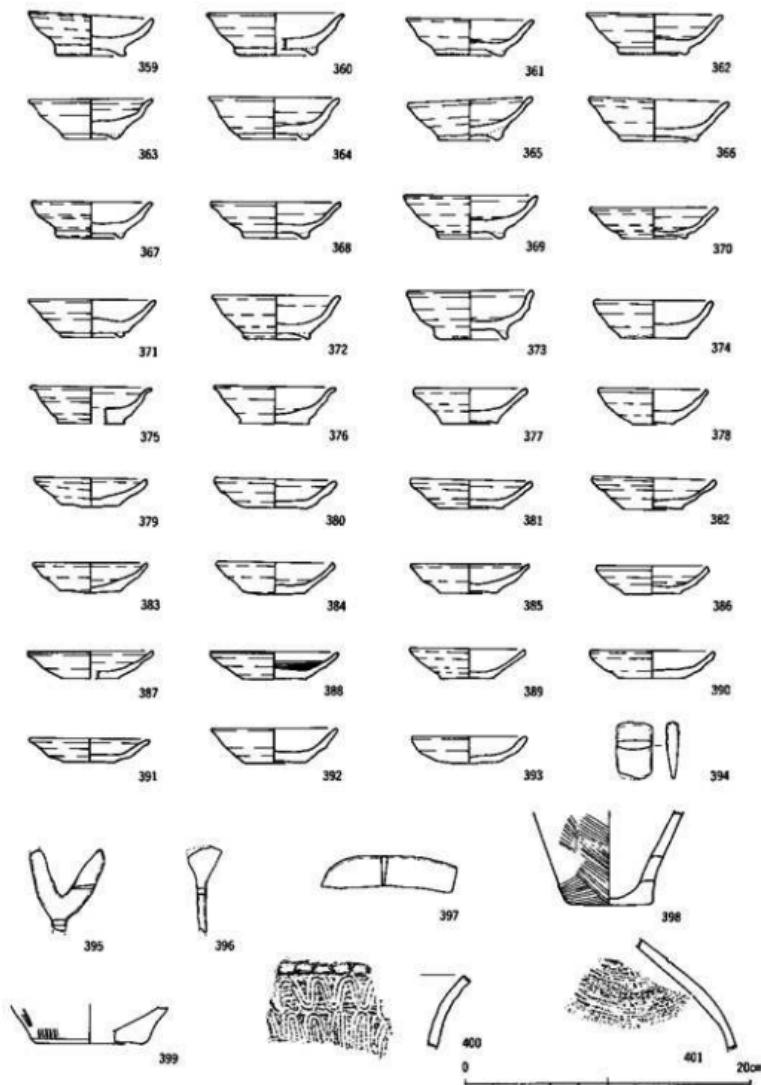
第65图 遗物出土遗物(2)



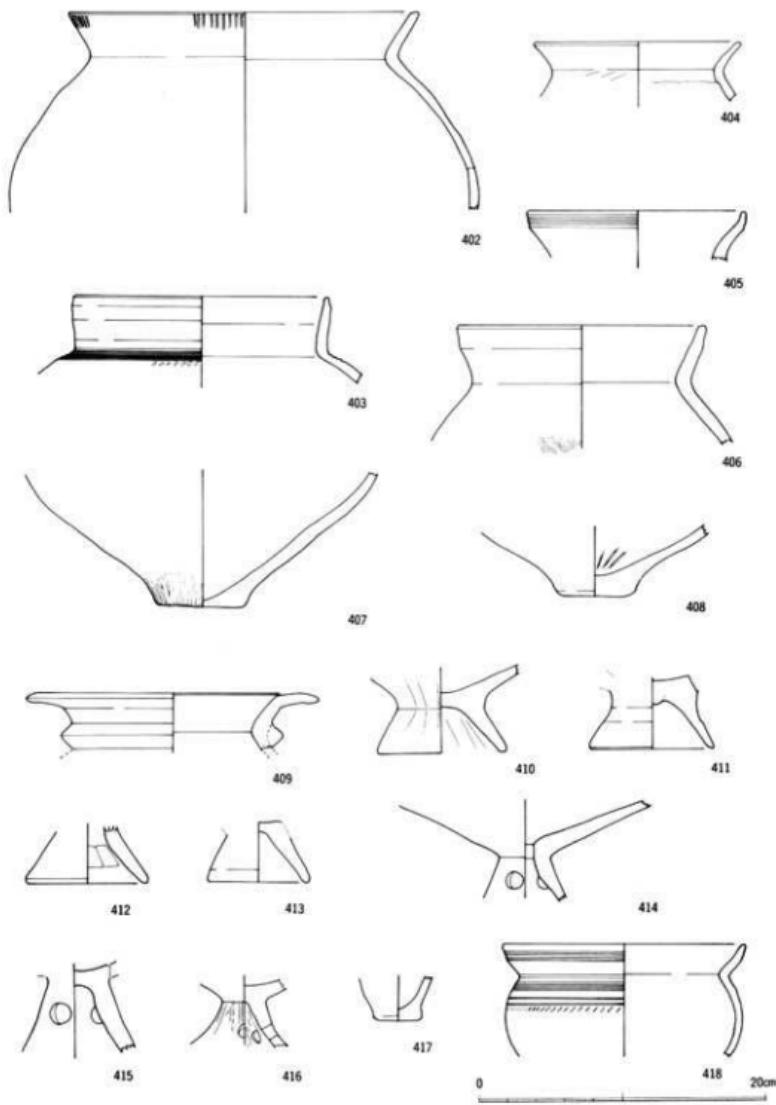
第66図 包含層出土遺物(1)



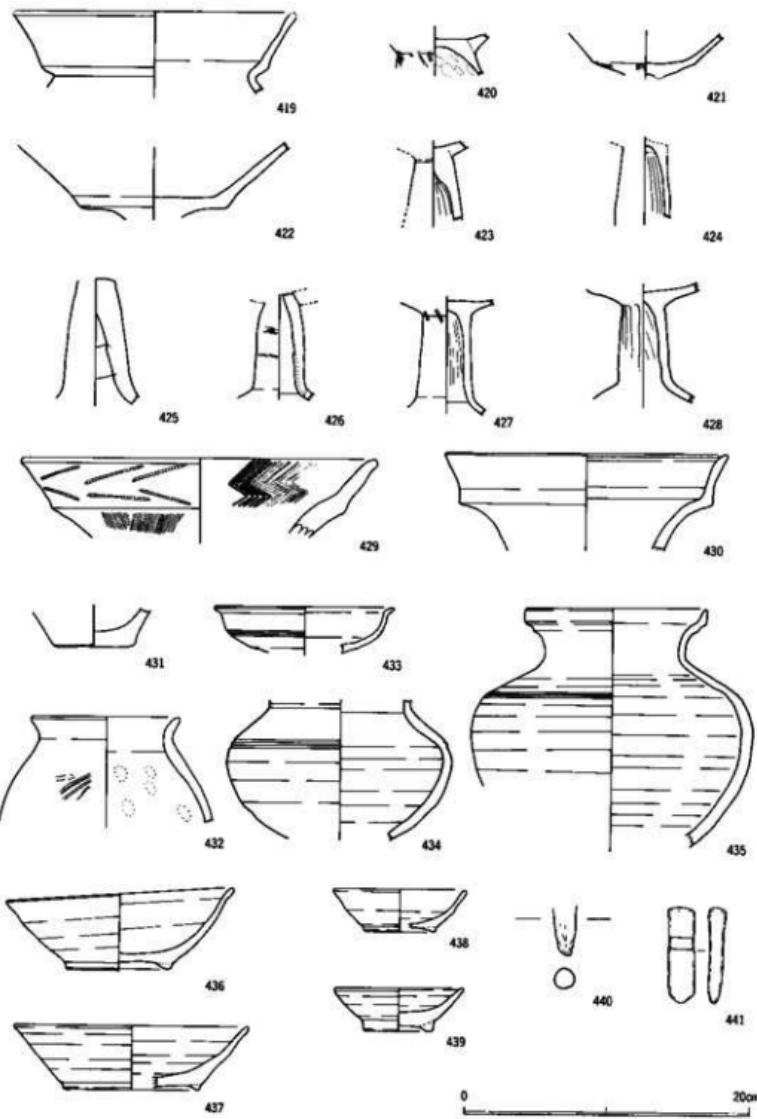
第67図 包含層出土遺物(2)



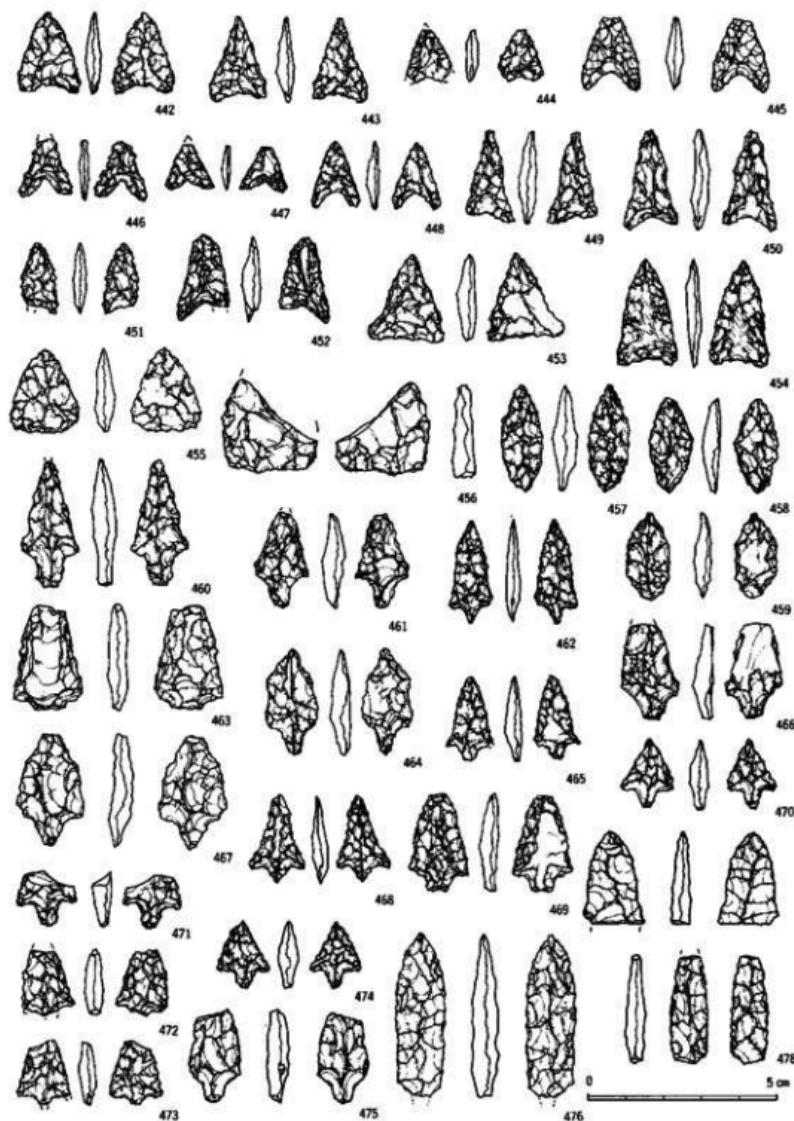
第68圖 包含層出土遺物(3)



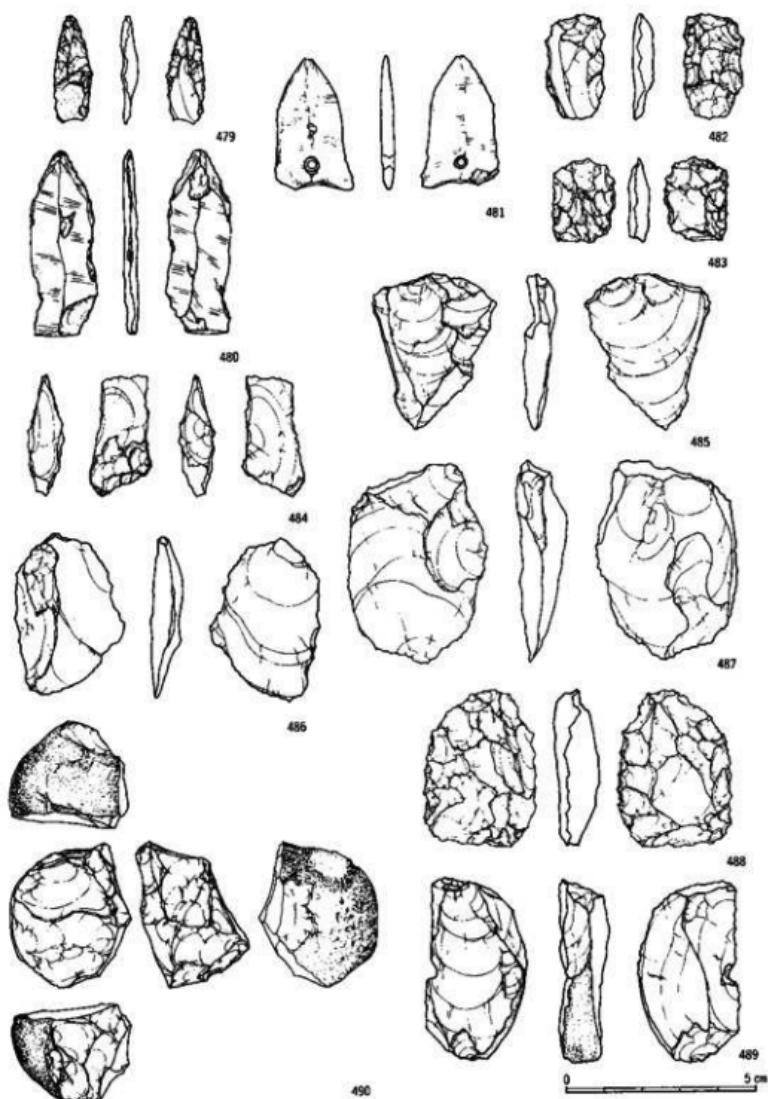
第69圖 包含層出土遺物(4)



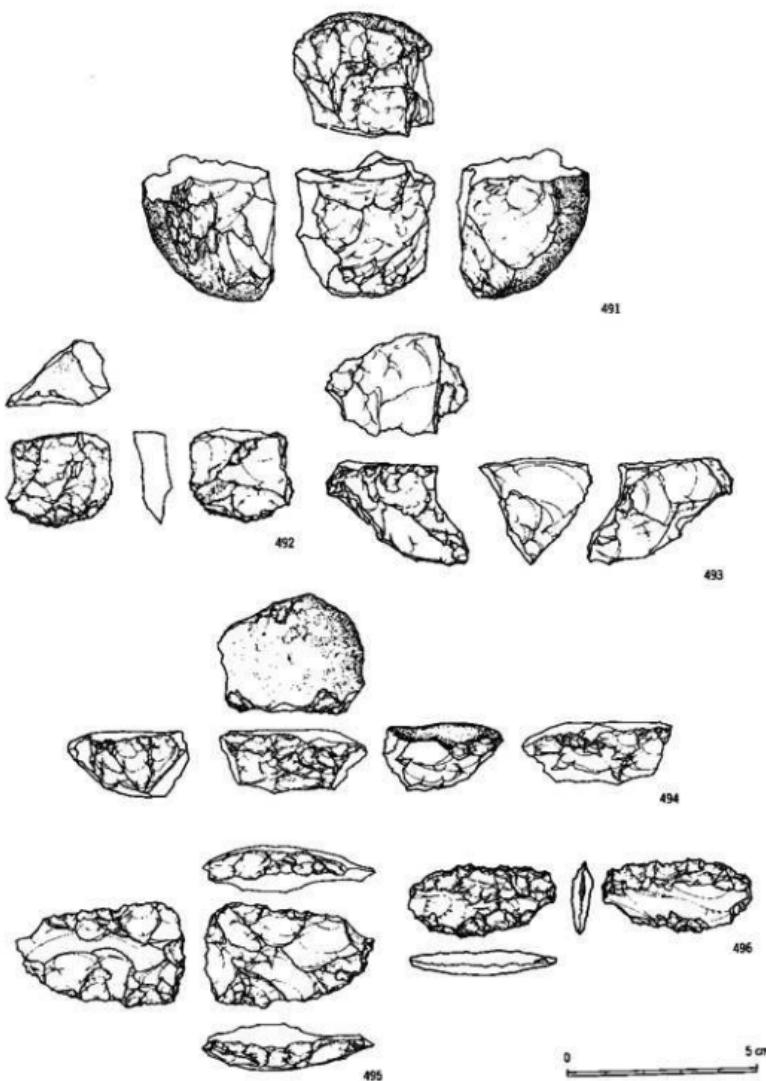
第70图 包含层出土遗物(5)



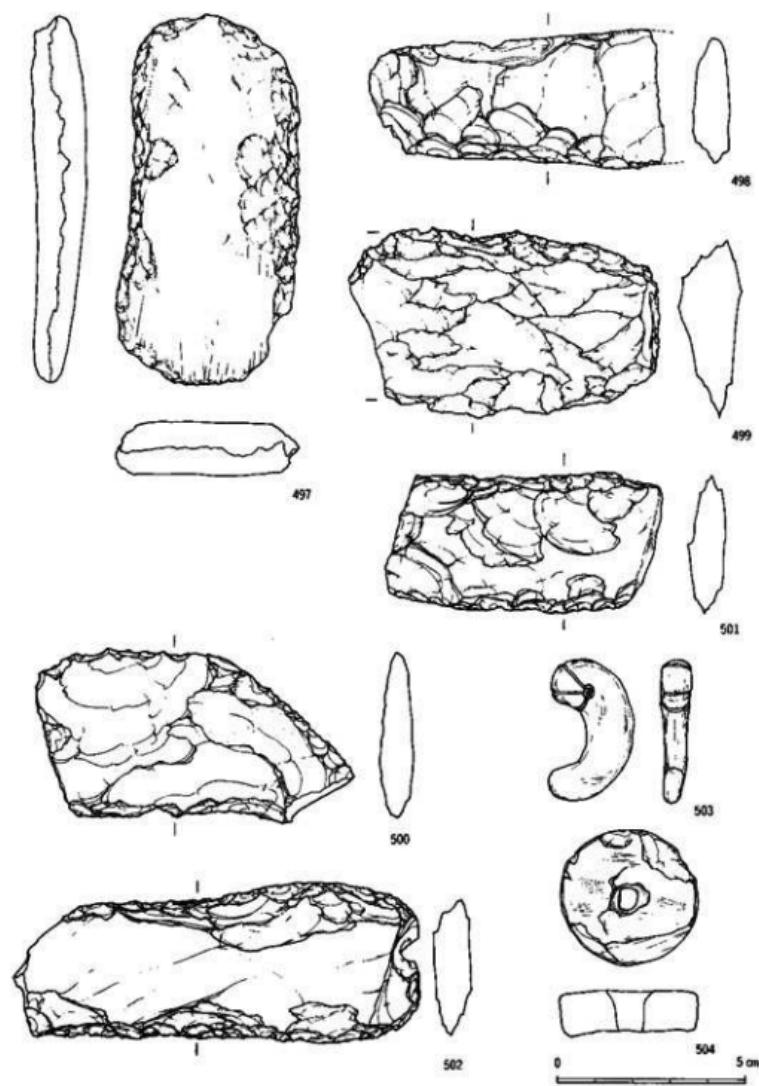
第71図 包含層出土遺物(6)



第72図 包含層出土遺物(7)



第73図 包含層出土遺物(B)



第74図 包含層出土遺物(9)

## 第VII章 まとめと考察

### 第1節 まとめ

今回の調査によって、尾崎遺跡では縄文時代晚期から中世にまで及ぶ長期間の人間の活動の痕跡を検出し得たのであるが、それぞれ各時期の遺構をすべて確認できたわけでもなく、もちろん空白の期間も存在する。ただし、6世紀前半でを欠くものの弥生時代中期～奈良時代にかけての竪穴住居址37軒を確認したことは、この地があらゆる意味において居住地として選択性が高かったかを認識できる。今回の調査区の北側には更に遺跡の広がりが予想され、本遺跡が大集落址としての景観を持つ可能性は非常に高い。尾崎遺跡の全貌については今後の調査成果に待ちたいが、今回の調査で確認できた遺構・遺物を大まかな分類を行なうと以下のVI時期に区分することができ、それぞれの時期について若干の検討を加えてみたい。

I期 弥生時代中期	1号住
II期 弥生時代後期後半	5・8・9・24住等
III期 古墳時代前期後半	2・3・7・12住等
IV期 古墳時代後期	カマド、須恵器をもつ竪穴住居址
V期 奈良時代	波迫編年IV期、刻印須恵器、羊形鏡
VI期 中世	白瓷系陶器が伴う建物址（墳墓？）

#### I期 弥生時代中期

所謂貝田町式と呼ばれる特徴を示す条痕をもつ斐形土器が伴う弥生時代中期に比定できる遺構は、1号住のみである。弥生時代後期の多く集中する本調査区の西側に位置するが、後期の竪穴住居址とは明らかにそのプラン、規模等を違える。南西コーナーを2号住に切られているが、ほぼプランは推定でき隅九長方形を呈し、推定床面積は約22m<sup>2</sup>である。県内の当該期の住居址について検討を加えた山内[山内1991]によれば牧野小山遺跡[美濃加茂市教育委員会1973]Y1・10他、根本遺跡S B 3・7、半布里遺跡[富加町教育委員会]等に形状・規模について類似性が見いだされ、中期から後期に移る段階で住居プランが方形へ変化していく画期があるという。本遺跡の1号住は他の点——4本柱構造、火処をやや東側に持つ等——でも根本遺跡S B 3・7と共に通点を備え、当地域の中間に属する典型的な住居と言えよう。

遺物については、貝田町式に比定した斐形土器は、近年においては形態の変化を伴いながら高蔵期まで存続することが報告されているが、1号住では他にあまり類例のない小型の變が伴

うのみで時期の細分については検討を要する。

### II期 弥生時代後期後半

弥生時代後期後半に比定できる遺構は、5・8・9・24号住等がある。これらの住居址は本調査区の中央に入る谷状地形の西側に位置している。これらは、出土した遺物から見ると全てが同時期というわけではない。第IV章で述べたように、加納俊介氏の編年観で言うと、瑞穂期・能田旭期前半・同後半という三時期に分けられそうである。時期を細分すると、それぞれの小期に属する遺構は極めて限られてしまい、同時に存在したと考えられる遺構配置を知り、それを正しく評価することは困難となる。

遺物の点に対しては、上述の三時期は端的に言えば高坏の脚部の短脚化の度合いによって区分される。これは、基本的には尾張地域と変化を共にしていると考えてよいであろう。しかし、能山旭期の土器に関してみると、S字状口縁台付壺や受け口状口縁台付壺等、尾張地域・美濃平野部では見られるが本遺跡では全く出土しない土器があることも重要な事実である。

弥生時代後期後半の遺跡は、美濃加茂市内では比較的多く存在するが、それらのほとんどが木曾川の形成した段丘上に分布している。その中で尾崎遺跡は、南側に広がるこれらの段丘と更に約10mの比高差をもつ丘陵上に立地している。高地性集落とは言い難いが、こうした高い位置に集落を形成しているのは何等かの理由が存在すると考えられるが、類例の増加を待って検討すべき問題であると考える。

### III期 古墳時代前期後半

この時期に比定できる遺構は、3・12号住が代表的なものと言えよう。本調査区中央部に入る谷状地形を取り巻くように分布している。この時期を特徴づける遺物は、S字状口縁台付壺と屈折脚の高坏であるが、前者は出土していないが後者が出土していることからこの時期に比定した住居址もある。そういう住居址は、遺物の遺存状態があまり良くない状況を示していることより果たして本来よりS字状口縁台付壺を欠いていたかのかどうかは判然としない。

3号住及び12号住は、ほぼ同時期と考えることは第IV章で述べた通りであるが、ここから出土した土器は、古墳時代前期後半の良好な資料と考えられるので、少し触れておく。

壺はS字状口縁台付壺（口縁部が直立する所謂山陰系のものも含む）からなり、それは尾張等で見られるものと製作・調整法に極めて忠実である。高坏では、12号住では緩やかに外反する脚のものと屈折脚のものが共に出土しているのに対して、3号住では屈折脚のものからなる。両住居址とも高坏の個体数がやや少ないため、これを単純に時期差に置き換えることは控えた。壺では、12号住より有段の口縁部もつものと、柳ヶ坪型壺が出土している。その他、3号

住からはX字形の小型器台、12号住からは小型有段鉢が出土していることに注目したい。これらの土器は編年的には加納氏の西北出期に、赤堀氏の松河戸I式の前半に比定することができるので、在来の土器の他に畿内に由来する土器が加わった組成を持つもので、これは広く東日本と共通する特徴である。

近隣の各務原市八龍遺跡A地点でもこの当該期の住居址が確認されているが、八龍遺跡ではS字状口縁台付甕を持つ住居と持たない住居が判明している。しかし、八龍遺跡のS字状口縁台付甕は、その製作・調整法に忠実なものがある反面口縁部が厚く屈折が崩れてしまったり、外面の刷毛目が著しく疎らであるものなど稚拙な作りのものがかなりある。この時期は、S字状口縁台付甕がその盛行のピークを過ぎた時期であり、S字状口縁台付甕個体そのものが製作・調整法の規範の厳密性を失うと共に、一住居内における他の甕との組成の在り方も多様になっていることが窺えるのではないだろうか。

3号住では方形に張り出した部分に「類カマド」的な構造である可能性を考えてみたが、当地域において竪穴住居にカマドが付いてくる時期を考える上で貴重な資料であると考える。類例の増加を待って検討したい。

#### IV期 古墳時代後期

この期に比定できるのは、15、21号住等がある。本調査区の東側に位置している。この時期を特徴づける竪穴住居は、北壁にカマド、北東コーナーに貯蔵穴、周溝等強い規範性を感じられ古墳時代後期の住居の持つ特徴を良く示している。カマドは粘土で構築しており、重竹遺跡〔関市教育委員会1984〕川合遺跡〔可児町教育委員会1978〕等と同じ構築方法である。15号住は、カマドの支脚に河原石ではなくシルト塊を直方体状に切り出し使用しているのが特徴的である。他の住居でも床面上に碎けた状態でシルト塊が散在しており、該期に積極的に利用された状況が窺える。

遺物は、須恵器・土師器で占められるが、須恵器が主体的である。やはり背後に美濃須恵、猿投等須恵器の生産地に近い地理的な条件が想定されるが、15住には畿内系と考えられる坏蓋も数点存在している。

#### V期 奈良時代

この期には、弥生時代後期に続きた多くの住居址が存在する。16、20、23、28住等がある。前時代に引き続き、カマド・プラン・貯蔵穴・周溝の存在に強い規範性が見られるが、23号住のみカマドが東壁に構築されている。本調査区の中央に位置する谷状地形より東側に分布するが、谷状地形を埋める黒褐色土、褐色土を掘り込み住居を構築している点が注意される。この時代

においては谷状地形もかなり埋まり現在と近い状況を呈していたと考えられるが、水捌け等を考えると地形的には良い地とは言えず、意図的なものがあったのだろうか。

遺物は、やはり須恵器が主体を占め、土師器が若干伴うが、遺物の残存が悪い状況が多く本来の状態を示しているのかは疑問が持たれる。須恵器は、やはり美濃須恵が多く、やはり本地域の特徴であろう。住居内出土ではないが「美濃国」刻印のある壺蓋、壺、羊形硯の存在、本遺跡が占める位置的な条件(可児市宮之脇遺跡[可児市教育委員会1976]、富加町東山浦遺跡[富加町教育委員会1978] 等との関連)も加味して注目に値しよう。

#### VII期 中世

この時代に属する白瓷系陶器の碗、皿は非常に多く出土しているが、確認できた遺構は1、2号建物址、1～3号溝、1号土坑のみである。1号建物址は、谷状地形のやや西寄りに位置している。南壁側を地傾斜により流失しており判然としないが、北壁で観察すると竪穴状に地山(第III層)を掘り込み、削平地内に掘建柱建物が存在したと考えられる。京都府福知山市大道寺跡[京都府埋蔵文化財調査研究センター1983]、同福知山市宮墳墓群[京都府埋蔵文化財調査研究センター1988]、同熊野郡久美浜町日光寺遺跡[京都府埋蔵文化財調査研究センター1990]等の中世墳墓に伴う建物について考察を加えた森島[森島1991]によれば、第一に建物の東西方向が南北方向より長く、方位を意識している。第二に墓地の西側に下方に建物をたてる意識がある、第三に平坦地を造成しているという共通した認識が存在するという。本調査においては、第二の特徴については確認し得ないが、第一、三の特徴に非常に近いものが考えられる。墳墓に伴って建物を建てることは、天皇陵の場合には平安時代前期から見られるが、11世紀以降において支配階級の墓制として「墳墓堂」が用いられ、鎌倉時代には支配者層の間に流行している。この遺構が確認されているのは、大阪府大阪市喜連東遺跡[大阪市教育委員会1987]、栃木県国分寺町下古館遺跡[栃木県文化振興事業団1988]、愛知県一宮市・葉栗郡木曾川町田所遺跡[愛知県埋蔵文化財センター1994]がある。本遺跡の建物址については、堂下に遺骨を納めた痕跡については本調査において確認されておらず判然としないが、これに類する例であることは確かであろう。このように考えるのなら、この地が中世においては、集落としてではなく墓域、あるいは死者に対する追善供養の場として機能していたことが想定され、本調査区の北側に中世墓が展開している可能性が非常に高い。

遺物に関しては、所謂北部系の白瓷系陶器(碗、皿類)がほとんどを占めるが、僅かに南部系も認められる。

## 第2節 考 察

### I. 弥生時代後期後半の土器に現れた地域差について

今回の尾崎遺跡の調査で、24号住から弥生時代後期後半の住居に伴う一括資料を得たのははじめとして、住居に伴うと思われる弥生時代後期後半の土器を比較的多く得た。美濃では、この時期の良好な資料がなかったため、土器の様相が知られておらず、尾張と共に濃尾として一括されることが多かったが、尾崎遺跡24号住の土器は、必ずしも尾張と一括できる内容ではない。そこで本稿では、今回得た資料を、土器の実態が明らかになっている尾張低地部とおもに器種、形式構成に着目して比較し、異同を確認し、その背景について考えてみようと思う。なお、形式ごとに設定される型式も比較の対象としなければならないが、今回は行わない。

#### 1. 前提

尾崎遺跡24号住の土器を弥生時代後期後半のものであると述べたが、赤堀次郎氏の編年【赤堀1990】に従うならば廻間I式の後半にあたり、古墳時代の土器、すなわち土師器ということになる。しかし、本稿では弥生土器と土師器の境界を、全国的な土器の交流や小型精製器種の有無におこうと言う加納俊介氏の提言【加納1986】【加納1991】に従い、加納氏の編年による瑞穂期及び能田旭期を弥生時代後期後半と表現する。その中でも、本稿で取上げるのは専ら能田旭期である。また、能田旭期は高杯の形態変化などから更に細分ができるが、本稿では相対的な新古には言及するけれども、細分した小期を設定することは行わない。

また、比較する基準となる尾張低地部の土器については、すでに赤堀次郎【赤堀1990】、加納俊介【加納1991】、宮腰健司【宮腰1993】をはじめとする諸氏の業績があり、かなりの程度土器の実態が判明している。器種、形式構成を中心に予め整理しておくことにする。これまでの成果によると、甕はくの字状口縁台付甕、受け口状口縁台付甕、S字状口縁台付甕からなり、その中でどの形式が主体となるかは遺構毎に違うが、三者は多くの場合併出する。S字状口縁台付甕は、能田旭期にはじめて出現する甕の形式である。壺では、いわゆる鋸歯文バレス壺と、単純口縁のものがある。バレス壺は、拡張した口縁に擬凹線文を持ち、口縁は平坦或いは内湾した文様帶を持つ。文様としては、基本的に鋸歯文が採用されている。高杯は、有稜高杯と梳状杯部の高杯があるが、数量的には前者が多く、廻間遺跡SB3【愛知県埋文センター1990】を見ると、住居で用いられたのは圧倒的に前者である。また、有稜高杯では杯部口縁部内面に多条の沈線を施したものや、法量がやや小さく、低脚なものがある。直口壺は、長頸のもの、細頸のもの、短頸の狭義の瓢壺がある。そのほかの器種としては、器台があり、これは通有の

大きさのもの他に法量の小さなもののが存在する。<sup>1)</sup>

## 2、尾崎遺跡と木曾川中流域の土器の検討

さて、前項で整理した尾張低地部の資料と今回得た尾崎遺跡の資料及び近隣遺跡の土器を比較してみよう。尾崎遺跡で検討の対象になり得るのは、8・22・24号住であり、相対的な序列としてはほぼこの順序となろう。

尾崎遺跡での事例について詳細は第IV章に譲り、尾張低地部との比較検討の結果本稿で問題となる点だけを述べる。

- a 瓢についてはくの字状口縁台付甕を主体としている。特に、24号住の一括資料では、出土した甕の多くがプロポーション等にばらつきを見せながらも、くの字に外反する口縁を持ち、体部外面を粗い条痕的な調整を施し、下半にケズリ、内面もケズリという調整方法を共有している事が特筆される。受け口状口縁台付甕はない。ただ、24号住の場合、時間的に受け口状口縁台付甕は見られない可能性も考えねばならないが、8・22号住からも受け口状口縁台付甕は出土していない。S字状口縁台付甕はまったく出土していない。
- b 高杯は、有棱高杯が多く出土しているが、椀状杯部の高杯は明確な資料がない。但し、法量がやや小さく、外反する脚部は数点出土しており、椀状杯部の高杯も実際には存在したと思われる。有棱の高杯は、24号住から4個体ほど出土している。形態のばらつきが大きいが、口縁部に明確な内傾面を持たないのが特徴と言えよう。そのほか、同じく有棱高杯ではあるが、法量が小さいものがあることに注意したい。

c 直口壺は、長頸の直口壺と細頸の直口壺がある。

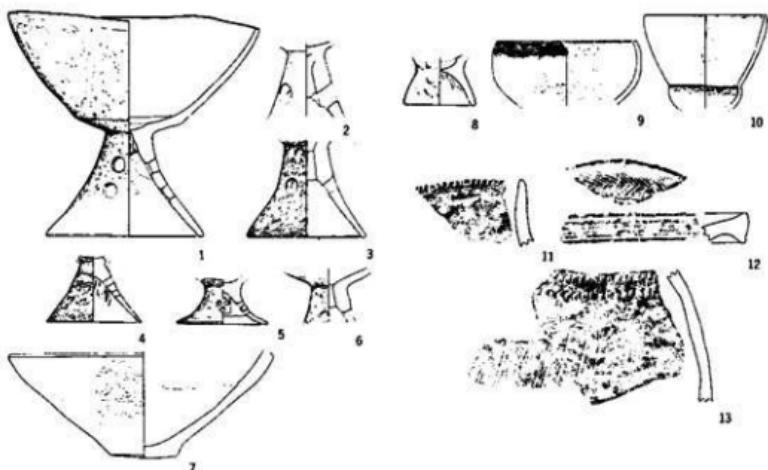
d 壺については資料がない。

e 器台は、通有の法量のもので小型品は存在しない。また、尾張低地部などで見られる口縁を拡張し、擬円線文を施すものも存在しない。

f 22・24号住では鉢と分類した、法量が小さく、単純に外反する口縁を持つ煮沸用いたであろう土器がある。一方、II径が大きく、浅い器形の鉢は存在するがあまり目立たない。

以上が、尾崎遺跡の土器について尾張低地部と比較した時に注意される点である。尾崎遺跡の資料の具体相には尾崎遺跡を残した小集団の固有の事情が反映しているわけで、それを検討することが重要であることはいうまでもないが、本稿では遺跡単位の事情はある程度捨象して、地域の問題として把握しようという立場にたって、近隣の遺跡に目を転じる。

美濃加茂市内の遺跡では、同じく弥生時代後期後半に属する住居址が検出されている今遺跡〔岐阜県教委・美濃加茂市教委1979〕をみておく。<sup>2)</sup>今遺跡の7号住居址出土の遺物（第75図）は尾崎遺跡の8号住に近い時期が想定できるものである。先に示した尾崎遺跡の注意項目に従ってみてみると、aは甕の出土がほとんどないため知り得ない。bについては、4が椀状の



第75図 今遺跡7号住居出土遺物

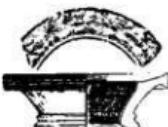
杯部をもつ高杯になると思われる。また、5は脚部のみだがあまり類例のない器形であり、4のような椀状の杯部の高杯とは別形式と考えたほうがよいと思われるが、今後の資料の増加を待ちたい。有棱高杯では口縁部に明瞭な内傾面は持たない。

cでは、長頸の直口壺と思われるものが2号住居址から出土している。

dでは、今遺跡の7号住居址で、いわゆるバレス壺(11)が出土していることが挙げられる。今遺跡出土のバレス壺は、全体が知り得るものがないため、体部の文様構成はわからないが、口縁形態は、浅井和宏氏の分類【浅井1986】によるC類(新)である。バレス壺が住居で用いられていたものと考えてよいだろう。また、10は台付の器形となるものと考えられ、尾張では能田旭期よりは瑞穂期に類例が求められよう。

そのほか、美濃加茂市内では採集資料ではあるが長福遺跡【美濃加茂市1980】の有棱高杯があるが、これも口縁に内傾面を持たない。

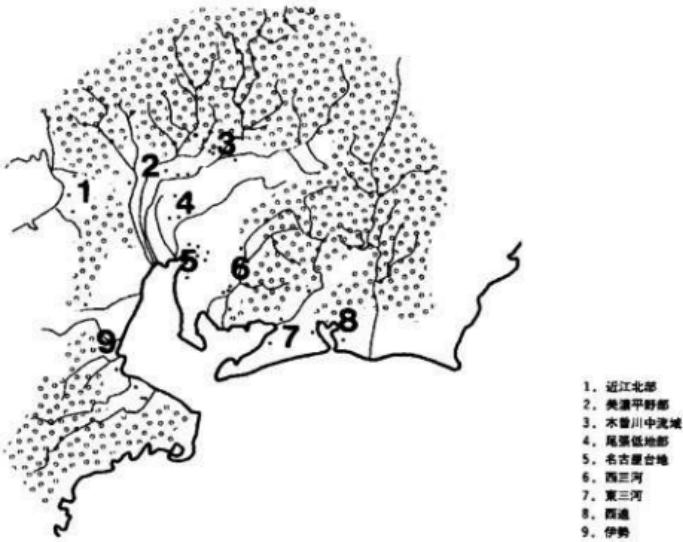
美濃加茂市とは木曾川を挟んで対岸に位置する可児市宮之脇遺跡【岐阜県教委・可児町教委1976】でも有棱高杯の出土があるが、これも口縁部に内傾面を持たない<sup>3)</sup>



第76図 今遺跡31号住居出土バレス壺

さて、以上のように木曾川中流域の遺跡出土資料を見てきたが、先述したように遺跡固有の事情を捨象して、ここで得た知見を木曾川中流域の特徴として理解しておきたい。

木曾川中流域に見られる土器の特徴を整理しておく。まず甕に関してはS字状口縁台付甕、受け口状口縁台付甕がほとんど見られない。尾崎遺跡24号住では甕は、くの字状口縁台付甕一形式から構成されており、多様な形式構成を見せる尾張低地部とは対照的である。高杯では有稜高杯が数量的に見て主体となり、これらは口縁部に明確な内傾面を形成しない。更に、法量がやや小さいものもある。椀状の杯部を持つ高杯も数量的には僅かであるが存在する。また、今遺跡7号住居址5は別形式の高杯の存在を示唆するものかもしれない。高杯の形式構成としては、尾張低地部に比較的近いと見てよいだろう。壺では、いわゆるバレス壺が採用されている。文様構成は不明であるが、口縁部で見る限り尾張低地部との類似度は低くない。直口壺では、長頸及び細頸のものがある。その他では、器台、台付壺なども採用されていたことが確認できた。木曾川中流域で用いられた土器は、高杯、バレス壺、器台、台付壺など多くが尾張低地部と共に通である。一方で、甕の形式構成、法量の小さな器台、浅い器形の鉢の存否など一部



第77図 地域設定図

表44 各地域における一括資料の序列

	美濃	尾張低地部	名古屋台地	伊勢	西三河	東三河
瑞穂期						
能田 旭期	尾崎SB8 今SB7	能田旭溝 廻間SB75	高藏D-1 城跡溝 豊三藏通5次	中楽山SB1 野垣内SB45 地蔵僧SB26	高橋32号住 中狭間溝	欠山遺跡 柳原 諏訪SB110
猪間期						

(注) 各地域内での相対的な序列であり、地域間の厳密な併行関係は示していない。  
なお、この表作成に当っては、「赤塚1990」「加納1991」「久野1991」等を参考にさせて頂いた。

に相違を見せる。

こうした相違が、何を背景として生じるかは、違いの現われ方を木曽川中流域以外の地域と比較してみないと解らない。と言うのは、尾張低地部はこの時代、この地域の中心地であって、単純に比較の対象とするには特殊に過ぎる可能性があるからである。しかし、同時に、多くの器種・形式の発祥の地である尾張低地部を介在させないでその周辺地域同士比較するのでは、比較の基準がないためにその地域の特徴が明瞭にならない。それ故、以下の検討は尾張低地部を基準としたときの各地域の「偏差」[石黒1988]の実態をまず確認し、その現われ方を比較することになる。<sup>6</sup>なお、周辺地域の区分は第77図のように行い、それぞれの地域での主な一括資料の序列を表(44)に示す。

### 3. 周辺他地域の検討

まず最初に、木曽川中流域と同じく美濃に属し、尾張低地部と近接する美濃平野部を検討したいが、資料の不足のため正しく把握することができない。それでも敢えて述べるならば、江東遺跡〔岐阜市教委1979〕、井八島水没遺跡〔川島町1976〕、藤掛中州水没遺跡〔笠松町文化財審議会他1976〕等から、S字状口縁台付壺A類〔赤塚1990〕が比較的多く出土していること、高杯の杯部内面に多条沈線を施すもの、口縁部を拡張して擬四線文を施す器台などの存在から尾張低地部と極めて近い土器様相を示すと思われ、從来濃尾と一括されてきたこともうなずけ

るのである。

美濃平野部と同様に尾張低地部に隣接する名古屋台地は、尾張低地部からの偏差を持つ地域としてすでに度々指摘されている。宮脇健司氏によると〔宮脇1993〕、名古屋台地の当該期の土器を尾張低地部



1



2

第78図 竪三蔵通遺跡出土遺物

と比較すると、1、S字状口縁台付甕が格段に少ないと。2、長脚の有棱高杯が弥生時代後期後半の内の新しい時期まで残ってくること等が特徴として指摘できるという。名古屋台地では、この時期の土器の量は豊富であるが、出土状況が良好な資料があまりないため、断片的な資料をつなぎあわせる事になるが、本稿の最初に尾崎遺跡の検討で挙げた点についてみていく。

a 甕については、宮脇氏の指摘にあるようにS字状口縁台付甕は極めて少ない。高藏遺跡〔伊藤他1979〕〔伊藤他1985〕、見晴台遺跡〔名古屋市教委1966〕<sup>3)</sup>、城遺跡〔名古屋市教委1991〕など、能田旭期に属する土器が多く出土する遺跡においてもほとんど目立たない。城遺跡では大溝から多くの土器が出土しているが、甕はくの字状口縁台付甕を主体とし、受け口状口縁台付甕も含まれている。また、見晴台遺跡においてもその傾向は同じで、主体はくの字状口縁台付甕で受け口状口縁台付甕も見られる。両遺跡ともS字状口縁台付甕はほとんど目につかない。

b 高杯は有棱口縁のものが量的に多いが、楕状の杯部を持つものも存在する。有棱高杯は、杯部口縁に内傾する面を持つものが多い。脚の長さは個体差が大きい。また、口縁内面を肥厚させそこに多条沈線を施すものが竪三蔵通遺跡〔名古屋市教委1987〕で出土している（第78図2）。名古屋台地ではこれだけである。その他、法量がやや小さく、外反する脚をもつものが高藏遺跡で見られる。

c 直口壺では、城遺跡で細頸、長頸のもの、短頸の狭義の瓢壺が見られる。瓢壺には、貝殻の腹縁による連弧文が施されている。

d 壺においては、バレス壺が採用されている。口縁形態、文様構成からみても、尾張低地部のそれに極めて類似する。

e 器台については、通有の法量のもの、法量が小さいものもある。竪三蔵通遺跡においては口縁部を拡張し、擬凹線文を施すもののが存在する。（第78図1）

f 鉢は、口径の大きな浅い器形のもの、深い器形のものが何れも見られる。

さて、名古屋台地の資料について概略ではあるが見てきたが、竪三蔵通遺跡において高杯、器台など尾張低地部との共通な土器がみられるが、これらの土器はそれ以外の名古屋台地上の遺跡では認められない。S字状口縁台付甕についてはこの時期には名古屋台地ではほぼ採用されなかったと結論できるだろう。この二点が、名古屋台地の偏差の実態であると見られるが、これは偏差の実態としては木曾川中流域に近いと見てよい。ただ、名古屋台地では受け口状口

縁台付甕、浅い器形の鉢が比較的多く見られることが相違している。

尾張低地部を基準とした時に、木曾川中流域、名古屋台地で共に欠落する土器形式として、S字状口縁台付甕、多条沈線を施した高杯、擬四線文をもつ器台があり、両者の尾張低地部からの偏差は比較的類似している様に見える。では、尾張低地部の周辺各地では同じ様な偏差が現われるのでしょうか。次に見る伊勢では偏差の実態がまったく異なっている。伊勢と尾張低地部の相違についてもすでに宮腰健司氏が指摘しているが、伊勢ではバレス壺が極めて少ないことが挙げられている。地蔵僧遺跡〔亀山市教委1978〕、納所遺跡〔三重県教委1980〕、野垣内遺跡〔三重県教委1978〕、中樂山遺跡〔三重県教委1978〕<sup>64</sup>などで良好な資料がありこれを見ると、確かに宮腰氏の指摘の通り、バレス壺は極めて少ない。伊勢でみられる壺は、単純に外反する口縁のもので、口縁部外面も、擬四線文を施すことはほとんどなく、矢羽根状の沈線で飾られている。一方で、S字状口縁台付甕、受け口状口縁台付甕は数量的にも多く、住居単位で見ても、くの字状口縁台付甕とともに確実に組成に含まれている。尾張低地部との比較でまとめるとき、S字状口縁台付甕の採用は共通し、バレス壺が少ないことが尾張低地部との相違であると言えるだろう。偏差の実態としては、名古屋台地などとは異なっている。

その他の地域ではどうだろうか。西三河については、高橋遺跡4次SB32から良好な一括資料〔豊田市教委1969〕が出土しているが、ほぼ全ての甕がくの字状口縁台付甕である。S字状口縁台付甕は中狭間遺跡の濠状造構などから数点の出土があるが比率の上でも決して高くない。壺では、高橋遺跡4次SB32で口縁部の形態から見てバレス壺と分類してよい壺が出土している。但し、文様は鋸歯文を持たないようである。バレス壺はそのほか、本神遺跡、中狭間遺跡の濠状造構からも出土しており、絶対数の少なさは否定できないものの、住居からも出土していることから、土器形式として採用されなかったわけではないと考える。高杯、直口壺などは尾張低地部に共通する。また、中狭間遺跡では、法量が小さな高杯があり、鋸歯文、直線文で飾られている。S字状口縁台付甕、受け口状口縁台付甕の欠落が偏差の実態と見られる。

東三河では、源訪遺跡、柳原遺跡、欠山遺跡の資料があるが、高杯、直口壺などに尾張低地部と同一形式の土器が見られるのは他地域と同様である。バレス壺、S字状口縁台付甕といった尾張低地部から広がった土器はほとんどない。だが、欠山遺跡では、くの字状口縁台付甕、受け口状口縁台付甕が見られるが、受け口状口縁台付甕の存在が目立つことが注意される。この受け口状口縁台付甕は、能田旭期の内に、尾張との関わりでもたらされたものであるという。〔鈴木1994〕同じく甕でありながら、S字状口縁台付甕はもたらされず、受け口状口縁台付甕はもたらされると言う現象に注意したい。

東三河の土器の様子を、尾張低地部との比較でまとめるとき、受け口状口縁台付甕、高杯、直口壺等が共通する一方で、S字状口縁台付甕、バレス壺などはほとんど欠落していると言ってよいだろう。

さて、鈴木敏則氏は今検討した諸地域に西遠を加えて欠山式を設定した〔鈴木1985〕が、西遠地域は今検討した地域と高杯、直口壺を共有〔鈴木1985〕するが、そのほかではほとんど別形式の土器が用いられている。<sup>7)</sup>

#### 4、整理

さて、木曾川中流域の土器が尾張低地部の土器と具体的に何が相違し、その相違の仕方は周辺他地域と比べてどうなのかという問題からはじめて、周辺地域の尾張低地部からの「偏差」の実態を概観した。それをまとめると、周辺諸地域では資料が不足ぎみの美濃平野部を除いて尾張低地部とまったく同じ器種構成、形式構成を持つ地域は存在しない。何れの地域も何等かの土器形式を共有する一方で、何等かの土器形式を欠落している。そして、その欠落する土器形式は地域によって異なっている。単純化すれば、S字状口縁台付壺が採用されたのは尾張低地部の他では伊勢のみ、バレス壺は尾張低地部に近接する地域を中心で比較的多く採用されているが、伊勢では欠落する。また、受け口状口縁台付壺は尾張低地部と伊勢、名古屋台地、東三河の欠山遺跡など比較的広い範囲で採用されている。その他では、有稜高杯、長頸の直口壺などは伊勢から西遠という広い分布範囲を持つ。しかし、有稜高杯の中でも、杯部に多条の沈線を施したものは、美濃平野、尾張低地部、名古屋台地のごく一部と、上の検討では触れられなかったが近江の北部・東部等に限られる。同じく、法量の小さいものもほぼ同様の分布範囲であると見てよいが、尾崎遺跡や名古屋台地の高藏遺跡、西三河の中狭間遺跡で見られる等や分布範囲が広そうである。

今までには、各地域で尾張低地部と共通の土器形式の採用の有無をそれぞれの地域ごとの偏差として考えてきたが、土器形式について見ればその分布範囲が土器形式個々に異なっているということである。そこに着目して、偏差が生じる背景を考えてみよう。全てについてふれるることはできないので、有稜高杯、バレス壺、甕などについて見ておく。

先に検討した中でもっとも広い分布域を持つのは有稜高杯であった。弥生時代、古墳時代の高杯を検討した比田井克仁氏は、盛り器としての高杯は甕、壺よりは消耗度が低く、量産を必要としなかった事から、型式変化の時間幅が広く、その為に同一形式の高杯の分布圏が他の器種の分布圏に較べて広くなることを述べているが〔比田井1983、1985〕、それがまさに有稜高杯の分布範囲の広さの理由であろう。口縁部の形態や脚部施文の有無などに地域的な差異を見せながらも同一形式と見てよい有稜高杯が広がる伊勢から西遠の範囲は、この高杯の共有に積極的な意味を見出していた繩まりというよりは、有稜高杯についての情報が広がり得た最大範囲とみることが妥当であると思われる。こうした有稜高杯のなかで、分布範囲が異なるのが杯部の口縁部を肥厚させ多条の沈線を施すものである。先に述べた美濃平野部、尾張低地部、名古屋台地のごく一部のほかでは、近江北部など〔滋賀県教委・滋賀県文化財保護協会1989〕に限

られている。この高杯が他地域には広がらず、近江から濃尾を中心とする限られた地域のみで見られることは、同様な形態の高杯であっても、広範囲に広がり得る属性と広がり得ない属性があることを示す。杯部多条沈線有稜高杯がその他の有稜高杯との様な関係にあったかを知り得ない現状では、この高杯がなぜ他の有稜高杯のように各地に広がらなかったかを知ることはできないが、有稜高杯に関して、伊勢、近江から西遠という地域的縦まりの内部は全てが均質に情報を共有しているわけではないことを確認しておきたい。同様なことは、有稜高杯のなかでも法量の小さいものにもあてはまる。<sup>10)</sup>

次にパレス壺について考えてみよう。先に見たとおり、この土器は尾張低地部を中心に美濃の周辺部や名古屋台地、西三河でも採用されていた。また、近江北部、東部でもやや変化は大きいが、パレス壺を受容したことを示す資料が多い。パレス壺は、穀物或いは液体物などを貯蔵する機能を果たす美しく飾られた土器である。パレス壺が担っていたであろう意味の具体的な内容<sup>11)</sup>には踏む用意がないが、パレス壺が、生活の基盤である農耕と直接関わる土器であることと、その担っている意味を積極的に表現している点で、他の土器形式を共有することとはまた異なる意義があったと考える。ただ、パレス壺に記された文様は各地域で幾らか相違を見せており、器形赤彩といったものの共有の一方で、文様に表現された各地域の固有性も無視できない。こうしたパレス壺を共有する空間、すなわち近江北部から尾張低地部、名古屋台地、西三河という範囲は、単に土器形式についての情報を共有している範囲としてだけではなく、パレス壺が象徴する意味を共有し、そのことを積極的に示す縦まりとして理解する必要がある。<sup>12)</sup>

次にS字状口縁台付甕は、その後の盛行や他地域への拡散、全国的な薄甕の出現と軌を一にするなど極めて重要ではあるが、その出現直後には尾張低地部と伊勢等の一部地域のみで用いられていたのみで、美濃の周辺部や名古屋台地といった近接する周辺諸地域で日常用いられる土器としては広がらなかったことを確認した。この時代における拡散の度合い、各地域の側で言えば採用の度合いはパレス壺よりも低い。<sup>13)</sup>もっとも破損しやすく、比較的短いサイクルで生産が行われる甕がそれほど拡散しないのは、尾張低地部から周辺に広がり、各地で受容されるだけの意味を持ち得なかったからであろうか。或いは、赤塚次郎氏が指摘するように〔赤塚1990〕、甕は日常的な土器であるからこそ「伝統的な甕に対する愛着」「新しい文物に対する嫌悪感」から各地域で採用されなかったのかもしれない。しかし、同じ甕であっても受け口状口縁台付甕は、名古屋台地にも多く見られるし、東三河の欠山遺跡でも比較的多く見られる。生産の場面で考えれば同じく赤塚氏が指摘するように、S字状口縁台付甕は製作技術の点で特異な土器であるから受け口状口縁台付甕等の他の甕と同様な伝播の仕方では広がり得なかったという点は十分考えられる。それに対して、受け口状口縁台付甕は、製作技術の点での特異さがないため、両者の広がりかたに相違があるのだろう。<sup>14)</sup>しかし、そうしたS字状口縁台付甕が、

バレス壺を共有しない伊勢で採用されているのは注目される。これについては、現時点での理由はわからない。

### 5.まとめ

以上まで、各地域で偏差が生じる背景、言い換れば土器形式の分布範囲が相違する背景を考えてきたが、ここで最初に問題とした尾崎遺跡を含む木曾川中流域の尾張低地部からの偏差の背景を考えてみよう。

まず、バレス壺を共有することから、木曾川中流域は基本的に尾張低地部と共通の農耕に対する意識をもった地域であると言える。S字状口縁台付壺は名古屋台地など尾張低地部に隣接する地域でもほとんど見られない土器であったため、これを欠くからといって尾張低地部との「関係」が疎遠であったと考える必要はない。ただ、S字状口縁台付壺の製作に必要な技術の伝播がなかったことを確認できるのみであるが<sup>14)</sup>、むしろ、比較的周辺地域に拡散している受け口状口縁台付壺があまり見られないことを重視すべきである。前節で、受け口状口縁台付壺はS字状口縁台付壺とは違って、生産に特異な技術が必要とされたわけではなく、日常レベルでの土器形式の拡散、伝播を示していることを想定した。この欠落から、尾張低地部と日常的かつ頻繁な接触・交流はやや考えにくいということになる。S字状口縁台付壺、受け口状口縁台付壺の欠落は同時に壺の形式構成の単純さとして表れる。その点で、名古屋台地は木曾川中流域と比較的よく似た偏差の実態でありながらも、受け口状口縁台付壺を含むことからやはり尾張低地部との関わりかたが両者で異なっていると考えられるのである。高杯に関しては、有稜高杯が存在するのは当然であるが、その中で杯部に多条の沈線を施したものではなく、杯部の法量が小さいものは存在する。この両者は共に近江北部から濃尾平野を分布の中心としているものであるが、両者が反映している背景が異なるのか、或いは前者の不在が偶然であるのか現状では決め難い。ただ、かりに偶然の不在であったとしても美濃平野部などと比べて、前者が極めて少數であったことは疑いない。両者の持つ意味の違いが木曾川中流域での分布の有無になって表れていると考えたい。

以上のことから、尾崎遺跡を含む木曾川中流域の尾張低地部からの偏差の背景をまとめると木曾川中流域は、尾張低地部と同一であることを志向し、現実に同じ土器形式を採用しているものがある。特に、バレス壺に象徴される意味を共有していることは重要である。しかし、その一方で日常的、恒常的な接触・交流と言った土器についての情報が広がる具体的な機会が多くないために、本稿の最初に示したこの地域独自の特徴を發揮するにいたったと言えるのではないだろうか。なお、本稿では検討できなかった器種もあるため、木曾川中流域と尾張低地部の関わりかたが今述べたことで尽くされるわけではない。

## 6. おわりに

これまで述べてきた、各地域における土器形式の分布の有無は、各地域毎に見ると尾張低地部とは土器の組合せに相違を持つことになるから、それぞれの地域での組合せを、尾張低地部と同一大様式のなかの地域差としての小様式とするか、あるいは別の大別様式とするのかという議論が行われてきた。[鈴木1985] [赤塚1990] [加納1991] しかし、本稿では土器の組合せを議論するのではなく、個々の土器形式の分布について考えてみた。具体的に見てきたように組合せを構成する土器形式どうしの関連（例えばS字状口縁台付甕とバレス壺の関連）よりもそれぞれの独立性のほうがきわどっており、尾張低地部からの偏差という視点で見た時、各地での組合せはあくまでも個々の土器形式の分布の結果であって、個々の土器形式の分布にこそ、我々が土器から復元しようとする地域間、特に尾張低地部を中心とした時の「関係」なり「影響」なりが具現化していると考えたからである。<sup>15)</sup>

また、それぞれ土器形式毎に分布域が相違するということ自体に検討すべき理由、背景があると考える。というのは、上で検討した土器形式の発祥地、中心地は何れも尾張低地部であろう事が推定されるのであるが、今示した分布の相違は、その周辺地域への拡散、伝播にあたって必ずしも全ての情報が広がったわけではない。また、受け手の側でも全てを受容したのではなく、選択が為されたことが推定されるが、そこにそれぞれの土器形式の他の土器形式に対する固有性を読み取ること可能であると考えるからである。

本稿で見てきた事実は、個々の土器形式はそれ固有の機能があり、生産から使用に至るまでの固有の特質を持つこと、そして更には固有の意味を担っていたことを示している。土器形式についての情報の広がりかた、その背景はその土器形式の固有性を考慮しないと見てこない。本稿では、その一部にしか触れられなかったが、そうした土器形式の固有性を抽象して組合せの議論をするのではなく、固有性を確認した上で、その組合せを議論しなければならない。

なお、本稿を成すにあたって、尾崎遺跡の土器については宮腰健司氏から頂いた御教示を、東三河の土器（欠山遺跡）については欠山式土器研究会における鈴木徹氏、赤塚次郎氏、加納俊介氏をはじめとする諸氏の議論を参考にさせて頂いた。

また、図版は、個々に示した文献から引用させて頂いた。

(注1) 基準資料を出土した能出廻遺跡の溝状遺構〔師勝町教委1987〕については、その性格が不明なため、器種構成を考える上では注意しなければならない。なお、能出廻遺跡の資料については、市橋芳則氏の御配慮により実見することができた。

(注2) 今遺跡の資料については、可児光生氏の御配慮により実見することができた。

(注3) 宮之島遺跡の資料については、吉田正人氏の御配慮により実見することができた。

(注4) この時期の土器の地域差を検討する作業は、[鈴木1985] [石黒1988] [宮脇1993] 等で繰り返し行われており、本稿でもそれを参考にした。ただ、単なる存否だけではなく、住居での採用の有無やその組成上の位置等に着目したため、結論が違っている場合がある。

(注5) 見晴台遺跡ではすでに32次に及ぶ調査が行われており、それぞれについて概要が報告されている。全ての出典を挙げるべきであるが、紙幅の関係上割愛し、最初の調査のもので代表させる。

(注6) 中東山遺跡、納所遺跡の資料については、岡田美幸氏の御配慮により実見することができた。

(注7) 西遠の資料では、中村遺跡の資料を後藤建一氏の御配慮により実見することができた。

(注8) 近江については、触れられなかったが、これらの高杯や口縁部に擬四瓣文を施した器台の分布が近江から濃尾平野に限られることは、「欠山式」の本質を濃尾地方と琵琶湖地方の接点における緊密化であるとした石黒氏の見解 [石黒1988] を裏付けている。しかし、本稿でも明らかなように多様な関係が土器に表れており、濃尾地方と琵琶湖地方の関係もその内の一つであると考えたほうがよい。また、「緊密化」の具体的な内容を明らかにする必要もある。

なお、この時期の、濃尾と近江北部との関わりについて、濃尾から近江北部への多くの人の移住を想定する考え方 [古川1991] もある。しかし、その根拠の一つである口縁部非ヨコナデ調整の付合窓は、その故地であるはずの濃尾周辺ではほとんど見当たらない。近江北部と濃尾地域が土器の上でかなり共通性が高いことは注目すべきことであるが、具体的に何が共通し何が相違するのか、特定の器種、形式のみが共通するのか或いは組合せとして共通するのか更に検討を要する。

(注9) 装飾窓そのものに込められていたであろう意味については [西川1985] を参考にした。

(注10) 壺の属性の中でも、文様を共有するまとまり、形態を共有するまとまり、器面調整を共有するまとまり等が考えられる。それぞれがどんな関係を背景としているかはそれぞれ別々に議論しなければならないが [深澤1988]、本稿のバレス壺については口縁部の形態、文様を重視し、その存否を中心としている。

(注11) バレス壺が、農耕に関わる祭祀に用いられることがあるとするならば、バレス壺を共有することは、その祭祀を共有すると言えるのだろうが、それを示す証拠はない。ここでは、農耕、或いはその収穫物に対する意識を共有すると考えておく。

(注12) S字状口縁台付窓とバレス壺では出現時期が違い、バレス壺はいわゆる山中式期から存在しているため、それが各地域での受容の度合いに影響しているとも考えられる。しかし、口縁部の形態から見て、山中式期に各地域に広がったものがそれぞれ独自に各地域で変化を遂げたのではなく、能田旭期のバレス壺は能田旭期の内に尾張低地部から拡散したものと考えられる。

(注13) 受け口状口縁台付窓は、能田旭期に先立つ瑞穂期に名古屋台地ではすでに採用されており、拡散の時期が違うことが他の窓との分布の相違の要因として考え得る。但し、東三河の欠山遺跡では受け口状口縁台付窓が出現するのは能田旭期 (併行) である。

(注14) S字状口縁台付窓の製作技術が伝播する方法も具体的に考える必要があるが、本稿では触れることができなかった。

(注15)もちろん、各地域では尾張低地部から受入れた土器形式、尾張低地部以外から受入れたもの、從来からあったもの、その地で新たに生みだされたものがそれぞれ組合わざり、「互いに補いあって生活の要求を満たしていたところの、有機的な複合体」 [横山1985] を構成しているわけであるから、その組合せを議論することが重要であることは言うまでもない。しかし、本稿では各地における尾張低地部からの土器形式の受け入れかたを主に問題としており、その実態として組合わせ (様式) 単位で受け入れているのではなく、個々の形式を単位としていることが確認できるから、個々の形式を単位として問題とするのである。

S字状口縁台付窓、バレス壺、有棱高杯などの生産、使用における「有機」な関連を具体的に探ることが今後の課題であることはいうまでもない。

## II. 弥生時代における石器群の様相についての一考察

本調査によって約700点の石器が出土している。しかし、それらの帰属時期が明確なのは1・5・8・9・24号住居址等より出土している一部の資料のみで、大半が時期的な解釈に関しては問題を含んでいるが、大局的には弥生時代中～後期のものとして捉えても大過ないと考える。弥生時代石器研究に関しては、縄文時代晩期よりの研究姿勢を継続し、大陸系磨製石器群の出現が加わるもの依然として直接的にその使用が想起される一般的、定形的な石器に関してのみ注意が払われている。その反面で例えば鉄製品（主に鉄鎌）の出現以前におけるイネ科植物の石製切断具、石庖丁の組成率が低い地域における石製収穫具、石器製作技術（剥片剥離技術）等検討すべき問題は多々山積みしている。ここでは、今回の資料で確認できた次の2点——①（大型）剥片石器、②剥片剥離技術——について考察し問題提起してみる。

### 1.（大型）剥片石器について

弥生時代における（大型）の剥片を素材とする石器については、斎野[1987、1992]、山田[1987]等による宮城県富沢遺跡例を基とする代表的研究がある。この石器は「大型板状安山岩製石器」と名づけられ、具体的な石器機能・他の石器との共存関係等が提唱されている。<sup>1)</sup>更には、斎野[1993]により全国的視野に基づく資料の収集・紹介が行なわれている。また、長野県飯田盆地に所在する恒川遺跡を筆頭とする遺跡群では「有肩扇状形石器」の名に代表される大型打製石器が取り上げられ、古くから石製農具として問題が提起されており[松島1964]、御堂島により実験使用痕分析が行なわれている[御堂島1989]。尾張においても、第1次調査報告の資料中から斎野によって見いだされ[1993]、山中遺跡[1992]では横刃形石器、朝日遺跡IV[1993]では粗製剥片石器<sup>2)</sup>の名称で該当資料が紹介され使用痕についての検討も行なわれている。

美濃においては、大杉遺跡の「箇状石器」[岐阜県博物館1987]と紹介された資料がその初見であり、根本遺跡[多治見市教育委員会1991]では、「使用痕ある剥片」、「有肩扇状形石器」として2点の資料が紹介されている。<sup>3)</sup>これらは、尾崎遺跡の直線刃石器と呼称した資料を含め以下の共通した点が認められる。<sup>4)</sup>

- 1、石材として片岩を使用している。
- 2、体部、刃部ともに打製である。
- 3、刃部が直線（的）である。（ただし、一部凸刃のものも含む。）
- 4、所謂大型で、刃部長が9cm以上である。

1については、片岩を素材とすることによって、その特徴である片理を利用して剥がすような剥離が行なわれたと思われる。その結果、直線刃石器素材は板状となる傾向があり、逆にこの

石材特色を積極的に取り込んでいたのだろう。2・3についても石材の特徴に大きく委ねられており、刃部にはそれ程特徴的な二次加工は施されていない。尾崎遺跡出土の直線刃石器に関しては、刃部を中心としてコーングロスが認められる。石材の観点からは、時期的には遡るが、朝日遺跡においては、素材に河原石を利用し、断面の片側に凸面を持つものが多く明らかな違いを見せてている。この背景については、ここでは言及しない。4については、所謂石庵丁との機能の明確な分化が行なわれていたものと考えられる。

## 2、(小型) 刺片石器について

前述の(大型) 刺片石器の他に本遺跡石器資料の中でもう一つ特徴的な事例として、第IV章の中で述べた事であるが、従来、おそらく打製石斧として分類されてきた石器の中に機能を別とする石器が存在することである。1号住出土の313、時期的にはやや問題を含むが包含層出土の498~502がその例として挙げられる。これらは、結晶片岩、ホルンフェルスを石材とし、平面形は所謂短脣形の打製石斧(石鎌)に酷似するが、片側に刃部の加工、あるいは使用が集中し、その対辺は刃部というより、むしろ背部調整的な調整が加えられ、面を形成する傾向が強い。したがって、横断面形はクサビ状を呈している。山中遺跡において23の「石鎌状石器」と呼ばれるもの、根本遺跡の41の「石庵丁」、144の「スクレイバー」と呼ばれているものもこの例に含まれると考えられる。また、宮之脇遺跡の打製石斧として分類されていたものの中には約1/4程度の当該資料が含まれている。<sup>10</sup> 使用痕分析も今後の課題と考えられるが、石製農具として一つの地位を与えることができると思われる。

## 3、刺片石器についての整理

刺片を素材とする前述の2種の石器が、木曾川水系中流域の弥生時代において石器組成中に特徴的に存在することは確認してきたとおりである。従来、磨製石庵丁等によって代表されてきた石製農具の中に新しいヴァリエーションを加えたわけであるが、弥生時代の農耕の実態を考える上で必要な要素と思われる。その名称としては、大型直線刃石器、横刃形石器、粗製刺片石器、有肩扁状形石器等種々存在している。(大型) 刺片石器については、斎野氏が提唱した「大型直線刃石器」(肩部を作り出した有肩も含む)として形態的、機能的にも整理されつつあり問題はないと考えられるが、後者の(小型) 刺片石器に関しては、石庵丁・石鎌との機能の分別・組成中の占める割合等の問題が存在しており、資料の増加を待って検討しなければならない。このような点が介在するので、ひとまず「小型直線刃石器」として仮称しておき、機能的には打製石庵丁あるいは石鎌の範疇の中で考えておきたい。

## 4、刺片剥離技術について

尾崎遺跡では、多くの剥片及び石核を得た。これらは下呂石（岐阜県益田郡下呂町湯ヶ峰に産する）<sup>60</sup>が大半を占めることは第IV章で述べた。飛驒・木曾川水系においては、旧石器時代よりこの石材が積極的に利用されているが、尾崎遺跡が所在する木曾川中流域においては、石原[1992]、斎藤[1993]等によって下呂石の転石が積極的に利用されていたことが述べられている。また、現在においても、当地域では数～10cm程度の転化した下呂石が採集でき、それらは完全に円礫化が進んでいるが、表面の爪状のクラックはほとんど目につかない状態であることが斎藤によって実証されている。尾崎遺跡の資料中よりも残存している自然面の観察から、全点が転石であることがわかり、その大きさも斎藤の実証とほぼ一致している。近隣の八龍遺跡B地点発掘調査報告書〔各務原市埋蔵文化財センター1993〕においても同様な例が報告されている。挙大程度の大きさの原石を利用した場合、剥片剥離を行なうと、得られる剥片に自然面が保有される割合は多くなる。本資料において、打面部・打面部付近に自然面が残るものが多い。

次に、残された石核の形態的特徴等から分類を行ないたい。これはあくまでも帰納的な分類によるものであり、前段階に存在しただろう時間的経過等の議論は含んでいない。

a類 剥片素材。縁辺、あるいは背面を打面とする。背腹両面において剥片剥離を作業を行なうもの(488、495、496)腹面側のみに剥片剥離作業を行なうものがある。(307)

b類 上下両端が潰れ状を呈し、第IV章において両極剥離痕のある剥片としたものに対応する。今までのピエス・エスキューとして分類されていたものも含まれる。<sup>61</sup>打角は小さく直角に近い。剥離された剥片は打面を有しない線上打面剥片となる。<sup>62</sup>(308、489)

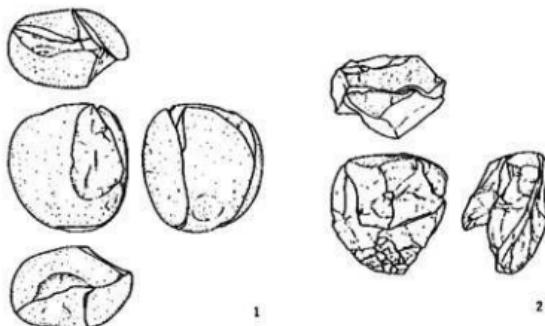
c類 平坦な自然面を打面として、その周囲に剥片を剥離していくもの。また、底面にポジティブな面を持つものも見られることから、この石核の素材は転石の平坦な自然面にそって分割されたものであろう。(310、490、494)

d類 多面的に打面と作業面が設定され、所謂サイコロ状の残核となるもの。打面は多くが自然面である。剥片剥離面を打面とせず、あくまでも自然面を打面として利用している。491は被熱によりはじけた面が複雑に見られる。(491、492)

e類 円礫をそのまま用い、礫の稜を打点として剥片剥離を行なうもの。自然面打面であり、初期剥片は背面に自然面を残す。(309)

他に、チャートを素材とする石核が1点ある。(493) 剥離分割面を打面とし、打面・作業面は固定していない。

以上5類の石核を確認し得た。<sup>63</sup>さて、これらの石核がどのような過程を経て我々が認識し得る形態的特徴を具現化したのかという問題が生じてくる。西村は、八龍遺跡B地区発掘調査報告書の中で、弥生時代中期の資料を基に「小型円礫石核剥片剥離工程モデル図」を掲げ、一つの時間軸上における剥片剥離工程を復元している。当該期において軽視されがちな石器製作と



第79図 山中遺跡SB17出土石核（スケール1/2）

いう言葉で表現される文化的一面——石材の移動、剥片剝離技術——にスポットをあてた功績は評価できるが、接合資料等の実証例が無く、その考古学的基礎的操作に欠けている。ただ、それぞれの段階の資料については前述の石核の5分類の中で説明できるものが多い。しかし、これらがどのような時間的線上、あるいは枠の中で位置付けられるかは現状では討論することはできず類例の増加を待つべきであろう。類例は少ないが、資料を積極的に評価するならば、山中遺跡SB17出土の石核の接合資料がある(第79図1)。これは下呂石の転石を分割したものであるが、仮に、このような石核素材の分割が存在するのなら、その分割の方法にどのような規則性があったのか不明であるが、石核素材の分割→石核→剥片剝離という図式が成り立ち、その打面(自然面打面)が平坦であるか丸く屈曲しているかで前の石核分類におけるc・d類とe類の区分が可能となる。即ち、両者の区分は時間的軸上によるものでなく石核の選択性に問題があることとなる。また、1例のみであり根拠に乏しいが、この石核の分割に関しては、491例のように火熱の使用が存在した可能性もある。

次にb類の石核の存在を理由として、本報告では今までピエス・エスキューとして分類されてきたものをやや用語上問題はあるが両極剝離法のある剥片として分類してきた。これは、この種の石器を一つの利器としてではなく、多くがII類の剥片剝離工程の中で生じたものと考えたいからである。基本的には本遺跡剥片資料中約30%程度を占める。勿論、このように結論づけるためには両極打法の存在が必要不可欠となるが、この技法を積極的意味合いでなく、消極的意味合いで、つまり基本的には上部からの剥片剝離を目的とするが、下部の台石等の存在のため両極打法に似た効果が得られている程度の解釈で理解してその存在を認めたい。山中遺跡SB17出土(第79図2)はその一例ではないだろうか。

その他の特徴としては、主体的に打面として自然面を意識している事である。石核a類は例外的なものであるが、c・d類で見られた砾の分割こそ目的的な剥離、すなわち自然面に対して垂直に剥片剥離を行なう意識が主体的に存在していたのではないだろうか。下呂石という石材、転石という素材に熟知した技術であると言える。

なお、山中遺跡S B17出土の石核は山中遺跡〔愛知県埋蔵文化財センター1992〕より引用させて頂いた。

(注1) 仙台平野の資料については、斎野裕彦氏のご配慮により実見させて頂いた。

(注2) 剥片石器という分類は、製作技術上等の意味合いにおける分類としては包括的な内容を持ちすぎている。石器の素材として大型の剥片を意図的に使用しているが、何らかの目的に使用された利器としての石器の名称としては不適切と思われる。

(注3) 根本遺跡の資料については、山内伸浩氏のご配慮により実見させて頂いた。

(注4) 斎野〔1993〕が大型板状安山岩石器の形態的特徴をもとにくくった特徴に非常に類似している。それを簡潔に要約するならば、①最大長10cm以上、最大幅8cm以上、②刃部長が9cm以上、③刃部が直線刃、④刃部に連続した微細剥離痕が認められる、の4点を挙げることができる。

(注5) 宮之脇遺跡の資料については、吉田正人氏のご配慮により実見させて頂いた。

(注6) 下呂石については、最近は流文岩であるとされている。〔岩田1994他〕本報告では混乱を避けるため考古学上の通称である「下呂石」を使用する。

(注7) 国本道雄による定義〔1976〕が具体的であり、要約するならば岩手県磐石遺跡の分類に基づく(1)平面形は四辺形を呈し、縦・横断面は凸レンズ上を呈する。(2)素材として、砾核素材のもの、剥片素材のものが存在する。(3)上下両端に細かい碎屑の剥落した痕跡が残され、多くは階段状剥離を呈する。(4)両極打法によって作成される。という4点が諸特徴であり、石器としては齊一性を持った器種として、何らかの使用目的に供された石器をしている。

ただし、旧石器～弥生時代を通して1つの機能を有していたかは今回の弥生時代における問題のように類例の增加を待って検討したい。

(注8) 西村は、八龍遺跡B地区発掘調査報告書の中で「後上加撃」という表現で同じ技術を説明しているが、剥片剥離技術における後上加撃とは別のテクニックを指すことが多く、本報告書では線状打面を持つ剥片としたが意味するところは同一である。

(注9) 石核の分類については、長屋幸司氏との討論による所が大きい。厚く感謝します。

## 〈参考文献・引用文献〉

- 愛知県埋蔵文化財センター『瑞穂遺跡』 1990  
 　　『山中遺跡』 1992  
 　　『朝日遺跡IV』 1993  
 　　『田所遺跡』『年報』 1993
- 赤坂次郎「考察」「瑞穂遺跡」 1990  
 浅井和宏「<宮廷式土器>について」  
 　　『欠山式土器とその前後』 1986  
 鶴尾恭之「尾張における後期弥生式土器の編年的研究（I）」  
 　　『古代人』27・28 1973  
 石黒立人「伊勢湾地方と琵琶湖地方、あるいは東西の結節点」『古代』第86号 1988  
 石原哲彌「飛驒の地理と下呂石の動き」『特別展飛驒のあけぼの』岐阜県博物館 1992  
 一宮市「新編一宮市史」資料編（二） 1967  
 大阪市教育委員会、大阪市文化財協会「喜連東遺跡（KR86—3）現地説明会資料」 1987  
 国崎市教育委員会「東郷遺跡」 1985  
 国村道雄「ビエス・エスキューについて」「東北考古学の諸問題」 1976  
 各務原市埋蔵文化財調査センター「八龍遺跡A地区発掘調査報告書」 1991  
 　　『八龍遺跡B地区発掘調査報告書』 1993  
 笠松町文化財審議会・笠松町考古歴史を語る会「かさまち」第4集 1976  
 加納俊介・都築みどり「愛知県」「古墳時代土器の研究」 1984  
 加納俊介・浅野清春・北村和宏「愛知県岩倉市小森遺跡出土の土器」  
 　　『古代』第86号 1988  
 加納俊介「絶論」「欠山式土器とその前後」 1986  
 加納俊介「東海」「古墳時代の研究」6 1991  
 可児町教育委員会「久ノ上遺跡発掘調査報告書」 1979  
 亀山市教育委員会「地蔵寺遺跡」 1978  
 川島町「井八島水没遺跡」 1976  
 岐阜県教育委員会・可児町教育委員会「宮之島遺跡発掘調査報告書」 1976  
 岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会「今遺跡」 1979  
 岐阜県教育委員会・可児町教育委員会「川合遺跡」 1978  
 岐阜県教育委員会「半布里遺跡調査概報」 1981  
 岐阜市教育委員会「岐阜市史」資料編 考古・文化財 1979  
 岐阜県博物館「特別展飛驒の弥生時代」 1987  
 京都府埋蔵文化財調査研究センター「大道路跡の調査」「京都府遺跡調査報告書」1 1983  
 　　『宮墳墓群』『京都府遺跡調査報告書』10 1988  
 　　『国道178号バイパス開削遺跡昭和63年度・平成元年度発掘調査概要』『京都府遺跡調査概報』 1990  
 久野正博「三河・西遠江の後期弥生土器編年と地域性」  
 　　『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』 1991  
 小坂井町教育委員会「欠山遺跡」 1994  
 斎野裕彦「大型板状安山岩製石器について」「太平台史窓」11 1991  
 　　『弥生時代の大型直線刃石器（上）』『弥生文化博物館研究報告』2 1993

- 斎藤英生「下呂石——飛驒・木曾川水系における転石のあり方——」『愛知女子短期大学研究紀要』 1990  
 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会『柿田遺跡発掘調査報告書』 1989  
 師勝町教育委員会『師勝町埋蔵文化財分布調査概報』『能田旭遺跡』 1987  
 鈴木徹「欠山式土器について——『欠山式土器』の再提示——」『欠山遺跡』 1994  
 鈴木敏則「欠山式の地域性」『転機』創刊号 1985  
 関市教育委員会『重竹遺跡 その1』 1979  
 『重竹遺跡 その3』 1984  
 多治見市教育委員会『根本遺跡』 1991  
 知多市教育委員会『大樹間遺跡』知多市文化財報告第13集 1975  
 桜木郡文化振興事業団『自治医科大学周辺地区』 1988  
 豊田市教育委員会『高橋遺跡発掘調査報告書』 1969  
 富加町教育委員会『東山浦遺跡』 1978  
 『半布里遺跡』 1986  
 名古屋市教育委員会『昭和39・40年度見晴台遺跡第I・II・III次発掘調査概報』 1966  
 『第5次整三歳通遺跡発掘調査概要報告書』 1987  
 『鳴海城跡・城遺跡』 1991  
 中野俊「上野玄武岩類I: 2つの單成火山における不均質マグマ」『岩鉱』88 1993  
 西川修一「装飾壺の終焉」『古代探査』II 1985  
 比田井克仁「古墳時代前期高杯考」『古代』第74号 1983  
 「弥生時代高杯考—南関東地方を理解するために—」『古代探査』II 1985  
 平井勝「弥生時代の石器」 1991  
 深澤芳樹「弥生時代の近畿」『岩波講座日本考古学』5 1986  
 古川登「北部近江における「く」の字状口縁台付甕について—研究の提言—」  
 『考古学フォーラム』2 1991  
 松島透「飯田地方における弥生時代打製石器」『日本考古学の諸問題』 1964  
 御堂義正「有肩肩状石器の使用痕分析」『古代文化』 1989  
 三重県教育委員会「野垣内遺跡」「中楽山遺跡」  
 『昭和48年度県立開拓整備事業地埋蔵文化財発掘調査報告』 1978  
 『納所遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告35-1 1980  
 美濃加茂市『美濃加茂市史』通史編 1980  
 美濃加茂市教育委員会『牧野小山遺跡』 1973  
 『南野遺跡』 1976  
 宮藤健司「尾張における弥生時代後期土器の様相」『転機』4号 1993  
 森島康雄「中長墳墓に伴う建物」『京都府埋蔵文化財論集』 1991  
 横山浩一「型式論」『岩波講座日本考古学』—1985  
 山田しよう「弥生時代の石器の使用痕分析」『富沢——富沢遺跡第15次発掘調査報告書』 1987  
 山田直利他「阿寺断層周辺地域の火成岩類の放射年代と断層活動の時期」『地調月報』43 1992

# 図 版

図版 1



(1) 尾崎遺跡遠景



(2) 調査前状況

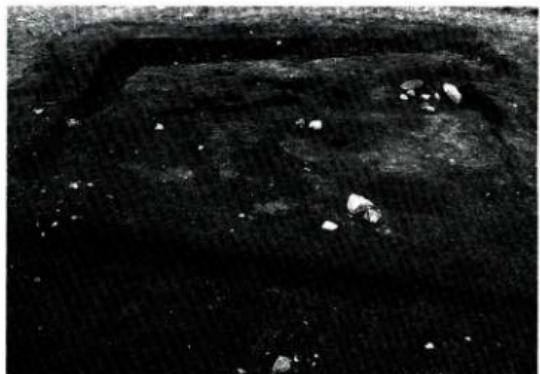


(3) 1・2号住居址

图版 2



(4) 1·2号住居址



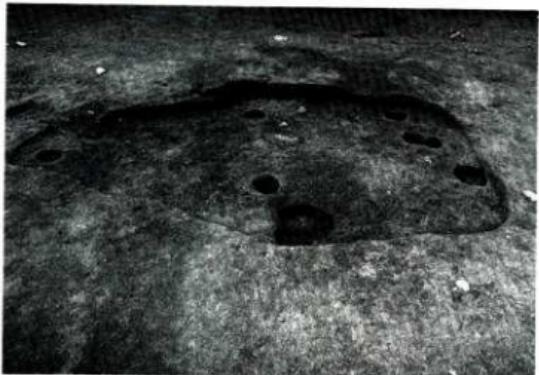
(5) 3号住居址



(6) 4号住 遗物出土状况

图版 3

(7) 4号住居址



(8) 5号住居址·1号土坑



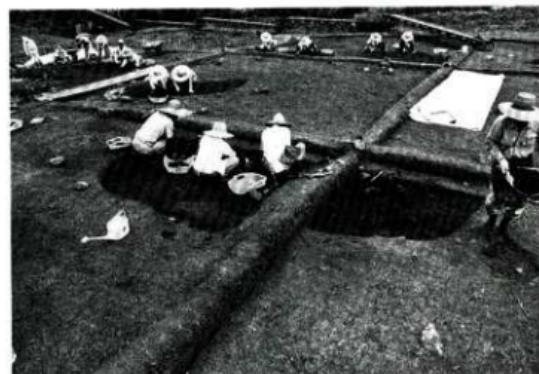
(9) 7号住居址



図版 4



(10) 高環[64]出土状況



(11) 調査風景



(12) 羊形鏡[335]出土状況

図版 5



(13) 8号住居址



(14) 9号住居址



(15) 10号住居址

图版 6



(16) 10号住火处



(17) 11·31 a·31 b 号住居址



(18) 12号住居址

図版 7



(19) 13号住居址



(20) 14号住居址



(21) 14号住カマド

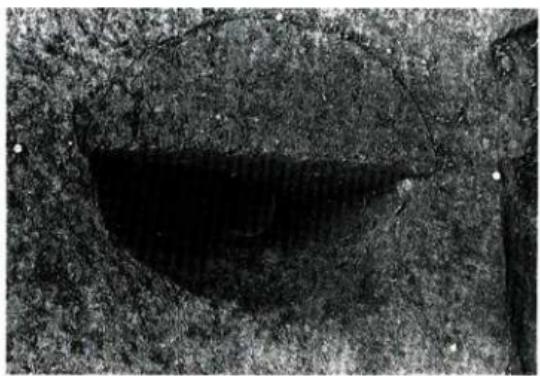
図版 8



(22) 15・16・17号住居址



(23) 15号住カマド



(24) 15号住貯藏穴内环身

[130]出土状况

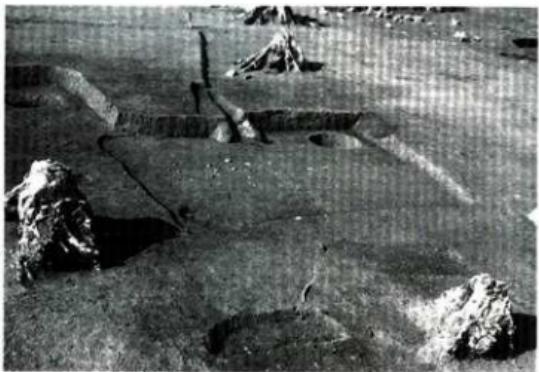
图版 9



(25) 16号住居址

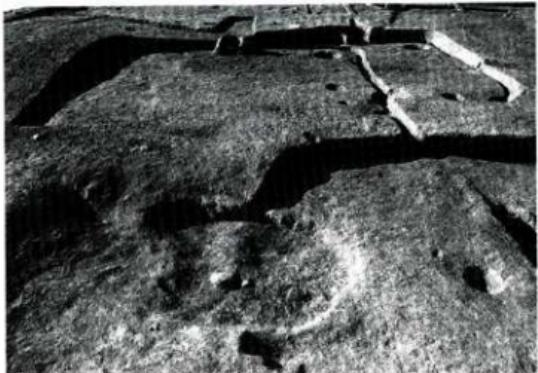


(26) 16号住居[147]出土状  
况



(27) 17号住居址

图版10



(28) 18·20号住居址



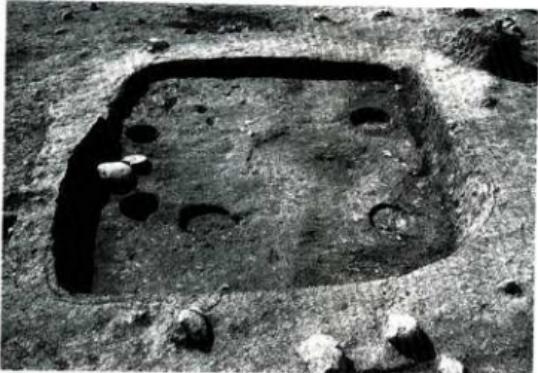
(29) 21·22号住居址



(30) 23号住居址

図版11

(1) 24号住居址



(2) 24号住台付壺[178]出土  
状況

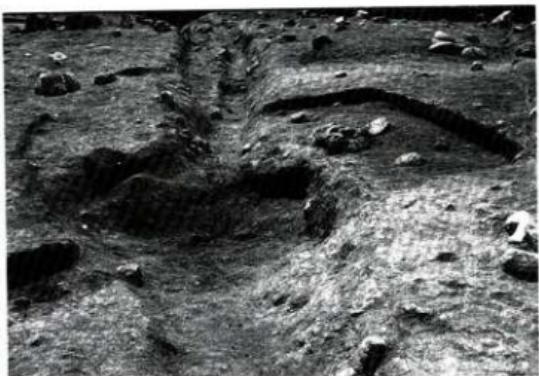


(3) 25号住居址



图版12

(36) 26号住居址・3号溝



(37) 27号住居址・3号溝



(38) 28号住居址



図版13

(37) 30号住居址



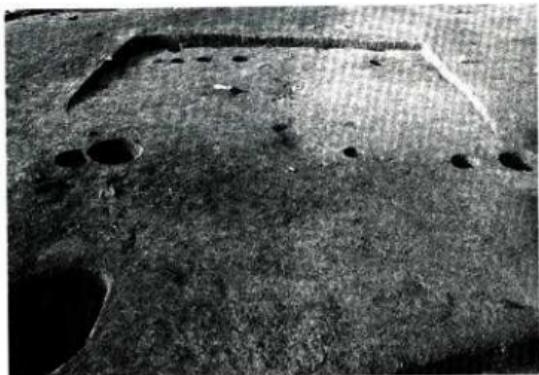
(38) 34号住居址・2号溝



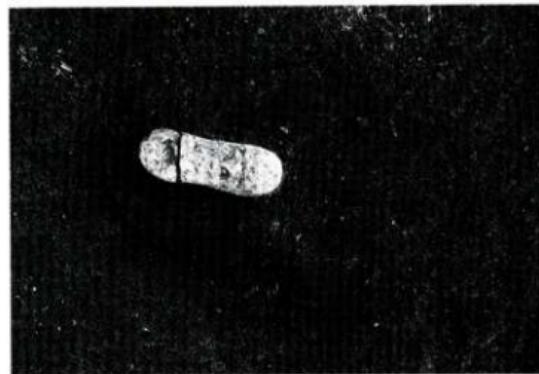
(39) 35号住居址



图版14



(40) 36号住居址



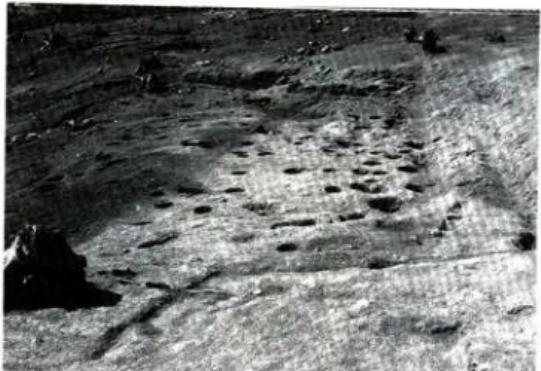
(41) 36号住居址



(42) 37号住居址

図版15

(43) 1号建物址



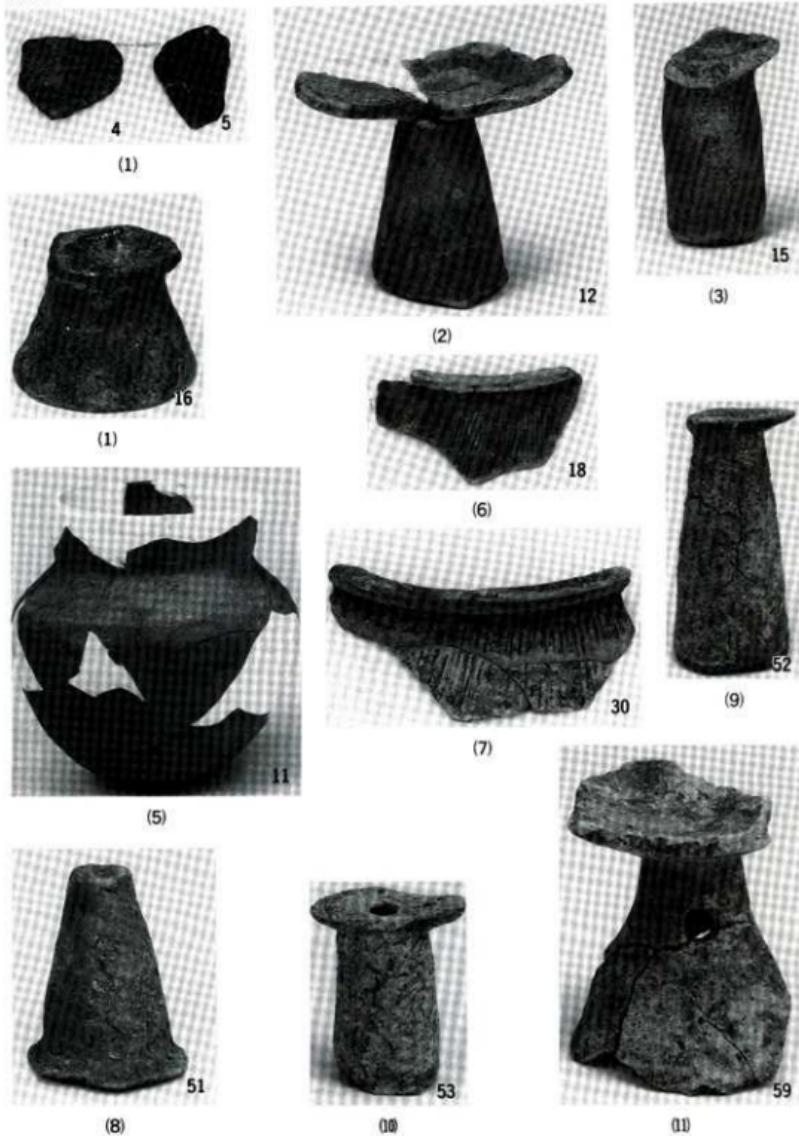
(44) 2号建物址



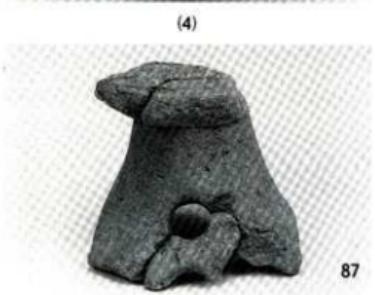
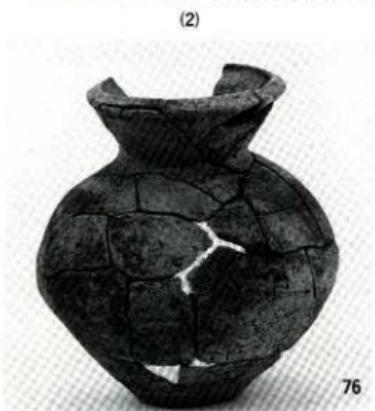
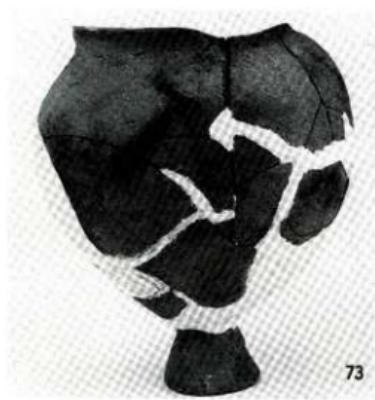
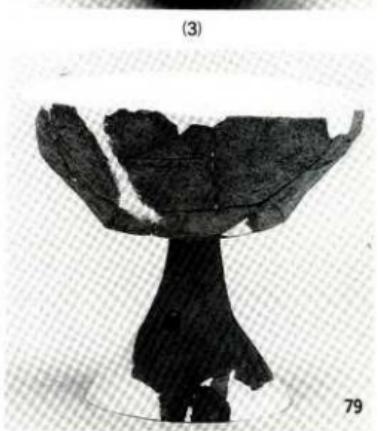
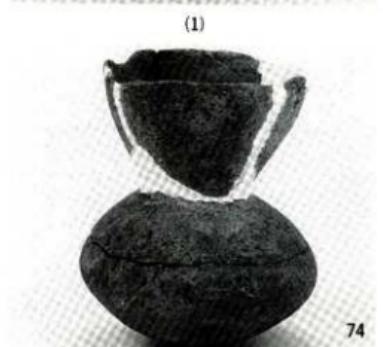
(45) 2号土坑



图版16



圖版17



(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

(6)

圖版18



(1)

(2)

(3)

(5)

(4)

(6)

(7)

(8)

圖版19



147

(1)



148

(2)



152

(3)



164

(4)



170

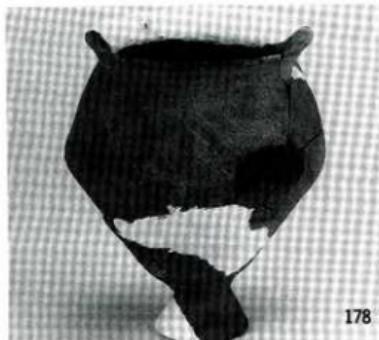
(5)



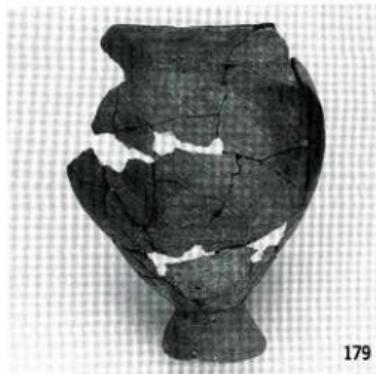
171

(6)

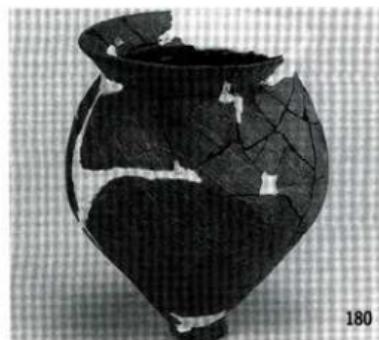
図版20



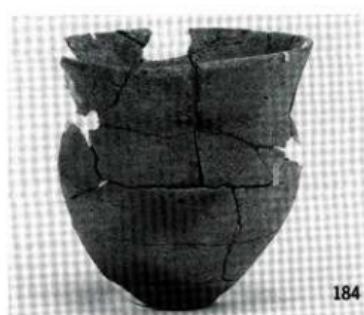
(1)



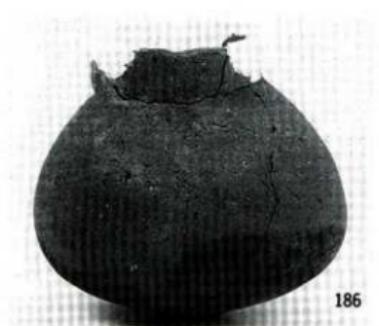
(2)



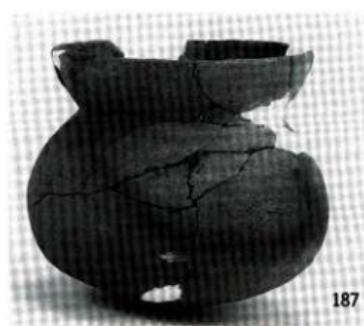
(3)



(4)



(5)



(6)

図版21



(1)



(2)



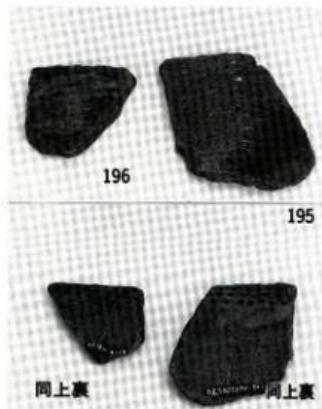
(3)



(4)

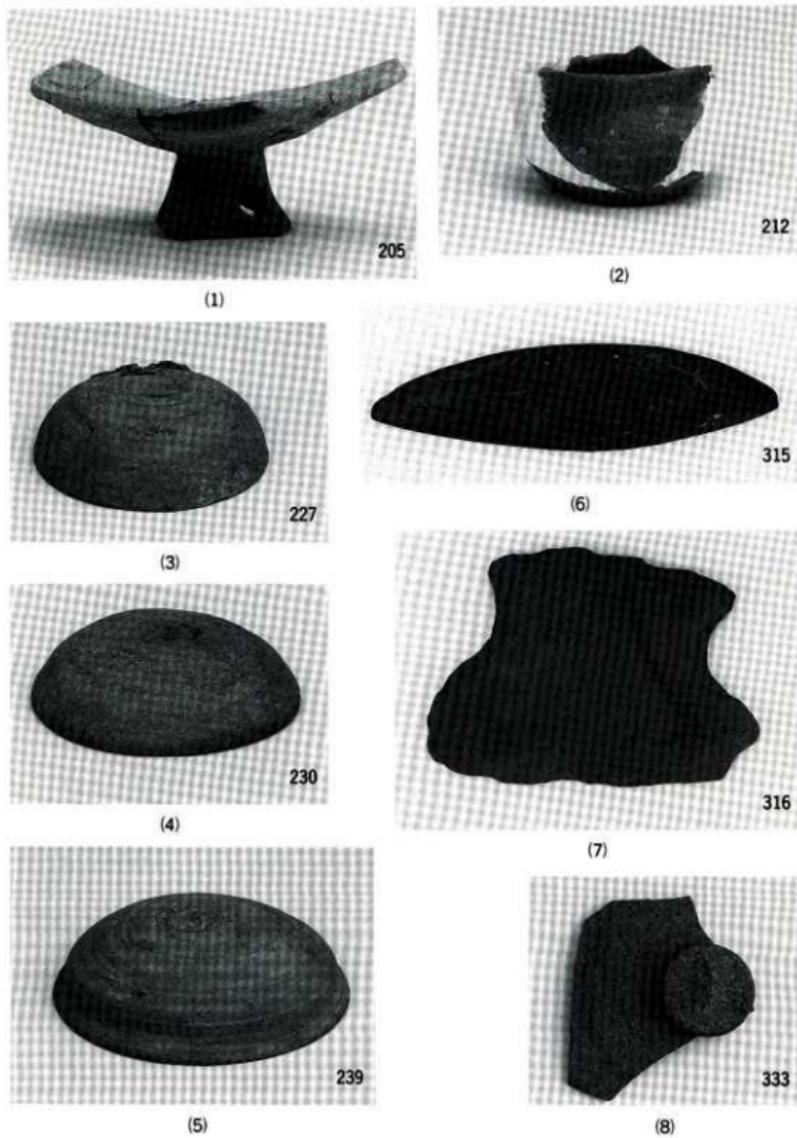


(5)



(6)

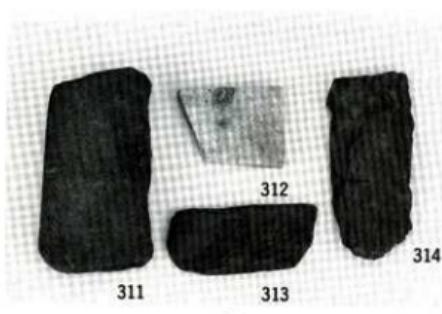
図版22



図版23



(1)



(4)



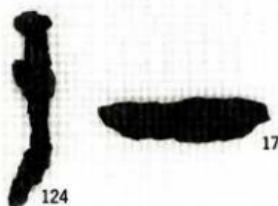
(2)



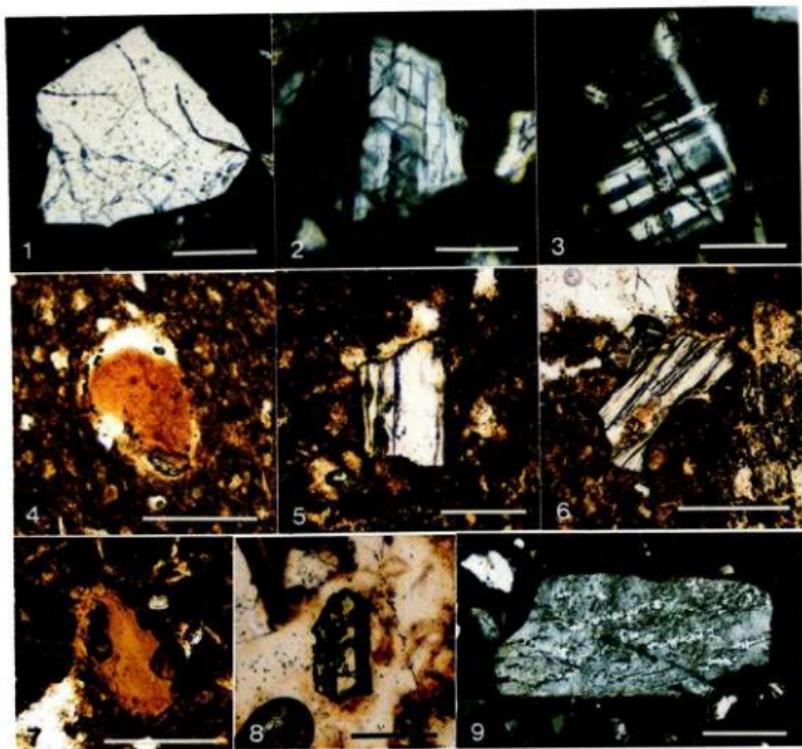
(5)



(3)

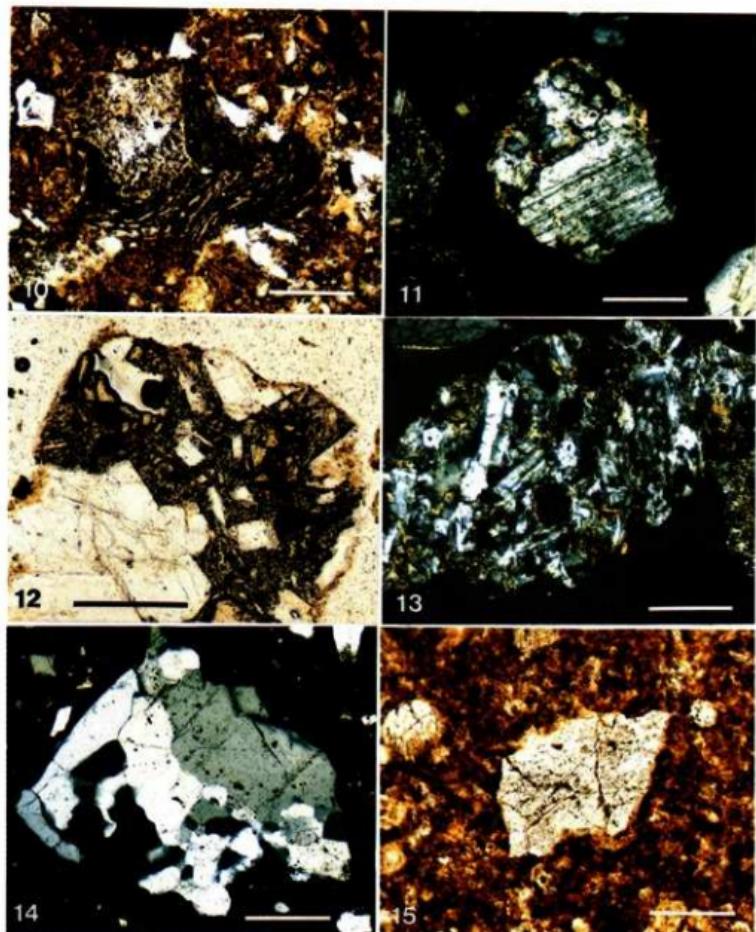


(6)



図版24 土器胎土中・砂質堆積物中の粒子(その1)

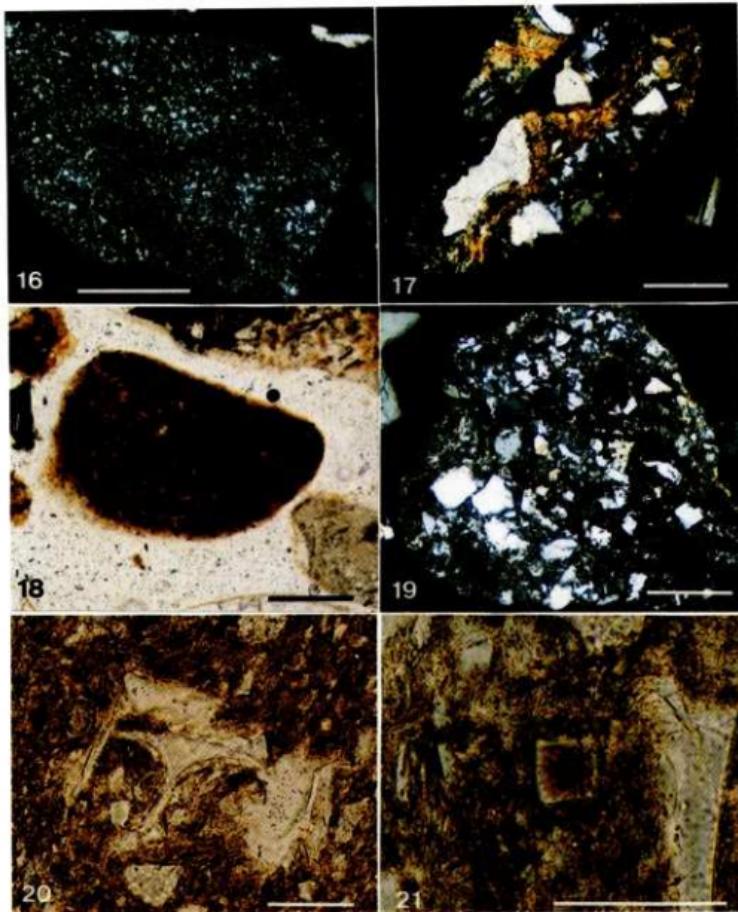
(スケール: 2,5は0.1mm, それ以外は0.2mm; 1,2,3,9は直交ポーラー, 4,5,6,7,8は下方ポーラーのみ)  
 1 : 石英(試料No.3), 2 : 斜長石(双晶)(試料No.15), 3 : カリ長石(微斜長石)(試料No.6)  
 4 : 雲母類(試料No.4), 5 : 斜方輝石(試料No.3), 6 : 単斜輝石(試料No.10)  
 7 : 角閃石(試料No.10), 8 : ジルコン(試料No.5), 9 : カリ長石(バーサイト構造)(試料No.6)



図版25 土器胎土中・砂質堆積物中の粒子(その2)

(スケール: 0.2mm; 11,13,14は直交ポーラー, 10,12,15は下方ポーラー)

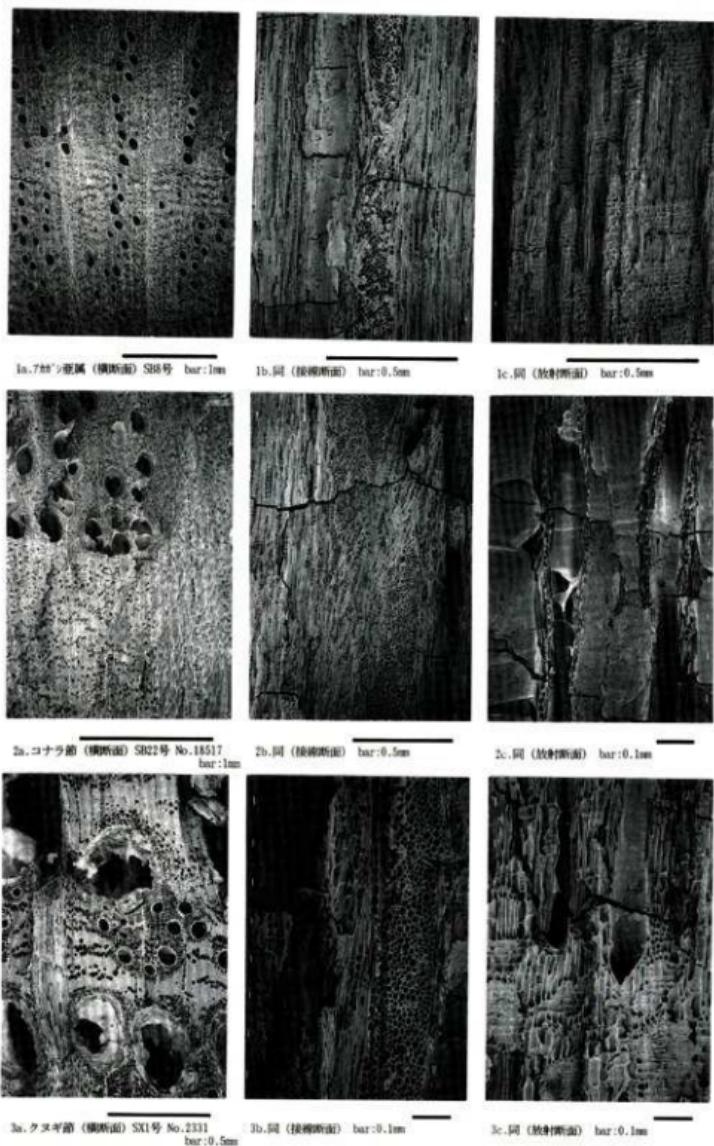
10: 濁ガラス質(試料No.10), 11: 複合鉱物類(試料No.13), 12: 斑晶質(試料No.13), 13: 完晶質(試料No.13)  
14: 複合石英類(試料No.6), 15: 濁複合石英類(試料No.7)



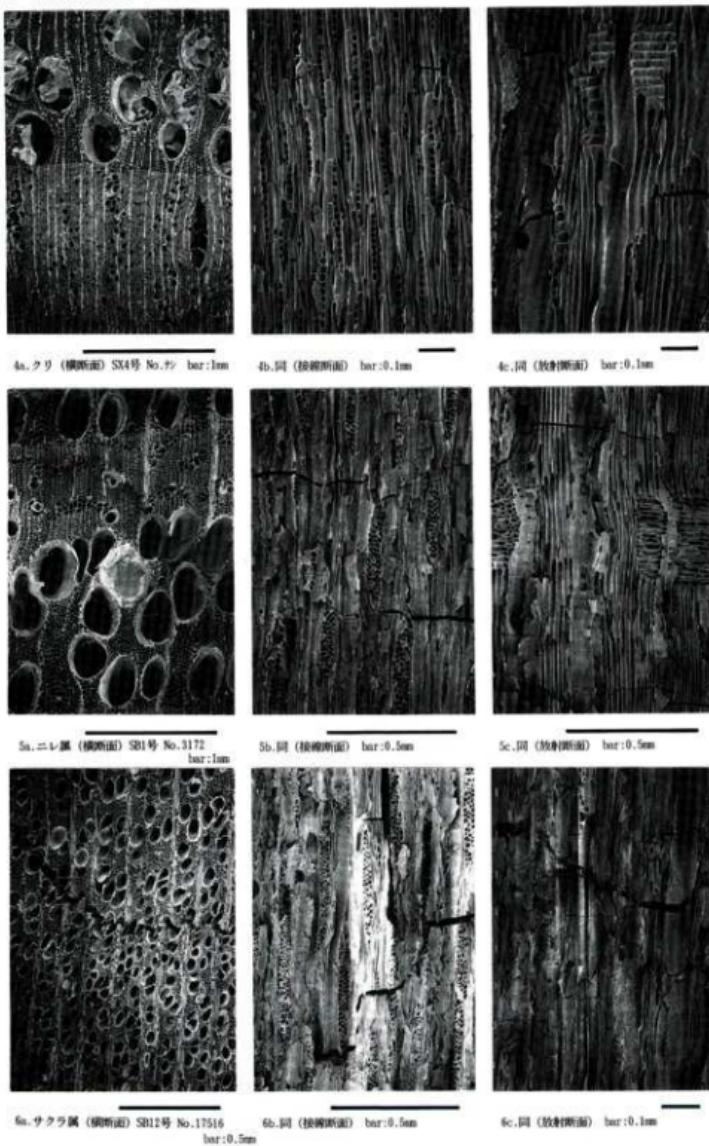
図版26 土器胎土中・砂質堆積物中の粒子(その3)

(スケール：20, 21は0.1mm, それ以外は0.2mm) 16, 17, 19は直交ポーラー, 18, 20, 21は下方ポーラーのみ  
 16: 滅複合石英類(微細)(試料No.10), 17: 複合石英類(黄色二次)(試料No.13), 18: 泥岩(試料No.13)  
 19: 砂岩(試料No.13), 20: ガラス(試料No.4), 21: 植物珪酸体(試料No.4)

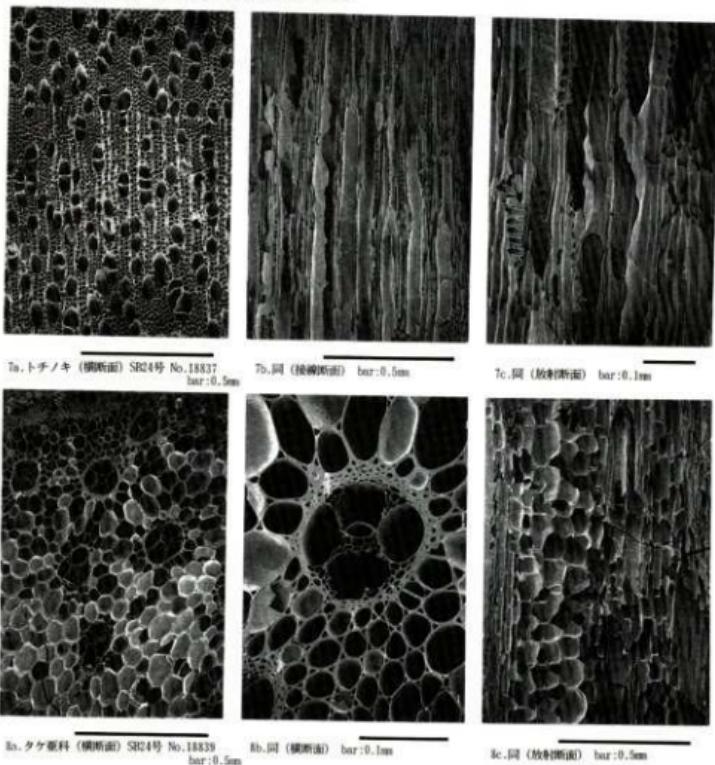
図版27 尾崎遺跡出土炭化材の電子顕微鏡写真



図版28 尾崎遺跡出土炭化材の電子顕微鏡写真



図版29 尾崎遺跡出土炭化材の電子顕微鏡写真



文献データシート

書名	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第13集 尾崎遺跡
執筆者	佐野康雄他
発行所	財團法人岐阜県文化財保護センター
発行年月	1994年3月
遺跡名	尾崎遺跡
読み	おざきいせき
所在地	岐阜県 美濃加茂市 蜂屋町上蜂屋
調査原因	一般国道41号美濃加茂バイパス関連工事
種別	集落跡
時代	縄文時代晚期～中世

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第13集

# 尾 崎 遺 跡

1994年3月25日 印刷

1994年3月31日 刊行

編集・発行 岐阜県本巣郡穗積町牛牧宮下 395

財團法人 岐阜県文化財保護センター

印 刷 西 濃 印 刷 株 式 会 社

## 尾崎遺跡報告書（平成5年度） 正誤表

●以下の点に関して誤りがありました。訂正をお願いします。

頁 例言	行	誤	正
	8	第V章を村木 .....	第VI章を村木 .....
6	12	「神明」・「牧之	「神明」・「牧野
21	17	肥厚させもの（18～21）	肥厚させもの（24～33）
21	19	おわるもの（24～33）	おわるもの（18～21）
22	1	該当する。29	該当する。46
24	24	時期は4他の高坏 .....	時期は58・59他の高坏
35	9	底部のみ残存し、正確な器形は不明であるが .....	ほぼ全形を残す。類例の少ない資料であるが .....
43	6	なら、1はイとした .....	なら、93はイとした .....
48	31	天井部の2/1の .....	天井部の1/2の .....
78	18	壺（215）	壺（215・216）
83	12	ら後期の狭間に .....	ら後期の間に .....
84	5	1の坏壺は床面 .....	227の坏壺は床面 .....
90	23	玉縁状となり。	玉縁状となり。
170	27	見られるものと製作 .....	見られるものの製作 .....
175	5	パレス壺（11）が出土	パレス壺（12）が出土
178	17	b 高坏は有稜口縁の	b 高坏は有稜の
181	30	口縁台付壺はく製作技術	口縁台付壺は製作技術
183	14	分布の相違は、その .....	分布の相違から、その .....
183	15	わけではない。また、	わけではない、また、
185	18	、第1次調査報告 .....	、朝日遺跡第1次調査
188	10	石核の選択性 .....	石核の形態の選択性 .....